
仙水さんが歩むハンター道

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仙水さんが歩むハンター道

【Nコード】

N24930

【作者名】

千葉

【あらすじ】

暇を持て余す大学生がある日神様の力によってハンター×ハンターの世界に行くことに……

主人公の神様への願い事は幽遊白書の登場人物である仙水忍になりたいというものだった！！

これはそんな主人公が仙水としてハンター×ハンターの世界で生き

プロローグ（前書き）

二次創作は初めて書くので至らない点があったら気軽に意見ください。よろしくお願いします。

プロローグ

ああ、面倒臭い。

大学の授業に何の魅力も感じられなくなった俺、御山^{みやま}忍^{しのぶ}は暗い部屋でゲームをしていた。この大学は元々第一希望ではなかったこともあり、おもしろそうなサークルもなかった。日々ゲームをするか寝てばかりで、自分でもこんなことをしていいのかという考えはあったが、そうそうこの暮らしを変えることもできなかった。

明日は兄貴が家にくると言っていたので部屋の掃除をしようとしたが風呂場の洗剤がなくなっていたことに気づき近くのスーパーでついでに不足品も買い物しておこうと考え家をでる。

一人暮らしの様子を身に来るのは普通親なんだが家は少し他所と事情が違う。

兄が言うには俺が幼い頃両親は自動車事故にあって死んだらしいのだが、親戚の俺達への反応は両親が亡くなった子どもへの哀れみではなくまるで俺達のことを恐れている風だった。それがどうしてかは分からないが血がつながっているとはいえ、俺からしたらただの他人なのであまり気にしていない。

幸いにも親が残してくれた遺産があったので身寄りの無い俺達は施設に入るのを拒み俺が大学生になるまで二人で暮らしていたが今でもよく連絡は取り合う。唯一の家族を盛大に迎えてやろうとバイトで貯めた金を下ろして今晚はすき焼きにしようと考えていたら、その目的地であるスーパーからどす黒い煙が空へと昇っていつている

のが見えた。

急いで走りスーパーへと向かうと、店内からたくさんの人が悲鳴を上げて逃げ出してきた。

店内は既に火が充満してきているらしくあたりをオレンジ色に変えている。

「ママを助けてっ、まだ四階にママが残っているの!!!」

隣にいる女の子が黒い煙をモクモクとあげるスーパーの四階の窓を指差しながら必死で周りの大人たちに助けを求めているが誰も動くとはしない。

あの様子だとあと数分も持たないだろうから少しして消防車が来ても間に合わないだろうことが分かるからだ。

当然だ。誰も自分の命が一番大事でそれは当然のことなのだ。

決して責めるべきではない。人間なんてそんなものだ。

……だから俺は人間ではありたくないのだ。

店内の火が弱そうなところから窓を破って入る。後ろでギャラリイが何か言っていたが聞こえない、聞きたくない。

店の中はサウナの十倍以上の熱気が立ち込めていて喉がヒリヒリしたが我慢して、普段よく利用しているスーパーの階段を見つけると駆け上る。階段から食料品売り場へと足を向けたところで火事によってもろくなったのか、天井が崩れ階段は埋まってしまった。

もう階段を使うことはできなくなったか……

四階は煙で真っ暗だったのでどこかのTVで言っていたように地面をはいつくばりながら空気を吸って進む。煙が出て行く方に女性が見えた。

おそらくあれがあの子の母親なのだろう。窓へ座って地面を見下ろしながら緊張した顔をしている。恐る恐る下を見ると消防隊が救護用のマットをしいて女性が降りるための準備をしていた。

おそらくこの女性は飛び降りる勇気がなくて困っているのだろう。火がこちらへと赤い舌を伸ばしていたので俺は迷う女性を脇から掴んで救護マットへと降ろす。落ちる瞬間こちらを信じられないものを見たような目で見ていて恐怖したが命のほうが大切だ。

煙が胸を焼き目もボンヤリとしていく中で観衆たちの歓声が聞こえたのでどうやら無事落ちてくれたようだ。良かった。

そして意識が薄らぎ、最後は何もきこえなくなった。

ここはどこだ？

目が覚めると何も無い空間が広がっていた。いや、闇があるだけだな。

「我が子よ。よくここへ来た」

急に目の前に現れたのは白髪の少女。

「幼女に母親発言される日がこようとは……」

「せっかくシリアスにしたのに空気を変えないで欲しいのだが」

ガクブル状態の俺を見て呆れたような口調で話す少女。

「先程からモノローグが幼女で締めくくられるのには我慢ならんっ
！！」

「で、あんたは誰で何故俺はここにいるんだ。」
渾身のボケをスルーするのが好きだ。

「はあ、もういい。……私は神だ。
そしてお前は死んで魂だけの存在になったところを私に拾われた。」

「まあこの状況から言っただけを信じるしかなさそうだが、
で、これから俺はどうなる？」

「なかなか鋭いな。」

普通ならお前は輪廻の輪に取り込まれて再び生まれ変わるが、お前は特別だ。」

「どう特別なんだ？」

「端的に言えばお前には霊力がある。それも普通では有り得んほど
に」

いよいよ話がおかしな方向に進みだしたな。

「そのどこが悪いんだ？」

「靈力が強いものは邪霊に狙われやすい。そしてそれはお前の周りにも影響を及ぼす。」

お前の両親が死んだのも、今日のような火事があったのもそれが原因なのだ」

こいつの話が本当なら親戚の連中が俺を恐れていたのにも納得できるな。

……待てよ。まさか兄貴にも影響が……

「その可能性は高いな。今は何も被害を受けていないがいずれ巻き込まれるだろう。」

そしてお前が輪廻の輪に戻れないのはその力が次の生命にも受け継がれる度に力を増し、世界を危うくしかねないからだ。」

「……………」

「そこで、今回紹介するプランはこちら!!」

幼女は後ろに現れたボードのシールを得意げに剥がす。

こいつキャラが安定していないぞ。あとどや顔がうぜえ!!

「『私が作り出した世界に行って靈力を別の物に変えてしまおう』プランです!!」

「別の世界ってというのは?」

「まあ、ぶっちゃけハンター×ハンターの世界です。」

「ここでは靈力がオーラに変わるってことだよ」

「テンプレな展開だが勿論願ひ事はあるだろうな？」

今まで運動もろくにしていない大学生があんな危険いっぱいなところに行けば速攻で死ぬるからやはり最低限度の保障はしてくれるべきだと思う。

むしろ当然だろ！！

「うーん、仕方無いねえ」

「なら幽遊白書に出てくる仙水 忍にしる。もちろん靈光烈蹴拳と聖光氣、氣鋼鬨衣付きで、あと多重人格の設定はいらぬい。」

「なんで仙水なの？他にも強い人いるよ」

「仙水と俺は靈力が強く邪靈に狙われていたという点で一緒だし、名前も同じ忍だ。」

それにどこか他人だとは思えないからかな。」

「ふーんとりあえず納得。で、さっきの願ひのことだけど靈力が使えないから全部念能力で実現可能にするために具現化系と放出系を百パーセントにしたの。だから他の系統はせいぜい二十パーセント以下になっちゃうけどいいよね？」

クラピカの緋の目の限定版みたいなのところか。

「大丈夫だ。問題ない」

「それは死亡フラグだよ。」

「神は言っている。ここで死ぬ定めでは無いと……」

「私が神なんだけどなく。まあそろそろ時間だから、最後に何か私に言うことはない?」

「兄貴を頼む」

こんな迷惑体質の俺を育ててくれたのは実質兄貴のおかげだ。感謝してもしきれない。

せめて兄貴だけは幸せになってほしいものだ。

「……もちろん分かっているよ。では行ってらっしゃい」

幼女はふざけた顔をやめ本当に綺麗に笑った。

ああ、こいつはやっぱり神なんだ。
何故かすんなり納得できた。

「いってきます」

そうして俺は消えた。

仙水の生まれた日(前書き)

この話はハンター×ハンターの独自解釈がつきます。

どうぞご了承ください。

仙水の生まれた日

何だ？何も見えない

この現状を打開しようとしてとりあえず動かこうとするが体が上手く動かない。

ズルツという擬音の後、ようやく体が少し動かせるようになって安心していたら生命としての本能が俺にある衝動を促す。そのむせ返るような強い本能に抗えず俺は終にそれを行動へと移してしまっただの。

「ホンギヤー、ホンギヤー」

そう産声を上げることだ。どうやらトリップではなく転生らしい。まあ修行する時間が増えたのでこちらとしては万々歳だけだな。

「ようやく産まれたのねあなた。」

こちらを見て優しそうに微笑む決して美人ではないが不細工でもないおそらく母親が、隣で嬉しそうに俺を見つめる平凡な眼鏡をかけた男、父親に語りかける。

実の親に向かって失礼なことだとは思うがこの二人の遺伝子からあのクールでかっこいい仙水さんのようになるとはとても思えないのだが大丈夫なのだろうか？

その点については神様がどうにかしてくれたのだろう。そうでなけ

ればたとえ大隔世遺伝をしたとしても仙水のように成長するとはとても思えない。

今はただ祈ることしか出来ないな。

俺はこらえきれない程の眠気に逆らえず意識を手放した。

5年後

まあ急に5年もたったのは不自然に思うかもしれないが、ちいさいころからずっと体力をつけるために修行をする他は特になかったので割愛させていただく。

どうやらカレンダーによると今は1979年のようだ。ゴンさんたちが受ける1999年のハンター試験の時には26になる計算だね。この頃になると顔が大分仙水さんに近づいてきて近所で話題の美少年になっていたのだがその反面、親はまるで自分たちの血を受け継いでいるとは思えないせいか冷たく当たるようになってきた。

父親は俺が母親の浮気相手との子だと思い込んでいるようで毎晩喧嘩が絶えない。

そして母親は記憶にないことで父親に疑われたことへのストレスを俺を痛めつけることによって解消するのだった。

俺が子どもながら冷静で素顔を出さなかったことも原因に入るのかもしれない。

体力をつける修行の一環として山籠りをして二、三日帰らなかったこともよくあったし、そんな挙動不審な子を我が子として見るほうが難しかったのだろう。

住む場所を提供してくれるだけの人間だったので俺も親とってないのだが、

……ここまで自分が冷徹だとは正直思わなかった。

ひょっとして仙水忍の肉体に御山忍としての精神が引きづられているのではないか？

だが俺は仙水ほど人間に絶望してないはずなんだが………絶望した！！

修行を終えて元家に帰ると電気もついていなく、部屋には物がすっかりなくなっていた。

おそらく、いや間違いなく両親は俺をおいて出て行ったのだろう。

別に怨みはしないが何もベッドまで持つていくことはないだろうに

……

これからどうするかな……。……とりあえず修行を始めて列蹴拳はマスターしなければ身寄りもなく危険なこの世界じゃあ生きていけない。

念能力を覚えるには師匠がいなしそれが済んでからだ。

そう決めたならまずは行動だ。ここがアイジエン大陸の南東に位置する小さな村であることは既に村人から調査してある。上目づかいで「教えてほしいな」と頼んだら大抵のお姉さま方はあっさりしゃべってくれるのだ。

注意しなければいけないことはそのまま家に連れ去られそうになること。

それさえ注意すれば彼女たちは非常に優秀な情報提供者となる。

水道設備すらもこの村にはないので井戸から汲んできた数日分の水をペットボトルにつめ、家に唯一残っていた食料である干からびて端の方から崩れかけているパンと一緒にポストンバックに入れ家を出る。服装は言わず知れた全身黒の格好で、普通なら痛い感じになるのだが仙水には有無を言わさない何かがある。

とりあえず近くが一番大きな街までは野宿しながら移動した。一日に数本ほど村から街へ行くバスも通ってはいるのだが何分金がない。金の工面もしなければそこで野垂れ死んでいる奴のようになることは想像に難くないがこんなガキを受け入れてくれる所なんて、

「ここで働かせて欲しい」

「いいだろう。だが何でもやってみようぞ」

例え大半の人々が綺麗な服を着て栄養のある食事を取っている場所でもそのどこかに影の部分は存在する。それは当然のことだ。

体中に弾丸の穴が開いた死体を片付けながらそう自分を慰めた。

大人の死体と背が合わないのでも背負う形になってしまう。だから頬や体に流れ落ちる血液や脳しよを時折拭いながら処理場へ運ぶのだが途中でキリがないことに気づき無心で歩き続けた。やつとの思いでたどり着いたとしても一日に貰える賃金は300ジェニーばつちで労働基準法舐めてんのか？と言いたいくらい悲惨なものだ。

無論そんなことを口走つたらそれ以上に悲惨なことになるので何も言わないのだが。

帰る場所は雇い主というか、ただ俺達を扱き使う髭がボサボサのおっさんが与えた廃墟と化したビルの一階で、そこは二日に一度水を使つてもいい許可が下りる。

当然血まみれの俺は早くシャワーに浴びたいのだが今日に限って周りの連中がそれを止める。

「まだ中に人がはいつているから……」

「それがどうしたんだ？いつも2、3人一緒に入っているじゃないか」

「だから……」

それでも制止の言葉をかける皆を無視してシャワー室に向かう。こっちは血まみれで気持ち悪いんだ。それにこのままで寝ると酷い悪夢を割と高確率で見る。

「入るぞ」

汚れた服を洗濯桶に入れ、一応軽く声をかけて中に入る。

中はシャワーの熱気でムワツとしており蒸気で視界が曇って見えにくい。シャワーを浴びるのには問題ない。二つあるシャワーノズルの一つには俺と同じぐらいの年の子がかなりこちらを驚いたような顔で見ている。

「気にするな。」

「いや、もう私はでるところだったから」

「……そうか」

女の子だったんだな。このぐらいの年の子は起伏に乏しいのでよく分からない。

片手の力だけで日課の懸垂をしながらそう考えた。

そんな感じでつらい毎日を過ごしながらお金を貯めた。

1年たつて仲間たちは仕事に失敗して死んだのか、処分されたのか最初の頃のメンバーはシャワー室で男と間違えたエリを除いていつの間にかいなくなっていた。

「ねえ仙水、私も連れて行ってくれないか？」

出発まで一週間きつた時エリが背を向けながら話した。

最近は何対するマフィアを殺してくるよう命じられたりやばい金を盗んで来いという命令も当然のようになって来ている。俺らの組の連中もだいたいあせっているようで数日以内に大きな抗争があるということを大人たちも話していたのでエリが相談するタイミングとしては正しいのだろう。

「本当にいいのか？」

「……私は着いていきたい」

「準備をしておけ。」

顔を綻ばせるエリ。

その夜マフィアたちは俺たちの住処を襲ってきた。銃を向けられればただ死という選択肢しかない。幸いこういうこともあるうかと俺達は密かに抜け穴を用意しておいたので年齢の低い順に仲間を逃がす。

「よしつ、次は仙水とエリが行け」

年長の子に言われスライダー式の抜け穴に向かう。

「エリ、先に行け。」

「レディーファーストって訳ね」

脱出の時間が早まったことが嬉しいのかエリはこんな状況でありながら笑顔を向ける。

軽く笑い返すとエリをスライダーへと押しして俺もそのあとに続く。予想以上に長い距離を滑った後丸い出口が夜の景色を切りとる。

だがスピードを抑えきれずに前のエリはその勢いのまま出口へと向かっていく。

「大丈夫か!？」

スピードを緩めゆつくりと出口を通過した後俺が見たのは先に脱出したはずの幼い子ども達の死骸。工作上死体には慣れていたが今まで一緒に過ごしていたモノの死骸はより死をリアルに感じさせる。

「おっ、次の獲物は君かな?」

カウボーイハットを被り右手にマシンガンを持ったニヤケ面の若い男が踏みつけているのはエリ……だったモノ。

顔の右部分は皮がめくれており腕や足は銃で打たれたのか千切れかけていてその目に先程までの生气は無い。今にも悲鳴を上げて嗚咽しそうになるが悲しみを凌駕するほどの生への執着が俺を目の前の敵から逃げさせる。

しかし獲物が逃げるのを予期していたかのように配置されていた大柄なスキンヘッドの男に片手を捕まえられるが俺はそいつの手を渾身の手刀で打つ。

さすがに少しは聞いたのか捕まえられている腕の力が緩んだスキに片手を振り払い夜の街へ逃げ込む。後ろから弾丸が飛んできて足に当たったがその痛みすら生への執着には敵わない。

血の痕で追っ手に見つけられないように服を切り裂いて縛り、ゴミ捨て場の中で夜が明けのを待った。ようやく安全を確保出来たと確信した後にはやっとエリのことを考える自分の身勝手さに腹が立つ。

フフツ、フハハハハハハ！

これが人間の本質だというのか！？ 呆れを通り超すと笑えてくる！！

この日、仙水忍が生まれた。

仙水さん修行する(1) (前書き)

お気に入り登録ありがとうございます!!

仙水さん修行する(1)

イグラーの樹海

アイジエン大陸の北部に存在する二万ヘクタールのこの森は世界三大魔境の一つとして大抵の人に認知されている。魔境でありながら何故そこまで一般人に認知されているのか？

答えは簡単だ。そこは本当に魔境なのだ。

樹海は周辺部から中心部に向かうにつれ道はより険しくなり、毒蛇やワニなども多く生息している。ここまでは今までどこかで聞いたことがあるような内容だが重要なのはここからだ。

ここが魔境と言われる所以はその魔獣の多さからだと言える。

魔獣とは人語を操れる獣を総称して言うものであり戦闘力の高さもピンキリなのだがイグラーの樹海に生息する魔獣は比較的凶暴で人間と積極的にコミュニケーションをとるものはかなり稀だ。無論、会話以外の方法でなら彼らは非常に積極的に人間とコミュニケーションをとりたがる。中心部に行けば行くほど魔獣の強さも上がりより手荒い歓迎をつけることになるだろう。

そして一般人に認知されている理由の多くはこの近くに大きな町があつて交通が整っていることもあり、日本での有名な自殺スポットとは比べられない程毎年ここにたくさんの人が訪れるからである。もっとも自殺志願者たちのほとんどはその目的を達成できず他殺という結果に終わってしまうことのほうが多い。

そしてその近くの街に向かう人は自殺志願者がほとんどということもあって今俺は町へむかう乗り合いのバスの運転手に命の大切さを説かれているという訳なのである。

なんでも話によるとこのおばさんもかつては死に場所を探し求めてこの地に来たらしく樹海のおまりの恐ろしさゆえに命の大切さを知り町で再就職をして今はこの生活に幸せを感じていると熱く語る。

今見えているあの町が大きく成長したのはおそらく樹海の恐ろしさから命からがら抜け出してきた者たちが想像以上にたくさんいたからなのだろう。

確かに乗客は俺以外全員目に生気が籠っていない様子のままずっと一点を見つめているか何かうわ言を言っているかでバスの車内の空気はよどんでいる。そんな死にたがりたちをゴミでも見るかのように眺めていた自分に気づき、気分を変えるためにバスの窓を開ける。

だが生温い風は胸のモヤモヤを吹き飛ばしてはくれずその淀みを見ただずらにかき回すだけだった。

エリの事があってから人の弱さや醜さを見ると考えが仙水に近くなる。

今はまだ何も害はないがいずれ大切な人も傷付けるかもしれない。そう思うと少し怖くなるが自分が望んだことなので後悔はしていない。

ただ俺は今度こそあのような目に遭わない為ここへ強くなりに来たのだ。

仙水忍としてでは無く御山忍として

町につくとイグラーの樹海へ行く為の準備をする。

寝袋、ライター、空のペットボトル、サバイバルナイフ、いちおう

数日分の食糧も用意したがなくなったら現地調達をしようと考えている。

「おい坊主。死にたくないならあそこに行くのだけは止めときな」

レジで会計を済ましていると店員の丸々と太ったおっさんがそう忠告するがどうせあんたもあそこに行った中の一人なんだろうと返したらそれはそれで面倒臭いことになりそうなので止めておく。皆あそこに行った暗い過去を忘れないに違いないし、親切で言っていることだろうから。

「大丈夫ですよ。すぐ帰ってきます」

嘘だ。しばらくはあそこで暮らす予定だしこの店員もそれを信じてはいなそうだ。

「……………気をつけな」

出口で一度礼をして店を出る。

町から十キロほど先にイグルーの樹海がある。

そんなに近くて魔獣が町を襲いにこないのかと思うかもしれないが樹海の中だけで食物連鎖のバランスが保たれているらしく外にでる魔獣は滅多にいないし、人間のほうから出向いてくれるので大丈夫らしい。

それに一応町の周りには巨大な鉄の柵によって覆われていて監視台から24時間交代で監視しているから安全なのだそうだ。

しかし今俺がいる樹海の入り口からはもう危険な匂いがする。足下には人間の白骨がゴロゴロと転がっていて、入り口に立てられた二本の鉄柱の間の鉄条網に絡まっている看板には『立入厳禁』の文字

が返り血で汚されてほとんど見えかかっていた。だがそれに臆するわけには行かず鉄条網の隙間から中に入る。

思ったよりも綺麗な所でここが魔獣の住む地でなければきつと今頃キャンプ場やピクニックの目的地にもなっていたのだろう。

しばらく歩いていても魔獣の気配はしない。もつと先にいないと出ないのだろうか？

何はともあれまずは生きるために必要な水を探さなければ

地図には確かここをまつすぐ行つた先にあつたはずだが……案の定見つかった。

きれいな湖があるがそれを楽しんでいる暇はない。水場は魔獣が水を求めてやってくる一番危険な場所なのでバッグから2?用のペットボトルを三本出して一本ずつ水を詰めていく。コポコポと空気を吐き出しながらペットボトルは水を吸い込む。

二本注ぎ終わって三本目にとりかかろうとした時背後から殺気を感じ前転を二三回転してその場から離れると同時に先程まで俺がいた地面が深く削れた。

マジで死ぬ寸前だったな。冷静を装おうとするが内心恐怖で心臓が耳のそばでなっているような感覚がする。襲つた相手は凶悪な爪と牙を生やして熊のように大きくした猿で今もその冷たい赤い瞳は獲物を観察している。こいつには絶対敵わないと判断した俺は奴の足下にあるペットボトルを諦め地面の砂を相手の顔目がけて蹴りつけた。

まさか攻撃するとは思ってなかったデカ猿が俺の攻撃によって一瞬怯むとその隙に湖の奥側にある森目がけて走る。すぐにシヨックから立ち直つたデカ猿がドスドスツという足音をたてて追いかけてくるが首に奴の爪が刺さるすんでのところ急で急に直角に曲がつた俺を捕えきれず空振りする。

あの巨体ではいくら猿とはいえ密集した木の間を素早くは通り抜けないだろうと思っていたが、何と奴は木の枝を伝って移動し上から俺を補足するために追いかけてくるではないか!?

奴はこの樹海の中でもかなりの実力者なのか、他の生き物達が介入してくる気配が全くしないのが唯一幸運だがこのまま逃げてもしリ貧になることは確実、ならば……

俺はより木が群集している方向へ逃げる。空の光さえも遮るほど枝葉が多くなりデカ猿の追いかけるスピードも遅くなってきた。だがここで調子に乗って奴を切り離して走り続けると他の魔獣に狙われてしまう。適度な距離で気づかれぬ為にはここらへんで隠れるしかない。

地面にある落ち葉や土を体に擦り付け匂いを消すと5歳の俺がようやく隠れるくらいの木の窪の中に入り気配を消す。念をしらなかつたゴンでさえ似たようなことが出来たので俺にも出来るはずだ。

しばらくたつと聞き覚えのあるドスツドスツという足音が聞こえ始めたので音をださないように唾を飲み込む。目の前に奴の姿が現れあたりの匂いを嗅ぐような振る舞いをはじめたので祈るような気持ちで目を閉じる。

一秒一秒が有り得ないほど長く感じ、そして長い長い時の後小鳥のさえずりが聞こえ始めると生まれてから今までずっと息を我慢していたかのように深く息を吸った。

頬を冷たく落ちるものに気づきようやく自分が冷や汗を出していることに気づく。

これからはもっと周辺部から攻略していくことにしよう。修行とは生と死ギリギリの間でやるのが望ましいがここでは死が近づきすぎ

る。
まだ原作開始まで時間はたっぷりあるゆっくりやっつけていこう。

仙水さん修行する(2) (前書き)

早くも感想をくださった読者の皆さんに感謝します!!

仙水さん修行する(2)

あれから十数年の月日がたった。年は16歳になり体もすっかり大きくなって170あるかないかぐらいになり見た目はますます仙水さんに近づき、周辺部の魔獣相手に毎日命がけの特訓をしていたので烈蹴拳もまだ荒いながら形になってきた。もともとこの烈蹴拳とはあらゆる体術を習得及び鍛錬した後でしか習うことが出来ないと言われていたので普通ならこう簡単に掴めることは有り得ないのだが幼女(神)様が上手いとこやってくれたのだろう。

だがここまで来るのにそれはそれは長い道のりがあったということ。ここをここで語っておこう。

まずは生きるうえでもっとも大切な食糧調達だがそのほとんどが倒した魔獣の肉に限られる。とはいえここイグルーの樹海に住む魔獣は大変強力で、狩るところか狩られることの方が多く最初は空腹のまま森をさまよった。運がよければ親が巢を離れた隙を狙って魔獣の子どもを仕留めれるがそんなことはそうそうあるわけが無い。力とスピードで劣る俺は魔獣に気配を悟られずに近づき不意打ちを成功させることでしか狩りができず返り討ちに遭い一週間ともに動けないほどの怪我もしょっちゅうあった。

そのやりとりを何百回と繰り返し“絶”を覚えることができたので悪いことばかりでもなかったのだが…

もちろん魔獣相手に力とスピードで劣るからといってそっち方面を

鍛えなかったわけではない。もともと漫画で自身が言っていたように仙水^{ミズル}は魔族に覚醒する前の幽助にパワー、スピード、バネ、スタミナ全てが負けていたのだが仙水に生まれ変わった俺は二度と同じ轍を踏まないため巨大な岩を背負ってランニングしたり、水中で魔獣と戦ったりと、集中的に鍛えてきたのである。おかげで体は傷だらけになったがその分強くなった自信もある。

今なら試しの門も三の扉までは行けそうな気がする。
試してみないと分かんないけどな。

そのようにして力をつけていった俺はイグラーの樹海を攻略し始めたのだがまだ全体の三分の一度しかマッピングが済んでいない。理由は簡単で魔獣が強いからだ。周辺部の魔獣は人の姿に擬態して騙そうと近づいてくるほど力に自信がないのもいたが中心部に近づくにつれ強い魔獣たちが現れてくる。一番初めに会った猿のような姿をした魔獣もそのなかの一匹だ。

あれから二度戦ったが鉄並みに堅い皮膚と分厚い毛皮によってダメージは通らないし攻撃は重く、速い。だがそれも修行前の話だ。

今から修行の結果を確認するために奴を倒しに行くとしてもするかな。思い立つたら行動、早速ボロボロになったボストンバッグからサバイバルナイフを取り出し腰のベルトにつけるといつも隠し場所として使っている木の洞にバッグを投げ込む。

ナイフは戦闘で使う気は無いが念の為と、死体から肉を切り裂いたり皮を剥ぐために持っていく。

さあ、狩りの時間だ。

デカ猿の住処は大きな木の下にある自然にできた洞窟の中だ。一度“絶”で追跡した時に分かったもので、今もその時と同じように“絶”をして入り口を慎重に覗く。

猿は眠っているようで俺の存在に気づいてないようだ。中は獣臭くて息がつまりそうだったがギリギリ我慢できないことも無い。

足下に転がっている奴が食った獣の骨を拾い上げ眠っている奴の頭に向かって投げる。

見事命中するとデカ猿は起きて俺の存在に気づきいやらしい笑みを浮かべた。

『メシガメノマエニイルトハ、コウウンダ』

「奇遇だな。今俺もそう考えていたところだ」

『ヨマイゴトヲ!』

別に奇襲をしかけるために“絶”をしていたわけでは無い。奴から奇襲を受けないために“絶”をしていたわけで、俺がやりたいのは純粹な殺し合いだ。

猿はその巨大な岩を連想させる拳を振り下ろすがそこには俺の姿はない。既に攻撃を予期して後方にバク宙していたのだ。勿論わざわざこんな避け方をしたのは今の身体能力を確かめる為と相手を虚仮にして怒らせ冷静な思考を困難にさせるためだ。決してかつこいいからとか少し懂れてとかじゃない。

何はともあれその作戦は成功したらしく更に攻撃が荒く読みやすくなったので俺の頭を吹き飛ばそうとしたフックを体を反らして避け、から空きの横腹に回し蹴りを放った。

以前の實力では猿に当たっても微動だにしなかったその蹴りは猿に

とって想像以上のダメージだったらしく苦しい顔を浮かべる。
だがそのダメージが猿に再び冷静さを与えた。
先程までの笑みをピタリと止め、相手の弱みを探そうと警戒しながらこちらを見る。

しばらく何もせずに向かい合っていたがその静けさも長くは続かなかった。

猿のこの森での強者としての矜持が膠着状態を許さなかったのだ。
しかし今度は先程のような大振りの攻撃ではなく鋭い爪である程度俺と距離をとりながら戦うことを選んだ。

こちら側からの攻撃は当たらず一方的に避けるばかりとなったこの状況を作り出した猿はさすが知恵のある魔獣といったところだ
だがまだ終わらんよ！！

攻撃をよけながら洞窟の地面にゴロゴロと落ちている拳大の大きさの石を拾い上げて感触を確かめる。
十分な硬さがある、これなら使えそうだ。

『バカメツ、ソナイシコロガ、オレニキクカ！』

「それはやってみなければ分からないさ」

手の中にある石をそっと放して地面へ落ちる前に猿目がけて蹴飛ばす。まだ念が使えないので念弾の代わりを石で代用した烈蹴紅球波だ。ただの石と侮る無かれ、今の仙水さんの実力で蹴り出した石は木を軽く貫通するぐらいの威力がある。

勿論そんな攻撃を喰らってはこの猿でさえも無傷には済まず、一発打つごとに鮮血が溢れ肉が散り当の猿は苦痛を訴え醜い叫び声をあ

げるのだが攻撃は止まない。
数分後には体中ボロボロの状態でありながらもまだかるうじて生きている猿がそこにいた。

「もう…休みたまえ」

『ク・・・クソ・・・ニンゲン・・・ナンゾニ』

足裏に頭蓋骨を踏み潰した時の感覚がするが嫌悪感湧いてこない。歓喜、快感に近いであろう感情が胸を満たす。もはやそれが仙水忍としての感情なのか御山忍としての感情なのかはどちらでもいい。ここで喜んでいるのは俺という存在であるというのに変わりはないからだ。

無論このデカ猿を食べようとしたがあまり美味しくは無かったので毛皮を剥いた後は放っておいた。どうせ他の魔獣が掃除してくれるだろう。

木の実を食べすっかり満腹になった俺は主のいなくなった洞窟でこれからどうしようと考えながら獣のように深く眠った。

目が覚めたら体がやけに暖かいことに気づいた。大抵ここらは夜になると気温がかなり落ち起きてもしばらくは体が動かないことがよくある。不思議に思い目を開けると目の前でパチパチと小気味いい音をたてながら薪が燃えている。寝る前に焚き火をした覚えはないんだが……

「あ、あんたやつと起きたんだわさ。
寝顔も目のホヨーになっただけど長い間寝ていたからちよつと心配したわさ」

焚き火の奥にいて見えなかったがこちらを心配そうに見つめるゴスロリ姿で金髪をポニーテールにしている少女が目の前にいた。一見すると害のない美少女だが長年魔獣を倒してきた俺の勘がこいつは只者ではないと言っている。

殺意や敵意を感じればすぐ起きるのでおそらく敵ではないのだろうが分からないのは何が目的でこんな危険なところに来たのかだ。

「何故こんなところに……」

「それは子どものあんたが言うセリフなのさね？」

……まあ、そんなこと言っても始まらないしね。あたしはビスケット・クルーガー、この奥地に『星の欠片』と呼ばれる宝石があると聞いてやってきた美少女財宝ハンターだわさ！あたしのことはビスケ、もしくはビスケちゃんと呼びなさい！！」

へえ、ビスケね。ハンターだというならこんな危険な場所にこれたのも納得だ。

……うん！？

ビスケって確かどこかで聞いたことがあるような……ハンター×ハンターを十六年間も読んでないので細かいところは忘れてしまったからな。

忘れるということはそんなに重要人物でもないのだろう。

「で、あんたは？」

「……… 仙水 忍だ」

「へえ、名前からいってジャポンの人みたいね」

「ああ」

「何であんたはここにいらんだわさ？」

やはり聞かれると思った。別に隠す必要はないので本当のことを話しても構わないのだが初対面の人にわざわざ聞かせるような話でもないな。

「そこに樹海があるから…？だ」

「嘘をつくのはかまわないけど。もっとマシな嘘をつきなさい！」

ビスケのその返しを苦笑して話をごまかそうとしているのに気づいたのか、ビスケも呆れた顔で詮索するのを諦めた。

「じゃあ話を変えるけど、あんたのオーラの様子から念能力者じゃないってのは分かるんだけどよくこんな場所で生きてこれたわね。」

ひよつとして何か格闘技でも修めているの？それ以外考えられないんだけど」

「ああ、拳法を少し」

「へー、ひよつとして心源流拳法？あたしもだわさ」

かの有名なネテロ会長が師範を務めている心源流拳法を学んでいる金髪少女、念能力者で『だわさ』という特徴的な語尾はもしかしてあの……ビ、ビスケか！？

ようやく思い出した！

……だとしたら目の前に座っているのはかなり大物だぞ。いろんな意味で

しかし念の師匠としては申し分ない人材だ。

「動揺しているところから凶星のようね。もっと表情を隠したほうがいいわさ」

どうやらビスケはさきほどの動揺を勘違いしたようで得意気な顔を浮かべる。

「いや知り合いに心源流の使い手がいたから驚いたただけだ。

それより一般人に念のことを教えていいのか？秘匿義務があるのでは……」

「あんたがカタギの人間には見えなかったし、その様子だと念について知っているようなんで大丈夫だわさ。」

「だったらちようどいい。俺に念を教えてくれないか？」

「いいわさ」

断られてもしつこくお願いするつもりでいたのだが答えはあっさりおkだった。喜ぶべきなのだがあっさり了承されたのとビスケの素敵な笑みであまり良い予感はない。

「その代わりに『星の欠片』の搜索を手伝うのと、パスの有効期限があと二ヶ月できるからそれまでになるけどいいわさ？」

話がうますぎると思ったたらやはり条件つきだったか。『星の欠片』

とやらの搜索は魔獣を脅して聞けばわかるだろうからいいのだが期間は二ヶ月か、決して満足できる時間ではないが念の基礎でも学べればそれからは自分でもなんとか出来る。幸い能力は既に決まっているので能力開発に費やす時間も必要ないと考えればなんとか我慢できる時間だ。

「それでいい」

「じゃあこれで契約完了だわね」

仙水さん修行する(2) (後書き)

諸君、私はマチが好きだ。

……というわけなのでいつか絡ませたいなあ

仙水さん修行する(3)

十 十 十

今回のターゲットはなかなかの大物だった。

おもに宝石を狙う財宝ハンターであるあたしはハンター専用サイトである『狩人の酒場』からアイジエン大陸の北部にあるイグルーの樹海に『星の欠片』というダイヤモンドが眠っているという情報を手に入れた。

三千万ジェニーという情報料はなかなか痛かったが信用のあるハンター専用サイトなので偽の情報を掴まされることは無い。懸念すべきは同業者の存在だろう。

常に新しい情報が手に入りしだい報告をしてくれる協力者がいるので他のハンターたちより先に行動できるが三千万ジェニーもかけて情報を得たというのに宝を先取りされたらあたしはたぶんそいつを許せない。非常に嫌だが怒りでうっかり元の姿にもどってしまうということも有り得る。そう考えたあたしは翌朝の最初の便でアイジエン大陸へ飛んだ。

空港から電車で五時間、そこからバスで三時間ほどした先にイグルーの樹海にほど近いイグルアの町がある。さすがにイグルーの樹海は世界有数の自殺名所だけあって途中に乗ったバスの中は辛気臭い奴らばかりが乗っていてイライラしたが未だ見ぬ『星の欠片』の姿を思い浮かべて妄想を膨らますといつのまにか着いていた。

さて、一通りの準備はここでしなきゃね。

樹海は湿気がつよいから汗で落ちにくい化粧品を買いそろえないと、あと服も二、三着は欲しいとこだわさ。

結局その日は買い物に忙しく樹海に行けなかったが、全て必要なので仕方無い。適当なホテルでチエックインをして軽くシャワーで汗を流した後、夜更かしは肌に悪いのであたしはさっさと眠りについた。

翌朝イグラーの樹海に行く入り口の足下が骨でいっぱいだった。汚れた骨が服につくと嫌だったので軽く足を念で強化して飛び越し、鉄条網で覆われている入り口のどこから進入しようかと迷っている。と隅のほうにちょうど一人一人入れそうな隙間があいていることに気づいた。先にきた誰かが開けたのである。その隙間は子どもかあたしのような可愛い女の子が入れるぐらい小さく、入るときにスカートが引っかかるからないう苦勞したが何とか引っかかるずに入れた時はホツとした。

入ると直ぐに蝙蝠形の魔獣があたしを襲ってきたが念も使えない動物相手に負ける気はしない。軽く撃退するとまた更に奥へと進む。

あれから十時間ほど歩き回ったが分かったことはここがとても広いということ。

ここまで広いのなら探索型の念能力者を雇うべきだったと後悔したが今更遅い。

もって考えてくるべきだったわさ。

空も暗くなってきたので今日はこのへんで夕食をとって明日再びハンターを雇いに帰ったほうが効率的だね。ああ、一時でもここを離れるのは嫌だけどこれも『星の欠片』のためだわさ。

そんな決意を胸に野宿するのにいい場所を見つけていたら湖のそばに洞窟を発見した。

こんないい場所にあるということは九割方中に魔獣、しかも大物が住処にしているのだろう。慎重に中を覗くと魔獣は留守なのか気配を感じられない。

あたしも少しはついてきたのかねと思いつながら奥へ進むと何か人影があるのに気づいた。

急いで岩陰に隠れるが向こうはこちらを気づいている様子が無くその場からじつと動かない。気配からして人に化けた魔獣ではないようだ。

凝で見てもたが隠を使っている様子も無いし、まずオーラが全くと言っていいほど無い。

完全な絶の状態だ。

そのまま相手を警戒していたが聞こえてくるのはスー、スーという寝息だけで嘘がだいたい分かるあたしはそれが本当だといっている。警戒するのが馬鹿らしくなりどんな奴か確かめに近寄ると、体つきからいって16歳ぐらいで額に確かビンディだかティラカだというものを着けている黒服の美少年で将来はかなりいい男になることが想像できる。

寝顔は幼く見えるのであるいはもっと若いかもしれない。

なにせよあたしのタイプであることは間違いないわさ。

眠っている美少年を前に涎が出てしまっているのを感じそれを慌てて拭う。

そういえば何故こんな所にこの少年はいるのだろうか？それほど鍛えているようには見えないのだけど……

服で隠されている腕を触ってみるとそこには少年の見た目からでは考えられないほどの筋肉があった。

こぶが出来たり見るからに筋肉質なわけではないのだがあたしには分かる。

これは修練に修練を重ねた上にできる質のいい筋肉だ。ホッソリとした見た目ながら皮膚の下では強靱な筋肉が出来かけている。ここで

まだ未完成ながらあたしの若い頃を彷彿させるわね〜

きつとこの子は磨けば光る原石、それも特上の！！

胸の内にムクムクと膨らんでくる欲望。この子を育てたらいつたいどんな綺麗な宝石になるのだろうか、興奮してくるわさ〜！！

それに確かジャポンでいう『光源氏計画』、小さいときから懐かせ自分好みの男（女）に成長した所をいたたくという素晴らしい計画をあたしもしりスペクトすべきかもしれないだわね〜

すっかり冷えてきたので焚き火をつけてこの子が起きるのを待つ。

絶と同時にこんなに深い睡眠までして体が己を癒そうとしている程日々の修練が苦しく、体を苛め抜いた結果だろう。その資質はあたしの好むところだけど……

ふいにモゾモゾと体を動かしたし寝むたそつな目を開ける少年。

「あ、あんたやつと起きたんだわさ。

寝顔も目のホヨ〜になっただけど長い間寝ていたからちよつと心配したわさ〜」

警戒した様子でこちらを見る少年。当然のことだけどね。

「何故こんなところに……」

「それは子どものあんたが言うセリフなのさね？」

……まあ、そんなこと言っても始まらないしね。あたしはビスケット・クルーガー、ここの奥地に『星の欠片』と呼ばれる宝石があると聞いてやってきた美少女財宝ハンターだわさ！あたしのことはビスケ、もしくはビスケちゃんと呼びなさい！！」

「で、あんたは？」

「……仙水 忍だ」

「へえ、名前からいってジャポンの人みたいね」

「ああ」

寝顔からはここまで無愛想な子だなんて想像できないわね。

「何であんたはここにいらんだわさ？」

「そこに樹海があるから……？だ」

「嘘をつくのはかまわないけど。もっとマシな嘘をつきなさい！」

きつと触れられたくないのであろう。忍はあたしのそのセリフを苦笑で返す。

「じゃあ話を変えるけど、あんたのオーラの様子から念能力者じゃないってのは分かるんだけどよくこんな場所で生きてこれたわね。」

ひょっとして何か格闘技でも修めているの？それ以外考えられないんだけど」

「ああ、拳法を少し」

「へー、ひよっとして心源流拳法？あたしもだわさ」
見るからに動揺する忍。どうやら腹ごとはあまり得意ではないらしい。

「動揺しているところから凶星のようね。もっと表情を隠したほうがいいわさ」

「いや知り合いに心源流の使い手がいたから驚いただけだ。

それより一般人に念のことを教えていいのか？秘匿義務があるのでは……」

話がはぐらかされたけど……まっ、いいでしょう。

「あなたがカタギの人間には見えなかったし、その様子だと念について知っているようなんで大丈夫だわさ。」

「だったらちようどいい。俺に念を教えてくださいないか？」

「いいわさ」

どちらにしてもこの原石を放っておくような勿体ないことはするつもりは無かったし、服の様子からここで長い間生きてきたことが分かるのでこの樹海の中にある『星の欠片』探索にも役に立つだろう。

「その代わりに『星の欠片』の搜索を手伝うのと、パスの有効期限があと二ヶ月できるからそれまでになるけどいいわさ？」

「それでいい」

「じゃあこれで契約完了だわね」

それから忍の念の修行が始まった。といっても忍は長い修練によって念に目覚めかけていたらしくあたしがちょっと念をぶつけたらすぐに念に目覚めた。

蒸気のように立ち上るオーラ。それをあたしのアドバイス無しで直ぐに纏で留めたことにも驚いたけど、忍の飲み込みの速さにはもっと驚かされた。

纏から錬の修行に移るまで一日もかからなかったしそのあとは自分で錬の持続時間を延ばす訓練から錬の応用技である凝に近いことも自分で開発したりとまるで生まれたときから念について知っていたように感じる。

「全く、可愛げが無いわねえ。」

もっとあたしに先生をやらせなさいよ！」

「ビスケには感謝してる」

最近ようやく見せるようになってきた笑みを見てため息がでる。

「じゃあ今日は（あたしが）待ちに待った発の訓練ね。」

まずは自分が何の系統に属しているか調べるために水見式と言われる方法を使うわよ。

まあ何事もやってみなくちゃ分からないからとりあえず両手をこのコップの脇に置いて錬をしなさい」

「……分かった」

何故か諦めたような表情を浮かべ忍が錬をする。

コップの中の水が

少し紫色に変わった。ということは放出系ね。

「忍は……」

言いかけたところであたしは気づいてしまった。紫色の水の中で砂金のような金色に光る粒があることに

「忍は……放出系と具現化系!？」

どういうこと!?!?こんなこと聞いたことが無いわさ!!!」

十 十 十 十

やはり恐れていた事態が起きてしまった。

念についての上達の速さはただの才能で話がつくが系統については中々そうもいかない。

二つの系統が百パーセントなんてことは歴史上無いだろうし(クラピカは緋の目の時、特質系で全ての系統が百パーセント使えるというものだから違う)あまり人に知られたくないので水見式の対処方を考えていたが良いアイデアは浮かんでこない。

ビスケに水見式をすすめられた時はほとんど諦めていたが、二系統はやはり珍しいらしくビスケにたくさん質問された。知らぬ存ぜぬをつき通したが未だ疑いの表情を向けられる。

「俺は何も知らない。第一念が使えないのに系統が分かるわけないだろう」

「それは……そうなんだけど、忍は何か隠している気がするんだわさ」

「気のせいだろう」

その場の追求は何かなくなつた。

『ヒーツ、俺は本当に何も知らねえんだよ。だから頼む、助けてくれ!』

「だったらお前はもう用なしだな」

俺の言葉を聞いて一目散に逃げる魔獣の頭に念で強化した踵落としをする。頭から腰の位置までがぱっくり裂け鈍い音をたてながら地面に倒れる魔獣を見ながら考える。

やはり念での肉体強化はあまり得意では無いらしい。せいぜい普段の1.5倍程度の威力しかない、俺自身の筋力をつけるかオーラの総量でカバーするしかないようだ。

「忍く、そつちはどうだったわさ？」

林の奥からツインにしたビスケが出てきてそう言う。

「ダメだ。どいつもこいつもろくな情報を持ってない」

だいたいの念の訓練が終わって最初の約束通りビスケの『星の欠片』の探索を始めた俺達は会った魔獣から情報を聞き出すということをしてきた。無論素直に答えてくれる魔獣は皆無とっていいほどだった。なので俺は念の訓練と併用しながら作業をする。

「あたしは良い情報を聞いたわ。何でも巨大な猿みたいな魔獣が自分の住処にもって帰るのを見たという話だわさ。」

「……それなら心あたりがある」

正確には確信だ。灯台もと暗しという言葉がこれほどまでに正しい言葉だったとは…

しばらく家探しをすると、巨大な岩盤が意味ありげに壁際に立てかけられているのを見つけた。ビスケと協力して岩盤を動かすと中には手のひら大のダイヤが…

「ああ、やっと見つけたんだわさ〜!!」

なんて名前をつけようかしら、ディアちゃん!? ベリーちゃんも捨てがたいわさ!!」

冷たい視線に気づいたビスケはコホンと咳払いして向き直った。

「あ〜これであたしの願いは叶ったし、あんたはこれからどうするの?」

「しばらくは念修行の旅にでるわ。」

「じゃあ、あたしのホームコードを覚えておくわね。
あんたも携帯電話を買ったらあたしに教えるのよ。」

そういえばそんなものがあつたかもしれない。十数年ぶりに外にで
るからきつと周りの景色もだいぶ変わっているのだらう。現代の浦
島太郎とはきつと俺のことかもしれない。

「わかった。携帯を買い次第連絡するよ」

「待つてるからね」

そついい残しビスケとはイグリアの町で別れた。
とりあえずアイジエン大陸から離れて、ヨルビアン大陸にでも行く
か。天空闘技場に行くのも良い。

やるべきことはまだたくさんあるのだから

仙水さん修行する(3)(後書き)

これからも更新続けていきます。

ご要望、意見がありましたらどうぞ

仙水さん出会う(前書き)

読者の皆さんにはいつも励まされています。

ありがとうございます…！

仙水さん出会う

人通りの多いカフェテラスでブラックコーヒー（に砂糖とミルクを混ぜたもの）を飲む。砂糖が舌に心地良い。

しばらくそうしていると通りの向こうから見知った顔が来てため息をつく。奴が来て良い話しを持ちかけたことなどないのだ。

「仕事だぞ仙水」

「また殺しか？」

「いや、今回はどうやらボスのコレクションの警護らしい」

あれからヨルビオン大陸に渡った俺は念の力を生かすためにマフィアに雇われた。

最近の命令は組織を裏切った奴やボスの命を狙ってくる念能力者を殺す仕事ばかりで、別に人殺しに忌避感はないが同じことの繰り返しに少々飽いていた。

そしてそんな俺に話しかけてきたのは俺と同時期に雇われたボスのボディガード兼やつかいな事件担当のコレオという奴で見た目は爽やか系の金髪青年だが、優秀な念の使い手であつては連続殺人犯として監獄暮らしをしていたところボスにその力を見込まれたらしい。

はつきし言つてどうでもよかったが割かし年の近い俺にやたらと絡んできて以上のことを延々と語るのですっかり覚えてしまったのだ。男の過去には興味が無い。

「で、それだけかい？」
こいつのことだからそれだけを伝えに態々会いに来ることもあるまい。

「……実は昨日ボスが夜俺を部屋に呼び出してな。」

今日の夜のパーティーの護衛についてかと思ったがどうやら気色が違うらしい。

もっと近くに寄れと言われて近づいたら今まで部屋が暗くて気づかなかったがなんとボスは裸でいたんだ。五十近いおっさんがだぞ！その場は明日の準備がありますのでと言ってなんとか逃れたがあれは完全に俺を狙っていた目だった。間違いない！！」

「仕事を止めようにも、ボスとの契約を見捨てて犯罪者の君が再就職する場所は無いに等しい。滑稽だよ、これは」

「他人事だと思って……」

「おや、違ったかい？」

俺の言葉にグウの音もでないコレオ。

さすがに可哀そうに思えた俺は話を変えようと仕事の件についてくわしく聞く。

「さっきいったように今日の七時からマフィアのお偉いさんたちが集まるパーティーがあるのはお前も知っている通りだ。」

そこでボス…ボスが大事にしているベンズナイフのコレクションを自慢するんだとさ。

勿論厚さ一メートルの防弾ガラスで四方が覆われて構成員たちにも

マシンガンを持たせて警備させるが、もしも念能力者が盗もうと思つたらそれは不可能じゃねえことはお前も良く知っているだろう？

そこで用心のために仙水が陰で守ってくれたら安心だ。

まあ、俺はおそらくボ…ボスの護衛になるんだらうけどな……」

再び落ち込むコレオ、正直見えていてウザイ。

「警備主任は君なんだろう？」

だったら配置を変えればいいじゃないか。」

「クツ……その手があったか！？今からボ…ボスに掛け合ってくる！」

あと警備班の集合はPM5:00にいつもの場所だそうだ。またなっ！」

急いで駆けていくコレオを横目に時計を見ると午前十時を示していた。

まだ時間はあるから念の修行でもするか。

護衛たちにあてがわれた家に帰ると地下室で練を始める。

オーラの色が聖光気の色である黄金色に未だならないのは何故なのだろうと思ひながら応用技に移る。円や流は中々難しくて拾得できてないが隠は身に着けた。戦闘において隠はかなり役立つ、特にわか念能力者は凝を怠るのでその効果は大きい。

以前も烈蹴紅球波を戦闘の中隠で隠して打ったが相手は気づかず頭を吹き飛ばした。未だ威力は原作ほど無いのでこれから修練が必要だろう。

気鋼闘衣は何故か上手く出来ない。イメージ等の修練が足りないせいかもしれないが聖光氣を得てないのが原因だと思う。

いったいどうしたら聖光氣を纏えるんだ？
仙水だつて聖光氣を纏うまでに十年近くかかったので単純に修練不足かもしれないが…

とりあえず現段階で出来るのは念の修行しかないので只ひたすらにやるのみ

系統別の修行で烈蹴紫炎弾、多数の烈蹴紅球波が襲う技のために操作系の訓練をしていたがふと時計を見ると既に四時前だったのでしごを登りシャワーを浴びて新品の服に着替える。

服は基本的にいつものやつなので選ぶ手間が省けて良い。
適当に食事を済ませると集合場所へ向かった。

移動は電車だ。俺はコレオみたいなボディガードではなくもっぱら荒事専門なのでボスの屋敷からは少し離れたところに住んでいるのだ。

あの仙水が電車にのっていると考えるとかなりシニールで笑える絵だろう。

そんなことを考えながら混雑した電車の中で席を探したがなかなか見当たらない。電車の後方に一つだけ席が空いていたのでその席の隣にいる本を読む人物に声をかける。

「そこ、いいかな？」

「…ああ、構わない」

了承して貰えたようで安心して座るが座った瞬間に鋭い視線が飛ん

でくる。どうやら隣の人物からでは無く後ろの席からと向かい側の席の女性からのほうからだ。がマフィアの世界じゃよくあることだから気にしない。

目的地に着くまで暇なので向かい側の女性に話しかける。

「君達はどこへ行くんだい？」

「……あんたに関係ない」

どうやらご機嫌斜めのような。そんなに隣の人物と一緒にいたかったのだろうか？

この女性と話すことは諦めて隣の本を読む人物と話すことにする。

「君のその本もしかして『黒の章』じゃないか？」

「これを知っているのか？」

「ああ、俺が作者だ」

もちろん名前は仙水が人間を本格的に嫌悪し裁かれるべきだと考えるようになった決定打のビデオテープ『黒の章』からつけられた。人間が行ってきた罪の中で最も極悪で非道なものが何万時間という量で記憶されたそれはビスケと別れた後に書き出版された。

内容は人間が行ってきた罪を哲学的に書いた簡単なものだったが一部の熱狂的なマニアが人間に絶望して人殺しが行われたので本の発行は中止になり今ではレアな存在だ。

忍のような精神状態になった時書いたもので今でも見ると少しぞつとする。

「このページの考察についてだが…」

「ああ、ここは…」

その後は会話も弾み道中は楽しかったが目の前の女性は不機嫌そうな表情をし続けていたが後ろの席の連中は驚きと好奇の入り混じった視線を向けてくるようになった。

楽しい時間はあっという間に過ぎ電車は目的地に到着した。ホームには既にマフィア達がゴロゴロして待っていた。

「ここでどうやらお別れのようだ」

「奇遇だな。俺もここで降りる予定だ」

「そうか、またどこかで会えるといいな」

「ああ」

そつえばまだ名前を聞いてなかったな。

「俺は仙水 忍だ。君は？」

「クロロルシルフルだ」

俺は動揺を必死で隠して軽く手を振る。クロロも不思議そうにはしていたが何事も無く別れた。

俺は構成員の一人が迎えに来たリズムジンの中で考えた。

十中八九旅団の狙いはボスのベンズナイフコレクションだろう。少なくとも二十点はある

ということは最低でも一億ジェニー、ボスはレアもの好きだから五

億はいくかもしれない。

そしておそらくクロロはベンスナイフの愛好家。

旅団が狙うはずだ。

クロロはオールバックじゃなくて額に包帯巻いていたから気づかなかった。

……ということは俺の目の前にいた女性はマチだな。後ろの方にいたのはその他の初期メンバーだろう。どうやら今日でこのファミリーは潰れるらしい

鬱な気分のまま集合場所に着いたことを運転手に言われゆっくりリムジンを降りる。

マフィアが抱える戦闘部隊がそれぞれ武器を持って集合していたが旅団の連中を見た後ではゴミにしか見えない。

「遅いぞ仙水」

俺を見て声をかけるコレオ。

「まだ時間にはなっていないようだが、

こんなところにおいて大丈夫なのかい、ボスの護衛はどうした？」

「外してもらったんだ。」

コレオは嬉々として言う

「そうか、それは可哀そうだ」

「何でだよ！」

ボスの護衛ならまだ生き残るチャンスがあるがベンスナイフの警備

ならば確実に殺されるだろう。まったくもって可哀そうだ。その後は若くして警備主任についたコレオからの戦闘員の配置といざという時のプランについての説明があったがほとんど俺は聞いてなかった。どう考えてもそのプランの中にA級首の盗賊団が襲ってきた時の対処方法が想定されているとは考えられなかったからだ。実際出来ることは逃げることぐらいしかないが……

「コレオ、君はボスのボディガードに戻ってここから逃げたほうが良いぞ」

「やだよ。駆け落ちじゃあるまいし何故俺があんな奴と逃げなくちゃならんのだ。」

「君にとってその方がいいんだけどなあ」

「殴るぞ仙水」

忠告はしたから後はもう知らない。

クロ口達が来たらどうしようか。まだ原作ほど強くなっていないから一対一なら勝てる自信があるが複数でかかってこられたらたぶん死ぬだろう。

考えごとをしていると時間はあっという間に過ぎパーティーは始まった。

きらびやかなドレスを着た貴婦人たちや各ファミリーの幹部たちがぞろぞろと入場し、舞台には有名なオーケストラが演奏している。小さな子どもがテーブルの上の食事を口いっぱい詰り込み親達はワインで乾杯する中ベンスナイフを警備するために配置された構成員たちがもっているマシンガンが酷く浮く。俺はパーティー会場の

中を絶で気配を消しながら移動していた。基本的に陰で怪しい者がいないかを調べ不足の事態が起きたときに対処するのが俺達の役目なので行動はあまり制限されていない。未だ客の中にも幻影旅団らしい姿はないので大丈夫だろう。すると警備前に渡された小型の耳につけるタイプのトランシーバーから声が聞こえた。

『そっちはどうだ仙水？』

「問題ないようだ」

『そうか。引き続き警備を頼む、何かあったら連絡を入れろ』

「了解」

そのままパーティーは続いた。ボスが自らベンズナイフコレクションの前に立ち長々とこのナイフを集めるようになったきっかけやどのような経緯で手に入れたのかを招待客の前で自慢をしている様子は呆れたが概ね周りの客からは人気があった。

きつといくつもの敵対するマフィアを潰したり、欲張りな商人を逆に騙して安く買った話が同じマフィアとして関心がもてるのだろう。そして最後にコレクションの中で一番高価なものの説明を始めるころには周り中がたくさんの人で覆われているほどだった。

「では最後にこのベンズナイフについてですが……」

『皆さま、これが最後の曲です。かの有名なホルストにあやかって木星』です。

どうぞ楽しんでお聴きください』

その間を計るようにして、いや実際計ったのだろう。
突然舞台の上の進行者がそうマイクで告げた。

「おっと、ではまたこの曲が終わった後に説明させて貰いましょう。」
「もったいぶるボスのやり方に衆人は皆不満の声を漏らしたがこんなことは良くあるので仕方無いとばかりに苦笑を浮かべる。」

音楽は有名だったので俺もよく知っていたがあまり聞き覚えの無い笛のような楽器の音はなんなのか分からなかった。フルートやピッコロでもない音は耳の肥えた一部の客は気づいたようだが綺麗な音だったのであまり気にしてないみたいだ。
だが曲が終わる頃に突然オーラを感じた俺は嫌な予感がしてその場の地面を強く蹴って離れる。

「戦闘演舞曲『木星』!!!」

地面が揺れ、耳が大きな破壊音を捉えると同時に巨大な天体がボスとその周りにいたたくさんの招待客を圧死させる。その音がおさまると中心部は大きな穴が開いておりあたりは血まみれでもはや人は原型を留めていない有様になっていた。

「そう来たか…」

「何がだ？」

早速手に入れたベンスナイフを俺の首に突きつける幻影旅団の団長がそこにいた。

仙水さん出会う(後書き)

次回戦闘か!?!はたまた恋愛か!?!もしかするとコメディかもしれ
ない!?!?

え〜と……じゃあ戦闘で

また会いましょう読者の皆さん!

仙水さん闘う

黒塗りのリムジンの中から見る星空は都会のビルからもれる人工光に大幅に力負けしているが綺麗であることに変わりない。車は高速を変わらない速度で飛ばす。

「君はいつたい何者なんだい？」

「…その質問は俺がさせてもらおう」

助手席に座っているクロロがそう言うとは後部座席にいる俺を右隣にいるマチが念糸を首に当てて脅すようにするが脳内ではどう逃げようかという考えしかなかったのであまり気にはならなかった。しかし左隣にはボノレノフが、そしてその左にはリムジン内を窮屈そうな表情をしているウボオーギン、ウボオーギンが頭に手を伸ばしてくるのを嫌そうにするシャルナークがいたのでどうやらこの場での脱出は不可能らしい。

俺はあきらめて答えるとした。

「君が知つてのとおり俺はただの『黒の章』の作者さ」

「まあ、今はそれだけでいい。直に全てが分かる」

クロロの発言から推測するとこの車はパクノダのいる場所に向かっているようだ。でなければそんなことを言うはずがない。

しかしだとしたらヤバイな。記憶を探られ原作を知っていることを

パクノダに知られると非常に不味いことになる。

「……俺以外にあの場から逃げたしたものはいないのかい？」

「一人念能力者が逃げ出したようだよ。」

何か特別な能力があるのか追いつけなかった。あんたの友達かい？」

「さあどうだろうね」

「団長！！何でこいつだけ生かして連れてきたんだ？」

ウボオーギンが俺の態度と車内を更に狭くしている俺にいらついたのか大声で叫ぶ。

「ちよつ、ウボオー！こんな近くで大声出さないでよ。鼓膜が破れるかと思った」

「すまねえ。で、何でだ団長？」

「そいつはパーティーで何が起こるのかを知っていた。」

「それはこの人の念能力なんじゃない？」

「バカ言えシャル！そいつは俺らと一緒にの戦闘狂だぜ。血の匂いがブンブンする」

「俺は戦闘狂じゃないから一緒にしないで欲しいんだけど……」
呆れたように言うシャルナーク。

「ま、でもそいつはたぶんそんな念能力じゃないと思うね。」

「勘か？」

クロコが助手席から聞く。

「勘だよ」

高速から降りた車は廃墟と化したビルの前に止まりさっさと降りるとばかりにマチに押されたが危なげなく着地する。どうやらヨークシンでアジトにしていたような所らしくビルの中も夜の冷たい隙間風が吹いていて住み心地が悪そうだ。マチに両手を後ろで組まされた後念糸で拘束されながら奥へ奥へと進む。しばらく進むとどうやら目的地である開けた部屋にパクノダとノブナガ、フランクリン、フェイタン、フィнкスの初期メンバーがいた。

「よう、遅かったじゃねえか。」

「って誰だそいつは……？ボノレノフに次ぐ新メンバーか？」

ノブナガがそう言う。

「そつえばこいつ見覚えあるね。たしか電車に乗ってたよ」

「団長直々の推薦か？」

「んなわけないでしょう。団長の気まぐれで連れてきたの」

「パクノダ、こいつの記憶を見る。」

団長はやはりそう言う。どこか逃げ出す方法は無いかと探したが入り口の扉はウボオーキンが塞ぎその隣にはノブナガが刀に軽く手をあていつでも斬れるよう準備をしている。おまけにすぐ近くには団長がいるような状態だ。到底抜け出せない。

パクノダがゆっくり頭を掴もうと手を伸ばしてついに頭に触れる。

「じっとしてなさい直ぐ終わるから。あなたの隠したいことは何？」

頭の中を読み取られていく感覚がすると同時にスイッチが入ったような感覚がした。

「ヒイイツツッ！！何でっ！？……こ……こんな！！??」

「どうしたパクっ！？貴様っパクに何をした？」

ノブナガは俺の首に刀を当て動揺した様子で止めるよう促すが一番動揺したのは俺だ。念も何も使っていないというのに目の前の人間がいきなり叫びだして驚かない奴などいないだろう。それほどまでにこの世界が漫画の世界だというのに驚いたのだろうか？それともいまだ知らない何かが起こったのか？

謎は深まる。

しばらくして動揺が収まった様子のパクノダだがこちらを見る目は完全に恐怖して顔も青ざめている。

「何があったパクノダ、最初から話せ」

「はい団長。しかし最初に言っておきますがこいつは危険です。

今すぐ釈放したほうがいいかと」

パクノダのその発言に俺は勿論驚いたがそれ以上に団長であるクロ口を除く旅団のメンバー全員が信じられないような顔をする。マチヤノブナガはその訳を聞いたさうと口を開きかけるが団長が手で制止をかけたので二人とも黙り込む。

「それは俺が判断する。話せ」

「私がこいつの記憶を見たところ最初はここからどう脱出するかについて考えていましたですがすぐに、まるで人格が入れ替わったように記憶が変わりました。」

『皆殺しだ』『全ての人に墓を掘る』『俺達二人で墓を掘る』という言葉と共に異常なほどの殺意に溢れた記憶は吐き気を催すほどに強く私は耐え切れずに手を離したんです。

今考えてもゾクゾクします。あれほどの殺意はありえないわ」

間違いない。忍だ

エリの一件以来目覚めた人格が俺の中で眠っていたようだがパクノダの記憶を読み取る能力に感化され出てきたというのがおそらく正しいだろう。忍と俺はかなり近い存在だが俺は忍ほどの殺人衝動を持ってないのが唯一の違いだろう。

「…………それは旅団員であるお前を震え上がらせるほどの殺気というわけか」

「はい」

クロロは何か思案事でもあるのか黙る。またしばらくして一言

「ウボオーギン、こいつと闘え。殺しても構わん」

「待ってたぜ団長!!」

ウボオーギンはそう言つと一足早く部屋から出て行つた。パクノダに記憶を読まれなかつたことは良かったのだが人生とはそう上手くはいかないものだ。なとため息まじりに後をつづく。

外は少し肌寒かつたが体を動かす分には申し分ない。

ビルの上からは旅団員達が戦いの様子を見るために集まっていたがその動機は不純なものらしい。

「あたしは十秒以内に終わるに10万ジェニー」

「俺はそうは思わないな。あの人強そうだし三十秒は持つんじゃない？

ノブナガはどう思う？」

「そつだ。奴もなかなかの腕前だがウボオー相手に一分もつか持たないかな」

「動きいいね。でも一分以内に終わるに百万かけるよ」

「じゃあ俺は二分」

「俺も二分だな」

外野が随分騒がしいな。

「じゃ、そろそろ行くぜつ！！」

ウボオーギンはそう言つと念で強化されたせいか足下のアスファルトを砕きながらすさまじいスピードでこちらへ向かってきた。強化系を極めたウボオーギンの攻撃は練をしてても一発くらつと相当や

ばいがそう簡単には受けない。

「喰らえっ!!！」

大振りのアッパーが俺を狙うがそのような攻撃が俺に当たるはずも無く、その後に出された普通では見えないはずの蹴りも上体を反らすことで軽くかわす。そして必殺の一撃がかわされたことでバランスを崩したウボオーギンの顔を蹴り飛ばす。
一瞬の出来事がショックで地面に伏せたウボオーギンはまだ自分が何をされたか良く分かってないようだ。

「確かウボオーギンとか言ったね。」

……君のパワーを10とすると俺は4と5の間くらいだろう。スピード、バネ、スタミナ全て君が上だろうな。

君のほうが俺を上回っているのに勝てない……何故かわかるか？」

「ほざけっ!!！」

冷静さを失った様子ウボオーギンは動きが荒くなり、隙を見せたところを再び蹴り飛ばしたが頬から少し血が出ているぐらいであり大きな怪我はしてない。

距離を置いて少し油断しているウボオーギンの姿を見て俺は手のひら大の大きさの念球をつくる。そしてできあがったそれをウボオーギン目がけて蹴りだした。

「烈蹴紅球波っ!!！」

「ぐぐっ!!！」

ふいをつかれたウボオーギンの腹に見事命中するとそのまま三メートルほど宙を舞った後痛ましい声を上げる。

観客はまさかウボオーギンにあれほどのダメージを与えとは思ってなかったらしくフィングスは賞賛の口笛を吹く。

ウボオーギンがよろよろと起き上がる様子からどうやらあばらが折れたらしい。

「降参するかね？」

「誰がつ！」

さすがタフが売りな強化系らしく動きに衰えが見えない。むしろどんどん速くなって行く。

上体だけで攻撃をかわすのもしんどくなりその場を離れるためにバツクステップする。

するとウボオーギンはそれを待っていたかのような笑みを浮かべた。

「くらえっ、破岩弾ん！！」

その声と共にアスファルトの塊が飛んでくる。全ていなしたが目の前には既にウボオーギンはいなかった。後ろに気配を感じて振り向いたがもうウボオーギンの予備動作は済んでおり顎のあたりを殴られ空へと打ち出される。

「終わったな。やっぱりウボオーギンの勝ちだ」

「つまらないね。結果わかってたよ」

が、飛ばされた先の建物を蹴った反動で再び隣接して攻撃に入る。
「……………なっ!?!」「……………」

ウボオーギンも反応して一撃目を防いだのは敬意に値するが二撃目からは反応できずいよいよにされアスファルトに強く体を打ち付けられる。

「君が勝てない理由その一、俺には君の攻撃がなんとなく読める。」

「どづいつことだ?説明しやがれ!!」

「つまりキャリアさ。幼い時から魔獣と戦ってきた戦歴。

さつきみたいに不意をつかれ攻撃をくらっても

戦いの勘つてやつが反射神経よりも俺を動かし致命傷をさける」

実際はそれに流も合わせて使っているのだが自覚がないのでよく分からない。

再び片手に念球を俺はつくりだす。

「打たせるかよっ!!」

突っ込んでくるウボオーギンの蹴りや拳を片手で捌きながら後ろへ跳ぶとそれに合わす様に前へ跳び再び攻撃をするウボオーギン。一度大きく後ろへ跳びウボオーギンが近寄ってくる前に念球を構えて蹴りだすモーションに入るがそれをさせじと念で更に足を強化し、放つ前の念球を潰せるタイミングをつかまれる。そしてウボオーギンが潰そうとした念球は目の前で消える。

俺が放とうとした念球を自ら消したことに驚いたウボオーギンはま

だ念球を蹴ろうとした俺の足が生きていることに直前で気づいたよ
うだが時既に遅し。

ウボオーギンはそのまま首を蹴り飛ばされ打ち所が悪かったのかピ
クピク痙攣している。

心配したのかシャルナークがビルの三階から飛び降りて確認した。

「大丈夫、気絶しているだけだよ！」

重そうに気絶したウボオーギンに引きずられて部屋に戻ると様々な
視線が飛んできたが大部分は好意的なものだった。

「お前の次の相手は俺な」

「フィックス、止せ。お前は着いて来い」

その後はクロロの案内に従って建物の中を移動した。案内された部
屋は何かの動物の毛皮が敷いてあってその上に椅子が二脚並んでい
る。

早速クロロに勧められて座ってみるとひじ掛けがピッタリ合い我が
家にも一つ欲しいものだと考えた。

「最初電車で会った時何か核心めいたものを感じた」
クロロは向かい側の席に座るとそう語りだす。

「お前と俺はどこか似ていると。」

「『黒の章』にしたってあの考えは殺人を日常のものにしている者
の考えだ。違うか？」

「要するに君は俺に何を求めているんだ？」

「幻影旅団に入れ」

「……それは心引かれる提案だが君達と俺は求めているものが違う。」
少し迷ったがもうこの意思は固まっている。

「いったい何を求めているんだ？」

「人の肅清だよ。」
忍とは違った方法で俺は人を肅清する。それが例え偽善だろうと悪
であろうと……

「……そうか」

「だがクロロの友人なら俺は受け入れよう」

「……友人か、そんな便利な利害関係があつたとはな。」

「本心だよ」

「知っているぞ」

仙水さん闘う（後書き）

仙水とクロロ、二人は仲良しっ！！

てな感じで終わった今回ですが以前からこの二人は良く似ているな
〜と思い仙水は誰かの下につくようなタイプではないと思ったので
このようなことになりました。

どうぞこれからもよろしくです！！

仙水さん仕事を(1)(前書き)

今回は話の導入部分なので短いです

仙水さん仕事をする(1)

「そんな隅でチビチビとやらずにこっち来てもっと飲めっ仙水!!」

あれからしばらく旅団の仕事を手伝うようになり旅団のメンバーと親しくなった。ノブナガは酒に酔うとやたら絡んでくるという酒癖の持ち主であることも見ての通りだ。

なかなか動き出さない俺に焦れたのかノブナガは片手に『美男子』と書かれた酒瓶をもって隣の席に掛けたがあまりに勢いよく座ったのでこけそうになっていた。

「もうやめておけノブナガ」

親切心で声をかける。

「そんなことより仙水、お前さっさと旅団に入っちまえよ。団長にも言われてるんだらう?」

「またか……」

何度も断っているのにノブナガも本気で誘っている訳ではないようだが酔うと半ば決まりきったように同じセリフを繰り返すのでノブナガの相手は大変だ。

シャルナークもグラス片手に横目で見ているがあれは助ける気が無さそうなので役に立たない。他の助けを求める為に視線を走らすかフェイタン達は仕事先で捕まえた一人を拷問しながらそれをつまみに酒を飲んでいるようだし、シャルナークやボノレノフなどの傍観

組みは頼りになりそうもない。ノブナガと仲の良いウボオーギンならどうにかしてくれるかと思ったが一人樽でワインを飲んでいるところを見ると他の連中と比べて役に立つとも思えなかった。

女性陣は……パクノダはまだ俺相手に怯えているようで向かいの席に座っただけで膝の震えが止まらなかつたし、マチには嫌われているようで仕事以外は話しかけてもほとんどシカトだ。そこまで嫌われる覚えは無いのだが事実嫌われているのでどうしようもないだろう。

クロ口に至っては言うまでも無く片手に本を持ちながら自分の世界に入っている様子なので希望は持てそうに無い。最初から希望は持っていないのだが……

現実逃避気味に他の人物に頼るのは止めにして泥酔したノブナガを担いだまま店を出ようとするとシャルナークが、

「ノブナガ送ってくれるの？」

とたずねて来たがそんなつもりはもうとうなく外の通りに置いておくつもりだと答えるとシャルナークは引き気味に笑っていた。もう外は雪がちらつき始めていて夜は氷点下を超えるであろうがそれは俺には何の関係もないことだ。おそらくノブナガは酔いを醒ますために外の冷たい空気にあたりについてそのまま眠ってしまったのだらうと、翌朝モノ言えぬ屍となった故人を前にして旅団の連中（シャルナーク以外）はそう考えるだらう。本当にかわいそうなことだがそれが現実なのだ。

「ヘックシヨーーイ、グスツ……あれ何で俺こんな所にいるんだ？」

ゆっくり起こさないように気をつけて通りに置いたところそのよう

な反応をされたので興が冷めた。凍える中バーに戻り帰る旨をクロ口に告げると貸していた本が返ってきたので感想を聞くと、なかなかだったとだけ言って再び本を読み始めた。その本を受け取り団員に軽く挨拶してホテルに帰る。

ホテルに戻り自室に入るとすかさず念の訓練に移る。来たるキメラアントとの戦いにおいて王クラスとまでは言わないが王直属の護衛であるユピー、プフ、ピトーと渡り合えるぐらいの実力はつけていなければならぬ。この先原作に出てこない強敵が現れることも十分ありえるからだ。聖光気さえ纏えればそんな心配はいらないのだが未だその兆しは見えないので今は烈蹴紫炎弾の為に操作系の系統別修行を始めている。原作に描かれてなかったのととりあえず手の平大の念弾をつくりそれを部屋の端から端へ移動させるようなことをやってみた。

口で言うのは簡単だがこの操作は予想以上に難しい。放出系と具現化系は100%の才能を持っているのだが他の系統に関してはせいぜい20%しか無いと神に言われたのはどうやら本当のようだ。のろのろと八工が止まりそうな速度で進む念弾を見てくじけそうになるが才能が無いと諦めるのはまだ早い。

強化系のネテロ会長の念能力は『百式観音』、あれは完全に具現化系と操作系が入っている。

ヒソカ風に言えばカストロのようにメモリ不足になるはずなのだがネテロの能力はそのような兆しが無い。この差は純粹に念能力者としての経験の違いによるかもしれないがおそらく大部分はオーラ量の多さで説明できるだろう。つまり苦手な系統でもそれに費やすオーラ量を増やせば能力は発動できるということだ。

今度は念弾に費やすオーラを通常よりも多くしてやってみる。
すると先ほどより何倍も素早く部屋の端から端へと移動したがそのスピードを制御出来ず窓を突き破ってしまった。まだまだ練習が必要ようだ。が烈蹴紫炎弾の道は開けた。消費するオーラ量さえどうにかして少し制約をつければ十分実現するだろう。

続いてオーラ量を増やすために練の持続時間をのばす特訓もする。
今のところ楽にできるのはせいぜい五時間までといったところでゴン達より少し長いが放出系の技はオーラそのものを飛ばすので具現化系に比べると燃費が悪い（と思う）からオーラは必要だし、オーラが多くて悪いことはない。最近ではオーラが自分で見ていて分かるほど静かにそして力強くなっているように感じ、顕在オーラ量もだんだん増えていっているように思う。

このまま念の修行が順調に進めばいずれ聖光気を纏える日がくることだろう。

しばらくその調子で練をしているとドアをコンコンと叩く音がした。誰だろう？と思いつながらドアを開けると一番有り得ない人物がそこにいた。

「伝令の変更よ」

そういえばマチは指令役だったなと思いつき納得した。とりあえず詳しい話を聞こうと部屋の中に招き入れようとしたが、マチは部屋の中にさえ入る気は無いようで改めて嫌われていると実感したため息をつく。

「それで……？」

「フヴァロン家の『リトルドラゴンの琥珀』奪取、最初はあんだだ

けで実行する予定だったけど最近腕利きの念能力者が多数雇われたらしくてね。(まあ、ついさっきシャルナークがハンターサイトで調べた情報なんだけど……)

あんた一人じゃ無理っばいんで団長があたしとフランクリンも連れて行くようにだって」

『リトルドラゴン』というのは三億年前に存在した体長五センチ程のトカゲのことです。つい最近までそんな時代にトカゲは存在しないとしていた学者たちの発言を黙らせたのが『リトルドラゴンの琥珀』だ。その名の通り樹液の中に閉じ込められたリトルドラゴンが長い年月を於いて琥珀へと変わったものでその価格は一億とも二億とも言われている。

フヴァロン家によって保管されているそれは近年国の博物館に寄付され警備が更に頑丈になる前に頂くと話す話だったのだが……

「なぜ情報が漏れたんだ？」

「あたしが知るわけじゃない」

「……だろうな」

このことを知っていたのは俺を除いて団長とシャルナークだけだったはず。

二人が情報を漏らすはずが無い。となると内通者の線は薄いから誰かが情報を盗み見たとしか考えられないのだが……

まあ考えても仕方無い。だが次からは情報をより厳重に扱わなければならぬ。

マチは俺が了解した旨を伝えるとさっさと帰っていった。
明日の仕事もあることだし今日の修行はこれぐらいにしてもう寝ようかと思ったが部屋は破れたガラス窓から冷たい風が吹きこんできてカーテンは外からの風の強さを表すように激しくはためいている。さすがにこの部屋で眠る気にはなれずホテルの受付に連絡して窓の修理代を払って部屋を変えてもらった。

明日は少しマシなことがあるといいのだが

仙水さん仕事をする(1) (後書き)

更新が遅れた理由は……クツ、言えません

なぜなら突然目の前に現れた鎖男に”律する小指の鎖”ジャックシメントチェーンなる鎖を心臓に打たれ更新が遅れた理由の一切を話した瞬間自分の心臓が握りつぶされてしまうからなのです。

読者の皆様に真実を伝えられないことは本当に悔しいですが……

あの、すみませんでした!!次は更新を早くするよう努力します!!

仙水さん仕事をする(2) (前書き)

キャラを壊さずに書くって難しいっ!!!

既に仙水さんは壊れてるかもしれないが……

仙水さん仕事をする(2)

フヴァロン家の敷地内には既にカタギの人間ではないような集団で溢れかえっていた。各々物騒な銃火器を持ち屋敷の周りを警備している連中を前にしてフランクリンとマチはリラックスモードだ。魔獣たちが常に襲いかかってくる中育った俺もたかが銃をもつ相手は脅威にもならないので同様にしている。

「おそらく雇われた能力者達は屋敷の中にいるだろう」

屋敷内に植えられている茂みの中でそう告げる。

「十中八九そうだろうな。するとここでゴミどもを外で相手するの
が一人、中に潜入し敵をバラした後お宝を盗ってくるのが二人。問題はその人選だが……」

フランクリンも顎に手を当て思案顔で答える。

「それについては既に考えている。マチ……頼めるか？」

マチの実力は十分知っているが狭い屋敷の中放出系の俺とフランクリンは念弾を敵に当てやすい。屋敷の中は逆に隠れる場所や死角も多いがそこはフランクリンの“俺の両手は機関銃”ダブルマシンガンで一面に弾幕を張ればあまり意味がないし、俺の場合は今朝制約をつけて実現した複数の“烈蹴紅球波”が相手目がけて襲う“烈蹴紫炎弾”を使えばそれも解消できる。それにフランクリンを今回の仕事につけたクロ

口もそれを予期してのことだろう。

「やだね。

旅団クモでもないあなたの指示を受ける義務はこっちには無い。

それにあんたは信用できない。好きにさせてもらおうよ」

そう言うとマチは屋敷の裏にある窓へ念糸を飛ばして、その上を伝って屋敷内に入って行ってしまった。以前から嫌われているとは思っていたが、まさかそこまで嫌いだとは思わなかった。少し驚くと同時に面と向かって拒否されたので少し傷つく。それにマチの言うことももつともな話なのでマチの行動にも理解がないわけでもないが、今回は一応この仕事を任された俺に従ってもらいたい。

「仙水、マチはああ見えてお前のこと（実力）を認めているんだ。

だがマチは今まで団長に依存してきたからな、旅団としての繋がりしか持てないマチにとって団長の友人という特別な繋がりを持つお前が妬ましかつたんだろう。

ゴミ掃除は俺に任せて仙水はさっさとマチを追っていけ」

フランクリンはそう言うのと茂みから抜け出して銃火器を持った連中に向かって進みだす。それに気づいた連中は一斉に銃を突きつけた。

「何だてめえは？命が惜しければさっさと帰りな！」

「……………うるせえよ」

“ダブルマシンガン俺の両手は機関銃！…！”

フランクリンの両指から多数の念弾が放たれゴミ共は抵抗らしい抵抗も出来ずにやられて行く。ここにいるゴミは直ぐに片付くだろうが応援は次々とやってくるだろう、いつまでもここに居ては目的も達成できないので一番近い窓までジャンプしてガラスを蹴破り侵入した。ガラスが割れた音が響いたが外でフランクリンがそれよりもっと大きな音を響かせながら暴れているので気づかないだろう。

廊下には今の状況におよそ似つかわしく無い牧歌的な風景画が並んでいる。その廊下を進んでいくと脇のドアから剣をもった男とまるでカエルのような見た目をした男が進路を立ちふさがるように現れた。練をしている所からどうやら念能力者のようだ。

「おーっと、これより先に進まれたら困る。依頼主に怒られてしまうんでね」

「ゲロ、侵入者はカエルの前を飛び交うハエのようにやられる定めゲロ」

剣を持った男とカエルのような男はそう言うのと襲い掛かってきた。おそらく具現化したであろう男の振り下ろしてきた剣を手でいなし、続けてカエル男が粘着質なベロで俺を捕えようとしてきたので、剣士の襟を掴んで引つ張り男を盾にする。

剣士はあっさりカエル男のベロに心臓を貫かれ死んだ。まさか仲間の攻撃で死ぬとは思わなかったのだろう、驚愕の表情を浮かべている様子は滑稽ですらある。続けて怯んでいる様子のカエル男に一速跳びで接近し、相手の“堅”を超える錬度の“堅”で回し蹴りを放つ。ゲロオ！と妙な断末魔の叫びを上げ頭が床に転がったのを横目で確認した後、道を急いだ。

いくらマチが強いからと言って念能力の可能性は大きい。勿論マチはそれを補えるだけの経験と勘を養っているはずだが何か悪い予感がするのだ。

誰も知るはずの無い襲撃をまるであらかじめ知っていたかのような念能力者の手配。

それにA級首の幻影旅団が来ると知っているならもつと何かあると考えて間違いないだろう。

マチの勘ほどではないが嫌な胸騒ぎがする。

十 十 十 十

あたしは仙水 忍という男が嫌いだ。

最初に抱いた感情は正にそれだった。いつも仕事には車が飛行船を使って移動するのだがたまたまその日は交通の便から電車で移動することになったのだ。人が混み合う電車はあまり好きではなかったが、旅団のメンバーで一つの車両にかたまれば一般客も近寄ってこないだろうと思っていた。……その考えが甘かったのだ

最初の頃は物々しい旅団のメンバーが一つの車両にいるのを見て大抵の客は例え混雑していても他の車両に移動した。それでも居座ろうとする連中は少し殺気を飛ばせば冷や汗をかきながら出て行くのでちよろいもんだ。

だが次に停車した駅で奴が現れた。

奴は強面の旅団のメンバーもまるで気にした様子も無く、更に凶々

しいことに団長に向かって隣の席を譲ってくれ（実際は違うが）とぬかすのだ。当然団長は断ると思ったが団長は気にした様子もなくそれを受け入れ再び本を読み始める始末。団長に頼るのは諦め、早く去れとガンを飛ばすがそれすらも奴には効果がなく、拳句の果てにはこちらの目的地まで聞いてくる。

あまりにも鈍感か？

それともかなりの曲者か？（これは有り得ないことだが）

こいつという存在に頭の中を掻き回されていることすら嫌だったので、もう考えることすら放棄し到着までのしばしの間休息をとることに決めた。

しかし予想外のこと団長が何度も読んでいるお気に入りの本の作者が目の前男だったらしく、意気投合した二人は本についての考察を語り合っている。その様子にしばらく呆気にとられた。表情には出てないが、団長があんなに楽しそうに人と話しているのは付き合いが長い私達でさえ見たことがないものだったからだ。気づけば他の旅団のメンバーも珍しいものを見たような顔でこちらを観察している。

ムカツク事に降りる駅まで一緒だったが奴と駅で別れた時ホツとした。それはあまり認めたくはないがおそらく嫉妬、いやもつと幼稚な感情かもしれない。

団長の笑顔、旅団の皆の好意的な態度

あたしが長い間積み上げてきた全てがああ男の手に奪われていつてしまうようなそんな感覚さえた。だからこの男との繋がりが切れるその時あたしは安堵したのだ。

しかし運命というモノはあるのだ。別れの時間は短くその日の仕事先で再び奴とであってしまった。ボノレノフの戦闘演舞曲『木星』バトルガントービレで死んでしまえば良いと思ったが予想以上に奴は出来るらしく、それに目をつけた団長は仮宿に連れて帰るなんてことを言い出した。

その時にあたしは旅団の皆にも一目置かれていたのだ。

『おそらく団長は奴を仲間にしたがっている』

この時の勘ほど外れて欲しかったものは無い。こいつがこれ以上あたし達の中に入ってきたらあたしという存在はいつたいどうなってしまうのだろう。

パクノダが記憶を読んだ後に突然悲鳴を上げたことが更にあたしの不安を助長させた。

そして続くウボオーギンとの戦闘も危うい一面を見せながら勝利する。

団長が勝った仙水を自室へと案内したところからおそらく本格的な勧誘をしているんだろうと、あたしは絶望的な気持ちの中団長が帰ってくるのを待った。ところが奴は団員には入らず団長の友人というふざけた地位におさまった。しかも奴には仕事の拒否権まである。

あたしを含め団員はそれに強い反感を覚えたが、奴と共に仕事をすすめるにつれそのような話はいつの間にか聞かなくなってしまった。あのあまり人を認めないフェイタンやフィンクスでさえも奴に一定の理解をしめしている。団員でもないのに奴は仲間の一人という妙な共通意識が芽生えつつあるのだ。

奴はいつもあたしの期待を裏切って行動する。だから今回の仕事ではあたしの好きにさせて貰う。自分の幼稚な発想にほとほと呆れるがこうでもしないとあたしはやっていけないのだ。それが団長を裏切る行為だとしても……

屋敷の中に入ったあたしは念能力者を片付けながらフヴァロン家の金庫へと向かう。念能力者自体は弱かったので苦勞もせず倒せたが進むにつれ自らの勘が警鐘を打ち鳴らしている。おそらくこの先に恐ろしい者が待ち構えているのだろう、自らの勘だけではなくピシピシと伝わる空気がそれを教えているのだ。

普段なら勘の時点であたしは絶対ここから逃げ出していたはず。

……だが今回は進む。

今までとは全く違った行動でもとらなければ答えは見えてこなさそうだから

仙水さん仕事をする(2) (後書き)

怪物ハンター、財宝ハンター、幻獣ハンターいろいろあるけど

千葉は読者の心を掴むハンターになりたい!!

そう言えたらいいなと思いましたwww

仙水さん仕事をする(3) (前書き)

今回だいぶ難産でした。

しばらく戦闘シーンは書きたくないな

仙水さん仕事をする(3)

マチの後を追うのは思ったより簡単だった。

細かく刻まれた人の死体が道しるべのように廊下に転がっていたからだ。念糸を格子状にして“隠”でオーラを限りなく見えないようにし、敵をかたづけただろう。相変わらず良い趣味している。

そのまましばらく先に進むと一つ少しだけ開かれているドアを見つけた。さも入ってくださいと言わんばかりの様子で、畏の可能性も高かったが、他にマチの手がかりが無かったので進む。

片手でゆっくりドアノブを掴み中を覗きこむが暗くてよく見えない。意を決してドアを勢いよく開き出来た隙間に飛び込む。勿論畏を考え“堅”の状態でだ。

暗闇の中に人の気配がするのを感じるので油断は出来ず、身構えていると暗闇の奥のほうから声が聞こえてきた。

「そう警戒するな。くだらない畏は仕掛けじゃない」

その謎の人物の声の後に照明がパッと点き辺りの様子が分かるようになる。

どうやらここは何かの劇場のようで、俺はその客席の中にいるみたいだ。

劇場の舞台の上でスポットライトを浴びている人物を見て驚かされた！

「コレオ！？ 何故ここに？」

以前一緒に働いていた金髪の美青年コレオがそこにいたのだ！

甘いマスクで油断してはいけない。マフィアのボスのボディガードを務め、旅団のメンバーから逃れきるほどの念能力者なのだ。旅団のメンバーから逃げ出せたのはおそらく何かの能力を使ったとは思って……

久しぶりに見たコレオはサングラスを掛けていること以外、以前と変わっていないみたいだった。

「久しぶりだな仙水

いいたいことはたくさんあるが、まずはこれを見てくれ」

コレオが指を軽く鳴らすとスポットライトが舞台の下を照らす。

その先には血まみれになって今にも生命の灯が消えそうなの……マチの……姿があった。

俺は憎悪と侮蔑のこもった眼でコレオを睨みつける。

「おいおい、そんなキツイ眼でこっち見んなよ！

裏切られたのはこっちの方なんだぜ。お前がそんな眼でこっちを見る権限なんかないだろう」

まるで覚えの悪い子どもに諭すように話すコレオが酷く憎い。コレオはそんな俺の様子に気づきながらわざと無視して続ける。

「まさかお前があの悪名高い幻影旅団とグルだったんだとはな。

あの襲撃もお前が手引きしたんだろう。

おかげで俺はこの雇い主に出会うまで文字通り泥水を啜って生きてきたんだ!!」

「言い残すことはそれだけか？」

全力で殺気を飛ばすと今まで平静を保っていたコレオも耐え切れず、ジリジリと後ずさりし始める。

「今の俺じゃあお前に勝てない。

だからとっておきを用意したぜ。じゃあな!!」

コレオはそういい残し舞台脇から逃れようとしたがそうはさせじと追いかける。

……が、その行く手を突然現れた何者かに塞がれた。

回り込んだ人物は中華風の服を着た老人で白髪を逆立て、胸のあたりから『一日一殺』と書かれた布が垂れ下がっている。見るからに怪しい人物だ。

とうかゼノ『ゾルディックだった。コレオの雇い主はゾルディック家を雇うまで『リトルドラゴンの琥珀』にご執心らしい。いったいいくら払ったんだろう？

『リトルドラゴンの琥珀』よりも高いかもしれない。

「やれやれ、今回の雇い主は人使いが荒い」

おそらく、いや確実にマチを相手にしたのはゼノだろう。溢れ出すオーラの質がそこらの能力者とは比べ物にならない。オーラ量では

俺が勝るかもしれないが実力、経験共に完全に向こうに分がある。ゼノが相手では『リトルドラゴンの琥珀』を盗み出すことと、コレを追いかけて殺すことは不可能に近いだろう。

理想は今すぐマチを連れ出してここから逃げ出すことなのだが……

「さて、そろそろ殺ろうかの」

どうやらそうはさせてくれそうにないみたいだ。

ゼノはそう言っていると俺の後ろに移動し蹴りを放った。心臓の位置を狙った良い蹴りをかわした後は、三発の蹴りと手刀を交えて攻撃してくる。

さすがに全部はかわしきれずわき腹にいいのを貰ってしまった。

ゼノ相手に出し惜しみはキツイ。いったん距離をとってオーラを爆発させる勢いで練をする。正真正銘、俺の全力だ。

「ほほう、まだオーラ量が上がるか

それに上手く隠しておるが変わった拳法を使うの。自己流か？」

ゼノは身構えて、そう聞く。

「元々は烈蹴拳だ」

そう言うとゼノは初めて少し驚いた表情になる。やはり烈蹴拳は珍しいのか？

格闘技に詳しいビスケでさえ気づかなかったので、この世界には烈蹴拳は存在しないのかと思っていたんだが……

「確かジジイが昔言っておったな、肉弾系格闘技では間違いなく史上最強だと。伝承者が消えもはやなくなったと聞いておったが……元々とはどういうことじゃ？」

「つまり、これからはオリジナルということだ！」

言うと同時に周囲に数十の念弾をつくる。ゼノはそれに気づき急いで止めようとするが会話の間で既に準備は整っている。数十の念弾を一ヶ所にまとめゼノ目がけて蹴りだす。

「烈蹴ー紫炎弾っ!!！」

蹴りの勢いで一度集まった念弾が散弾銃のようになりゼノ目がけて飛来する。ゼノは最初の念弾たちを危なげなくかわすが烈蹴紫炎弾の本領はここからだ。念弾はまるでそれ自体が意思を持つかのようになり再びゼノ目がけてあらゆる方向から襲っていく。

「ちっ、面倒臭いのっ」

ゼノはそういいつつ、こちらに接近してきた。おそらく術者に近寄れば術者自身も念弾の餌食になると考えてのことだろう。だが甘い

「グッ!？」

近寄ってきたゼノは真横から来る念弾の気配に気づくのが遅れ、頬に赤い筋が浮かぶ。

「遠隔操作は出来ないんでも？」

本当は頸動脈を狙った一発だったが見事にかわされた。一応隠を使っただが空気の流れて分かったらしい。さすがかの有名な暗殺一家の一人だ。

それに比べて今の俺はさっきの念弾の遠隔操作でオーラを大分使ってしまった。やはり操作系に才能がないだけあってオーラの消費も半端ない。クロロがゼノとシルバ相手に闘ったと考えると改めてその凄さを思い知る。

「確かに少し厄介じゃが、制約はおそらくその場所から移動できる範囲が限られておるといふ物じゃろう。」

遠隔操作にだけ気をつければそう恐れることはない」

たいした洞察眼だ。正確には烈蹴紫炎弾を使う時は半径2メートル以内から動けない。

いずれ操作系をもっと修行すればこの制約の範囲もマシになるとは思うが、それでも制約を知られたのは痛いので烈蹴紫炎弾の発動を止めた。するとゼノもこちらの意図を理解したのか肉弾戦の構えにはいる。

「ハアアアッ!!」

「カアアアッ!!」

互いに気迫の声をあげてぶつかりあった。

出された蹴りを、手刀を、上半身をそらしてかわし、手で受け流す。さすがに全てを捌ききることは出来ずガードするがその攻撃の重さは尋常じゃない。油断すればガードごと吹き飛んでいきそうなのだ。

とはいえ防戦一方はギリ貧でいずれゼノが勝ちを取るだろう。少々
の危険は覚悟の上で行かなければ……

「もらった!!」

鋭い手刀が右腕を切り裂き、鮮血が舞う。何年も付き合って傷だら
けの腕が宙に浮かんでいるのはかなりの違和感を感じたが、そんな
ことを考えている間に出血多量で死にかねないので凝でオーラを集
め、出血を防ぐ。

「まだだっ!!」

「何っ!?!」

片腕をゼノの顔面目がけて蹴りだし、余った左腕で怯んだ様子のゼ
ノの片腕を掴み腹部に膝蹴りをする。ゼノの肋骨が悲痛な叫びをあ
げて一本か二本ほど折れた。

ところがゼノの動きに目立った痛みは無い様子だ。片腕を犠牲にし
てそれだけはいささか卑怯だと訴えたい。

「……ワシもまだまだじゃのう」

ゼノが感慨深そうに言うのと再び練をする。今までとは比べようもな
いオーラ量だ。

「今まで本気ではなかったのか……」

「まだまだ若造相手に負けられんわい」

ゾルディック家の異常さのため息をこぼすと同時にドオオーンという爆音が背後からした。そこから拳大の瓦礫がマシンガンのように辺りを襲うが八割は蹴り落として、残りの二割は反射的にかわすできればゼノは巻き沿いになって欲しかったが、当然のようにかわして非常におもしろくない思いだ。

突然の乱入者にゼノは怪訝な表情を浮かべていたが、俺としては非常に助かった。あのままやっていたら十中八九負けていただろう。

「何だ？ まだやってんのか仙水。
ブツは頂いたからさっさとずらかるぞ」

突然の乱入者、フランクリンはその大穴から片手にオレンジ程の大きさの琥珀を抱えて現れるとそんな暢気な事を言う。だがフランクリンが来たことで勝機が見えた。

ゼノ相手に二人してかかれば5%ほど勝機が上がる。たった5%だがそれでも随分マシになるだろう。

気分を入れ替えて戦闘態勢に入るがゼノは対照的に戦闘態勢を解いて服についた埃を振り払い、見るからに戦闘意志は無さそうだ。

「やらないのか？」

「ワシの仕事はそれが盗られるまでという契約じゃからのう。」

そう言うとゼノは何の未練もなさそうに帰って行った。

俺は体が疲労で今にも倒れそうなか、マチと千切れた腕を拾う。マチの血で背中がベトベトする感触が昔死体を運んだ嫌なことを思い出させるが、マチの心音は確かにまだある。千切れた腕の方はどうなるか分からないが、マチの体力は常人のそれとは比べ物になら

ないので腕の良い裏の医者に見てもらえばなんとかなるだろう。

後、フランクリンが今更俺とマチの状態に気づいて騒ぎ出したが無視しよう。

仙水さん仕事をする(3) (後書き)

次回から仙水さんを強化していきます

聖光気もそろそろでちゃうかもしれないWWW

読者の皆さんには本当に感謝しています

仙水さん目覚める

目が覚めて体を起こそうとする時痛みが走るかと思っただが、包帯で固定されていて少し動きにくいことを除けば、予想していた痛みはなかった。どうやら俺の体は予想以上に頑丈だったらしい。切れたはずの右腕も繋がっている。幻かと思ひ指を動かしてみると指も何の遅れもなく動く。ここまで完璧に動くという事はマチの念糸縫合によるものだろうか？

辺りを見回すと、おそらくクロ口の趣味であろうアンティークの小物が自らを主張しすぎないよう配置されている。そしてこのゴシックな雰囲気の家造りからどうやらここは本拠地本拠のようだ。一応旅団員以外が入ってはいけないらしいのだが気がつくくとクロ口に鍵を渡されていて、仕事の時以外はここでくつろいでいるのだが未だ何故ここにいるのかが分からない。確かマチを担いで裏の医者のもとまで運んだのは覚えているのだがそれ以降の記憶が曖昧だ……

とりあえず寝かせられていたソファから起き上がり談話室の方に行ってみると、

「8きりで上がりね」

「俺も上がりだ！」

「クツソーツ！！ お前らイカサマしてんじゃねーだろうなっ！？」

フェイタンとフィックス、ノブナガが大富豪をしていた。

「おつ、仙水！ どうやらもう動けるみてえーだな」

「ああ、おかげさまでね」

「礼なら右腕縫い付けたマチとそのお前らをホームまで運んだフランクリンに言いな。

それにしてもあの時のフランクリンの顔は今思い出しても爆笑もんだったぜ！！」

とフィンクス。

「確かに面白かたね！」

「いったいどんな顔だったのだろうか？ パクノダも見ていたなら記憶メモリー弾ボムでその時のフランクリンの顔を見せて欲しい。今後パクノダとはいい関係を築いていこう」

「それよりそのマチはどうしてるんだ？」

「マチなら二階の部屋で寝てるぜ。」

意識が朦朧としている中、念糸縫合でオーラを使いきっちゃったもんだからあと二日は目覚めねえだろうな」

言いたいことだけ言って再び騒ぎ始めたノブナガたちを後に俺はマチの部屋へと足を進める。

部屋には点滴を受けてゆっくり眠っているマチとその隣でイスに座りながら本を読んでいるクロ口の姿があった。クロ口は部屋に入る

俺の姿をチラッと見ると再び本に視線を戻す。

「マチは？」

「全治五ヶ月らしい」

何の表情も浮かべずクロロが言う。

「それと、お前たちが苦勞して盗ってきたあの『リトルドラゴンの琥珀』だが……」

「傷でもついていたか？」

さすがにあの状況じゃあ傷がついていてもおかしく無いか。価値は落ちるかもしれないがそれでも一億ジェニーはするだろう

「傷はついていなかったがあれは模造品だ。」

一瞬、間違いなく時が止まった。

「模造品レフリカ自体が非常に良く出来た代物で五百万ジェニーはするだろう。」

専門家でもないで見分けられない上に、ゾルティック家を雇って金庫を守らせることで本物だという信憑性を高めた知略に富んだ策だ。…完全にしてやられたな。

おそらく本物は既にフヴァロン家の者が回収しているだろう。」

あれだけ苦勞してゼノと闘ったのが無駄だと知り少し落ち込んだが、命が助かっただけありがたいと思うことにしよう。それでも無いとやってられない。

「そうか。……俺の次の仕事はキャンセルにしてくれないか？」

「マチのことなら心配するな。」

「そうじゃない。今回俺は自分の無力を思い知った、鍛えなおす時間間が欲しい」

しばらくの沈黙の後、クロロは好きにしろとだけ言って部屋から出て行った。おそらく気を使ってくれたのだろう。

マチの顔は穏やかで死んでいるのではないかと思うほどだが、呼吸のたびに胸が上下することでなんとか生きていることが分かる。

「また……エリのように死なれるのは怖いな」

彼女は何事にも冷静でみんなのまとめ役だった。悩みを抱え込んでもそれを人に打ち明けることを良しとせず、いつも一人で解決し、そして傷つく。傷ついているところを人に見られて優しくされることを恐れていた。その時自分はいつかどうしていいのか分からなくなるから

彼女は誰よりも強く、誰よりも弱かった。

内と外で相反する二つが彼女をよけいに傷つけた。

そんなエリの姿がマチと妙に重なって見える。

生まれも、育ちも違い、顔なんて全然似てないのに……

今度は助けよう。

内と外の間には挟まれて苦しむのならその間をつくってあげればいい。強さと弱さを併せ持つ純なる存在、それが彼女の葛藤の緩衝材となるだろう。

そんな純なる存在でいられる場所が俺につくれるだろうか？

エリはそれを許してくれるだろうか？

答えはまだ出てきそうにない。

部屋から出て、風にあたりにはブランダに行くところクロロがこれまたアンティークのテーブルでコーヒーを飲みながら本を読んでいた。どうやら新たに蔵書室から本をもって来たようだ。

ホームにはクロロが世界中から集めた本がおさめられている巨大な蔵書室がある。その数はおよそ三百万冊、そこらの図書館とは比べ物にならないほどの蔵書数だが専らクロロと俺、シャルナークしか本を読まないのもその大半は今も眠ったままである。宝の持ち腐れとはこのことだ。確か3億ジェニーぐらいする珍しい神字についての考察が書かれた本もあるというのに

……なるほど、その手があったか

「クロロ」

「……どうした？」

「神字である物を作りたいんだが、腕の良い物作りの能力者を紹介してくれ」

「いやいや、苦労しましたぞ。仙水殿の要望を全て答えるのは」

クロロに紹介された人物はキブソンと名乗る能力者で年齢130という会長並みの化け物だ。

「すまなかつたな」

「いえいえ、私もここまでやり甲斐のある仕事が出来て嬉しいばかりです！」

またご要望があれば優先してつくりますよ」

キブソンにつくって貰ったのはいわば呪霊錠のようなものだ。いや、この世界には霊力がないから呪念錠というのが正しいな。見た目はただのリストバンドだがその裏にびっしりと神字が刻まれていて効果は絶大だ。

これは言わば両手両足につけることによつてまるで鉛で出来たバネのように両手両足を拘束する枷だ。相当なオーラを動員させないと動くことすらできないだけでなく、オーラは垂れ流し状態（体を動かすだけでかなりのオーラが呪念錠にいくから）か、額に汗を浮かばせてようやく纏ができるくらいで動きもかなり制限される。

だがこの呪念錠は長く身に着ければ着けるほど外した時のオーラ量が増える。幽助は少なくとも数日の間に霊力が五倍になったのだから、一ヶ月以上着けると外した時はまさにオーラの塊になるだろう。

早速リストバンドをつけてみると予想以上の拘束力が体を襲った。全オーラを体中に行き渡らせてようやく立っていられる事が分かった時はキブソンに拘束力を強くするよう注文したことに後悔の念が浮かぶ。

一步一步、歩くのさえ苦勞して夕食の席では不自由な思いがしたがマチが少し笑っていた気がするので良しとしよう。

そつえばマチへのお礼を言うのを忘れていたので夕食後、おぼつかない足どりでマチの姿を探していたがなかなかマチの姿が見当たらない。円を使えば早くみつかるのだろうが、今の俺はほとんど念の使えない一般人だ。

勘でバルコニーの方に赴くと果たしてマチはそこにいた。マチは思案顔でそこにいたが俺に気づくとおもむろにこちらへと歩いてくる。手が届きそうな位置まで来るとマチは俺の目を見つめて、まるで自分の目の奥にある何かを捕らえようとしているかのようにだった。酷く気まづかったがマチの様子は真剣そのものだったで、黙ってマチの気が済むまでこのままでいることにした。

一時間、あるいは五分間だったかもしれないが俺にとって長い時間は終わりを告げた。

「仙水はあたしのことをどう思う？」

突然マチの堅く閉ざされていた唇が開きそんな音を発する。

しばらく考えたが自分でも満足できそうな答えは出てきそうにもなかった。

「あたしはあんたの事が嫌いだよ。」

マチの発言はおおよそ予想のついていたことなので驚きはしない。

しかし、例え嫌いであっても、嫌いであるからこそ腕を繋げてくれたことには礼が必要だ。

「ああ知っている。だが……「だけど、認めてやってもいい」……!？」

「仙水は確かに気に食わない。だけど仙水も旅団のメンバーだ。」

例え蜘蛛の刺青はつけていなくてもね。」

マチが初めて肯定的な発言をしたことに喜びよりも驚きの感情が強かった。ノブナガ以外にそんな事を口に出して言う奴はいないから余計に……

「だから腕を治した礼なら五百万でいいよ」

「……金をとるのか？」

「当然」

マチが不敵に微笑みながらそう言ったのがあまりに彼女に似合っていたので、耐え切れず思わず笑ってしまった。マチは変なものを見る目をしていたがそれすらも彼女に妙に似合った仕草だったのでついに声に出して笑ってしまう。

「……？ とりあえずこの口座に金を振り込んでいてね」
不思議そうな顔をしたマチはそう言い残し去って行った。まだまだマチという人間を知るには時間がかかりそうである。

「……」

「……」

マチの前だったから普通にしていたがその気配が消えるとガツクリ膝を落とした。立っているだけで体力が削られているような呪念錠の効果は予想以上に大きい。
とりあえず普通に動けるようにならなくては実戦すらもできない。

「シャルナーク、いるんだろ？ 動けるようになったらしばらく天空闘技場で修行するからククロ口に伝えておいてくれ」

「あははは、バレてたか？」

調度品の影から又ツと現れたシャルナーク。

「気をつけなよ仙水。」

あそこは二百階から念能力者たちしかいないから、今の仙水じゃかなりキツイと思うよ」

「そのくらいしないと意味がない」

「……まったくマチも仙水も素直じゃないな。楽に生きれないよ」

シャルナークは肩をすくませ呆れたように言うがそんなことは既に分かっている。

俺は楽に生きれないし、楽に生きるつもりもない。
そういうニンゲンなんだ。

仙水さん目覚める（後書き）

腕は気硬銃にしようかと思いましたがやはり素手のほうが格好よかったのでなしにしました。

ご意見、感想があればいつでもどうぞ！

仙水さん洗脳する(前書き)

今回は短文かも？ あと人によって嫌に思つかもしれません

そこんとこどーぞよろしく

仙水さん洗脳する

天空闘技場、パドキア共和国の東部に位置する地上251階、高さ991mの建造物。

下から見上げると呆れるほど高い。飛行船の飛んでいる位置が低く思えるところからその高さがわかるだろう。

とりあえずここでずっと眺めていても仕方無いので受付の行列に加わる。屈強な体の連中がこちらを一度見ると興味が失せたように視線を逸らす。確かに俺の体は見た目スラッとしていて到底強そうには見えないかもしれないが、見る人が見れば長年の修練によって鍛え上げられた身体だということが一目で分かるだろう。

呪念錠に最近ようやく慣れてきて日常生活は苦労しないレベルにはなつたが、戦闘においては未だ満足に動けるかどうかかわからないので、あまり余裕をこいていられる状況でもないが…

少しずつ前の列の人間が回収されていき、ついに整理番号1733の俺の番になった。

「天空闘技場へようこそ。こちらに必要な事項をお書き下さい」

受付嬢に渡されたバトルクエスチョンと書かれた紙に記入する。

名前：仙水 忍

生年月日：1974年 6月6日

闘技場経験：無し

格闘技経験：16年

格闘スタイル：烈蹴拳

「ふくん、お兄さん珍しい拳法使うんだね」

振り返ってみるとその声の主はなんとまだ幼い少年だった。銀髪で多少生意気な顔はしているが端正な顔立ちのその少年はどこか気品を感じる。だがこの少年が放つ気配はその容貌と違い、あまりに鋭く静かだ。それに隠しているようだが殺気が漏れ出している様子からカタギの人間ではないことは確かだ。

「少年も天空闘技場にエントリーしに来たのかい？」

少年の質問を軽く流してこちらから質問する。えてして、この誘導は大抵の人間が引つかかるので使い勝手がいい。

「ああ、そうだよ。で、その烈蹴拳だっけ？」

最近じいちゃんから聞いたような気がするんだけど」

「……少年、君の名前は何というんだい？」

「普通そういうの自分から名乗るもんだと思うけど、さっき名前盗み見たからおあいこだね。」

俺はキルア、あんたは仙水さんだっけ？」

何故か最近をよくゾルディック家の人間に会う。

そういえばキルアは6才の時に二百階まで行ったような気がする。原作の記憶が薄れているというのもあるが、幼い姿というだけでわ

からないものだ。

「ああ」

『1562番、1733番の方Bのリングへどうぞ』

早くも呼び出しがかかったので動き出そうとするとキルアも同時に動き出す。

「ひょっとして……」

「少年が1562番だというなら俺と戦うことになるな」

「やっぱりか。まあ、次があるから頑張りなよ」

キルアは嬉々としてリングへ進んでいく。自分が負けることなんて想像だにしてないのだろう。さすがに子供のキルアに負けるわけにもいかないので少し実力を見せよう。

「両者リングへ、それでは始め!!」

キルアはへらへらと笑いながらこちらへ近づいてくる。おそらく油断した相手の後ろにまわり、首へ手刀の一撃を叩き込む天空闘技場で使ったやり方をするつもりなのだろう。

「おい、あんちゃん。ガキ相手に何ビビッてやがる!! さっさとやっちまえ!」

野次馬もうるさいのでとっとと済ませよう。俺はキルアと同じようにゆっくり相手に向かって進む。

キルアは少し驚いたようだが絶対な自信があるのか、不敵な笑みを浮かべて再び歩き出す。

ちようどリングの真ん中で俺とキルアがぶつかりあうように見えたその時、キルアが瞬時に脇を抜けて後ろから手刀を振り下ろす。だが既にその場所に俺の姿は無い。

キルアが脇を抜けたちようどその時に、キルアの死角から後ろに廻りこんでいたのでキルアの目には俺が一瞬で消えたように見えただろう。目の前でオロオロしているキルアの首に逆に手刀を打ち込んでやるとキルアはガクツと倒れた。

「1733番：キミは50階に行きなさい」

思ったよりも動きはマシだった。問題は二百階に行った後だ。果たして練も使えない状況で勝てるのか？

とりあえずこの次の試合が終わって昼食をとってから考えることにしよう。

天空闘技場の周りには食堂やホテルがたくさん並んでいる。観客や選手をもてなす為はその手の店が増えただろう。そして俺はその中で有名人達が通う隠れ家的な定食屋を選んだ。

美味しい。このカレイの煮付け定食は非常に美味しい。

それはいいのだが、

「後、チャーハンとラーメン、から揚げ定食もお願い！」

「はいはい、お宅のお子さんはたくさんお食べになるんですね」

店の人は微笑ましい顔をキルアに向けてそう言うが、俺に子供はいない。気絶したばかりだというのに、目の前でパクパク食べている暗殺一家の少年に血のつながりもなければ何の関係性もない……はずだ。

「いったい君は何を考えている？」

キルアはマンガのように井を天高く重ねた横で、がつついているチャーハンへの手を止め真面目な顔をして俺と視線を合わせるがほっぺについたご飯粒がいろいろと台無しにしていた。

「まあいろいろ話したいことはあるんだけど、とりあえずお兄さんって何者？」

「幻影旅団の協力者、といったところだな」

「ハハツ、何それ？ 面白いこと言うねお兄さん！
だったら俺は暗殺一家の息子だよ。」

「知っている。ゾルディック家の三男だろう」

からかわれているのだと思ったのだろうキルアは冗談でも言うようにゾルディック家だと明かすが、俺の一言でその軽い態度を改め本気で警戒し始める。とはいえイルミに刺された針のせいかその体勢

は逃げ腰で、何とかして俺の隙を狙って攻撃する気はないようだ。俺も油断する気は無いし、例えば隙が出来たところがかかって来ても返り討ちにできるからその選択は正しいともいえるが。

「とりあえず落ち着いて座ったらどうだ？」

キルアは実力差の前に何をしても無駄だと悟るとイスに着く。その額には脂汗が浮かび店員も険悪な様子に声もかけられずにいる。

「……」

「君はどうして俺についてきた？」

キルアは少し逡巡を見せた後、あきらめたかのように語りだす。

「……別に、ただの好奇心だよ。」

「好奇心は猫をも殺すというが君はどう思う？」

「……」

キルアの額から滝のような汗が流れ落ちていく。

「なぐに、軽いジョークだよ。君に危害を加えるつもりは無い。

むしろ興味をもっているのだよ、君という人間に対してね。」

「……どういうことだ？」

「君は今の自分の状況、つまりその状況をつくりだしたゾルディック家に対して不満を持っているんじゃないか？ ゾルディック家を継ぐために毎日人殺しの訓練をさせられ、将来継いだ後は君も何の抵抗もなく、自らの父親がしたように我が子へその技術を伝える。」

そんな不毛な人生は嫌悪すべきだと俺は思うがね」

ここに来て初めてキルアの表情に戸惑いの色が混ざった。幼いがゆえに何の疑いもなくやってきたことに俺の発言で疑念が芽生えたのだろう。普通の六歳児はこんな風に考えられない、やはりこの子は天才だ。

だがそれゆえに染まりやすい。

「俺は……よくわからない」

まあ、今日はこんなところだろう。

「考えておくことだな。君には自分の意思という尊重すべきものがあるのだから」

再び考え込むキルアに声を投げかけて心を揺さぶる。

「会いたくなったらまた来るがいい、いつでも話を聞こう」

「……うん」

キルアは弱弱しく年頃の声を響かす。

「それではまたな」

店を出てゆっくり去っていく姿を見送りながらキルアは小さく咳い

た。

「え……俺がお金払うの？」

仙水さん洗脳する（後書き）

最後のオチはあまりシリアスにならないための予防線です。

ちよこちよこシリアスな感じにしたいので……

まあ何はともあれ、読者の皆さんに喜んでもらえるように頑張ります！！

仙水さん愉しむ

それから毎日のように天空闘技場へ出かけ、百階の選手になりようやく自分専用の部屋が与えられたが、旅団の本拠地で今まで過ごしてきた俺にしてみれば部屋はお世辞にも広いとは言われず近場のホテルのVIPルームで過ごす日々。

念能力の特訓は勿論、肉体強化や毒物、電流への耐性をつけるためにいろいろと器具を購入したので部屋の半分近くがそれらで埋まっている。

いくらゾルディック家の人間と言っても、電流の耐性はどれだけ受けてもつかない気がしたが実際百万Vの電流を受けても平気なところを見せられると納得せざるを得ない。

人体の神秘を垣間見た思いだ。

毒物に対してはイグルーの樹海でいろいろと経験（具体的に言えば毒草や毒を持った魔獣相手に）してある程度の抵抗は出来たが、それでも毒物は日々あらゆる種類や効果を見せるので少しずつ食べ物に混ぜて耐性をつけていく。

「仙水さん、俺今日五十階まで行ったよ！」

勢いよく扉を開けて入ってくるキルアの喜びで跳ね上がったような声を聞きながら柔軟体操を終える。ただでさえ呪念錠で動きの鈍い体を効率的に動かすには柔軟は欠かせない。

「そうか。それは良くやったな」

適当に返事をするだけでキルアは喜色満面という言葉が相応しい表情を浮かべた。

あまり褒められ慣れていないせいも、そういう耐性はないようだ。電流や毒物に対する耐性をつけるよりか、よっぽど簡単だと思うのだが。

「仙水さんは今どこら辺にいるの？」

「今は……確か百九十階だったな」

「すげーな〜！ でも俺も直ぐに追いつくからな」

残念ながら君は俺の目的地である二百階まであと二年はかかるのだよ、と教えてやりたくなかったがそれはどうにも躊躇われた。

キルアは何が気に入ったか、あの日以来結構な頻度でここに来ては勝手にお菓子を持ってきて、カスを散らかしたまま去って行く。ゾルディック家でもピカイチの才能を持つキルアを懐かせておけば将来何らかの役に立つだろうと考えていたのだが、最近はただの子供にしか思えなくなってきた不安を抱く日々だ。

「キルア、かかって来い。俺に一撃当てたら何でも買ってやる」

「本当に！？ その言葉、後で取り消しはなしだぜ仙水さん！！」

少しキルアの実力を見てみようという軽い考えだったが本人の予想以上のやる気に少し萎えてしまった。

キルアはそんな俺の心情を無視してゆっくりと俺の周りを歩き出すと一人、二人とその姿を増やしていく。

これがかの有名な肢曲か……

一流の暗殺者（ゾルディック家は超一流）が生涯をかけて習得する高等テクニクをこの年で身につけたのは恐ろしいが、まだ幼いというだけあって技にキレが無い。

しかし将来の見通しで言えば、この年では充分過ぎるほどでもある。

「そこだ」

俺の周りをグルツと囲んだキルアの内で、背後から狙ってきたキルアへ後ろ蹴りを入れる。

それと同時に俺が蹴ったキルアを除いて全てのキルアが消えた。

「イテツ!!!」

本物のキルアは床に蹲り怨めしそうな目でこちらを見つめるが勝負は勝負だ。

未だ納得できないような表情を浮かべたキルアを残し闘技場へと向かった。

『さーて、この数日で瞬く間にここ百九十階まで駆け上ってきた期待の新人。

仙水だー！ツー！』

闘技場が揺れるほどの歓声が響く。

『そして相手は百階で数十年間腕を磨いてきた熟練の闘士、その手刀の切れ味は敵を斬り刻む、ゴツツだー！』

対戦相手はどこかのボディビルダーのような筋肉を身につけ、応援する観客に向かって陽気に手を振る。

『それでは、試合開始っ！！』

審判が出した始まりの合図よりも前に、ゴッツがこちらへと向かってくる。審判が慌てて止めに入ろうとするが、既にテンションの上だった観客の熱狂的な叫び声によってその声は空しく掻き消された。

ハンマーのように大きな拳骨が今既に俺がいた場所を破壊する。見た目より俊敏な動きで後ろに下がってかわした俺を追撃してリング端へと追い詰めると、意表を突くように身を投げ出してボディプレスをするが、ゴッツが浮かび上がった際に出来た隙間からすべりこんでその攻撃は回避することが出来た。

思った以上に戦いなれているゴッツの評価を自分の中で上方修正すると、どうやら向こうも同じことを考えていたようで互いに薄っすら微笑みあう。

再び同じようにこちらへ向かってくるゴッツの姿を見て、少し失望したがこちらへと向けてくる拳の中が一瞬何かキラッと光ったのが見えた。それが何かは分からなかったが、いつでも俺を生かしてきた本能がそれを普通に避けることを拒む。

そういう時はいつも本能に従うようにしている俺はこちらへ向かってくる拳を掌底で上方へと弾くと、その何かが宙へ飛び闘技場の床へと落ちる。

見た目がゴツイ割には随分器用なようだ。そうでもなければ手の平に小刀のような暗器を忍ばせて切りつけるまねなど出来るはずがない。敵を斬り刻むと審判が言っていた手刀はどうやら暗器によるも

のだったようだ。

審判も落ちた暗器を拾い、さすがに試合を中止しようとする。

「別に構わんよ」

「し、しかしこれは重大なルール違反ですよ！」

不満そうに審判は言うが、しばらく俺が何も言わないまま黙っていると諦めたらしく試合を始めさせた。

「へへっ、感謝してるぜあんたには」

「君はもう……休みたまえ」

手刀はあまり得意ではないがこいつよりはマシだろう。

肩から先が一つの刃物に、鋭く折れない一振りの刀と化すようにイメージし、迷いを捨て振り抜く。ゴツツの両腕は宙に舞い、その後を追うように赤い血しぶきがあたりを染める。

「ヒィーッ、腕が！ 俺の腕がー！！」

止めをさそうとしたが審判に止められてそのまま二百階行きを命じられた。

なかなか思うようには行かないものだ。しかしこの男にこだわって出場禁止になるのも馬鹿らしい。素直に二百階へ行くとしよう。

エレベーターで二百階へ行くとそこには既に待ち構えてる人物がい

た。

背中にビリヤードのキューを背負い、両手で九つのカラフルなビリヤードボールをジャグリングする男。深くフードを被っているのが顔は見えないが、フード越しでこちらを注意深く観察しているのが分かる。しばらくその男はジャグリングをしていたが特に話しかけてくる様子もなければ、攻撃の意志も感じられなかったので気にせず通路にいるその男の横を通ろうとすると、ジャグリングしている球の一つをこちらへ飛ばしてきた。

それは俺の頭を目がけて向かってくる。スピードはあまり速くないが念が込められており纏を使えないただの一般人なら即死か、脳に損傷を負うことは想像に難くない。

直ぐに纏をして片手でそれを掴むと、その人物も少し驚いた表情を浮かべた後楽しそうにニヤツと笑った。

「久方ぶりに念の使える奴がきたか。さて今回はいつまで持つであろうか」

「そうだな……少なくとも君よりかは長いだろう」

「フツ、ぜひお手合わせ願いたいものだ。

ならば一ヶ月後の十月九日に戦おう。貴殿の実力が私の望むものであればよいな……」

男はそう言いのかし去った。

何だか釈然としないまま受付で試合日を十月九日に設定した後、ホテルへと戻ると既にキルアの姿は無かった。おそらく帰ったのだろう。

ふと携帯を見るとビスケからメールが来ていた。イグルーの樹海で別れたきり会って無いが時々思い出したようにビスケからメールが来る。内容は『一度心源流の道場に来て見ない?』や『美味しいレストランがあるんだけど、どう? 味は保証するわさ!』などのお誘いが多いがそういう時に限って旅団の仕事が入るので今まで全て断ってきた。

ビスケとは数年会ってないがどうしているだろう。俺は大分あの頃と変わってしまったがビスケはおそらく全く変わってないということに何故か確信を持てた。

メールの内容はこうだ。

『やつほ〜!』

久しぶりだわさ!! 今日久しぶりに天空闘技場の試合を見に行ったら黒服姿のいい男がいて、何故だか急に仙水を思い出しちゃったわさ。

そういえば随分会ってないけど今あんたは何してんの?

あたしは今天空闘技場の近くのホテルに泊まってるんだけど久しぶりに会って話さない?

飛行船代ぐらいはあたしの弟子だから奢ってやるわさ!

追伸 これは師匠命令!!』

……変わってないなビスケは。男好きなところも、ケチなところも

自分も天空闘技場近くのホテルにいる旨を返信すると、

『それは偶然だわさね!! あたしは ×ホテルのロビーにいるか

ら一時間以内に来ることっ！」

そのホテルは偶然にも泊まっているホテルだったので部屋に鍵をかけ、エレベーターで一階のロビーまで降りようとすると十階で止まった。扉が開くと共に赤色のフリフリがついたドレスを着て、髪をポニーテールにして入ってくるビスケの姿が…

一瞬こちらを見て危うく垂れそうになった涎を拭いてこちらに背を向けたが、フヒヒヒヒと愉悦な笑いをしているのが分かりたくは無いが、分かってしまう。

一階につくとビスケはロビーにある大きなソファアームに座ったので、その後をつづくように向かい側のソファアームに腰を下ろす。少しギシギシと音がなったが座り心地はいいものだった。ビスケは自分に気があるのかと思いつちをニヤケきった笑顔で見つめてくるがずっと無視を続けているとさすがに諦めた。

約束の一時間後、さすがに時間設定がきつ過ぎたのを理解しているのかビスケはまだ余裕の表情を浮かべコーヒーを飲んでいる。

二時間後、時間が気になるのか時計をチラチラ眺めている。

三時間後、本を読んで俺がくるのを辛抱強く待っているが表情は暗い。

五時間後、あきらめて部屋に帰ろうとしたところ、

「結局、ビスケの話したいことは何だったんだ？」

と声をかけると、しばらく訳のわからない表情をした後、ようやく

俺だということに気づくと

「忍〜！？ あんたは師匠をからかってそこでずっと楽しんでいたわけ…だね。」

最後の方は怒りで言葉が詰まり、額に青筋を浮かべて拳の骨を鳴らすビスケ。

「中々愉快だった」

邪気の無い笑顔でそう答えるとビスケは風船から空気の抜けたような音を発しながら地面にガックリと倒れた。

「はあく、そういえばあんたは昔からそういうところがあったね。でもっ、今日行く予定だったレストランはあんたの奢りだからねっ！！！」

ホテルのVIPルームに泊まっているとは言え、まだまだ天空闘技場で稼いできた金は残っている。軽く頷いて俺達は夜の街に出かけた。

仙水さん愉しむ(後書き)

皆さんの感想にいつも励まされています。

どうもありがとうございます！

仙水さん気づく

「いや、ホントに最近の武道のレベルが落ちていること落ちていくこと。」

あたしゃこの間心源流の道場へ見学しに行ってきた確信したわさ！

ジジイもあの世で嘆いていることでしょうね」

レストランでビスケはワインを片手にそう愚痴る。もう一時間近く飲んで、大声で愚痴るので店の客は気分が壊されたせいかそうそうと帰り、今ではほぼ貸切状態だ。店員も一時間前は早く帰れというアイサインを送っていたが今ではもうどうでも好きなようにしてくれと諦めの境地に達した。

「だいたい忍も訓練が足りないわさ！！

あたしの目立てでは今頃一流のプロハンターになっていると思っていたのに、未だハンターライセンスをとってないばかりか念能力の向上もあまり見られないし……練が足りないんじゃない？ 顔はあたし好みになっただけださ」

念については呪念錠をしているので仕方無いがハンターライセンスは確かに今までとってなかった。その絶大な効果を考えれば今後の仕事のことにおいても損は無いだろう。

「今年のハンター試験には行くこうかと思う」

「えっ、本当！？ だったらつてを使って今年の試験官に任命してもらおうかしら？」

「……随分簡単に言うな」

「ハンター協会は一年間の嚴重な審査の上で試験官を選定すると公には開示しているけど、実際はジジイがその時の気次第と思いつき、二つ星ハンター以上の自主推薦で一ヶ月前に決めるのが常なのさあ〜！」

ビスケは大分酔っているせいかガンツと大きな音をたてワインをテーブルに叩きつけると、そのテーブルは不吉な音をたて真つ二つになった。オーク製の頑丈そうなテーブルで、滅多なことでは壊れそうもないがどうやらビスケは『周』を無意識の内に使っているようだ。

「もう飲むのはやめておきたまえビスケ」

ビスケは忠告を軽く聞き流すと再びワインを飲み始める。

結局、酔いつぶれたビスケを背負って帰ることになったので店員にかなり多目の金額を渡し、店を出た。

最近、夜が冷えてきたのでレストランを出た時にはコートを着てくべきだったかと少し後悔したが、背中からビスケの温もりが伝わってくるので平気だった。背中に背負った女の子特有の甘い香りと酒臭さが合わさった匂いが自分を酷く複雑な気持ちにさせる。

パシャッ

突然シャッター音が後ろから聞こえて振り返るとそこにはデジカメ

を片手に笑顔を浮かべるシャルナークの姿が……

「やつ仙水、久しぶりだね」

「電話も遣さずに直接ここへ来るとは、よっぽど旅団は時間を持て余しているように見えるな」

「やだな、俺達は仙水に伝令と暇つぶしを兼ねてここに来たってわけ」

暇つぶしなら分かるが、俺はしばらくの間旅団の仕事を止めるとクロクに言ったはずだ。わざわざその俺を呼びだすほどの大仕事があるというのか？

「仕事の内容は？」

「それは一緒に来たマチに聞いてよ。俺も詳しいことはまだ良くわかんないし」

終始ニヤニヤが止まらない様子のシャルナークが気になったが、とりあえずビスケをホテルへ送ろうとするとシャルナークもついて来る。事情を聞いてみるとどうやら同じホテルに今日チェックインしたらしくマチも既にホテルの一室で待機してららしい。

「へえ、仙水ってそういう趣味だったんだ」

シャルナークの案内でマチと会った時の一言目がそれだ。おそらく背中で涎をたらしながら眠っているビスケを指しているのだろつが、ここへ連れてきたのはやはり間違いだっただか……

とはいえ、ビスケの部屋は知らないし、ロビーへ眠ったビスケを置いていくのも躊躇われたので連れて来る他なかったのだが。

「残念ながら『そういう趣味』がどういう意味か分からないな。今背負っているのは俺の念の師匠でちなみに年は50を越えている」

マチとシャルナークが息を呑む。無理も無い
どう見てもただの少女にしか見えないのだから。

「忍び、そこは触っちゃダメだわさ」

ビスケが何の夢を見ているかは分からないし、分かりたくない。

「ふん、あたし明日早いからこれで」

シャルナークと俺は半ば無理やり部屋から追い出されるとそのままマチに部屋の扉を閉められてしまった。シャルナークと別れた後、まだ仕事の内容を聞いていないことを思い出したがそれは明日でも構わない。

ビスケをベッドへ運ぶと急に喉の渴きを覚え、冷蔵庫に入っているペットボトルを取り出し口へ運ぶ。

それから念の修行に移る。今度戦う相手は一筋縄ではいかない。呪念錠をつける前でも真つ向勝負で勝てるかどうか分からない相手だ。

通常以上のオーラを生み出す『練』が使えないのなら、それ以外の四大行と応用を徹底的に鍛えるまで。とりあえず今まで呪念錠をつけたまま念弾を作ったことがなかったので試してみる。

今まで練の状態で念弾をつくっていたので、纏の状態で作るのは初めてだが予想以上に難しい。掌にある野球ボール程の大きさの念弾

を一分も維持できず、形が崩れてしまう。いつもならここで念弾に注ぎ込むオーラ量を多くして問題を解決するのだが、纏しか出来ない今では限られたオーラ量でどうにかするしかないのだ。

百三十回目の挑戦でなんとかいつもの綺麗な形の念弾がつくれたが、こんなに時間がかかつては戦闘に使えない。

少し落胆したが念の修行の後で疲れ切った体は心地よい怠惰感を覚え、俺の気など知らず眠りにつくのであった。

翌朝目覚めると俺はソファの上にあった。ご丁寧に毛布も掛けられていたが、あの状況で自分がかけたとは考えにくい。おそらくビスケの手によるものだろう、だが当のビスケがいたはずのベッドは既にもぬけのからだだった。

ルームサービスで遅めの朝食をとると再び念の訓練を始める。

昨日の特訓のせいか念弾をつくることは随分簡単になったが、いつもは数十の念弾をつくっても平気なのにせいぜい十ぐらいしかつくることが出来ない。それに加え空中に念弾を漂わせている間『纏』で体に纏わしているオーラ量が少なくなってしまう、攻防力が欠けてしまう。顕在オーラはたかが一ヶ月やそこらで増えるものでもない、これでこれは大きな問題だ。呪念錠を外せばなんとかなるかもしれないが、この先カメラアント以上の敵が現れるかも分からないというのにその考えは甘すぎだろう。

「まあそういつ時の為のビスケ（師匠）なんだが……」

仙水さん考える(前書き)

マチが少しでもデレるとなんだかキャラが違う気がする
キャラを崩さないようにするのがって難しいですね……

仙水さん考える

ビスケにメールを送ったがなかなか返信が来ない。まだ朝も早いので飛行船も出てないし、部屋に荷物が届いていたのでそこまで遠くへは行ってないだろう。

部屋でビスケを待つのもいいが、なかなか上手くいかない念の気分転換を兼ねてホテルを出た。

今日は何か大きなイベントがあるのか、街はビデオを持ち歩く観光客や地元の人で賑わっていた。ここまで人が多いとビスケを捜すのは骨が折れそうだと思いついた時、道行く人の間にツイントールのビスケらしき姿が一瞬見える。追いかけてよとしたが、誰かが俺の肩を掴んで止めた。

「仙水。団長からの伝令だよ」

「……マチか、今少々忙しいんだが」

「ここで話すのもなんだね。朝食を兼ねてそのカフェで話すよ」

ほぼ強引にマチへ連れられて通りのカフェに移動することに

店内は朝早くにも関わらず既に混んでいた。

マチは適当に料理を頼むと黙々と食べ始める。本拠地でもこんなに近くでマチと一緒に食べないので、目の前でBLTサンドを小さな口をめいっぱい開けて頬張るマチがとても新鮮だ。知らない内に軽く微笑んでいたらしくマチに鋭い目で睨みつけられたがしばらくこ

の笑いは止みそうになかった。

「で、仙水はしばらく仕事を休むって話だったけど今回の仕事はなかなか大きくなりそうだからね。ダメ元で聞くけどやってみない？」

「断る」

「やっぱね」

マチは俺の返答を予期していたらしく表情に変化は無い。いつも無表情だと思われがちなマチだがちゃんと喜怒哀楽を表情に出しているのだ。

ただ得てしてそれは微妙な空気だったり、或いはほんの僅かに上がった口角だったりするので旅団のメンバー以外は気づかないことが多い。もっと感情を出せばモデルでもなんでも出来ただろう、マチはいろいろと損をしているのだ。だが常に笑っているマチというのは既にマチでは無い別の存在になってしまっ。

となると今のマチで良かった……ということになるのか。

自己完結した俺はマチがこっちをジッと見ていることにようやく気づいた。

「世界七大美色の一つなんだけど……興味ない？」

ハッと気づく。そういえばそろそろ幻影旅団によるクルタ族の襲来があってもおかしくない時期だ。マチは俺の目の揺らぎから何かを感じ取ったのかニヤリと笑う。

「団長も『可能なら』って言ってたから別に無理に来なくてもいいんだけどね。

ウボォーは大暴れが出来るって喜んでたけど、あたしはあんまり興

味ないから」

「ではクロロに断ると伝えてくれないか？」

マチは一度自分が引いて俺の参加を促すことが目的だったらしいが、その目論見は失敗することになった。やはりマチも最初の俺の動揺から興味を持ったと核心していたらしく驚きの色を隠しきれなかった。

「ふうん、意外だね。男なら自分の意志は最後まで変えないってやつかい？」

「いや、少し世界七大美色に心当たりがあっただけだ。それ以上の理由はない」

元々、クルタ族が襲われようが襲われまいがどうでもいい。所詮自分が生きていく上で何の関係性もない連中に興味を抱けというほうが難しいのだから。

人　とはそんなものだ

「それより、そこらでビスケを見なかて「見てないね」……そうか」

何故だか知らないが少し機嫌が悪そうだ。下手をして藪を突いても興ざめなので、マチが食べ終わったのを見計らいさっさと会計を済ませます。さすがに女性に金を払わせるわけにはいかないので勿論奢りだ。

マチは何かまだ言い残した言葉があるようだったが、先ほどチラッと見えたのがビスケだとすると、あまり長い間話して距離を離されるのも面倒だ。朝からこれだけの観光客がいるのなら昼からだ也更

に人は増えるだろうからビスケを探すのも骨が折れる。

マチと共に店を出た所で最近すっかり見慣れた顔があった。

「あつ、仙水さんここにいたのか。……ひよつとして俺、お邪魔だった？」

当のキルアはこっちを見ながら小声でマズイことしたな〜と気を遣っているようだが、別に俺達はそんな関係ではない。気にしないでいいと声をかけるとキルアもホツと安堵の息を漏らす。

「それで用事は何だ？」

「そうそう、俺ついに百階まで行ったぜ！」

随分早く百階まで到達したものだ。修行の合間にキルアと手合わせしている影響かもしれない。

「へえ〜ガキにしちゃやるじゃない」

マチの言い方にカチンときたのかキルアはムスツとした表情を浮かべる。

「仙水さん、なんだよこの女？」

そんな生意気なことを言った瞬間マチはキルアの腕を掴んで背中へと捻じ曲げ、もう片方の腕で首を締め上げる。

「生意気なガキにはお仕置きしなくちゃね」

キルアは息が出来なくなり必死に呼吸をしようとかすれた声を上げ

て助けを求めるが、そんなことで許すような甘いマチではない。ギリギリと締め付け、キルアが落ちるその直前でようやく腕を緩めた。

「ビュー、はあはあ……… ippitai…何すんだよ!？」

「教育だよ」

この光景を見ていたカフェの店員が警察を呼ぼうと電話のダイヤルを押しているのが窓越しから見えた俺は渋るキルアと飄々としたマチを連れ、いったんその場を離れることにした。何だか最初のビスクを探すという目的から随分離れていつている気がするのだが、いったいどこから狂い始めたのだろうか？

パトカーのサイレンを背中で聞きながらキルアを小脇に抱えビルの屋上を次々と飛び移るマチの後を追いつ、考え続けたがその答えは出てこなかった。

十 十 十

「しばらくここに滞在することになったから」

「それは別に構わないんだが仕事はいいのか？」

雑居ビルの屋上で錆びついた貯水タンクの上に座るマチは携帯で誰かとしばらく会話した後そう言った。

「団長が次の仕事までに仙水の考えが変わるかもしれないからそこにいらって」

「どうやら期待に添えそうもないな」

「でしようね」

今回はクロロがやたら誘いをかけるな。昨日の夜シャルナークがクロロと話しこんでいたのと何か関係がありそうだ。その後ニヤニヤしながら画像を添付したメールを送っていたのも関係があるのだろうか。

そんな心情も知らずキルアはマチに長時間運ばれたこともあってグツタリと力つきていた。

「やばい。吐きそう」

「男なら我慢しな」

「……そういえば結局あなたは仙水さんの何なの？」

「仕事仲間だ」

妙な疑いを持たれる前に自ら言うておく。

「ふくん、だから強いんだ」

「少なくともガキよりはね」

「俺はキルアだ！」

最初は仲が悪いと思っていたが予想以上に二人の相性はいいようだ。互いに貶しながらも会話が弾んでいる。きっと同属嫌悪というやつなのだろう。

「キルア、これから一ヶ月近くはお前に構えない」

「えーっ!?!」

「そう言うな。代わりにお前の相手はマチがしてくれる」

要は念の修行の為の厄介払いだ。毎日来られては満足に修行が出来ないからな

「はっ!? 何言ってるの仙水。あたしがキは嫌いだし、そもそもあたしがそんなことをしてやる理由はないよ」

「俺だつて嫌だよ仙水さん!」

「二千万ジェニーで手を打たないか?」

「無理だね」

「五千万」

ピクツとマチの耳が動いたがまだ乗ってくれなさそうだ。

「一億」

「……やり方は?」

「好きなようにしてくれて構わない」

「まったく。俺の意見は無視だもんな」

長い間無視されている間にようやく気分が増しになったか、顔色もすっかりよくなったキルアが不満を溢す。

「キルア。お前は家業を継ぎたいか？」

真剣に聞くと、キルアも渋々と答える。

「そりゃ継ぎたくないよ。でも他にやりたいことも無いし、面白くないことばかりさ」

「面白くない世の中なら面白くしてやるっ」

「……!？」

「だから今は力をつける。それはお前自身の望みを叶えることにも繋がる」

教育費が一億もしたのだからそれを無駄にして貰っては困る。出世払いという形で返してもらっがな。

キルアの了承を得たところでマチに後のことは任し、ビスケ探しに出かけた。

既に太陽は真上に昇っていて予想されたとおり、人が混雑している。細い路地にさえ人の姿がチラホラ見えるのでビルの屋上を飛び移って時間の短縮とビスケの搜索を続けるが、いっこうにその姿は見えない。

もうホテルに戻っているのかと帰りを急ぐと後ろから肩を叩かれた。振り返ると弾けんばかりの笑みを浮かべたビスケ。

「誰か探しているんだわさ？」

「……意趣返しか。趣味が悪いな」

「ニシシシ、師匠をからかった罰だわよ」

呆れながらホテルへ帰ると直ぐに念のアドバイスをビスケにお願いした。勿論呪念錠のことは秘密にしてだ。いくら念の師匠でもこういった情報を教えることはいつか自分にとって致命的なダメージを与えるだろう。それは旅団内でも同じだ。

ビスケも俺のオーラ量の少なさと練が出来ないことから何かあると分かり執拗に訳を求めてきたが、俺がそのことに関しては一切話さない態勢を維持したので、あんたは昔から秘密主義だったわねとあきらめてくれた。

「うーん。普通なら練を繰り返して行って訓練するんだけど練が出来ないととなるとちょっとね」

「策はないのか？」

「二つ案があるわね。一つ目は相手の練での攻撃を流と凝で対応する為に徹底的に訓練を行う。凝は練じゃなくて纏で行うから二セ凝だけだね」

纏と練では圧倒的にオーラ量が違うので対処方としては正しいが、それ以外の場所に攻撃を受けると死にかねない。それにただでさえオーラを消耗する放出系にとって長時間の戦闘は危険すぎる。しかし戦闘では絶対必要な技術ではあるのでこれから訓練はするが、いささか勝敗を決する決定打が欠けているように思う。

「もう一つの案は？」

ビスケが待つてましたとばかりにウインクする。

「二つ目は忍の具現化系の発をつくることだわさ！！ たかが一ヶ月で具現化出来て更に応用力があり、戦闘に向いているものをつくりあげるのは常人には無理……」というかその発想自体が馬鹿げているのよ。でもあんたのセンスならなんとか出来るかもねえ」

具現化するものに関しては既に決まっているのだが、あれ（気鋼闘衣）はおそらく聖光気が必要だろう。毎回聖光気を身につけて攻撃するとオーラの損失が激しそうなので低燃費で普段の戦闘でも使える発をつくるのもいいかもしれない。

なにより具現化系の才能があるのに使わないのはもったいない。

クラピカが常に鎖を具現化していることから分かるように具現化系はそれを最初に具現化するのに必要なオーラさえあれば後はほとんどオーラを必要としないのだ。

問題は気鋼闘衣の他にどんなものを具現化するかだ。

やはり具現化のイメージに時間をとられすぎては実用化が遅れるので、基本的には気鋼闘衣のように身に着けるものが理想だろう。

念は奥が深いな

外伝 仙水さんと仲間たち(1) (前書き)

今回造語や自己解釈があります。

いきなり外伝を書いた理由としては、今まであまり団員との絡みを書いて無かったので書きたい！ とい単純な考えだったりしますww

しばらく続くと思いますけどよろしく！

外伝 仙水さんと仲間たち(1)

外伝

当初、今回の仕事は珍しく殺しを伴わない平和な仕事だった。クロ口から渡された細長い筒と交換に、ある相手からその品を受け取ってくるだけという子供のお遣い程度の仕事だ。

しかし、突如その相手は交換場所から姿を消し、更には飛行船の荷物受け取りセンターでその筒の入ったアタッシュケースの中身だけ盗まれてしまった。ほとんど警戒してなかったとはいえ、盗賊が逆に盗まれるとはなかなか笑えない。

「……という訳だがどうするクロ口？」

『わかった。そっちにフェイタンとパクノダを送る。それから先は自分の考えで奴等を使って構わない』

了解とだけ言って、電話を切った。

しばらく待合室で流れてくるアナウンスをBGMに読書が続けていると、そこから約三時間後にいつもと同じ姿のフェイタンとスーツ姿で若干緊張気味のパクノダが現れた。

「とんだへましたね仙水。笑えるよ」

「今回ばかりは何も言い返せないな」

フェイタンと会話している最中もパクノダはこちらを見てはビクッ

と反応する。俺（忍）の記憶を見てからは視界に入ることさえ避け
ていた時に比べれば随分マシになったが、それでもやはりまだ怯え
ているようだ。

そのこともあって今まで仕事を共にしたことは片手で数える程度し
かないことに加え、仕事ではノブナガやシャルナークが上手く間を
取り持っていたので、直接命令を下すのは今回が初めてと言っても
いいだろう。

「パクノダ。早速だがこのアタツシユケースの記憶を見てくれ」

「……分かったわ」

パクノダの能力は人や物体に触れ、そこに残された記憶を読み取る
というものだ。ならば筒だけを奪った犯人も必ずアタツシユケース
に触れているので、特定は容易いだろう。

案の定パクノダは直ぐに顔を特定し、簡単な似顔絵を書いてもらっ
た。それをシャルナークに送り、過去の犯罪歴から犯人を洗い出す
という方式だ。おそらく足がつかないように運び屋を何人が経由し
ているだろうが、こちらは順次運び屋の記憶を辿っていけばいい。
いつか取引相手に追いつくまで……

「見つかったよ！ そのつの名前はコルマ、スリの常習犯らしくて
運び屋としては素人だね。住所はそこから南西に十キロ先のゾール
市のアパート。詳しい場所はメールで送るからそれを参照に！」

電話を切ると直ぐに詳細な地図情報が添付されたメールが届いた。

「十キロなら走ったほうが早いだろう？」

「余裕ね」

「了解」

着いた先はボロボロのアパートだった。郵便受けに詰まっている新聞や、部屋の中に電球がともってなければ、人が住んでいるのを疑うようなそんなアパートだ。

シャルナークによると対象者はこの二階の一番奥の部屋に住んでいるらしい。

二回へと続く階段も踏むたびにギシギシと怪しい音が鳴り、鉄の手すりもすっかり錆びてしまっているのなるべく触れないよう進む。目的の部屋に着き、中を窺うが人の気配は感じない。インターホンを押しても返事はないし電気メーターも廻っている様子はない。

「どうやらいないようだな」

「本当ね。逃げたのかしら？」

「どうせ金欲しさで気軽に受けたのだからそこまで用意はしてないだろう。帰ってくるまで待つとするか」

「待つんだたら外より中ね」

フエイタンはドアを強く引いて鍵ごと壊すと中に入る。こういう行為にすっかり慣れてしまった自分はこちらの世界に属していると改めて痛感させられる。まあ、幼少時代からまともな仕事はしてなかったが……

とりあえず空腹だったので何かつくろう（もちろんこの家の中で）
と思ったが、その様子を見たパクノダが自分がつくると言い出した。
今までの人生で出会った女性は（主にエリとマチ、ビスケ）料理が
全くと言っていいほど出来なかったのであまり良い予感はいなかつ
たが、パクノダはどうしても言うので素直に任せてみた。きつと
パクノダなりに気まずかった関係をどうにかしようという試みのな
だろう。

ジュージューといい音を聞きながらフエイタンと一緒にテレビを見
る。くだらないバラエティ番組だったが、ある程度笑えた。そんなこ
とをしている間に狭いキッチンからいい香りが漂ってくる。

「む、出来たみたね」

食卓に運ばれてきたのはオイルサーディンのパスタとサラダだった。
部屋はボロだがここだけ有名レストランのように思えてくる味だ。
正直俺より料理が上手い。

「味はどう？」

「……君を少し甘くみていたみたいだな」

「そう。それはよかった」

「まあまあね」

遅めの昼食をとって五時間後、男は帰ってきた。辺りはすっかり暗
くなり、更に男は泥酔しているようで物陰に潜む俺達に気づかない。
例え素面でも絶をしているので気づかないだろう。

フエイタンは天井から男の後ろに音も無く下りて喉に刀をあて拘束する。パクノダもそれを見て暗闇から姿を現し、俺もそれに続く。男は自分が置かれていた状況に気づいたのか顔を青く染め、酔いもすっかり醒めたようだ。

「ひいい！」

「これから不用意に喋ったり動くと指を一本ずつ切り取るね」

男は無言で首肯する。

「早速聞かせてもらうけど、今日あなたは飛行船の荷物を誰に届けたのかしら？」

手を男の肩に置いてパクノダは問う。

「し、知らねえ」

「あら嘘はお勧めしないわよ。あなたの妹さん、リコさんが大事じゃないのかしら？」

「な、何故それを！？」

相変わらず趣味がいい。フエイタンもこれからの拷問を想像してニヤニヤ笑っているが今回はそんなに時間がないので手短かにしてもらおう。

男から情報を得るとシャルナークに連絡してまた新たな運び屋を追うこと十数回、やっとのこと今回今回の取引相手の居場所を突き止め

た。

フェイタンの拷問が無ければもっと早くに見つかったはずだが過ぎた事を言うのはよそう。

「それにしても“止まらない飛行船”<アン・ストツパブル>に乗るとは考えたわね」

アン・ストツパブルはその名の通り止まることのない飛行船だ。燃料も給油用の飛行船が並列して飛びながら給油するという徹底振りで、めくると飛行船の技術が確立された百年前から空を飛んでいるらしい。

乗るのも下りるのも移動しながら並列する飛行船に乗り換えねばならないが、飛行船でありながら世界十大ホテルの内の一つでもあり乗船は十年先まで予約で一杯だ。そして船外の警備は軍用ヘリが、船内の警備はハンター協会の選りすぐりで構成されている、なにやらきな臭い噂が絶えない有名な飛行船だ。

「なんとか乗車券は手に入れたけど取引相手がどこの部屋にいるかは分からないよ。

逆ハックされかけたからね。相当ハッカー対策されているんだな」

現在、事態の悪化に援護としてシャルナークも到着して俺、パクノダ、フェイタンと共に現在アン・ストツパブル行きの飛行船へ乗船している最中だ。

「そういう所に限て、人の警備はたいしたこと無いのが常よ」

「油断は禁物だよフェイタン。乗客の賞金首を狙って不法に侵入したブラックリストハンターが何人殺されたか知ってる？ 三十五人だよ」

「ビビてるかシャルナーク？」

二人の間に殺気がぶつかる。団員同士のマジギレは禁止なので間に
入って止める。

今からこんなで無事仕事は終わるのだろうか？

外伝 仙水さんと仲間たち(2) (前書き)

シズクやヒソカとも組ませて仕事をさせたいなあ

あとオリジナルキャラも出していききたいです!!

外伝 仙水さんと仲間たち(2)

飛行船から隣で滞空しているアン・ストツパブルを見上げると改めてその大きさに驚かされる。優に俺達に乗っている普通の飛行船の十倍はありそうな大きさで、揚力としてプロペラもいくつかついているそれは当時の技術力でよくつくれたものだと感じた。

「へえ、なかなかおもしろそうだね」

シャルナークも興味がひかれたのか、その当時の技術力でどうつくったのかの考察を一人で喋り続ける危ない人と化したので俺達は距離をとって他人の振りをする。

「大変長らくお待たせしました！ 本船はまもなくアン・ストツパブルと連結致します。

アン・ストツパブル入船の際は必ずチケットを受付に提出なさって下さい。もしチケットを紛失されたかたは、真に申しわけありませんが入船をお断りさせていただきます」

俺達の他には十数名ぐらいいしかアン・ストツパブルに乗り込む乗客はいないようで、その誰もが裕福そうな身なりだ。その乗客たちはアン・ストツパブルへの移動橋を渡り受付にチケットを渡す。受付は纏をしている様子から念能力者のようで乗客一人ひとりが念の使い手かどうか確認している。このまま行くと俺達は勿論、たとえば一般人のようにオーラを垂れ流しにしてもそのオーラの量で直ぐに念能力者だとばれてしまうだろう。

ここで凝を使われれば俺達は船内の警備員に念能力者ということ
かなり警戒されてしまうが、今回は運が良かった。先頭に行くフエ
イタンがこちらを意味ありげに見るので俺達も頷いて反応する。

フエイタンは一般人が僅かに垂れ流しているオーラ部分だけをその
ままに、あふれ出たオーラを隠で隠した。これなら少しオーラが一
般人よりも力強く滑らかなだけで、そういう人もいるんだなと納
得出来るだろう。俺達も同様にそうして、少し怪しまれたがなんと
か受付をパスすることが出来た。

「潜入には成功したけどこれからどうやって取引相手を探すべきか
しら仙水？」

「勿論君の能力を使う。しかしただ闇雲に探ったところで詳しい情
報は出てこないだろう。」

なにせ乗客の数が多し。ここはバラバラに別れ、ある程度の情報を
集めた後、信憑性の高い情報提供者をパクノダの能力で改めて調べ
るといのが一番効率的なやり方だろう」

「そうだね。……団長が仙水を旅団に入れようとしている訳が分か
った気がするよ」

「ハハハ、ノブナガと似たこと言てるね」

「では集合は三時間後の正午に三階の中央ロビーだ。くれぐれも目
立つ行為は避ける」

そついいひとまず解散すると情報を集めに船内をうろつく。
情報を集めるといのは口で言うのは簡単だが、実際かなり繊細で

なかなか実利を得にくい作業だ。自然な会話の中でこちらのカードを切らないで相手のカードを自身でも気づかない内に出させるのだからその苦勞が知れるだろう。相手の表情の機微、心理傾向、ちょっとした動作から人物を見極め対策をとる。

そういうことが出来ないと情報は手にいれられない。そして得たたくさんの情報の中から有益な情報だけを篩いにかけて残るのはたつた一握りだ。

シャルナークなんかはこういう事が素で出来たりするが、マチやウボオーギンなんかは向いていないだろう。マチは面倒くさがり、ウボオーギンは元から出来ないという若干の差はあるが……

船内を歩いて気づいたことはやはり富裕層が多いということだ。チケットでさえ一人七百万ジェニーもかかるのだから乗っているのは当然金持ちだ。そんな金持ちに当てはまる貴族のお嬢さんたちに笑顔で話しかければ皆同様に船内が暑いのか赤面し、出身地はどこ？等と質問をした後は、ほとんど何も聞かなくても自分から知っている情報をぺらぺら喋ってくれた。

時折頷いて相槌を打つだけでこんなに簡単に情報が手に入るなら思ったより情報屋は楽な仕事かもしれない。情報を手に入れる難しさは知っていたが、実際諜報関係の仕事はやったことがなかったのだから俗に言う食わず嫌いだったのだろうか？

「ちょっと仙水君、聞いてる？」

少し考えていたので目の前で少し怒った顔をする貴族のお嬢さんに気づかなかつたようだ。

上手くご機嫌をとるのに時間はかかったがなんとか成功した後、食事を誘われたが丁重にお断りした。

腕時計を見ると時刻は11:34

上手くすればまだ情報は手に入りそうな程時間は残っていたが、お嬢さんと話すのに少し疲れたのでこのまま時間を潰そうと最上階へ行く。

何でもこの最上階はガラス張りで外の景色が見えるらしい。

開放感を味わいたかった。人のいる所にずっといると胸が詰まったような感覚を覚える。

そして最上階へ着くとそこに爽快な景色があった。見えるのは雲と空だけだが、綿菓子のような雲を切り裂いて進んでいく飛行船が雲の塊を突き抜けた先に広がる青空。

このまま何も考えずにここで時を過ごしていたかったが正午まであと二分も無かったし、時折感じる粘っこい視線が気分を害するので三階のロビーへと足を進める。

案の定、既に俺以外はロビーに集合していた。

「遅れたか？」

「当たり前ね。ワタシ待たせるとは良い度胸だよ」

「もういいじゃないフェイタン。食事はあんたが何処で食べるか決めていいから」

「勿論中華ね」

「……俺はダマサ料理がよかったんだけどな」

少し落ち込むシャルナークを連れてパクノダ達について行く。……
少し日本食が恋しくなった。

やはり世界十大ホテルの内の一つというべきだろうか、船内には世界中のあらゆる料理屋がある。それにしても中国という国はこの世界にはないはずなのに何故中華料理があるのだろうか？ 日本がジャポンになっているように中国も別な呼び方になっているだけなのかもしれない。

「エビチリとカニ玉とギョーザとチャーハンとラーメンを五人前ね」

「……一人分多いぞ」

さすがに耐え切れずフェイタンに指摘した。

「何言てるか、今言たのはワタシの分だけね」

この世界の住人はよく食べる。どう見てもその体に対して不釣り合いな位に食べるフェイタンが良い例で、シャルナークにしても三人前位は食べるし、女性のパクノダでさえも二人前は食べる。俺は至って普通なのだが少食だと思われがちだ。

目の前に運ばれた料理を食べながら気になっていたことを話す。

「やっぱり今も監視されているな」

「それは私も感じていたわ。殺気を隠そうともしないでいるのはこっちがそれに気づくかどうか窺っているのかしら？」

「監視にそれなりの使い手がいたんでしょ。僕らのオーラを見てかなり警戒しちゃってるみたいだから。どうせこうなるんなら最初から絶をして念の初心者アピールすべきだったかな？」

「いずれ気が付かれていただろっさ」

「この警備もザルという訳では無い。今は一人だけの様子だがこのまま放っておくといういろいろ面倒だ。」

「食後の運動にちょうどいい相手ね」

あれだけの料理をもう腹の中におさめたフェイタンは動きも軽く今にも飛び掛りそうな様子だ。

「やめておけ」

「何故止めなければいけないね。あいつウザいよ」

「コインで決めるか？」

蜘蛛のマークの入ったコインを弾き、手の甲で受け止める

「ふん、いいよ。裏ね」

「表」

ゆっくり片手を離すとコインは蜘蛛のマークがついた表のほうだった。

フェイタンは軽い舌打ちとともにおとなしく席につく。

「もっといいやりかたが有るといふことだ」

俺はシャルナークの鞆から勝手に拝借したアンテナの突き刺し部分だけが出るように念弾とアンテナを合体させ、テーブルの隅をゆっ

くりゆっくり移動させる。途中でそれに気づいたシャルナークはいつの間に？ という表情をしていたが関係ない。

目でほとんど見ないで移動させるので、操作系が苦手な俺としてはそれが最大のスピードだったが今回は警備に気づかれないためにそのスピードが役に立った。そしてついにこちらに殺気を振りまいている男の首筋へとアンテナを刺すとシャルナークが携帯をいじりだす。

しばらくして設定し終えたシャルナークは満足げに携帯を閉じると、それが合図だったかのように男も去る。

「ここからは更に慎重に行動していかないとな」

「……そういえば早速だけどあなたたちが集めた情報を教えてほしいわ」

「コチの方では特に無かたね」

「俺は有力そうなのが二件、微妙なのが五件といったところかな」

「有力なのが六件、名前だけは知っているのが三件、見たことがあるのが二件、だいたい場所を知っているのが一件だ」

「！？ すごいじゃない！」

「仙水に負けた……」

旅団の仕事を止めた時の再就職先は決まったな。

外伝 仙水さんと仲間たち(3)

順調に進んでいると思われた任務だったがやはりこの世界はそんなに優しくないらしい。

今現在進行中で黒服姿の念能力者達に追いかけてられているからだ。やはりあの男を操ったのがばれたのだろうか？ 唯一の救いは船内の乗客を気遣ってか、余り念能力を使つての問答無用な攻撃が行われてないことだろう。

「やっぱここの警備は厳しいね」

「またあの攻撃が来たぞ」

後ろから追ってくる連中の一人が銃を撃つと同時に、俺達は観葉植物やイス、テーブルの影に隠れた。普通の銃ならただかわせばいいだけだが奴、おそらく具現化系か操作系であろう能力は撃った弾がターゲットを捉えるまで狙い続けるといふものだ。

『狙撃手』の刃霧を思い出すそのやっかいな能力は通常の弾でさえ凶器に変わる。

ドンッ、ドドドン

そんな音と同時に放たれた弾は俺が隠れていたテーブルを軽く突き破って旋回すると再びこちらへ向かってくる。

やはり威力が段違いだな！

向かってきた弾を硬で強化した拳で迎撃するが、強化系の系統が20%しかない俺では念弾を完全に防げなかったらしく指の骨が何本か砕けたようだ。

……なかなかいい能力者だ。今度スカウトしてみるのもいい

とりあえずその時は今ではない。

狙撃してくる相手は六発撃った後は溜め時間が存在することは今までの攻防で分かっていたことだ。それを証明するように六発撃った後はしばらく回りの連中がしばらく時間稼ぎとして銃で弾幕をつくる。それすらもフェイクかもしれないが今はそれを信じて進むしかない。

あと二発をどうやって消費させるか

……やはり自らの命を賭けなければ難しいか

不用意にテーブルから飛び出した俺を見てパクノダ達も追いかけていた連中たちも驚くが、直ぐに気を取り直したのはやはりあの狙撃手。一発撃った後、時間差でもう一発。

一発目は烈蹴紅球波で相殺したが、二発目は空中で避けようがない。死ぬ前は時がゆっくり進むというが正にその現象が起きた。胸の真ん中目がけて、銃弾が回転しながら進んでいく。

視界の端から何かが迫ってくるのが見えたのを最後に、胸まで後数センチというところでその銃弾が消えた。それと同時に時間が流れ出し、喧騒と火薬の匂いが再び戻ってくる。

まだ理解は追いつかないがとりあえず自分は生きているらしい。直ぐに物陰へ身を伏せるとパクノダが先ほどまで俺がいた地点へ銃を

向けているのが目に入る。
パクノダと目が合うと軽くウインクしながら俺の心臓を具現化した銃で撃つ真似をした。

……なるほど、そういうことか。

おそらく狙撃手の撃った弾をパクノダが撃ち落したのだろう。そういう有りえないことをやってくれる連中だ。

「借りはいつか返そう」

「あら、意外ね。あなたがそんなこと言うとは思って無かったわ」

本気かどうか分からない笑顔を浮かべながら返事をするパクノダにどう返していいか分からなかったので無言で頷いておく。
とりあえずこれで六発撃つたので今の内に行動すべきだ。
弾幕は狙撃手の弾よりも避けやすい。

「ついて来い」

後ろから飛んでくる弾を避けながら俺達は取引相手がいるであろうB・2階層へ駆ける。狙撃手が撃つてこないことからやはり推測はあっていたらしい。
何度か引き離したり、追いつかれたりを繰り返しながらようやく目的地へと着く。

B・2階層はいわゆるホテルだ。さすが世界十大ホテルというだけ
はあり、その広さ、質共にレベルが高い。

「で、このどこにいるっての仙水？」

「貴族のお嬢さんが言うには最上階らしい」

「貴族のお嬢さんとね……それはおもしろいことを聞いたわ」

どこがおもしろいのか良くわからないがパクノダ達が笑っているの
で何かしらのスラングか流行の言葉だったのかもしれない。そうい
う事にはすごく疎いのだという自覚はあるが、別段それをどうこ
うする気も起きないのは現状に満足している証なのだろう。

「問題は最上階の何処にいるかということだね」

「全てのドアをパクノダにチェックして貰うしかないだろうな」

最上階にはVIPルームしかないので部屋数は少ないが、それでも
十や二十では足りないほどの部屋があるので作業は難航した。

パクノダが一つ一つのドアを調べている間、何気なく窓から外を見
下ろすと先ほど追いかけた連中が次々とホテルの入り口に吸い込ま
れていく。

「どうやら追っ手が来たみたいだよのだが」

「そう、ちょうどいいわ。こっちも終わったところよ」

パクノダが指差したドアをすぐさま蹴破ったのはフェイタン。シャ
ルナークと軽く微笑みながら部屋に入ると、既にフェイタンが取引
相手に仕事をしていた。

太り目の東洋人男で右目側に泣き黒子、今はフェイタンに腕を折ら
れて顔が苦痛で歪んではいるが、クロクから言われた取引相手に聞

違いないだろう。

「いつ、待て！ 私を殺せば約束の物の隠し場所は分からなくなるぞ！！」

今更裏切った存在の大きさに気づいたか、必死の形相で交換条件をもちかける取引相手。

「ハハハ。何言てるか？ そんなことこちには関係ないね。無理やり聞き出せば一緒よ」

フェイタンのあの楽しそうな様子から拷問で体に聞くことは確かだろうが、ここはより正確な情報が手に入るパクノダに任せるのがいいだろう。それにフェイタンの拷問は時間がかかるので追っ手が差し迫った今ならなおさらだ。アイコンタクトでパクノダに伝えると、

「あなたに残された道は、情報を吐いて死ぬか、拷問を受けて死ぬかのどちらかよ。

どっちがいいかは選ばせてあげるわ」

パクノダの究極の二択に観念したのか取引相手も素直に答えだす。ようやく隠し場所を吐かせた後、にわかにはドアの外が騒がしくなりだした。

「よしっ、ぶち破るぞ！！」

「お客さんの到来ね」

「シャルナーク、脱出路の確保は？」

「五分前に完了済みだよ」

いつの間にそんなことをしていたのかは分からないが上々だ。ちょうど良い具合にドアをぶち破って来た連中もいることだし。

牽制に烈蹴紅球波を先頭の顎髭男へ打ち込むと、爆音と共に頭を吹き飛ばし残りの連中も蜘蛛の子を散らすように一時部屋から避難する。

「ならさっさとその方法を教えてくれないか？」

シャルナークはニコニコしながら船外の様子が見える窓を指差す。窓は飛行船専用の分厚いものでちょうど一人一人が潜り抜けられるほどの大きさだ。

「……雲が綺麗だな」

とぼけてみたがどうやら通用しないらしい。

「あきらめるのね、仙水。入船も非合法なら下船も非合法と相場は決まっているわ」

そうこうしている内に外の連中が勢いを取り戻してきた。どうやら増援が来たらしく、怒号が飛び交う戦場の中にあの狙撃手もいた。まさに刃霧のような見た目で、切れ長の目でターゲットであるこちらへ銃口を向ける。俺はさっきまでの躊躇を捨て、窓に念弾をぶつけ青空へと身を投げ出した。

轟々という音が耳を劈きながら落下を続けるがまだ大地の姿は見えてこない。空中でなんとか向きを変えて空を仰げばパクノダ達も飛

行船から飛び出してくる瞬間だった。百や二百メートルなら落ちても平気だがこの感じだと二キロぐらいはありそうなので、このまま落ちたら死ぬだろう。シャルナークは窓から降りると言っていたが何か策は考えていたのだろうか？

そんな疑問を抱いていた俺は急に落下スピードが弱くなったと感じた。いやそれだけではなく、先ほどまでの大気の抵抗が感じられない。確認の為よくあたりを見回すと、そこは屋内のようによく分からない機械類が並んでいた。

「ブツは手に入ったか？」

背後から話しかけられ振り向くと、そこにいたのは片手で“盗賊の極意”、もう片方で操縦桿を握っているクロロだ。

まだよく今の状況に頭が追いついていないがとりあえず近くにあったイスに座って落ち着く。一息ついた所で疑問をぶつけた。

「ここは何処だ？」

「小型飛行船の中さ。シャルナークから連絡がある前は近辺で待機していたが、連絡が来たのでアン・ストツパブルの低空でお前たちを待っていた」

「そこまでは理解できるが聞きたいのは俺をここに連れてきた方法なのだよ」

「……それは直ぐに分かるだろう」

クロロは“盗賊の極意”を片手に練をした後、あまり広いとはいえない船内にパクノダ、続けてシャルナーク、最後にフェイタンと現

れた。

シャルナーク以外は俺同様に皆驚きを隠せないでいるようだ。が少し分かったことがある。

おそらく“盗賊の極意”で使った能力は瞬間移動能力だ。それも高速で落下する俺達の速度を完全に失わせるのだから相当便利な能力だ。誓約は少しきつそうだが……

「パクノダ、成果はどうだ？」

「ブツは自宅の金庫に保管してあるそうよ。位置はだいたいここから二百キロ南西」

さすがに旅団結成時からの付き合いらしくパクノダは直ぐに状況を理解したらしい。

「このままだと備蓄している燃料だけじゃ持ちそうにないな。……そういえばすっかり忘れていた。紹介しよう新しく旅団に入ったコルトピだ」

「よろしく」

クロコの紹介と共に船内の奥から小柄で顔を隠すような長髪の人物が現れる。シャルナークは興味深そうにニヤニヤと、フェイタンは少しキャラが被っているせいか不機嫌そうだった。唯一まともな俺とパクノダは普通に挨拶をする。この時期に入団するとは思ってなかったので少し驚いた。

「では早速頼む」

コルトピは燃料タンクを左手で触ると、右手から全く同じ燃料タン

クが現れる。

二十四時間後にコピーは消えてしまいがそれまでにコピーした燃料の方を使い切れればいい。

具現化系を極めるとここまでの能力も手にいれられるのだなと感心した。

今度コツでも聞いてみようか。

「見ての通り、コルトピの能力は左手で触れたものをコピーできる。これからコルトピはパクノダと並ぶチームの要だ。お前らは命懸けで守れ」

パクノダの能力は貴重だから分かつて何故お前らの中に俺も入っているのだろうか？

仙水さん苦戦する(前書き)

申し訳ありませんでしたー!!

これほどの難産は初めてだ。更新を心待ちにしていた読者の皆さんにはご迷惑をおかけしました。なにとぞこれからもよろしくお願ひします!!

仙水さん苦戦する

「はいそこ、右手の攻防力が0.5%ほど多いわよ！」

そのアドバイスに従ってなんとか改善しようとするが、

「今度はその分背中についてちゃってるわさ！」

と、いつの間にか取り出したハリセンを地面に叩きつけて指摘する。片手で逆立ちしたまま1%以下のオーラの配分をしるというのだからビスケもたいがい鬼畜だ。それも三時間耐久。

俺がビスケに再び教えを請うと、ビスケは基本の四五行とその応用をやらせた後（もちろん練や堅、凝、硬、円はなし）集中的に流の特訓をやらせた。最初の念の修行の時ほとんど教えることがなかった反動なのか、ビスケは姑のごとく誤差1%以下のオーラ配分をネチネチと指摘する。その表情は心なしか楽しそうだ。

「まあ少しは見えるようになってきたわね。そろそろ休憩にしましよつか？」

「……………さすがに少し疲れたな」

試合まであと一週間。決して長くはないそんな現状で暢気にしている暇はないので、昼食の時間と十分ばかりの休憩がすんだ後に再びビスケ直々の特訓をつける。

放出系の系統修行『浮き手』も現在のオーラ量でなんとか出来るよ

うになったのでビスケいわく、今日やる修行はそれよりレベルが一段階高いものらしい。

「今日やるのはずばり！ 『乗り手』よ！」

「乗り手？」

「そう。まあ実際は今あたしが考えたんだけど、兎に角あんたの修行にはピッタリだわさ！」

球飛ばしは指先大の球状のオーラを遠くまで飛ばす、放出系の系統修行でも簡単なものでグリードアイランド編のときにゴンがやっていたものだ。

「まずはあんた念弾をつくってそこに浮かばせてみなさい」

言われた通りに念弾をつくって空中に浮かばせる。放出系の系統によっている自分にとっては造作もないことだが、ビスケがここからいったいどんなことをさせるのだろう？

「その念弾の上に乗きなさい。最初は足からでいいけど最終的には指一本で乗ってもらおうからそのつもりでね」

今まで念弾は飛ばすものでしかなかったのでオーラの塊に本当に乗れるものなのか？ と躊躇したが、念弾は実際に当たらないと意味がないのである程度の堅さと質力は持っているはずなのだ。ならばむしろ触れない方がおかし。

脳内で自己完結した俺は、自らのつくりだした念弾に片足で乗ってみたが予想以上に念弾の上に乗るのは難しい。乗るだけなら簡単なのだが、念弾は俺自身の体重を支えるためにオーラを使っらしくど

んどん小さくなっていくのだ。そしてピンポン球ほどの大きさになるとプシュツという音と共に念弾は消えてしまい、俺の両足は地面についた。

「忍、それでやってみてどうだった？」

「予想以上に難しいな。足裏にオーラを集めすぎると念弾に込められたオーラがあつという間に消費されていくし、かといって足裏のオーラが少なすぎると自らのオーラによって傷ついてしまう。本当によく考えられたメニユーだな」

「その通り。これをクリアするには流と発のバランスが一番大切なわけだわさ。忍もこれは一朝一夕じゃ出来ないわよ。あんたも大分成長したから、この修行はあたしのアドバイスなしで一時間念弾の上に乗りなさい。そうしたら晴れてあんたは弟子卒業だわさ！」

ビスケの顔は弟子の成長の喜びと悲しみが入り混じった複雑な顔で部屋を後にしたが、その手に持つ男性のグラビア雑誌がいろいろと台無しにしていた。

そんなビスケが去った後、まず最初に念弾を大きくしてやってみた。しかし始めてそうそうこれではダメだと分かる。

念弾を大きくした分、流で消費するオーラの量が増え、長続きしないのだ。それに加え最初の念弾をつくる際のオーラの減少によってオーラ総量が少なくなっているのも失敗の原因だと思われる。

やはり大きくすればその分長続きするという発想は甘すぎたのだから。

妥協案として念弾を維持しやすいボウリングの球サイズに変えてやったところ時間はかなり延びたが、それでも半分の三十分もいかない。これは念弾の所為だけではなく、流が完璧ではないせいだろうか？ ビスケの流の特訓で大分自信がついていたが、これは考え直

さなくてはいけないかもしれないと再び流の特訓に移る。

自分では体全体のオーラの配分が見えないので大きな鏡を前に置いての修行だ。

しかし何度確認しても流に問題があるようには思えない。

とすると単純にオーラ量が足りないのか？　しかしビスケは人に絶対出来ないことを課題としてやらせる人物ではない。何か大事なことを見落としているのだろうか？

念弾の大きさは……あれ以外では長時間持続できないからよいとして、流もおかしいところはないはず。念弾の上でバランスを常に保っているのがオーラ消費に余計なものはない。

もっと念弾に効率よくオーラを込めれたなら話は変わってくるのだが　ハッ！

まだ試してないことがあった。

念弾をつくりその上に乗りながら、流でオーラ配分をする。それまでは今までと同じだがここからが違う。話は簡単なことだったのだ。念弾に最初にこめたオーラだけで長時間維持しようと考えたのがまず間違い

自分の体重の分だけ念弾に込められたオーラが減っていくならその減少分を足裏から継ぎ足してやればよいだけ。最初はどのぐらいのペースでオーラをつぎ込めばいいか分からず失敗したが何度か繰り返していく内にだんだん感覚を掴めて来た。そして日が暮れるころようやく目標の一時間を達成

シャツが汗でベトツを超え雫をたらすほどになり、シャワーですつきりした後、泥のように眠った。

翌朝目覚めると直ぐに、念の基本を一通りやってから具現化系の修行に移る。

具現化系には膨大なイメージ修行が欠かせないが、それはほとんど必要としなかった。

幽白のキャラの能力なら、具現化系100%の才能があるからか、具現化するのにそれほど苦労しなかったからだ。

イメージしたのは蔵馬（妖狐）の白魔装束、色は黒に変えたので黒魔装束といったほうがよいだろう。それによりまず練が使えないことによる念の防御力の低さをカバー、無論それだけでは面白くないので武威の着ていた鎧の余計な飾りを捨て手甲や肩当て、脚部を覆う部分と組み合わせることにより攻撃力も上げた。

しかし、そのせいでやはり扱えるオーラがどうしても少なくなる。

これはもう顕在オーラ量を増やすしか手がないだろうという結論に至ったところで、部屋のドアを叩く音が聞こえた。おそらくビスケだろうなとドアを開けると、予想に反してそれはいつも通り顔に笑顔を貼り付けたシャルナークだった。

「わあ、仙水変わった格好しているね。それは新しい念能力か何か

」

ボタン

……少し無駄なオーラを具現化する時に使っている可能性もある。節約、節約と自分で言っていて少し空しい気持ちになるが、現状それしか手段がないというのだから仕方ない。

再び思考の波に入りかけた自分を呼び覚ます様にドアがしつこく叩かれる。

「酷いな仙水、いい知らせを持ってきたのに」

「……一応聞いておこう、何だ？」

「マチが仙水に百万賭けるから絶対負けるなだって」

「それだけか？」

その答えは予想してなかったらしく、シャルナークはしばし顎に手をあてて考え込んだ後

「あ、俺も応援してるからね」

今度はドアを閉めた後、鍵を掛けてチェーンまでした。

……修行を始めよう

十 十 十 十

『さあ始まりました！ 未だ無敗。謎のハスラー、キャロム・シークル対こちらは無敗の仙水 忍！ 無敗同士で初の黒星をつけるのはいったいどちらなのか！？』

向かい合う奴、改めキャロムはフードの下でニヤリと笑う。間違いなくウボオーギンと同じ戦闘狂だろう。

そういう相手は強い、弱い関係なく面倒臭いのが定石なのでやる気もそがれるというものだ。

『試合開始！！』

まずは自分だけの力でどこまでやれるか試すため、黒魔装束は具現化しない。
キャロムは余裕のせいか、薄く笑みを浮かべこちらへゆっくり近づいてくる。

「待ち望んでいたぞ、兵よ。^{じゅうまの}まずは挨拶代わりだ」

そう言うとキャロムの手にはダイヤの形の器具が出現した。具現化したであろうその器具の中には九つのカラフルな球が入っている。キャロムはそれを自身と俺との間に投げ、背中に背負っていたキューで再び手元に具現化させた白い手球を撞く。

それはどういう理由かちょうど膝ぐらいの高さに浮いている九つの球的の塊に当り、弾けた。

「【ブレイク・ショット】」

的球は目で追いきれないこともないが、あらゆる角度に撥ねて互いにぶちあたり、軌道が読みにくい。不意に背後から空気を割く音が聞こえたが、その時には既に背中を酷い衝撃が襲っていた。纏をしているとはいえ、人を殺せるような威力ではないそれは本当に挨拶代わりだったのだろう。

『ヒットーポイント！』

確かに軌道は読みづらいがなんとかならないこともない。

「フフッ、まだやれるという顔をしているがもう遅い。このフィールドが闘技場と言う名の台だとするなら貴殿はポケットなのだよ」

その言葉と共に体に妙な念がかかるのが分かった。どんな念能力かは分からないがその念能力の発動条件が先ほどの攻撃によってクリアされたのだろう。

俺は構わずキヤロムの元へ一足跳びで向かう。

こういう形に嵌めて発動させる念能力は総じて強力だが、経験上その本人の肉体の錬度はそうでもないことが多い。ゲームマスターの天沼や、キメラアントのオロソ兄妹などがよい例だ。

勿論、それを彼らは分かっているので自身に攻撃をさせない能力を備えていたり、あるいは隠れていたりするのだが、前者は念能力上かなりの制約が要求されるのでほとんどない。

つまりこういう相手の能力に嵌ってしまった場合は、能力者を見つけて出して殺すか、能力の解除条件をクリアするかぐらいしかないのだ。その中で一番効率的なのは勿論最初だろう。

能力の解除条件をクリアするにはまずその念能力がどんなものかを知る必要がある、その為にはその攻撃を近くで観察せねばならず危険が付き添うからだ。

一気に距離をつめた俺に相手は動揺もせず対処する。右フック、後ろ回し蹴りと繋げるが苦もなくかわし、あまつさえ反撃でキューの鋭い突きをくらうところだった。

一旦距離をとるとキヤロムは今だ空中に浮いている的球目がけ手球を撞いた。

このままでは防戦一方確実なので浮いている的球の一つを烈蹴紅球波で打ち落とす。轟という爆音を響かせ、確かに直撃したはずだが傷一つない球的球は依然浮いたままだ。

「やっかいだな」

そついい終わるまでに先ほどキャロムが撞いた球が連鎖反応的に闘技場の中を跳ね回り、ぶつかつた床に大穴が空くほどの威力を見せ付けてくれる。余りにも速く動いているので闘技場が的球の色の洪水によって覆いつくされていく。

『キャロム選手の【卓上の遊戯】<ナイン・ボール>炸裂!!』

九つの球が闘技場の床や天井を跳ね回り対戦相手を蹂躪するこの技は未だ破られていません!! 仙水選手はいつたいどう闘うのか! 『?』

こついう場合は下手に動く危険だと言われているが、先ほどの念能力で何らかの補正が加えられていることも考えられる。防御のために黒魔装束を具現化させると同時に狙つたように腹部に二つの衝撃を受け地面へと倒された。

先ほどとは威力も段違いでズサアという効果音と共に腹部が焼けるように痛む。どうやら肋骨を何本がいつたらしい

『クリティカルヒット&ダウン3ポイント!』

『おつと仙水選手へ再びヒット。これで4:0、私個人としてはヴィジュアル的に仙水選手を応援しております!! 八ッ!? これは失言でした。大変申し訳ありません!』

……痛みには慣れていたので起き上がれるが、後で折れた肋骨が肺にささつてないか不安ではある。キャロムはこんなものか? とでもいいたげに深くため息をついてみせた。

「期待にはどうやら沿えそうもない。君が想像しているのが自らの勝利だとしたらそれを裏切らねばならないからだ」

何も黒魔装束は念功防力を上げるためだけのものではない。付加させた能力は肉体を活性化させ筋力、強化系統を飛躍的に高めるといふものだ。気鋼闘衣と比べたらその効力は段違いだが、元々強化系の才能が20%しかない俺が黒魔装束によって40%へ上がるといふのは大きい。

普通は自分の系統と最も離れた系統でさえ40%は使いこなせる才能があるので、俺の具現化系と放出系以外20%というのは大きな縛りで最大のネックでもあった。単純計算で相手のオーラの二倍は持つてないと相手の最弱の系統の能力と同等ではないからだ。

俺は起き上がり、九つの球の被弾覚悟でキャロム目がけて突っ込む。烈蹴紅球波をぶつけたほうがより効率的だとは思うが外してオーラを無駄にしたくはない。

「ハアーーー！」

強烈な衝撃が肩にあたり再びポイントが入る。衝撃で危うく転倒しかけたが、それでもようやくキャロムの元へたどり着き、振り払おうとするキャロムを力づくで押さえ込んだ。さすがにここまで来るとは想像してなかったらしいキャロムの隙だらけの腹部に何度か膝蹴りを決めたところで嫌な予感がしてその場に伏せる。そして破壊音と共に今既自分がいた石床は的球によって大穴を空けていた。

『クリティカル仙水2ポイント！』

先ほどの攻撃で警戒心を高めたキャロムはこちらへ近づかせまいと手球を高速で動局的球にぶつける。やはり攻撃の起点は全てあの手球だ。あれをどうにかすれば能力が解除されるだろうがその前に目の前を高速で動局的球をどうにかしなければならぬ。

時間がかかればその分球が当たる確率は増えるだろうし、これはオーラの節約より多少のオーラ消費を覚悟の短期決戦へ持ち込むべきか
そう結論づけた俺は体の周りに多数の念弾を出現させ、烈蹴紫炎弾の準備をする。そうしてる最中も的球がその中の念弾のいくつかを破壊し、体のあちこちにかすり、内出血で肌が紫色になり腫れ上がる。審判がポイントを叫ぶ声を聞きながら烈蹴紫炎弾を放った。

黒魔装束で強化された力で放った烈蹴紫炎弾はそのいくつかを的球によって相殺されながらもキャロム目がけて走る。相手をしつつこく狙う無数の念弾にキャロムも顔色を変え、避けることに専念しているようだ。

ここで近づき止めをさせればそれがベストなのだが、烈蹴紫炎弾を使う際にはその場から2メートル程は動けないという制約があるので、今の自分に出来ることは飛び交う的球に当たらないよう身を屈めて、ただ念弾が相手を追い詰めることを願うだけだ。

ドン！！

もはや何度目になるかわからない衝撃が体を襲った。

吹き飛ばされてその場から2メートル以上離れたのが原因かそれまでキャロムを襲っていた烈蹴紫炎弾は消え、それと同時に体を覆っていた黒魔装束も消える。

『クリティカルヒット&ダウン、3ポイント！』

『オー、何と言うことでしょう！ これで9：2、いよいよ仙水選
手後がない！！』

キャロムがキューを構えたままこちらへ近づいてくる。

もう纏を維持するのさえままならず、シヨックのせいも頭がガンガン揺れているように錯覚してしまうほどだ。

だが、それでも立つ。体全体が痛み、もはや何処が痛いのかさえ分からぬ。

そんな異様なまでの意地を見せて立ち上がる俺を見てキャロムは呆れているようだ。

「貴殿は立派だった。もうそれでよいではないか？」

右腕はおかしな方向へ向いていたが、無事なほうの左手で真っ直ぐに戻し念弾を浮かばせる。体中のオーラをかき集めてようやく二つほどできたそれはお世辞にもあまり形がいいものではない。

一つを蹴りとばすが真正面からの単調な攻撃を避けられないキャロムではない。続けて二つ目を正面のキャロムからかなり右にずれた方向へ蹴る。それは途中で急激にカーブして背後からキャロムを狙う特別な念弾だったがそれすらキャロムのフードにかするだけだった。

もう自身のオーラは皮膚の表面でボンヤリ光る程度しか残されていない。

「普段通りの実力を出していたなら先ほどの一撃はかなり危うかっただろう。だが精度、狙いが甘い。私に勝つのはまだ早かったな」

キャロムがキューの先を硬で強化し止めを刺そうと身構える。

そして闘技場のリングは轟という音をたてて半壊した。

確かにその時俺はまったく体が動かさなかった。だがキューの狙いは確かにずれて闘技場のリングを破壊するだけに留まった。

キヤロムが外したわけではない。外させたのだ。

最後に放った二発の念弾。一発目が罠で、二発目が本命の変化球だと思わせたが実際は一発目が本命だった。

一発目の念弾はキヤロムに避けられた後、リングを大きく回って止めを刺そうとキューに硬をしたキヤロムの首筋に直撃。半壊したリングの瓦礫の中へ倒れ伏したというわけだ。

『キヤロム選手、戦闘続行不可能。よって勝者、仙水！！』

『な、何が起こったのでしょうか！？ あわや大ピンチと思われた仙水選手でしたが結果は大、大、大逆転勝利！！ 誰かいたいどうしてこうなったのか教えて欲しいところですよ！！』

観客が大歓声を上げる中、目の前のキヤロムに続いて瓦礫の中へ倒れる。

最後に見たのは、担架を持ってきた医療部隊がステージの端から急いで駆け寄る光景だった。

目を覚ますと体中に痒みと鈍痛がはしり思わず呻く。痛みを忘れるために再び眠ろうとするが、一度痒みや痛みが気になると中々寝付けない。

眠ることを諦めボンヤリと薄目を開けると体中に巻かれた包帯と薬品の匂い、折れた右腕には副子と三角巾で固定されていた。

あまり愉快的な光景ではない

「あら、起きたの？」

ドアをノックもせずに入ってきたのは、かごに入ったりんごを抱えたビスケだった。

起きて直ぐにシャルナークの顔を見るよりは随分いい目覚めである。

ビスケはベッドの近くにあるパイプイスへ腰かけると、果物ナイフで器用にりんごの皮を剥き出した。しばし病室にはりんごの皮をむくシャリシャリという音だけが流れる。

「よしっ、我ながらいい出来だわさ！」

誇るように剥き終えたりんごを見せ付けるとそのままパクツとかぶりつく。

……ビスケはこういう人物だ

「ちよっ！？」「冗談だわさ！ 忍もほら食べなさい」

何も言わない自分に焦ったように食べかけのりんごを出されても困るのだが。

りんごを受け取らない俺に諦めたのが再びりんごを剥き始め、今度はさすがにかぶりつかずカットされたりんごを差し出すが空腹を感じてなかったので丁重にお断りした。

「怪我の完治にどれくらいかかると医者は言っていたか？」

「全治4ヶ月。あれだけバンバン敵の攻撃を喰らっとしてそれだけですむなんて本当にたいした体だわね」

キャロムとの試合があつたのが十月九日。ハンター試験まであと二ヶ月と少しか。体の方はなんとか一ヶ月で治るだろうから残つた時間は病院生活で鈍つた体を叩き直す分にあてればギリギリ間に合う。

再びドアが開いて初の顔合わせをしたマチたちとビスケ。もう面倒ごとはこりこりなので毛布を被つて寝たフリでもしよう。

仙水さん苦戦する（後書き）

今回あまり黒魔装束や乗り手の修行の成果とはあまり関係なかったですけど次回からはその成果を御見せできると思います。

ハンター試験では転生者を出す予定です。原作知識ありから知識なしまで出します。

その中にはあの人の姿も？ 次回お楽しみに！！

仙水さん試験地に入る

たくさんの人が列をなして次々と飛行船に乗り込んでくる。その中に人目を惹く人物がいた。

首元から頭部を包帯で雁字搦めにして、唯一包帯の隙間から見えるのはギョツとするようなほど大きな右の眼球。更にその包帯の上から何かを封印するかのようにつも怪しげな字が書かれたお札を貼っている。

服は中国の武道家たちが好んできそうな道士服を着ていた。

おおよそ、その人物から感情や性別さえも知ることが出来ない、正に謎の人物と呼ぶに相応しい人物といえよう。それゆえに誰一人その人物が座っている席に近づこうともしない

(オレを見て近寄ってくる奴は気狂いか命知らずだけだろう)

その人物自身でさえそんなことを考えていた。

そもそもその人物、ムクロは生前中国の片田舎で生まれ死んだ唯の女だった。

どういうわけか死んで後に再び蘇り、いや正確には生前とまったく違う世界に前世の記憶をもったまま産まれた。産まれて直ぐに母親は死に、家族は父親だけ

その父親が最悪な奴だった。

生まれて直ぐにわが子の体を弄び、玩具同然に自らの体を使うだけ使って、自らの欲が解放されるとそのままの状態で放置する。日々悪化するその醜悪な生活に涙も耐えなかったが、その辺りは毎日新しい死体が転がる最低のスラム街だったので、子供の手だけでは到底生き抜くことは敵わない。

そうしてオレの体が開発されきったところ、あいつはオレを時々マフィアの下っ端に売りにだすようになった。下卑た大人たちが体の下で歪んだ笑みを浮かべているのを見ると、そいつらが余りにも哀れでおかしくオレの心は黒い喜悦に満ちる。その男達はそうやって蔑みの視線を受けるのが酷く気に入らなかつたらしく酷い体罰を加えた。

それでもオレの愉悦の表情は消えず男達はすっかり萎えてしまったように家に帰した。

家に帰るとあいつが何人の女と戯れながら電話相手と話している。

どうやらその相手は女を何人も遊び殺している狂った野郎のようでオレをいたぶりたいとあいつに熱っぽく話しているようだ。

さすがに面倒になったオレは用意してあった硫酸をあいつの目の前で被り、そのことを聞いた相手も傷つける楽しみが減ったと取引を断った。そうして目の前で激怒するあいつの脇腹をあらかじめ用意してあったナイフで突き刺すのは簡単だった。拍子抜けするぐらいあっさり人は死ぬんだな、と前世でも人を殺したことがないオレはその時深く実感したものだ。

硫酸の痛みは凄まじいものだったが、それ以上の快樂が、あいつを刺す喜びが強い。

どうせこのままオレは目の前で倒れたあいつに続いて死ぬのだろう。一度死という経験をしたオレには死への恐怖はなかった。それに硫

酸を自らの体にかけてことに後悔はないが、このまま醜い体を晒して生きるくらいなら死んでしまったほうがいつそ楽だ。後オレに出来るのは甘美な死という感覚が体全体を包むのを待つだけでいい。

ところが予想に反してオレは死ななかった。体中から溢れる湯気のようなものが何らかの力を発し、オレの体を修復していく。右半身の酸による焼け爛れは直らなかったが、結局死にはしなかった。

それが念だと知ったのは数日後、逃げるように街から出たオレへの追っ手が口を滑らしたからだ。以前とは比べ物にならないほどの速度で動く自身の体に戸惑いながら、オレはその追っ手を返り討ちにする。そうして念についての情報を吐かすだけ吐かせた後は始末した。

そうして数年間、向かってくる奴、逆らう奴、あるいはこの体を見た奴その全てを老若男女関わらず殺す日が続いた。

この半身は憎悪の象徴であり、触れられたくない過去でもある。

そして戦闘はその発散の為の手段でしかなかった。

そうして向かってくる奴を殺していたら、いつの間にかオレは闇の世界で有名になっていた。

おそらくオレが殺した奴らの中にマフィアの連中もいたのだろう、
気づけば一都市の長に祭り上げられていたのだ。

最近では無差別に人を殺すことも飽きていたので、気まぐれに長として部下に人身売買や薬物を流布させてみたがどうも面白くない。そんなオレの表情に顔を強張らせながら部下が面白い情報を伝えた。

ハンター試験。毎年世界中から数百万もの腕利きが挑み、会場にたどり着くものでさえその中の一人とも言われている。そして無事ハンター試験に合格すると富と名声の象徴であるライセンスカードが授与される、そこまで部下から聞いたところで下がらせた。

既に欲しくも無い富と名声は手に入れている。欲しいのはこの身に届くほどの強者との出会いだ。

この飛行船も受験地であるアイジエン大陸のボルトデルンへ向かうものだが、カタギではない連中もあちこちに見る。あれらが全てハンター試験の受験者だとしたら、聞いていたよりもハンター試験は楽なのかもしれない。中には念の使える奴もいるが、せいせい片手で数えるほどで警戒するほどではないだろう。

そうして広い席を独占しているとその男が現れた。

退院して天空闘技場を出る前にシャルナークがガイドを紹介してくれた。なんでも以前シャルナーク自身をハンター試験会場へ導いた人間らしく、良心的な値段でガイドを請け負ってくれるらしい。アイジエン大陸のポルトデルン行き飛行船に乗れとガイドは告げた。それから先は現地で落ち合うとだけ言って、電話を切ったガイドが本当に信用できるかどうかかなり微妙だが、もしダメならまた来年を目指せばよいだけだと自分に言い聞かせ飛行船に乗り込む。

既に飛行船の中には人が数えるのもバカらしくなるぐらい乗っていて、これは立ち乗りも覚悟せねばならない状況だろう。すれ違う人の中にはまるで化け物でも見るかのようにこちらを見つめ、口をパクパクと開け閉めする人間もいる。オーラも一般人並みに抑えたい、特別威嚇をしているわけでもないのです、結局その理由は分からなかった。

そのまま通路を進むと席がポツカリ空いているスペースが見つかったので、後の人を考えそこで既に座っている人物の隣に座る。その人物は顔を包帯で巻いていて、その隙間から眼球が覗いていたが変わり者揃いの旅団の連中に慣れているのでそこまで気にしない。懇ろ、ポノレノフと包帯繋がりで親近感が湧くくらいだ。

「そんな顔でオレを見てくる奴は初めてだな」

口も包帯で隠れているので、目の前の包帯姿の人物が話したのだと気づくのに数秒かかった。

声は想像していたよりも高いが、男とも女とも捉えられる声色だったので、はつきりとは分からないがなんとなく女性だと予想する。

「オレのいう事をハイハイ聞く脳無しのカズどもに比べたら大分マシだな。お前オレの部下にならないか？」

そしてまた一つ分かることが……見た目に反してこの女性はお喋りだ。

そして想像以上に強い。強者のみが持つ、そのプレッシャーから判断するに、少なくともゼノと同等程度の力量があるだろうことが分かった。

「ありがたいお誘いだが」

「決まってそう言う奴に限って欲しくなるんだ」

そう言いながら人目も気にせず、放つ凶悪なオーラで周囲のイスをギシギシ鳴らす女性。周囲のハンター受験者はオーラにあてられ気絶していき、念を使える受験者は顔色を変え更にこちらと距離をとる。

戯れでやっているのだろうかということは分かるのだが、時と場所を選んで欲しい。

俺達の周りだけスッポリ空いたその空間を残したまま飛行船は出発した。

なんでもこの女性の名前はムクロというらしく、何処かで聞いた名だと記憶を引っ張りだすと、最近A級のビンゴブックに載っていた名だった。裏では人身売買などで名が知れているので、専らお宝専門の幻影旅団では仕事でも鉢合わせることがないが、本人と出会っ

た今ではそのことが幸運だと分かる。もし仕事先で鉢合わせたら血を血で洗う戦争になりかねないからだ。

目的地に到着するまで暇なので、本を読んで暇を潰すことにした。そして文庫本の半分ほど読み終えた所で突然強い揺れが飛行船を襲った。

船内は上下左右に揺れ、人や雑誌などが宙に舞う。俺は時折飛んでくる危険物、おそらく受験者の物であろう剣や斧などを避けながらバランスを保っていたが、ムクロの方は激しく揺れる船内でイスから全く動いてないにも関わらず、まるで物の方がムクロを避けているかのように何一つ当たっていない。念能力の一部かと思ひ凝で確かめたが、ムクロはまるでオーラを纏ってない絶の状態だったので驚きを通り越して呆れてしまった。

おそらくこれは受験者を落とすための一部なんだろうが、この飛行船に乗っているのは受験者だけでなく一般人も大勢いる。それらを巻き込んでまで受験者を落とすことが出来るほどハンター教会は力を持っているということなのか？

『この飛行船は今乱気流の中にいます。このままだと船体に大きな影響を与えかねないので急遽ポルトデルン空港行き予定を変更しまして、ここから一番近い飛行場のカラリア空港へ向かいます。ご搭乗の皆さんには大変迷惑をおかけしますが、何卒ご了承下さい。尚この先も船内は揺れると予測されます』

船内放送が済むとにわかに関内受験者は騒がしくなってきた。なにせ唯でさえ合格率の低い今年のハンター試験に間に合わなくなる

かもしれないのだ

受験者の何人かは飛行船の操縦室にまで押しかけたらしいが、激しい気流の中あれを操縦するのは本当に難しい。一度ククロ口に勧められて操縦をやってみたことがあるのだが全く出来なかった覚えがある。そのことではばらくククロ口からかわれたのはいい思い出だ

「成るほど。これも試験の一部ということか」

包帯の下でニヤリとムクロが笑うのが分かる

「そのようだな。どうやら飛行船でのボルトデルン行きは外れだったようだ」

一応、これから向かうカラリア空港もアイジエン大陸にあるのだが試験の開催地であるボルトデルンへは距離がある。ガイドは現地で落ち合うと言っていたが果たしてカラリア空港にいるのだろうか？

結局、二、三の暴動はあったが無事カラリア空港に着いた。

受験者たちの多くは、直ぐにタクシーや最寄りの交通機関を使って受験地に向かおうとする。残りの少数派は俺と同じようにガイドを待っている奴か、どうしたらよいか分からず立ち尽くしている者、他人の動向を観察する者が約十数名。

ムクロは部下がガイドらしく、「受験地でまた会おう」とだけ言い残し去っていった。

そのまましばらく待っていると、スキンヘッドでグラサンをかけたスーツ姿の男が話しかけてきた。よほど急いでいたらしく、少し声を弾ませているようだ

「あなたが仙水様ですね？」

「ああ。君がガイドかい？」

「はい……えっ!？」

俺が男の背中から突き出た片腕を引き抜くと、男は支えを失い地面に倒れ伏す。

血で塗れた右腕を男のスーツの裾で拭ったが、ベトベトして全てを拭いさることは出来なかった。

周囲で様子を窺っていた者は何故ガイドを殺したのか？ と衝撃の表情を浮かべていたが、その答は簡単だ。あれはガイドではなかった。

まずあのいかにもな格好がおかしい。ガイドをする者は基本的にそうと分かる見た目はしておらず、一般人と同化することを目的としている。最近ではマフィアの奴らでさえあのような格好をする者は滅多に見ない上に、自らがガイドと名乗るのはいかにも臭いおそらくハンター教会に雇われた偽ガイドなのだろう

そして何よりガイドの者と打ち合わせしていた合言葉が最初になかった。

殺した理由の大半は前半によるところが大きいが……

とにかく空港で真昼間から人を殺した所為で、あたりの人間が騒ぎだしたのでとりあえず空港から出ると、待ち合わせていたようにジヤケット姿の男が現れる。

「昨日のおとといは何を食べたんだ？」

「今日食べたものと同じものだ」

しっかりと合言葉を聞いてきたので本物のガイドなのだろう。

「目立つようなことは控えてくれ」と苦笑気味にガイドに忠告されながら、あらかじめ用意されていた車に乗り込む。今は午前十時、試験が始まる一時までは後三時間ほど猶予があるが試験地までの交通機関はおそらく全て封鎖されているだろう。結局走って試験が始まる一時前に到着するか、ガイドの紹介によってしか試験地に到着できないのだ。

ふと車の窓から外を見ると道路を走って行く男がいた。

念で体を強化したその男が向かう先はやはりポルトデルン

なかなか愉しくなってきた

ポルトデルンはアイジエン大陸の中で三大都市のひとつに数えられている。飛行船が常に何処からでも見つけることが出来るほど交通が発達した街だが、今日に限って飛行船は飛んでいない。そういう大都市では貧富の差が激しいものだ

今日も車どおりの多い大通りの横で、体を洗ったのは何時だと同じくなるようなホームレスの爺さんが帽子を置いて物乞いをしていた。その帽子には小銭が少し端にある位でせいぜい缶ジュース一本

買えるほどしかない。

その帽子の中にガイドにあらかじめ渡されていた金貨を入れる。爺さんは濁った目にも光を取り戻し、意味ありげに目配せするとラミネート加工の手ケットを渡した。

それを受け取ると人々がゾロゾロと集う地下鉄の入り口へと足を運ぶ。

その手ケットを自動改札へ通さずに駅員へ見せ、つり革に捕まり、しばし車内の揺れに身を任せる。そうしていると、ふと車内で人目を惹く人物をみつけた。

三十代は超えているだろう男だ。短く刈り込んだ金髪と鋭い眼光の持ち主で、ダンディを絵に描いたような人物。その男を注目した理由は常に立っていられないほど揺れる車内で、つり革にも掴まらず立っている。その横にはピンク色の髪をポニーテールにした活発そうな女が不安そうにその男の服の裾を掴んでいた。

おそらく十七かそこらだろう。両者は纏をしていたので能力者であることが分かった。

この二人組みもおそらくハンター試験に向かうとすれば、今年の受験者は粒揃いだ。

既に今日は念が使える受験者を数人見た。

川を泳ぐシーラカンスの大群を見たようなそんな気持ちになる。それほどまでに念能力者は少数なのだ

もしかすると自分と同じ転生者なのだろうか？

だとするとヒソカに目を付けられたくない一心で、この時期にハンター試験を受けたということか……

それなら納得出来る。だとすると先ほどから感じる視線の数は全て

転生者の数ということか
いったいどれほど転生者がいるんだ？

十 十 十 十 十

「うん、おはようイスマス」

イスマスは軽く頷いて再び調理にとりかかった。朝のこの時間はイスマスが焼いたパンの匂いが食卓に溢れる。私はいつもこの時間が好きだった。

普段はすまし顔のイスマスも料理をしている時だけは表情も緩むのだ。

イスマスはこうやって私の世話をかいかいしく焼いてくれるが、私の実の父親では無い。そこらへんの事情を説明するにはまず私の出生から知る必要があるだろう

私、アニー・トレイルはこの世界の住人ではない。元々日本の普通の女子高生だった私はトラックに轢かれ、気づいたら母親の胎内から産まれていたのだ。

学生時代に携帯小説をよく読んでいた私は、これが俗に言う転生トラックってやつかとその時は暢気に思っていた。だがちょうど小学校に入る前、偶然見た地図にはアイジエン大陸やNGLの文字。

この世界にもHUNTER×HUNTERの漫画があつて、誰かがそれを真似て作ったのだらうと思つたが、それにしても精巧に出来すぎていた。嫌な予感がして母親に聞いてみたところ笑いながら、

「この世界の地図に決まっているでしょ」と聞かされた時は思わず何度も聞き返してしまった。それが真実だと分かった時の私の衝撃ときたおそらく生前にも味わったことがない程強いものだったように思う。

この世界ではあつという間に人が死ぬ。懸念すべきものときたら、幻影旅団やキメラアント、ゾルティック家、漫画ではバンバン幻影旅団に殺されていたマフィアだって一般人にしてみたら危険度はそう変わらない。ジョネスの暴れていたザバン市に住んでいた親戚には直ぐに引越しをするよう伝えた。

だがこの程度ではまだ足りない。第二の家族を守りたいし、私も死にたくない。

幸運なことにお父さんの兄にあたるイスマスおじさん　そう言ったら怒るから、便宜上イスマスと呼んでいる　は心源流の道場の師範だったので、お父さんに頼み込んでイスマスの弟子にしてもらった。

それからはイスマスに心源流を一から学んだけど、生前運動音痴だったのが影響しているのか、なかなか強くなれない。原作のゴンやキルアたちは本当に特別な才能を持っているんだなと実感するよ

それから心源流を学んで、最近イスマスがようやく念を教えるようになるようになった。イスマスには私がハンターになりたいと伝えているから、私の肉体の弱さを念で強化させようとしたのだろう。それほどもだに素の私は弱いのだ。

もう、つい先日道場に入った五歳下の子に負けるくらい……

勿論、肉体を鍛えることばかりではないよ！

私と同じように転生者がいないかデータベースを捲ったところ、出る

わかるわ。私と同じように原作を知ってない人には入れないようにパスワードも設置してあった。

例えば『この世界の作者の名前は？』なんてのもあった。

それを読んでいる内に転生者の数は予想以上にいるのが分かった。少なくとも千人以上はいると思う。その全てに共通していた事は前世で死んで、気づいたらこの世界に生まれていたということぐらいで、国籍も年齢も性別も共通していない。やはり中には原作知識のない人もいるようで、そういう人はアメリカの大統領だとかの名前を言えばその人宛にパスワードが送られるらしい。

そして電腦上で議論される内容はどうやったたらキメラアントに殺されないか？ というのが主だ。そしてベストアンサーはやはり『念を覚える』ということ

逃げるにしても闘うにしてもやはり人間の力だけでそれをしたとしても、キメラアントには通用しないだろう。転生者で念が使える者は必死でキメラアントの女王を探しているらしいが成果はないらしい。結局今の私達に出来ることはほとんどないということだ

そして中には『幻影旅団に会って、仲間に入れてもらおう』とか、『ゾルテイツク家の人と友達になる』とか言い出す連中もいたが、そういう連中は全員帰ってこなかったので暗黙の内に不干渉の態度をとることになった。

あんな人たちと関わろうとするなんて命しらすだよ……

クルタ族襲撃は今年中に行われるらしいけど、皆やつぱり幻影旅団に怯えて参加する人もごく少数らしい。誰だって死にたくないもんね

そして私も勿論そういう考えなので、ヒソカと会ってしまいう前にハンター証をとってみんなと安全に暮らすという案に行き着いた。

ただどみんな考えることは同じなんだね。いざハンター試験会場へ

行くと、何人が電腦上で見覚えのある顔がちらほら。

ちょうどハンター証をとるつもりだったと、イスマスが着いてきてくれたのが本当に嬉しい！ 転生者といえども皆親切だとは限らないし、いざという時は守ってくれる。

この電車はいつたどこまで進むのだろうと、考えていた時私はおそらく人生で二度目のショックを受けた。

つり革に掴まっているのはあの……幽遊白書の仙水 忍だった！？

目をゴシゴシと擦って再び確認したが、全身黒でオールバック、イケメン、額に黒い印、まず間違いなく仙水だろう。コスプレかな？ と思っただけあまりに似すぎているし、放つ空気が逸般人のそれだ。やはりというか、体を纏うオーラは滑らかで念能力者であることとは間違いない

急いで周囲の転生者にコンタクトをとる。何も知らないイスマスが『知り合いか？』と言っていたがそれに答える余裕はない。ゴメンね、後で説明するから

『何・で・仙・水・が・い・る・の！？』

遠くで同じように驚いている転生者の男の子に口パクで伝える。すると相手もそれに気づいて返してくれた。

『知・ら・ん・！』

続けて隣のお兄さんが、

『と・に・か・く・ノ・タッチ！』

3人組みのお姉さん達が、

『ダー・ク・エン・ジェル・様・~~~~~！！』

とりあえず辺りの人全員と同じようなことをした結果、やはり不干涉ということになった。

最後まで仙水さんと関わろうとする三人組を私達全員で必死に止めたせいか、転生者の人たちの間に妙な連帯感が生まれ、少し空気が和らいだ気がする

仙水さんがいつキレてカズヤになり、『このくそガキヤー！！』と気硬銃を撃たれる想像をしたら怖くなったので、イスマスを連れて別の車両に移動することにした。

イスマスはさつきから私の行動を不思議そうにしていたけど、何も言わず付いて来てくれる。こういうところがイスマスおじさんのいいところだね！

しかし、現実とは残酷なもので、そこでは人生で通算三回目の驚きが待っていた。

「む、むむむむむむ…」

「どうしたアニー、調子でも悪いのか？」

「……ムクロがいる」

こちらも見間違えはしない包帯姿の特徴的な女性が地下鉄の安っぽい席に座っている。違和感マックスなその現状を認めたくないっ！

魔界の三大巨頭の内の一人、もしその実力が本物なら幻影旅団だって敵わないだろう。

ハッ！？　もしかして他の三大巨頭の方々もいるかも？

その後車内を念入りに探したけど、そのお方たちはみつからなかった。

本当に……よかった。全盛期の雷神様なんか来たら、今年のハンター試験は中止になるだろう。

絶望的な存在が現れた代わりに、車内の転生者の人たちと仲良くなれたのは嬉しいけど……余裕でお釣りが来て大富豪になるレベルだよ。

なんで私、こんな時にハンター試験受けに来ちゃったのかな！？

何をしでかすか分からないヒソカのほうがマシと思えるのは、いろんなことがあって疲れてしまった幻覚のせいだね……

仙水さん試験地に入る（後書き）

ムクロの漢字が環境依存文字だったようでカタカナ表記にしました。
ちなみに仙水さんは魔界トーナメント編を知りません。

仙水さんとその他の思惑

電車が終点に着いたのはおよそ一時間前

一般客はそこで降りたのだが、受験者はそこで車掌に一人ずつチケットを確認され認可されたものだけがその電車に残り、再び地下の暗いトンネルを進み続けている。

地下鉄というのは地面と平行に続いているはずだが、この電車はどんどんと地下へと降りていつているようだ。

さすがに受験者の間にも不安そうな表情が現れ始めた頃、電車が地下に造られた駅へ到着した。タイルの汚れ具合からこの試験の為に用意されたものではなく、何らかの原因で利用しなくなった駅を利用しているようだ。

車掌に促されて電車から降りると、やけに体が丸い男にチケットと受験番号の書かれたプレートを交換してもらった。

受験番号は“103”

辺りの番号の中で一番大きな数字を探してみたところ“376”
多くもないけど、少なくともない。そんなところだろう

「てめーら、集まったか？　これからハンター試験を始める！！」

やたら筋肉質で熱そうな男が試験官なのだろう。大声を上げて馬鹿なフリをしているが、念能力者全員をさっと見ると受験番号を手元のボードに書いて仕切り始めた

「第一次試験は簡単だ。お前たちがさっきまで乗っていた電車に再び乗り込め」

「なっ！？ 電車はもう十分前ぐらいに行っちゃったぞ！ 間に合う訳がない！！」

前列にいる男の発言に、そっぴりだそっぴりだと辺りで声が上がる

「まあ、話を聞け。あの電車はこれから数十キロ置きに一時間の停車時間がある。その時に乗り込めばいいだけの話だ。ただし！ 乗員は二百名までで、早い者勝ちだ。」

乗車権獲得の方法はお前らで好きに決めればいい」

乗車権獲得の為に周りの受験生を狩りすぎると電車に間に合わなくなり、かといって電車に追いつくまでに周りを潰さないと団子状態になり、到着後戦闘が激化する。

そっぴりいう考えが辺りの連中には浮かんだらっぴり

しかし実際は、どうせ脱落する奴は脱落するので合格者は定員の二百名までいかないだらっぴりし、我先と辺りの受験生を襲って競争相手を減らそうとしなっぴりない限り、実力のある者は充分間に合う計算だ。試験官がわざわざ早いもの勝ちとっぴりったのは周囲の人間への猜疑心を生み出し、互いに潰させる為だらっぴり

だが難関と言われているハンター試験で、緊張して冷静な判断が出来なくなっぴりった受験生とっぴりりるのは結構いるもので、試験官の説明が済むと同時に会場には気迫の掛け声が響いた。

両隣の巨大な斧を担いでいた二人組みの男。おそらく双子なのだらっぴり

うその二人もそういう輩のようで、同時に頭をかち割ろうと振り下ろされたそれを人差し指と中指で挟んで受け止める。

少し手が痺れた。中々力が強いじゃないか……

「何っ!?!」

動揺する双子の頬を掴んで頭上へ持ち上げると、大きくなりすぎた子供のように思えて少しおかしい

恐怖で引きつった双子の顎の骨をそのままグシャツと潰し、そこらに投げ捨て先へ急ぐ。

そんなに急がなくても充分間に合うとは思うが、ここでの試験結果が次の試験に影響するとも分からない。どうせなら楽なほうがいいだろう

さすがに受験生もここで戦闘を繰り広げても電車に間に合わなければ意味が無いことに気づいたのか、互いに視線で牽制しながらレールの上を走りだす集団の頭上を助走をつけて飛び越える
トンネル内は薄暗く、時折光るコケが地面に生えていなければまともに進むことは困難だったろう。

それになにより暑い

この時期はこっちでは夏に当たるらしい

涼しいイメージのあるトンネル内だがここは空気の通り道が無いのだろう、唯でさえジメジメとした生ぬるい空気だというのに、受験生が多く集まることでその不快指数は倍になっているような気がする

そのまま暑さを我慢しながら進んでいると電車のレールが二手に別れているのを見つけた。

せいぜい五メートル前ほどしかはつきり見えないので、先頭集団がどちらに進んだのかさえ分からない

レールに耳を当て、振動が聞き取れないか試してみたところ右の方からかすかに振動が感じられた。しかし、人にしては振動が大きすぎる

魔獣？　あるいは動物か？

危険な生物が通るような道を電車が進むとは考えにくい
となると左だな

向きを変えて左に進んでいくとやはりというか、何者かに殺られた受験生が道にゴロゴロ転がっていた。ここで受験生同士の争いがあったということはこの道で正しいということだが、足や手がそこらに散らばっていて一体として楽に死ねた顔はないのが少し気になる。

そのままレールの上を走って二時間、ようやく前方にライトを灯した電車が見えてきた。

運よく停車しているようで乗り込むと既に数人の受験生、全員能力者でその中には見覚えのある人物もいた

「よう。待っていたぜ」

ムクロが気だるそうに裾の中で腕組みしながら挨拶したので、軽く手を上げてそれに答える

「しばらくぶりかな？」

「まあ座れよ。話はそれからだ」

お言葉に甘えてムクロの向かいの席に腰を落とす。席のスプリングは悲鳴にも似た軋みを上げ受け入れた。ムクロはそれを見届けると再び語りだす

「気づいているんだろう？」

「何のことを言っているかよく分からないな？」

おそらく飛行船から感じ始めた視線。転生者であろう者たちの視線のことを言っているのだろうかとりあえず惚けてみる。包帯の下でムクロが笑うのが分かったので、成功したとは到底言えないが

「念が使えるくせに動きが全くなっていない連中のことさ。あれじやあ銃器を持った人間のほうがよっぽど役に立つ。無理やり起こされた奴がなる典型的なパターンだとは思わないか？」

もし本当に転生者であつたら、例え前世で相当名の知れた喧嘩屋でさえ、この世界では周りのレベルが高すぎてただの一般人になってしまう。それほどまでに戦闘のレベルが違うのだ。

それに、ただでさえ前世にない念能力を見につけたせいで、己の力に過信した転生者は肉体を鍛えることを忘れる。

キメラアントは既に生まれ持つ肉体が強靱なせいで、並みの念能力者には勝てない存在となっているのだ。念能力は要だが、それが全てではない良い例である

「……途中に落ちてたのは君がやったのかい？」

「良い面してただろ？ 四肢を切り落とされて嘆く姿だけは一人前だったぜ」

どつりで途中に転生者と全く会わなかった訳だ。

同郷の存在とはいえ、彼らもこの世界が弱肉強食ということを知っているだろうから未練はないだろう。この世界では等しく……弱ければ死ぬ

ふと一人の少女を思い出した。

いつも笑っていた彼女。

死体を運んで、泥水に塗れた紙幣を握って、時には殺しもやって、それでも笑っていた彼女。今ではその時彼女がいつたいどんな思いでいたか確かめる方法は無いが、彼女はきっと幸せだったのだろう
そう信じたい

十 十 十

「アニー、避ける……！」

試験官の第一次試験開始の聲が会場に響いた途端、イスマスが叫んだ。私の体に染み付いた心源流がその声に反応して身を左に投げ出す。するとガキンという音と共に、今既に私がいた場所にはナイフが三本突き刺さっていた。

もしイスマスが声を上げてくれなかったらと思うとゾツとする

イスマスは未だ戸惑う私に絶をさせると、襲撃者を探しに人ごみの中を素早く移動し始めた。

結局、いつもイスマスに世話になってばかりだ。

せいぜい今の私に出来ることはなるべく身を屈めて、狙われないようにするだけ……

仙水さんやムクロ様といったイレギュラーな存在もいるし、やっぱりまだ私にはハンター試験はまだ早かったのかな？

しばらくそこで待っていると右腕を血で塗らしたイスマスが帰ってきた。その右腕の犠牲になった人のことを思うのは私の下らないエゴだし、何より私のためにそれをしたイスマスに対して失礼なので直ぐに手を繋ぎ、逃げるように電車の向かった先へ急ぐ

イスマスは一瞬心配そうな顔をしたが、私の表情を見て

「心配させるなよ。私は兄さんにお前を頼むと言われてるんだからな」

とだけ言っただけ私の手を握る力を強めた。私が悩んでいる時に一言一句変えたことのない常套句だ。本当に過保護だよ……

イスマスは私がいずれ結婚した時は父さんよりきつと泣くだろう

想像したらちよつとおかしくて、少し元気が出たように思う。もしやそれすらも考えて……いくらイスマスでもそれはないよね？

私達を飲み込もうとしているかのような暗いトンネルの中には、闘うことを止めて、ただゴールを目指す為にひたすら走る人たちの姿があった。いつ襲われるとも限らないので、イスマスは私をカバーするように走り続けていてくれるが、その本人はちよつとしたジヨギングぐらいにしか汗をかいていない。

守られてる私の方は、ムツとした暑さで肌と服がベッタリくっついていてというのに……

異常。異常の一言だ

地面に生えている光るコケのおかげで、トンネル内は頑張れば辺りの様子が見えるくらいの暗さを保ってはいるけど距離感も掴みづら
いし、今どのくらい進んでいるかもよく分からない。そんな精神的に追い詰められる状況の中、余裕で走っているイスマスは何なのだろうか？

我が叔父が魔獣であるとは信じたくないけど、今なら頷けるよ

まだ慣れない纏が疲れで解けはじめた頃、イスマスが急に私の前に手を突き出して制止させた。事情を聞こうとした時に私もその異常に気づいてしまった

匂い。血の匂い

イスマスがここで待つてるとジェスチャーをしたので軽く頷く
修行で動物を殺すこともしたけど、その時でさえここまでキツイ匂
いはしなかった。おそらくこの先には大量の死体があるのだろう
道はこの先一本道だし、きっとその死体を見る事にもなることは明
らかだ

……まだ私は人の死体を見たことはなかった

この世界で生きるためには私もいずれ人を殺めることがあるのかも
しれない。だから今の内に慣れていたほうが自分のためにもなる。
遅いか速いかだ

そう自分に言い聞かせ、私はイスマスが帰ってくるのをただ待った。

急に口を誰かの手によって塞がれ、体が後ろに傾いた。叫ぼうにも
その分厚い手を口の中に突っ込まれて声を出すことが出来ない

イスマスがすぐ帰ってくると思ってたし、絶をしていなかったのが
不味かった

謎の襲撃者が私の顔を振り向かせるとその男は間近で私を品定めで
もするかのようじろじろ眺めだす。

ボサボサの黒髪に横長の顔。目は気でも狂ったかのようにグルグル
回っていて、焦点もまとも合っていない様子だ

そして次に何をされるか分からない恐ろしさが目の前の男にはあった

「キヒヒ、可愛い子だな。僕のペットにならない？」

粘着質な舌で顔をそつとなぞられる。あまりのおぞましさにより全身か
ら鳥肌が立つのが分かった。

お願いだから、早く来てイスマス！！

「そそのよ。その表情　絞め殺してからたつぷり愛してあげるからね」

ガツと片腕で首を絞められる。目の前の男は念能力者じゃないようだけど、ただでさえ纏も切れ掛かっていたのでもう余り持ちそうにない

肺が、体全体が空気を求めているけど今はもう意識さえ怪しくなっている

白目をむいて、口からよだれを垂らし始めていたけど途端に首への圧迫が無くなった

ヒュー、ヒューと体内へ空気を送り込んで、イスマスが背中を擦ってくれて、気分は正直最悪だけどとりあえず落ち着いた。

「大丈夫……な訳はないだろうな。もう今年のハンター試験は諦めるか？」

イスマスは別に意地悪で言っているんじゃないやなくて本当に心配だから言っているのだろう。
でも……

「ううん。私やるよ」

ここで諦めてはいけないのだ。家族やイスマス、そして何より私自身のために……

「そうか」と苦笑いを浮かべるイスマスは続けて、

「だったらこの先にある死体から目を背けるな。アニーにこういう経験はさせたくなかったが、ハンターになるには覚悟しなければならぬ道のりだ」

死体を見ることは覚悟していたけど、イスマスの口ぶりからはどうやら伝えたいことはそれだけではないと言っているようだ。

唾を飲み込んでトンネルの先を進むとやはり人型が幾つか転がっている。あまりよく見えないが手や足のない死体が多いのは分かった。

イスマスに「もっと近寄って見る」と促され、その死んだ人の顔を恐る恐る見て私は驚愕した。

誰かを呪うような顔、泣き喚いてクシャクシャになった顔、死んだことに気づかずまったくの無表情の顔、驚きの顔。

私はその全ての顔に見覚えがあった。

電車の中で大分親しくなれた転生者の人たちだった。さっきまで一緒に笑ったり、悩んだりした人が無残な姿になっている。

その強烈な違和感に吐き気が催し、私は吐いた。そして泣いた

吐しゃ物の酸っぱい匂いの中に呆然と立ち尽くしながらイスマスの伝えたかったことに気付く。

身近な存在の死。転生者の皆とは今日が初対面だったけど、イスマスは電車での私たちの意気投合から古い友人だと思ったのだろう。実際、故郷を同じくするだけで私達は気が合っていた。この世界に訳も分からず生まれて、ようやく本当のことを、本当の自分で話せる相手に恵まれたのだ。

古い友人といっても間違いない

……私は甘く見ていた
いくらこの世界では人の命が軽いと分かっても、それはあく
までマンガという目の粗いフィルターによって描写されたもので、
現実味が足りなかった

だけど現実には私の目の前で生々しい形をもって私の前へ立ち塞がる
しばらく呆然としていた私の手を引いてイスマスがトンネルの奥へ
と進んで行くのを、まるで他人事のように見る自分がいた。

なんでこんなつらい目に会わなければならぬのだろうか？
そんなことを考えても無駄だということは分かっている。でもそう
でもしなければ自分という弱い存在を守りぬけなくて、また泣いて
しまいそうで

そしてそんな自分が何より嫌いだった

十 十 十 十

電車が数回の停車を繰り返して、その度に電車に入ってくるのは僅
か数人ほど
その多くが大なり小なり怪我をしている。

電車に乗りこんで二回目の停車であの男女二人組みが入ってきた。女の子のほうは何か酷いものでもみたかのように、憔悴しきった様子で席に倒れこむのを見ると、連れの男に睨みつけられてしまった。どうやらあまり機嫌がよろしくないらしい

試験官が第一次試験の終わりを告げた時、車内の席は最初の半分も埋まってなかった

確か最初の受験者数が376人だったからその半分、188人以下しか残っていないことだ。最も、競争率の高いハンター試験にも関わらず、定員ギリギリの数が残っているのだから“しか”では無く、“も”の方が正しいのかもしれないが……

そして更にその半数が念能力者
ムクロによって大分数が減らされていたが、やはり念能力者である
ということは強みだ

一般人に少々殺気を込めたオーラをぶつけるだけでその大半が死ぬのだから、かなり効率のいい殺し方である。最も念能力者が一番警戒すべきはマフィアでもその他の武装勢力でもなく、同じ念能力者なのだ

そして今も目の前の俺目がけて殺気の籠った視線を向けてくるのは、やはり念能力者のムクロだった。どうやら気にいられたらしいが、その方向性は大きく間違っている

気にいられると殺気を向けられるというのは、その間にいったいどんな飛躍的な論理展開があったのだろうか？ ムクロの高尚なる考えは俺程度の頭脳では到底理解できそうに無い

電車が再び止まり、降りるように言われる。

「どうやら今度こそは終点らしく、レールもこの先は続いていないみたいだ」

ただ地面にポツカリと空いた巨大な穴がレールの途切れた先に不自然に空いている。

深さもよく分からないほどだが、縁の削られ方からおそらく人間の手によって掘られた穴だということは分かった。

「はいはい、とつとと集まりなさい。これから第二次試験の説明をするわよ〜！」

試験官の声を受験生の壁のむこうから聞こえる。少し出遅れたか……それにしても何処かで聞き覚えのある声だな

内心ではその人物が誰かということとはほとんど予想出来ていたが、認めたくなかった。

もし予想が当たっているならば、きっとこの試験ではかなりの受験生が落ちるだろう

試験官の性格はかなり歪んでいるから

「第二次試験はずばり“チームで乗り越えろ！ 宝石争奪バトル”だわさ〜！」

幻影旅団マチ

「紹介しよう。新しく入団したヨナだ。ちなみに彼女には空いていた8番を埋めてもらった」

団長がそう言ってホームに連れて来た新人りは見るからに普通の女の子で、体を鍛えた様子もないばかりか、倒れれば軽く骨でも折れてしまうかのような弱い美少女。

春の新芽を思わすような緑髪と揃いの瞳は、旅団のいかつい面々（主にウボオーギンやフランクリン、フェイタンとフィックスのヤクザコンビ。こうしてみると旅団には碌な人物がいない）に怯えて今にも泣き出しそうだ。

正直、最初に団長が連れて来た時は何処ぞの令嬢でも攫ってきたか、それとも団長の子供か？ と考えたがどうやらそうではないらしい

「あの……よろしく願います」

頬を真っ赤に染めてモジモジと喋るその様子に子供嫌いの私でもさすがに惹かれる所があるので、子供好き（決してそっちの意味じゃない……と信じた）のノブナガは勿論微笑ましそうに眺め、あのフェイタンも「フンツ、興味ないね」と去って行ったが満更でもない様子だった

この子に戦闘力は無い様子だから、あたしのように連絡係か、何か特別な能力者なのだろう

「ヨナは念獣を使って他人のトラウマを脳内にたたきつける能力をもっている。その点を踏まえて、ノブナガやウボオーの補助を任せようと思う」

「ちよつと待つて団長、補助とは言えウボォー達の闘う場所は最前線だよ！ さすがにその子が行つても早死にするんじゃない？」

シャルナークが珍しく至つて真面目な事を言っているけど事実だ
体も弱そうだし、念能力も生きるか死ぬかという戦場の中では精神作用系の能力より、確実に仕留める打撃系の能力のほうが効率もいいし确实

そこらの能力者集団を手玉に取れるほどの実力がある幻影旅団に団長が何故こんな子を入れたのか、今でも不思議に思う

補助より癒し系という新ジャンルに入れたほうがいいというのがノブナガとの会話で出た結論だ

団長は何か思い出したかのように頭に手を当てた後

「その点においては心配ない。ヨナの能力は入団試験で一度俺も受けてみたが……もう二度と味わいたくないな。それに戦闘においてもヨナは優秀だぞ」

団長はノブナガに試してみると促すと、ノブナガは心底たるそうに立ち上がつて構える

誰だつてあんな子相手に戦いたくないのは分かるが、団長が二度と味わいたくない能力というのが妙に気にかかる

ヨナはワンピースの裾からスルツと小振りなナイフ、念が籠っているのでベンスナイフかな？

そして構えという構えもとらず、逆手にベンスナイフを握る様子は包丁を握りなれてない子供のように、見てるこちらを冷や冷やさせる

「団長。俺は手加減出来ないぜ」

「構わん。むしろそれぐらいしないとお前も納得出来ないだろ？」

「さあ来て下さい」

ヨナがそう言い切る前にノブナガの居合いによる一閃。

首を狙った一撃でいくら子供好きのノブナガでも遠慮は一切無い無残にも少女の首は胴体と別れを告げると思いきや、高い金属音とともにノブナガの刀は見当違いの方向へ真横に振るわれていた。

確かにあたしはまばたきせず凝で見ていたけど念を使った様子はなかった。

続けてノブナガが刀を素早く振るうがその全てが少女に当たらない。厳密に言くと、ノブナガの刀は直前まで急所を斬り裂こうとしているのだが、その寸前で予定調和のごとく別の方向へ弾かれるのだ。ベズナイフで目にも止まらない速度で弾いているのだと気づいた時はさすがに驚いた

あの細腕で目にも止まらないスピードでナイフを操っているところはなるほど、確かに団長が勧める実力はあるらしい

「嬢ちゃんやるな」

「そ、そうですか？ でもそんな変な髪形の人に言われても……」

赤面しながら毒を吐くヨナ。あたしも聞きはしなかったけどずっと思っていたことだから納得は出来るよ

「これはな〜！！ ちゃん鬚つってジャポンの誇りある“武士”の

象徴なんだぞ！」

「す、すみません。変人さんだけじゃなくて、妄想癖もある厨二病患者さんとは思わなくて……つい」

その発言にムキキーツとキレだすノブナガ。団員同士のマジギレ禁止だっというのに……

「もう許さねえ！」

「えー!? え? 何で怒っているんですか? あなた危ない人ですか?」

「もうっ　許さねえ!!」

円をつかってノブナガも本気のような。それと対峙していたヨナの影からオーラの塊が膨れだす

そのオーラはバレーボール程の大きさになり、そして形が定まった

それは一言で言うなら……異物だ

粘液に包まれたテントウムシの姿をしていて、足はテントウムシのそれではなくタランチュラのように毛の生えた蜘蛛のそれだった。

美少女とのおぞましい生物とのコントラストはおぞましかったがやはり本人の念能力だからなのだろう、矛盾してはいるものの、不思議と調和が取れた美しさがある

ノブナガは自らの方へ向かうそのテントウムシを周で強化させた刀で真っ二つにするが、テントウムシは空中で再びくっつきノブナガの体にぶつかるスウツと体内へ消えていった。

「何だこりゃ!？」

仙水、止める! 笑顔で手に持つてるそんな物騒なもんは何だ!?

来るなっ!

「アアッーーーーー!」

あのノブナガが酷くうなされている。……きっと仙水との愉しい思い出が蘇ったのだろう

まあ、地面を虫けらのようにのたうち回るノブナガはいいとして、とりあえずヨナは実力も頭のキレ具合も幻影旅団に相応しいということがこれで分かった。

なかなかおもしろそうな子だし、今度女メンバーで話すのもいいかもしれない

「ヨナって言ったね。あたしはマチ、仕事じゃあまり鉢会わないと思うけどよろしくね」

「は、はい。どうぞよろしくお願いします」

「僕はシャルナークって言うんだ。ようこそ幻影旅団へ!」

「ごめんなさい。そういう黒そうな性格の人に言われても……あまり嬉しくありません」

黒いのはどっちだよ、という質問はどうやら受け付けられないらしく啞然とするシャルナークの前で、ただニコニコと笑うヨナ

どちらにしるまたユニークなメンバーが旅団に加わった。仙水はハ

ンター試験に今行っているから帰ってきたらヨナを紹介しよう。
意外と気が合うかもしれないね……

仙水さんとその他の思惑（後書き）

幻影旅団の八番が埋まりました

たしかシズクの前任者でシルバに暗殺されたという設定でしたが、書いてみると死ぬには惜しい人材ですww
これからも出すかも？

仙水さんは思う

「第二次試験はずばり“チームで乗り越えろ！ 宝石争奪バトル”
だわさ！！」

闘技場で負った傷が治りかけた頃、「急に用事ができたわさ」と言
って出て行ったのは試験官になるためだったのか……
確かにそのようなことは以前言っていた記憶もするが、まさか本当
に試験官になっているとは……正体とは打って変わってその仮初の
見た目どおりの性格をしている

「まあ、いきなり何のことかは分からないと思うから、とりあえず
マーマン、例の紙を受験生に配って」

「相変わらずですねえ。ビスケさんは……」

豆顔の男は苦笑を浮かべながら受験生に箱に入った紙を一枚ずつ取
るように促す。

受け取ったその手の平に収まるぐらいの紙には『17』と大きく書
かれていた。

「その紙に書かれた番号が自分の所属するチームナンバーでもあり、
あんたたちの探す宝石、というよりその原石の番号でもあるわけよ。
今からサンプルを見せるから番号を呼ばれた順に来ること！！」

試験の詳しい内容も、合格基準もまったく説明ないままにまくし立

てるのはさすがに問題があるんじゃないのか？ 周囲でも同様のざわめきが広がっていたが、ビスケの勢いと試験官という身分から聞くにも聞かれない雰囲気があるそこにはあった。

ビスケの話だけでは、この試験がチーム戦ということと宝石を奪うということだけしか結局分からないままだが、受験者全員にサンプルを見せた後に詳しい説明があるのだと信じて待つとしよう。幸いにもここは第一次試験とは違って少し涼しいので待つのは苦にならない

三十分かそこらが経ち、ようやく17番が呼ばれた。

巨大な穴の横に設置された大きなキャンブテントの中に、髪をポニテールにしてたくさんの宝石のサンプルに囲まれていることが幸せなのか、終始笑顔を絶やさないビスケと数人の人影があった。おそらく同じチームであろうその人影の中にはピンク髪の少女と付き添いの男、それに……ムクロという見覚えのあるメンバーとまるで饅頭のような鼻を持つ中年男という、いまいち統一感に欠けた感があるグループだ

「んじゃ、とりあえず配った紙の確認とそれぞれの名前を確認するわよ」

「受験番号67番、ムクロ」

ビスケの呼びかけにムクロは軽く首を縦に振り、持っていた紙を設置されている机の上に置く。ビスケはそれを軽く見て満足そうに頷くと次の確認に入りだした。
その後も同様に行われ、

「受験番号103番、仙水 忍!!!!!!」

何故か自分だけが、テントの外に聞こえるほどの大きな声で名を読み上げられる

なるべく苛立ちを表情に出さないようにして、配られた紙を返したが上手く隠せているかどうか不安だ

「最後に受験番号35番、トンパね」

やたら気の抜けた声でそう読み上げると、饅頭鼻はピクピク青筋を浮かべながら紙を乱暴に机の上に叩き付けた。気持ちは分からなくないが、ビスケ相手にそういう態度をとることはあまりお勧めしない

「何あんた？ 文句があるなら落とすわよ」

「試験官にその権利は無いはずだぜ！」

おそらくハンター試験の常連なのだろう。訳知り顔でビスケに詰め寄るが、当の本人は年の功でビクともしない

「こっちはいくらでも理由つけて落とすことは可能だし、それにあんたは協会のほうでも大分目を付けられているんだわさ“新人つぶし”のトンパさん」

さすがに旗色が悪いと考えたのか、押し黙るトンパ。

何処かで見ただ覚えのある顔だと思ったら、あの新人つぶしのトンパだったとは……

あの二人組みはどうか知らないが、俺とムクロは新人なので潰される恐れは充分ある上に、この試験はチーム戦。和を乱すようなこと

は止めて欲しい
いや、むしろムクロが協力してくれるかどうかの方が心配だな

「あなたたちは17番だから……これね。よりにもよってサンヴァ
ニツクか、ついてないわね」

ビスケが見せたサンプルは小指の爪の先ほどの大きさだったが、い
つたい何処からそんな光量がでるのかというほど輝くものだった。

「このサンヴァニツクはね。見る者を惹くあまり、数年前から市場
での取引が禁止されたほどの宝石よ。一説によると動物を引き寄せ
るフェロモンと似た芳香物質が常に発散されているのと、この光と
の相乗効果で中毒者を続出させたらしいわよ」

確かに綺麗でずっと見つめていたくなつたので目を閉じて誘惑を振
り払うが、それでもまだ瞼の内側に残滓が残っているような気がした

これはこの宝石を運ぶのも、採掘するのも苦勞しそうだ

「全員サンプルは見たわね。……さてあたしの後ろにある大穴がさ
つきから気になってる奴が結構いるんじゃない？ この洞窟は鉋
石を掘り出す為に昔掘られた奴だから、他にも似たような穴がゴロ
ゴロあってね。これから別々の穴に入って始めてもらうのは、さっ
き見せたサンプルの原石をグループで採ってくるいわば宝探しみた

いなもんね。

勿論、中には入手難度がBを超えるレアメタルを指定されたグループもあるから、適当に他の奴を奪ってもいいけど、その場合二組のグループから奪うこと」

「ちょっと待ってくれ！ 原石はいつたいどのくらいの量を採ればいいんだ？ それに洞窟の何処に原石があるのか知らないぞ！」

騒ぎ出した受験者にビスケはフウツとため息をつくど、

「原石の量はそれと分かる程度なら大きさは問わないわさ。大きければそれなりに次の試験で優遇するけどね。それと後者は、それを探し当てる観察力と、探求力をこっちは判断したいんだっての！！………と言いたいところだけど、さすがにひよっこのあんたらじゃ少し難しいわね。」

ヒントは奥に行けば行くほど発見率は上がるってこと！

それに採掘場所に行ったらそうと分かるだろうから、採掘は武器でも何でも使って好きにしなさい。くれぐれも原石を傷つけない様だね！」

宝石マニアのビスケのことだ。例え合格基準に満たされていないとはいえ、不注意で碎けて割れてしまった原石を渡すと不合格にされかねない

採掘の経験はないが、とりわけ慎重に行う必要があるだろう

こんなことになるのなら、以前シャルナークに誘われたオビ遺跡の発掘作業に付き合っつて、そういうスキルを上げておくべきだったのかも知れない

一見、意味のないようなことでも何かしらの利益があるんだと、今回の反省を生かして次誘われた時は乗るとしよう。しかし分け前が7:3は酷すぎる……

「そして最後に、グループは必ず五人組で帰ってくることに、以上！」

……性格悪いよ、ビスケ

十 十 十 十

人はよく“未知の恐怖”と言うが、それは間違いだ

“未知”こそが“恐怖”なのだ

例えば、君は今自分の部屋にいらっしゃいます。そこは完全に自分の空間であり、そこに他人の匂いが付く様な物はなく、既知感しか存在しない

ところが夜、明かりを消して闇が訪れると様子は変わる

見慣れた物は当然見当たらず、人によつては闇の中に別の生物の存在を予期させるかもしれない

だいたい物の位置は分かるものの、それは脳内で作られた偽りの情報をなぞつて行動しているに過ぎないのだ

そして人は恐怖する

常識的に考えれば、昼と夜は暗くなる以外何も変わらず、そこにある物は全く何の変化も起こらない。そのはずなのだが暗闇という“未知”はいとも簡単に人を恐怖に陥れる。

“幽霊”や“死”を恐れる理由もこれに由来していると思われる

随分哲学的なことを考えてしまったが、そうせずにはいられない理由があつた

第二次試験が始まり、俺達は宛がわれた豎穴の縁になんとか足場を見出して下へ降りていくまではよかつた。

しかし、そこに広がるのは闇

洞窟の途中にあつたヒカリゴケのような都合のいいものはどうやらここにはないらしい

仕方なく、ムクロを先頭に自分、二人組みの男女、トンパといった順番に洞窟の横壁に触れながら先へ先へと進む。

オーラで辺りを照らせないかと考えたが、纏をした体の輪郭だけが浮かんで、辺りは全く明るくならなかつた。確かに、オーラが辺りを照らすのなら一般人にもオーラを見ることが出来るということになつてしまうのでこの結果は正しいと言えば正しいのだろうが、つくづくオーラがいったいどんな原理で光っているように見えるのだろうか不思議に思う

とにかく足下も見えず、その上ゴツゴツと起伏にも富んでいるようなので歩きにくいのが難点だ。

こんな時は円を使えば便利なのだろうが、呪念錠で纏ぐらいしか出来ない今の自分では到底無理なので、前に行くムクロに円で案内してもらっている

やはり、円は神経を使うのでムクロもおしゃべりを止めた

そうになると、暗闇はただ黙々と進める足音しかなくなる。無言の空間をつらいと考えたことはないが、目から得る情報が無くなると人は何かを考えることで自分という存在を認識しようとするのだろう。

先ほどのように取り留めの無い哲学的なことを考えてしまうのは仕方無いことだ

だがついに静寂に耐え切れなくなった少女が、連れの男に声をかけた。

「ねえイスマス、何処まで続くのかなこの道は？」

「試験官の口ぶりだと十キロはくだらないだろうな」

「甘いね」

二人の会話を遮ったのはトンパ。少女が闇の中でどんな表情をしているかは確かめる術がないが、おそらく突然の乱入者をあまり好ましく思わなかっただろう

「俺は十歳から25回もテストを受けてきたんだ。その経験から言わせてもらうと今回の試験は最悪だね。試験官が酷すぎる。君らは新人だろ、今回は諦めて次回受けたほうがいいぜ」

トンパにしてはしごく真つ当な意見だ。

「そ、そんなのあなたに関係ないじゃありませんか！ 私は早くハンター試験に受かって……」

「早くハンター試験に受かって、何だい？」

「……………」

「言っちゃ悪いが嬢ちゃんは今年の新人の中じゃドベだ。この先もお守りの世話になってハンターになっても損するだけ。ハンターは一番危険な仕事だからそれに相応しいだけの実力を備えてなくちゃッ!？」

背後で殺気が膨れ上がる。連れの男、イスマスとやらがトンパの首元にナイフでも突きつけたのだろう。よっぽど少女を大事に思っている行動だろうが、そこまですることはない
トンパが言ったのは全て事実なのだから……

十 十 十

俺はトンパ

ハンター試験の常連中の常連だ。毎年、期待に胸を寄せてハンター

試験に来る新人の絶望した顔が見たいが故に今年で25回も試験を受けている。

趣味が悪いつて？

人を殺しまくるマフィアや戦争家に比べたら高尚な趣味に違いねえだろ？

何はともかく、今年も新人をつぶそうと会場へ向かう電車の中で新人を探したんだが驚いた。時間の都合で半分の車両しか見れなかったが、その半分以上が新人！

俺以外のベテランもこれには驚いたらしく直ぐに俺へ新人つぶしを依頼した。別に金なんか貰わなくてもやる予定だったから関係ないけどな

ベテランも俺以外の新人つぶしをくぐり抜けてここまで来たもんだから、新人つぶしの恐ろしさとその有用性を知っている。将来邪魔になる存在の芽を切り落とすのはある意味当然だしな

さっそく車内の新人に俺特性、無味、無臭の下剤入りジュースを勧めてみるが、これが全く通用しない！ おかしい、いつもは絶対何人かが試験の緊張から騙されて飲んじまうんだが、まるで予想してましたよといわんばかりに断られた。

ベテランの奴らは新人が邪魔だから、俺のことをばらす訳がないのでこれは今年の新人が総じて優秀だったことだな
へへッ、そうじゃないと潰しがいがねえな！！

結局騙されて飲んだのは二人。一人は毒だと知ってて飲み、

「オレなら平気だよ。訓練してるから。毒じゃ死なない」

と言いきったそいつに若干焦ったが、その後直ぐに車内で盛大に下痢を起こしやがった。口先だけの野郎に焦るとはオレもまだまだだ

もう一人は本当にあっけなく騙されたので最高におもしろかったが、まだまだ楽しんでやらねえ

なにせおそらくハンター試験始まって以来の新人豊作の年だ。ここを逃しちや“新人つぶし”の名も廃れるってもんだ

そして第一次試験が始まった。

まあ、体力やある程度の実力が試される第一次試験だったので試験に関しては問題ない

友人から動けるデブと評されてるオレにとっちゃ楽なもんで、試験の始まりと同時に偶然を装って新人の背にぶつかり、ベテランの群れに誘導させた後は今年の新人の出来を観察することにする。

オレがここまでやってこれたのは人を見極める目、観察眼があつたおかげだ。そしてそれは数十年の研鑽を得て今や第六感とでもいうべき実力にまで達した。

下手な勘よりよっぽど信用があるそいつで新人を観察する。

大抵の奴の実力は毎年の新人のそれと変わらないが、中にはとびつきりいい動きをする奴もいる。ひ弱そうに見えた少年も体に炎！？を纏ってあたりを威嚇していた。

きつと奴はサーカス出身で、着ている服が燃えてないのは耐火性の素材を使っているからだろう。やたらコストパフォーマンスが高そうな威嚇だが、動物は本能的に火を恐れるので的外れというわけでもない。ベテラン並みに癖のありそうな奴ばかりだ

その中でオレが目をつけたのは争いの中何を思っただか地面に屈みこんで、隠れようとしている少女だった。いや、実際それは上手くいつていた。

ふと視線が外れたらその少女がそこにいるんだと捉えるのが難しくなるぐらい少女には気配がなく、少女の目の前を通り過ぎた凶暴そうな男も気づく様子は全くない

気配を殺す技にかけちゃあの子は一人前、いやそれ以上だ

しばらくその子を観察していると連れと思わしき男がその子を連れてトンネルの奥に進む。

おっとオレもこんなことしている暇はねえな

走りながらその子を観察する。どうやらちよつとばかりし武術を齧ってはいるが、一般人に毛の生えた程度でハンターになれるとは到底思えない

第二次試験会場に無事着いた時は試験官が言う、その内容を信じられなかった。

チーム制

一次試験で他人を置いて我先と急がした後のチーム制。中にはガラの悪い奴もいるだろうし、まとまりが取れなくてはチームの崩壊は直ぐそこだ。

そして最後に言い残した「必ず五人で帰って来い」という言葉。

これは最初のチームメンバーを全員入れ替えたとしても、最終的に五人で原石を持って帰ってくれば合格にするというチームの裏切り

を暗示した言葉

ただでさえ一次試験で疑心暗鬼の種をばら撒いた上に裏切りを勧めるようなルール、そして他のグループの宝石を奪っていいという三段構えの暗示

たかが二次試験でそこまで受験者を追い込もうとするとは、やらしい試験官じゃねえか……

そして極めつけはサンプルを見せるためにテントに呼び出されて確認出来たチームがなんと、あの少女と男の連れ！ 連れの方は難しそうだが、あの少女は追い詰めればなんとか試験中につぶせそうだ

そして後のメンバーは何やらやばそうな気配のする包帯男と、一人の良さそうな黒服の青年。

どっちも見なかったことのない面だったので新人だつてことは分かったが、俺の第六感がこいつらに関わるなと告げている。しかし、これはチーム制。なるべく関わらないように、それでいて敵意を向けられないようにしなくては……

「んじゃ、とりあえず配った紙の確認とそれぞれの名前を確認するわよ」

「受験番号67番、ムクロ」

あの包帯男の名前はムクロか。危険人物ランクAだな

「受験番号103番、仙水 忍！！！！」

この仙水というやつだけ試験官にテントの外に聞こえるほどの声で呼ばれたのは何故だ？

ひよっとしてこいつら知り合いか？

新人の癖に試験官と繋がりを持っているとやるじゃねえか

そんな将来有望のこいつの潰れる姿を見たいが、どうもヴィジヨンが浮かばねえ

「最後に受験番号35番、トンパね」

さすがにその態度は無いだろっ！！ イラついて紙を乱暴に机の上に叩き付けた。

「何あんた？ 文句があるなら落とすわよ」

なんだこの試験官、オレと張り合っつてのか？

「試験官にその権利は無いですだぜ！」

実際は試験官の意志次第で落とすことは可能だが、どう見てもこの少女は十代前半にしか見えないのでハツタリを自信ありげに言えば、ばれることはないだろう

「こっちはいくらでも理由つけて落とすことは可能だし、それにあなたは協会のほうでも大分目を付けられているんだわさ“新人つぶし”のトンパさん」

チツ、先輩の試験官にでも聞きやがったのか？

それに新人つぶしだとばれちゃ、仕事がやりにくくなる。クソッ、

オレは執念深いんだ！
覚えとけよっ！！

苛立ちが収まらないまま始まった第二次試験。
洞窟の中は真つ暗だ。

普段なら俺の軽快なトークで盛り上げるところだが、既にチームの奴らには俺が新人つぶしだということがばれてるので不自然な話題提供は怪しまれ、碌に話は出来ない

それにさっきから何だか変な感覚が体を覆っているんだよな

誰かの体内の中にいるような、ぬべつとしたゼリーののようなものに包まれている感覚

気持ち悪い。ハンター試験の為にベストコンディションを整えてきたので体の不調という線は薄い、この暗闇に付け加えて、洞窟という閉塞感からそう感じるかもしれないなと自分を納得させ前に行くチームに続く。

それにしても、一番目のムクロって奴はこのほぼ視界ゼロの状況でさっさと進めるな

俺みたいなベテランでも苦労するつてのに、まるで真昼間外を出歩くようにスタスタと進みやがる

「ねえイスマス、何処まで続くのかなこの道は？」

前のほうからあの少女の声が洞窟内に響く。反射音からしてあまり横幅は広くないみたいだな

「試験官の口ぶりだと十キロはくだらないだろうな」

「甘いね」

突然の俺の声に遮られ、前の二人組みが露骨に嫌な表情をしたのが空気で分かった。だけど俺はこの程度で怯むような奴じゃないんだ。しつこさも俺の武器だからよ

「俺は十歳から25回もテストを受けてきたんだ。その経験から言わせてもらうと今回の試験は最悪だね。試験官が酷すぎる。君らは新人だろ、今回は諦めて次回受けたほうがいいぜ」

嘘偽りない俺の考えだ。今回の二次試験は今まで俺が受けてきた中で一番キツイ

正直俺も三次試験までは受かりたいので、合格するだけで精一杯の試験の中新人落とす余裕は余り無い。出来れば来年受けに来たこの少女を落とすほうが俺にとってもやり易いのだ。

「そ、そんなのあなたに関係ないじゃありませんか！ 私は早くハンター試験に受かって……」

「早くハンター試験に受かって、何だい？」

「……………」

「言っちゃ悪いが嬢ちゃんは今年の新人の中じゃドベだ。この先もお守りの世話になってハンターになっても損するだけ。ハンターは一番危険な仕事だからそれに相応しいだけの実力を備えてなくちゃ
ッ!？」

俺の親切な忠告は突然の乱入者に邪魔された。おそらく嬢ちゃんの

保護者であろう男にナイフのようなものを首に突きつけられたのだ
暗闇でよくは見えないが、荒い息と纏う空気から目の前の男が相当
キレているのが分かる

気がつけば俺の足がガクガクとみっともなく震えていた。

命の危機を感じたことはこれまでに何度もあるこの俺が、ただ目の
前の男になす術もなく恐怖することしか出来ないなんて……

何もんだこいつ？

仙水さんは思う（後書き）

トンパの口調に疑問を抱くのはきっと原作よりまだトンパが若いせいです！！

何かもうちょっと頭腦的なハンター試験を考えたかったな……
いい案があればぜひ！！

仙水さん呆れる

闇の中、ほとんど手探りでただ前に進むこと4時間。

視界ゼロの中で闘ったことは数あるが、ここまで長い時間暗闇の中にいたことはない

足の裏で岩のゴツゴツとした感触を感じ取る以外に外的接触もないというのは想像以上につらく、後ろを歩く少女が疲弊の色を表し始めたので、ひとまずなるべく平らな地面で休憩をとることにした。ちようどこの辺りは湿気が強いせいか、まばらにヒカリゴケが生えているようで周りの様子がボンヤリ見える。やはり明かりがあるといいものだ

「いやあ、疲れたぜ〜」

そのトンパの声に重なるように少女はため息をついた。不満の類は聞かなかつたがやはり疲れているのだらう、連れの男、イスマスにもたれかかるようにして休憩する。

ふと背後からムクロの声を聞いて振り返ると、いつものようにニヤニヤと包帯の下で笑っていた。一（出会って一日も経ってないが、いつもその人を不安にさせる笑みを浮かべているのだらうことは想像に難くない）

しかし、今回のターゲットは幸運なことにとつやら俺ではなく、少女とイスマスの二人連れらしい

「……愉しそうだな。いつも一緒なのか？」

いきなり怪しい人物に声をかけられた少女は動揺を露にした

「そ、そうよ。いや、そうです」

最初は強気でいこうとしたのだろうが、途中でムクロの放つ禍々しいオーラに怯み、口調を変える辺りが少女のなけなしの自尊心をよく表している。服従か、反抗か？ の二択しか新の絶対者は与えてくれないのだ。

「クツクツク、それはいい！ 自作自演の芝居を常日頃やっているのか……いや、本人は気づいてないのだからそうも言い切れないのか？ どちらにせよ面白い」

不吉な笑い声をあげるムクロに、当の少女も俺もまったく理解が追いついていない。

トンパは何でこんなチームに入っちゃったんだ？ とばかりに頭を抱えて、少女を支えるイスマスは眉一つ動かさず少女を守るように抱きしめた。

ムクロが何をいいたいのか問いたただそうとしたが、ムクロはクツクツと不吉な笑い声をあげて自分だけの世界に入ってしまったのでそれももはや敵わない
手持ち無沙汰になった俺は、ヒカリゴケがいたいという原理で発光しているのか、つまりちよつとした好奇心で壁際に寄る。

うん？ 確かにヒカリゴケが生えている所から発光しているが、それ以外の何も生えてない場所からも僅かに発光している
これはひよつとすると……

「確かトンパと言ったかな。少しこっちで手伝ってくれないか？」

「ああ？ この空気から逃げ出すのなら喜んでやるが、いったい何やってるんだ？」

「このところを見て欲しい」

トンパは肩口から首を伸ばして俺が指差す先を覗く。そして、ルーペのようなものを取り出して観察すると

「これはまさか……、よし、ちょっと待ってな。今道具を取りに行ってくるからよ」

やはりというか、トンパが小さな蚤とハンマーで掘り出したその先には緑色の光る原石があつた。研磨されてない状態でこの光なら、研磨すればいったいどれほどのものになるのだろうか？

「これは……緑晶石だな。残念ながら目的のサンヴァニックじゃねえが、これも中々の値打ちもんだ。ほら、あんたが見つけたんだ。とつときなよ」

「いや、遠慮しとくよ。それは君の手柄だ。とつておきたまえ」

その程度の宝石などしかるべき所にはたくさんある。それよりも目的の原石の見つけ方が分かった方が大きな成果だろう

お互いに譲り合っているも仕方無いと考えたのか、トンパは「ありがたく貰つとくよ」とご機嫌な様子を隠そうともしない様子。そういうところは逆に好ましく思える

「あんたのこと誤解してたみたいだな。俺はトンパ、ハンター試験

のベテランだ。よろしくな」

「こちらこそ。私は仙水 忍だ」

微笑みを浮かべて握手した。

再び探索が始まったのがそれから三十分後。少女はまだ疲れが残っているようだったが健気に立ち上がり、無言で着いてくる。体力はないが、根性ならあるらしい

先ほどのムクロのこともあり、少しこの少女に興味を抱いてきた

「君はどうしてハンターになりたいんだい？」

少女がトンパに聞かれて碌に答えられなかった質問を繰り返す。別に意地悪したい訳ではなく、ただその質問が少女の核心に近づけると思ったからだ

少女は歩きながら突然話しかけられたことに驚いたのか、随分長い時間の後に溜めていた言葉を吐いた

「……私は帰りたい」

「試験が怖ければ直ぐに帰ればいいじゃないか？」

「違う！……そうじゃない。

ちよっと前までは家族の安全の為にハンターになりたかった。でも今は故郷に帰りたい
だからハンターになるの！」

泣きそうな声で少女は言う。

普通の考えなら、彼女は何か問題があつてハンターの権力でもなければ故郷に帰られなくなつてしまつたと考えるだろう。いや、それは広義的には間違いではない

おそらくここでいう彼女の故郷は“地球”で、それは彼女が転生者であることを表している。そして更に言うと地球へ帰る手段はおそらく二つ

一つ目は自らの念能力で地球へと渡ること。しかし、この場合はこの世界自体が“地球”と認識されているとすれば移動はできないし、まず異世界といつてもいいこの世界と他の世界を移動するという概念自体がまずあるのか？ 世界が並列に存在しているとも限らないし、ここは死後の世界なのかもしれない、ひよつとするとこの世界自体が“地球”の未来の姿かもしれない可能性を上げればキリがないのだ

そこらへんの理屈を抜かしたとしても問題は山積みである。とはいつてもこの世界で転生といった形で生まれたのだから、どういふ形になろうとも元の世界に戻ることは可能であるという意見もあるだろう。確かに可能性としては考えられる

例えば念能力によつてもこの世界に戻れることができると仮定しよう。時間軸は自分が地球で死ぬ前で、今までの記憶も全てであるとする。

果たしてそれに使うオーラはいつたどの位の量が必要になるだろうか？

世界を渡る。

この世界でも瞬間移動能力者がいるので無理ではないだろうが、制約と誓約はかなりキツそうだ。

それに加えてこの少女の放つオーラは脆弱。纏しかできない今の自分よりも普段身に纏うオーラはずっと少ない。これでは到底世界の壁を越えるような念能力者になることは叶わないだろう

二つ目は一つ目よりも幾分可能性はある。グリードアイランドをクリアして“アカンバー同行”や“リープ離脱で元の世界に戻るのだ。グリードアイランドは世界の念能力者の中でも五本の指に入る、とネテロ会長に言わせしめたジンの認めた念能力者たちが作ったカードシステムである。そこらの能力者に頼るよりかよっぱど現実的だ

まあ、おそらく彼女は後者を指して言っているのだろう。ハンターになればバッテラの試験に受かる可能性も上がるし、自らを鍛える意味もあつて目標としては間違つてない

まあ、彼女が本当に転生者ならばの話だ

「あなたはどうなんですか、仙水さん？」

「君のように確固とした目標があつて受けたわけじゃないさ。ただそのほうが仕事に都合がよかっただけのことだよ」

公的施設の95%はただで使えることや、ハンター専用の電腦ページに入れることが大きい。最も、ハンター試験を受けに来ている者のほとんどが俺のようにそういうハンターの特権を求め、少女のようにハンターになつてから何をするかという一番肝心なことを考え

てない

「ムクロはどうなんだ？」

前で無言で歩くムクロに声をかける。円で集中しているムクロに声をかけるのは悪い気がしたが、この流れで聞いておかないともうこれから聞くことはもう無いように思えた

本人さえも知らない内に人を自ら遠ざける、遠ざけようとする傾向がムクロにはあった

「……暇つぶしだな。それも今のところ成功しているとはいえないが、ただ祭り上げられているだけよりこうしているほうがよっぽどマシだ」

一万人以上で構成されているといわれている夜号やごうのボスのセリフとなるとやっぱり重みがある

当たり前のことだけど、皆それぞれの事情を背負っている

「おい、俺は聞かないのかよ!？」

……

再び暗闇は静寂を取り戻す。

しかし、大分奥に進んだせいか時折壁の奥に光を見つけようになつてきて、今では互いの顔も確認できるほどには周りも明るくなっている

だがどれもビスケの見せたサンヴァニックほどの輝きを有しておらず、採掘作業は一向に進んでない

しばらく進んでいくとはるか上から、底の見えないほど深いポツカリと空いた縦穴が行く手を阻んでいた。俗にいう完全な行き止まりかと思えたがどうやらそうでもないらしい

縦穴のはるか下のほうで、今まで進んできた道のように人が通れる洞窟があった。

だがちょうど穴を挟んだ向こう側にあるせいで距離がありすぎる上に、ロツククライミングの要領で横壁を渡ろうにも、地下水が染み出してきたのか壁はツルツルで引っかかりもない。

あきらめて引き返すという手もあるがここまでの道は一本道だったのでそれすら出来ない

「クツクツク、このざまじゃオレたちはハズレだったみたいだな」

「おそらく道が崩れたのだろうな」

「おいおい、何冷静に分析してるんだ仙水。このままじゃ失格だぜ！」

「そうですよ」

トンパの動揺に嫌々ながら少女も同意する。手はないこともないが、念能力者でもないトンパに見せるわけにはいかないな

すると困ったようにトンパを見つめる視線に気づいたのか、ムクロが何もいわずいきなりトンパの首にかけていたタオルを引ったくり、目隠しした。

確かにそうしようとはしていたが、何か一言かけるべきだったろうに
ついでとばかりにバックに入っていたトンパの上着を切り裂き猿轡
にして、完成

少女はムクロの突然の奇行に酷く怯えていたが、念能力を見せない
ためだと理解するとホッとため息をつく

これでもう念能力を隠す必要のある人物はいなくなった。

周りの注目が集まる中、手の平にバスケットボールほどの大きさの
念弾をつくり、まずは崖に一番近い場所に滞空させておく。続いて
十メートル先と次々と設置して最後に下の洞窟の近くまで念弾を行
き渡らせたら準備は完了だ

「で、どうするんだ？」

ムクロの声に急かされる

「一度やってみせよう」

少し助走をつけて、念弾の上に飛び乗ると続けて次の念弾に
ビスケの修行でやった乗り手を応用するとこんなこともできるのだ

ようやく洞窟に下りたところで少し声を張り上げながら、

「今のようにやってみればいい」

「そんなの無理ですよー！ー！！」

「なるほど、なかなか面白そうだ」

対称的な意見を賜った

結局少女は連れのイスマスに背負ってもらい、ムクロはトンパを片手で持ち上げることになった。トンパが最後まで反抗していたがムクロの殺気に中てられるとおとなしくなった。（気絶したというのが正しい）

少女たちの方は、少女が軽いということもあって上手くいった。浮き手のように長時間乗り続けるのは難しいが、ただの足場として直ぐに移動するならそれほど難しいことでもない

問題は体重のあるトンパを担当するムクロだった。

ただでさえ少女達が乗っていったせいで念弾に込められたオーラは少なくなっているのだ。

そしてムクロはそんな心配を他所に念弾に飛び移った

ムクロが念弾を踏んで跳んだ直ぐ後に、パツンとはかない音をたてて念弾が弾けているのを見るのはハラハラする。しかしそれは途中までは上手くいっているように見えた

ちょうど残り半分というところで次に飛び移るはずだった念弾がはじけたのだ。

ムクロ一人ならともかく、トンパを背負って二十メートル以上ある距離を飛び移るのは流石に無理がある。だがどうする？ と考える間もなくムクロは背負った荷物を投げた

こちらの方にモガモガ言いながら飛んで来るそれをキャッチすると、ムクロは余裕の表情で一つ飛ばしに次の念弾に飛び移り、無事到着した。

やはりとんでもない人物だ

「……………さすが魔界三大巨頭」

少女のよく分からない賞賛の言葉が聞こえた

再び道を進むこと一時間。どうやらさっきの道がショートカットに繋がったらしく、壁に埋まっている原石の光量も増えてきたように思える

そろそろサンヴァニックの放つ光に近い。この先これ以上に光るものがあればトンパに採掘してもらおう

「もうそろそろ採掘したほうがいいんじゃないかねえのか？ これとかどうよ？」

「詳しい知識はないから、君に任すよ」

少しずつ周りの岩を砕いて調査しているようだが、その苦い表情から当たりはまだないらしい

だいたい素人に採掘させるとか無理があるだろう。専用の道具も持っていないチームが採掘できるとも思えない　なるほど、そのための奪っていいというルールか

自己完結したところでムクロが巨大な光り輝く岩石を持ち出してきた。それは今までの岩石の中でも一番の輝きで、サンヴァニツクのように見るものを惹きつける求心力がある

「さすがにこれは無理　分かったよ、やればいいんだろ？」

ムクロの眼力に根負けしたトンパがその巨大な岩石の中にある原石を掘り出す。さすがに巨大なこともあって苦労していたが、ブツブツ文句を言いながらも見事掘り出した。

「こんなに小さいのか……」

掘り出されたサンヴァニツクは手の平に収まるほどの大きさ

その魅力にやられない内に黒い布で輝きを覆い隠そうとしたが、それでも光が漏れてしまう

道を照らせるのはいいが、敵の被発見率も上がるのは少し痛い

そうして無事目的を手に入れたので帰路を急ごうとすると、前方から空気を切り裂く音が聞こえ、地に伏せる。背後でキャアツという少女の叫びが聞こえたが、イスマスが守ったようで怪我はないらしい

トンパは長年の経験で身を伏せ、ムクロに至っては無論、円を利用してその凶器、小さめの投げナイフを指先で掴み取っていた。

襲撃者は闇の奥にいるようで、闇を照らすサンヴァニツクを持っている俺はいい的になり優先的に狙ってくる

なんとか今は空気の流れてナイフをかわしているが、飛んで来るナイフの数はどんどん増えてきているのでこのまま増え続けられるといつか当たるだろう。明らかに一斉に数十本のナイフを投げられているのだが、闇の中の気配は少なく、多く見積もっても3人だ

不思議に思い、凝で確認するとやはりナイフはオーラが込められていた。あらかじめたくさんのナイフを用意して操作系で操ったのか、それとも具現化したナイフに何かしらの付属効果をつけたのか。

とりあえず同じ場所に留まるのは拙いと駆け出すと、ナイフの矛先は完全に自分に移ったようで背中にザクッザクッと二本のナイフがささったようだ。だがそれ以上の攻撃をされる前に黒魔装束を具現化すると、まるでこの場の闇が纏わり付いたかのようなエフェクトと共にそれは現れた

ああ、やはりいい

強化系のレベルが上がったせいか、体の調子が一気によくなるのを感じる。とりあえず軽く拳を握って力の確認をすると、地面を蹴り一直線に襲撃者の元へ向かう

途中、何度かナイフが体に当たったが黒魔装束の前に跳ね返されダメージはない

襲撃者は若い赤髪の男とそれに身を寄せる同じく赤髪の女。

兄妹だろうか、容姿がよく似ている

「ぼ、僕は殺してもいいが姉さんは殺さないでくれ！」

「ちょっと何言ってるの！？ 私の方が年上なんだから死ぬのは私よ……」

何やら争いを始めてしまった

「ムクロはどう思う？」

「そんなことオレに聞くまでも無いだろう。確かジャポンのことわざであるだろう、喧嘩両成敗ってやつだな。うちではそうしている」

よくそんなことわざ知っているなという前に、「その論理だと成敗を受けるのは俺とこの二人組みになってしまっただろう」と指摘すべきなんだろうか？

何はともあれ結局出た答えは、どちらも殺すほうが後腐れがなくて楽ということだ

殺したほうが楽という考えが直ぐに浮かぶあたり、俺も旅団の影響を受けているのかもしれない

本人達にその旨を伝えたところ

「俺はこんな役立たずの女と違ってよく働け！ 殺すのはこの女にしてくれ……」

「こんな馬鹿のいう事を聞いても意味ありませんよ。あたしならあんな達の欲望のはけ口に喜んでなるわ……」

殺す気が一気に失せた。

「……俺もここに来るまでたくさんの物を捨ててきたが品性まで捨てた覚えはない」

「何だ、気が削がれたか？ なら代わりにオレがやっておくか」

断末魔の悲鳴は最後まで聞こえなかったが、背後で肉と骨の軋む音が聞こえ続けていた。

「もう帰ってくるチームはないようね。じゃあこれで二次試験終了だわさ！！」

二次試験受験者180名中、死者113名、行方不明者54名

合格者10名

仙水さん呆れる(後書き)

気づけばヨナのことばかり考えている。

病院にいつてきまゝす

一二三二二() ^ ^ () 二 ブーン

仙水さん懐かしむ（前書き）

書けるうちに書いておけ！

という考えで珍しく最近は構想が浮かびます

これも読者の皆さんのおかげです。ありがとう！…そしてありがとう！

仙水さん懐かしむ

二次試験が終わると直ぐに飛行船に乗せられた。合格者が十名しかないなので貸切の飛行船の中は随分と広く、到着するまでに食事を済ましておくと、小さな食事会も用意されていたがどうも食欲が湧かなくて丁重にお断りした。

外では雨がポツポツと降っている

二次試験前にふと思い出してしまったから、気が付けば記憶の糸を辿ってノスタルジイに浸ってしまっているのに、更に追い討ちをかけるようなこの雨

あれはいつだったろうか？ 詳しくは思い出せないがあのお古びたビルの中で仲間と共に過ごし始めてそれほど経ってなかったように思えるので五歳かそこらの時だろう

その日もこんな風に雨で、俺達は天気が悪さと対照的に喜んでいた裏の仕事も、雨の日はファミリーレストランやスーパーの客が減るのと同じように少なくなるからだ。そして、午前中に俺達への仕事を下す命令役の中年男から直接今日は休みだと告げられ、色めき立った。

普段なら仕事がないということは直接命に関わるので避けたかった

が、その日の前日にマフィア同士の抗争による死体の後片付けという大仕事があったので、気持ちはまさに学校に通う子供たちの休日のそれだ（最も俺達の中で学校に通う奴は一人もいなかったが）

「今日はお祝いだ。秘蔵の肉を皆で食べようぜ！！」

年長者のリーダーの言葉に更に興奮する俺達。肉を前に食べたのはいったいいつの頃だったろう？ 日々食っていくのが精一杯な俺達にその誘惑にあらがう術はない

下の子たちの立派なお姉さんであろうとするエリもあの時は子供らしい笑みを浮かべていた。

最もまともな肉ではない。街で犬をかつている家から与えられた犬用ジャーキーを横から掠め取って、非常食として全員分溜めたものだそれでも人肉を食べるよりよっぽどマシだろう。以前飢えに飢え、一度だけ試してみたことがあるがとても食べられるようなモノではなかった

「おいしいね。仙水」

エリはそれはそれは大事そうに、口の中にちよこつとずつ入れて、味も無くなり原型が止めきれなくなつてようやく飲み込む。思慮の浅い下の子は早々に食べてしまい、エリの元にねだりにくるが「これは私のだから、ダメッ！ 仙水のにしなよ」と頑として譲らないスタンスを保つ

泣きながら自分の元へ来る子供達に断腸の思いで端っこの部分を譲ると、エリは自分を棚に上げ、子供みたいと高らかに笑った。

そんな幸せの形があった

気づけば外はもう暗く、眼下で建物の光が後方へと流れていく

一度肩を回してコリをほぐしてから自室に戻ると、備え付けの机の上
に書置きが残っていた。

『第二次試験、大変にお疲れ様でした

仙水様の食事は冷蔵庫の中にありますのでどうぞお食べ下さい

なお、第三次試験の開始は本日の深夜を予定しております。精神的
余裕を持つことは大事ですが我らハンター協会としてはいついかな
る時でも対応する力を求めていることをお忘れなく』

一通り目を通してからクシャクシャにしてゴミ箱へ捨てた

最後にハンター協会の印がないことから、どうせトンパのイタズラ
だろう

二次試験の終わりに少しビスケと話してみたところ、三次試験が始
まるのは明日の朝らしいし一（試験官にあるまじきカミングアウト。
上も公平を期すべき試験官が情報を漏らすとは思ってないだろう）、
どうせ警戒を促すような文章を残して精神的に疲れさそうとして
のことだ

それにトンパの手を使わずとも精神的に疲れているのは否めない

冷蔵庫の中にはサンドウィッチとパスタ、サラダ、パンとやたら炭水化物の多いメニュー

ビュッフェ形式だったのだろうか？ ああいうのは腹を膨らませて利益を貪ろうとやたら炭水化物が多い

今と過去の食事の差に何ともいえない気持ちになって、用意されたものを全部食べてしまった

どうせトンパのことだからこの中にも下痢を促す薬物でも入っているのだろうが、毒物の耐性をつけてあるので致死量クラスでもない限り体に異変はない

……明日に備えて寝るとしよう

飛行船が停止したのを感じたのは目覚めのコーヒー（インスタントだった）を飲んでいる時だった。受験者は全員、直ぐに放送で呼び出され下船する

何故だろうか？

目の前に広がる光景は森林、いや樹海といったほうが正しいのか見渡す限り鬱蒼と生い茂った緑に亜熱帯のジメジメとした空気が時折森の奥の方から悲鳴のような声が聞こえる

……その全てに覚えがある

しばらく呆然としていたが試験官の声によって現実へ引き戻される
「というわけで、第三次試験はここイグルーの樹海、世界三大魔境の一つとして有名なここで三日間生き残ることだ」

イグルーの樹海。人生の半分を過ごした地、自身の故郷といってもおかしくない場所だ
ところがそうは考えない人物もいるようで

「ふざけんな！ 無理に決まってるだろうっ、こんなところでプレートを奪い合ったら全員死ぬぞー！！」

二次試験で合格したもう一方のチームの、金髪でさぞ女にもてそうな容姿をした男が猛抗議。まだ誰もプレートを奪い合うなんて言っていないだろうに……

おおかたこの樹海を見て原作の第4次試験を思い浮かべたのだろう
転生者確定だ

「……？ 何か勘違いしておられるようですがプレートを奪い合うようなことは致しませんよ。なかなかいい案ですけどね」

「ここでは受験生同士互いに争うのを禁止します。もしこれを破った場合は即刻失格とさせていただきます」

「……どういうことだ？」

「実は先ほどの二次試験でかなりの人数が絞られたみたいで、これ以上有望な人材が減るのを上も望んでないのですよ。それに付け加えて、受験生同士の争いなんて不毛です」

団結するもよし、一人で行動するもよし、とにかくここで三日間生き残ってください」

十年以上過ごしていた俺の立場は……

第三次試験は協力を促していても始まる場所は別らしく、それぞれのゲートから試験が始まった

あの頃のように鉄条網の隙間を通ることは出来ないのでハンター協会の手で臨時に作られたゲートをくぐると、雨上がりということもあってむせ返るような懐かしい植物と土の匂いが出迎えてくれた

「やはり故郷はいいな」

とりあえず住居は猿の魔獣が住んでいた洞窟で決定だが、食糧や飲み水の確保がまず先だろう

その両方を確保するのはやはり湖だ

やたら毒々しい色の魚、正式名称はケプラーフィッシュなるものを手づかみで捕獲し、五匹ごとに蔓で括る。そのままでもこれは美味いが、干物にすれば更に味が熟成され絶品になるのだが三日の滞在では作れないのが惜しい

水はいつもバツクに空のペットボトルを入れているので、綺麗なところで汲めばいい

コポコポと愉しそうな声をあげて水を飲み込むペットボトルに気を

遣いつつ、もう片方の手で体を持ち上げて、浮いた右足を背後から襲おうとした鳥の魔獣の横っ面に叩き込む

ペットボトルのキャップを閉めながら、痛みでのたうち回る鳥の魔獣を改めて確認する。この鳥はイグラーの樹海で最も多く生息している魔獣、キバハクオウだ

一応、魔獣なので人語を解せるが知能は低く、やたら大きな嘴と、南国の鳥のようにカラフルな黄色の羽毛をもち、その名の示すとおり口の中には肉食動物のような牙が生えている。

その他にも夜行性だとか、飛べないだとか説明することは多々あるが、今重要なのは一つだけ

こいつは見た目の期待を裏切らず、美味しくないということだ

『ブ、ブチコロシテヤルツッ!』

怒りを頭にその鋭い牙を向けて突進してくるスピードは、羽ばたきによる加速もあって凄まじい

少年時代はこのタツクルをまともに喰らい、肋骨が折れた中、命ながら逃げ出した覚えがある

今となつては既に慣れたもので、つま先に凝をしたままコツンと猛スピードで向かってくるキバハクオウの頭を小突く

それだけで脳髓を撒き散らしながら地面へと崩れる獲物

オーラ量は呪念錠によって少年時代以下まで落ちているがその分、修行によってオーラの密度は以前のそれとは比べ物にならない。いくらオーラ量が多くともそれを体表面に留める力がなければ紙ではないのだ

魚と飲み水を確保して久しく帰ってきたあの洞窟は以前の主、つまり自分の匂いが残っていたせいなのか、荒らされた様子もなく、薪にピツタリの乾いた枝が隅っこに転がっているという最高の状態で主人の帰りを迎え入れてくれた

ただ、その代わりに強力な魔獣たちの縄張りの間になっているようで、たどり着くのに苦労したが……

洞窟をより過ごしやすいものにする為に、木々の葉っぱを自作の木製の枠に集めて簡易的なベッドを製作し終わった頃には日がすっかり暮れ、梟の声や魔獣の奇声を聞きながらのディナータイムを始めることにした

木串にさしたケプラーフィッシュから滴り落ちる油が焚き火の火に落ちてジュツと香ばしい音をたて、まるで今が食べごろのサインですよと教えているようだ

そのサインに充分に従いつくした後、森は急に静かになった

この静けさがどうしても苦手だった

頼りにしていた梟の声も、魔獣の恐ろしい声も聞こえなくなるとこの森は本当に静かになってしまう。闇の中では魔獣が息を殺して自分を狙っているのかもしれないと考えると、怖くて怖くて眠れなかった。実際魔獣が夜襲ってきたこともあるので尚更恐怖は増す

エリが死んでしまってもう恐れるものは何もないと嘘ぶいていたが、

所詮は子供

母の温もりも、父の優しさも知らずに生きてこの世界に味方はなく、見るもの全てが珍しく、見るもの全てに怯える毎日

生前の記憶を思い出そうにも、その記憶は今いるこの世界と直接的な繋がりはなくどうしても心細かった

そんな時は忍によく慰めてもらったものだ

彼が自身の真の理解者であり、唯一の繋がりでもある

最近ではすっかり姿を隠してしまっただが、彼の存在がなければここまで生き残ることは出来なかっただろう

二日目、昨日は久しぶりに帰った故郷の景色を充分に眺められなかったので、食糧調達も兼ねて周囲の散策をすることにした

樹木にベツタリと張り付いたコケの裏には、陸上に生息している海老の一種であるオカエビがいる。この樹海に住んでいる生物のほとんどが毒を持っているので、処理無しで唯一安全に食べることが出来る貴重な栄養源だ

他にも野鳥の卵などの食材を次々にバックパックと詰め込んでいく。今日は昨日よりも随分豪華な食事になりそうだ
ふと、木陰の奥から人影が向かってくる

「お〜い、仙水！！ 探したぜ」

それがトンパだと分かると食材の確保を止め、バックパックのチャックを閉めて反対方向へ駆け出した

「えっ！？ おい、何で逃げるんだよ！！ 俺だって、トンパだって！！」

クソツ、追いかけてくるか！

走る場所を木の上に変えてみるが追っ手は変わらず追いかけてくる。追跡を免れる為に湖へ飛び込んだり、木陰に隠れたりするが、さすがハンター試験常連者なだけあってなかなか奴は鋭く引き離すのは難しい

そうして逃げ回ること約二時間

さすがに面倒臭くなってきたので停止して、背後追いかけてくるトンパを待つ

息を切らして、前のめりになって追いかけてくる姿はさながらゾンビのよう

「ぜえ〜、ぜえ〜……… 何で…逃げるんだ？」

「………！？ トンパだったのか？」

「何今更気づいたみたいない言い方してるんだよ！！ 絶対気づいて逃げたる」

「すまない、てっきりイグラーの樹海に迷い込んだゾンビかと思っただよ」

「逆によくそんな推測が出来たな！」

「私もゾンビの存在は信じてなかったが、実際この眼で確認できたなら信じるほかないだろう？」

「確かに疲れて少しはゾンビっぽくなったことは百歩譲って認めよう。でもお前と出あった頃はまったく疲れてなかったぞ」

「生まれ持ったの才能という奴だな」

「そんな才能は断じて認めねえ！！」

そんな掛け合いで飛行船での夕食の恨みを晴らす。執念深いのだ

事情を聞いてみるに、何でもトンパは直ぐに他の受験者と合流しようとしたらしいのだが、もう片方のチームには何故か全く受け付けられなかったらしい

こちらのチームでは少女とイスマスの中に入り込むほど凶々しくはないし、ムクロとの団結行動は命が惜しいので消去法で俺の元に来たということだ。

協調性のない連中だな

さすがに魔獣のうろつく樹海の中放っておくほど人が出来てない訳ではないので、住処へ案内する

我が物顔で葉っぱのベッドに腰を下ろしながら

「へえ、いいところに住んでいるんだな？」

と早速睡眠をとりだすゾンビ、もといトンパ
昨夜は警戒して眠れなかったのか、スヤスヤと眠りに落ちるトンパ
を他所に食材の下ごしらえに取り掛かる
オカエビの殻を剥いて、アクを抜いた山菜と炒めるとあたりに好い
香りが漂い始めた

うん、なかなかいい味だ

何故昔の俺は料理をあまりしなかったのだろうか？
修行のほうが大事だったから？ たぶんそれだ

最後に目玉焼きを作って、出来上がり
ちょうどいいタイミングで目覚めたトンパにそれを運ぶと、毒は入
ってないだろうなと失礼なことを言い出したので目の前で食べて見
せて渡した。

君のようなことはしない

それで安心してトンパは食べ始めたが、毒見の後に睡眠薬をこっそ
り盛ったので彼は倒れこむように眠った
毒は盛ってないので嘘は言っていない

深夜の来客に彼は立ち会うこともないだろう……

仙水さん話す

ちよつど料理をトンパが食べ始める頃に後ろの茂みから視線を感じている。敵意は無いので放っておいたが、そろそろ声をかけるべきだろう

「君達、深夜に何の用だい？」

気づいていたのに驚いたのか、しばらく揺れる木々。暫く仲間内で小声で話し合うと諦めて出てきたのは3人組みの女性だった。おそらく姉妹なのだろう、顔が似ている

「何ではれたのかな？ 絶だけは師匠に褒められたのに……」

一番小柄な眼鏡をかけた青い髪の少女が先頭に、金色、紫色の髪をもつグラマーな女性が続く

「バカッ！ ダークエンジェ…ゴホン、この方に通じるはずがないでしょう」

「向き合ってみると、やっぱり強いね」

一辺に喋られると話が混乱しそうなので、とりあえず焚き火の奥に座るよう促す

先ほどの発言でこの3人が転生者であることは分かった。既に残りのチームの内の四人は転生者ということになる。

転生者の数が気になるところだが、まずはここに来た理由が一番だ

「正確な数は分からなかったよ。君達かなりの使い手だね」

「……普通なら嫌味にしか聞こえないけど、ここまで実力差があるってことは純粹に評価されちゃってるのかな？」

「まあ、感激ですわ！」

言動、及び筋肉の付き方から紫の髪的女性が参謀タイプ、青髪が補助タイプ、金髪が戦闘タイプといったところだろう。現に感激ですわ、と言っている金髪が、いざという時残りの者を守るためにこちらと一番近い場所に位置どっている。

他の試験ならともかく、この試験で他人を傷つけることは失格に繋がるのでやる気がないのは向こうも分かっているのだろうが、それでも警戒しているということはこれから話す内容がこちらを怒らせる可能性があるのだろうか？

それとも単純にこの警戒のしかたが普段通りなのか？

後者の場合は、そういう危険がいつも付き纏っているということになるのでより警戒する必要がある。この試験中は危害はないと思うが、やっかいな念能力でもかけられたら後々面倒だ。何がきっかけで念能力の条件を達成することになりかねない。

凝で観察しつつ、発言にも細心の注意を払おう

「凝なんかしなくても別にこっちに危害を加える意志はないよ」

案の定、青髪の少女が凝に気づいてそう言うが、止める気はしない。

騙そうとする奴は大抵そういうのだ

「すまない。だがこれはもう癖みたいなものでね。悪いが我慢してもらおう」

疑われることを渋々許容した青髪が寝癖のついた頭を掻いて、諦めたように話した

「まず、いきなり用件を言うのもあれだから自己紹介しようか。私の名前はサイカ」

続けて貴族のように髪を縦ロールにした金髪

「ワタクシはマリアと申します。以後お見知りおきを」

最後に頭の片側に団子をつくった紫髪

「……リュウだよ。気づいているとは思うけどあたし達はトリッパーだ」

自らトリッパーだと明かすということは勿論こっちの正体も気づいているということか

だとしたら考えられる用件としては原作のまま進めるか、原作崩壊を手伝えということに違いない

どちらにしてもあまり気乗りしないな

「一応いっておくけど、勿論あなたにこれまでの人生の詮索なんかはしないよ。この世界はいろいろと厳しいからね……　そこまで強くなるにはきつとあたし達以上の過去を持っているということだし

よ？」

「バカねサイカ。そう言ったら聞いているもいっしょじゃない」

「本当、我が妹ながらバカで困りますわ」

「五月蠅いなあ」

何だか仲良く話しているみたいで暇なので、トンパのうるさいびきを抑えるために鼻を摘んでみる。……苦しそうに唸っている。そしたら鼻を押さえていた指にトンパの油がついたので、綺麗そうなトンパのタオルに押し付けて拭い取った

「あの……トンパさんと知り合いなの？」

気づけば3人全員がマジマジとこちらの様子を見ていた

「そうだな。しいて言うなら、ゾンビとハンターの関係が一番近いな」

「」「」………？」「」

どうやら理解されなかったらしい。こんなにゾンビっぽいのに何故気づかないのだろうか？

見る目がなさすぎる

「ま、まあ話を戻しましょう。ワクシ達の用件は今年に起こる『クルタ族の虐殺』それを阻止するためにあなたに手伝ってほしいの

です。ダークエンジエ…仙水様の実力が本物ならそれも可能のはずです」

「既に一度クルタ族のところに行つて、住む場所を移すように言っているのだけど、部族の掟、掟と五月蠅い人たちばかりで受け入れてくれないの」

「若い人たちは割りと柔軟に考えを受け入れてくれるんだけど、酋長の許しがないとダメだつて……」

残つた手は幻影旅団の襲撃を里の外で待ち受けて、時間を稼いで、日和見主義の酋長に厳しい現実を目の前で見せて考えを改めさせるぐらい。今もトリッパの皆に呼びかけているのだけど、幻影旅団の名前に怯えて参加してくれる人は少数。でもあなたほどの強者なら……」

「断る」

目の前の3人は言われたことが分からないかのように呆然とすると、それぞれの表情は違うが揃つて負の感情の籠つた眼で訴えかけてきた

何故？

理解できない

最低

口には出してないがそういうことを考えているのだろう
それこそ理解できない。口ぶりでは情に訴えて生きていける世界じゃないことを十分に理解しているんじゃないか？

「一応、何故と聞いてもいいかな？」

青髪は冷静になろうとしているのだが、頬が引きつって上手く笑顔を作れていない

そこまで意外だったのだろうか？ 寧ろ幻影旅団に関わろうとしないトリッパのほうがよっぽど現実的で賢い

「簡単だ。そうする必要も、そう考える必要さえもないからだよ」

「何で！？ 力を持っているんでしょ？ 救える人がいるのに助けないのはその人たちを殺していると一緒にだよ！」

「そうですね。力を持つ者には弱者を助ける義務があります。そういう信念のない力は意味がありません」

「私があんたみたいに力を持ってたらもっとたくさんの人を救うわ」

「……だったら戦争で困窮している難民たちを救済せず、湯水のように金を使い、大豪邸を建てる富豪は殺人者なのか？」

「そ、それはあくまで富豪の話でしょ！」

「同じだよ。富という力を持っているにも関わらず人を救わない人間は殺人者だ。そして私は殺人者でも構わない」

何も言えず悔しそうに引き下がる青髪

「たしか義務といったかな。ここでいう義務と信念本来対立するものだが、君の中では同じものようだ。そう仮定して話すでしょう。」

君には信念があるのか？」

「勿論、ありますわ」

誇らしげに胸を張っている金髪の喉元にベルトに差していたサバイバルナイフを突きつけた

当然、直ぐに三姉妹は臨戦隊形に入ろうとするがその前にナイフを引いて敵意がないことをアピールする

「君の信念はこうやってあっけなく、信念のない力によって屈服させられる。自らの力に拠り所を求めた時点でこうも人は弱くなるのだよ。」

そして義務とは人を助けるといふ偽善的なものではなく、自分自身の力を向けた後にその責任を持つと言ふ至極当たり前のことだけだ」

最後の紫髪の女に眼を向けると、強気な態度でこちらを見返してきた。

論破できるものならしてみなさいとばかりの態度だ

「君は問題外だ。いくら仮定しても君自身の力にはならない
まだ他の二人のほうが行動に移していける内容なだけマシだ」

そうして納得の出来ないような表情を浮かべて三姉妹は帰っていった
この世界に生まれた時点で自身の人生を好きなように生きる権利は
誰も持っている。やりたいなら好きなようにやってくれ

……とは言え、少なからず幻影旅団との縁を感じている身としては
放っておくこともできない

トリッパーも原作の幻影旅団の強さを十分、分かって防衛戦に参加するだろうから旅団にも少なからず被害はでるだろう。
怪我を治す念能力者でも確保したほうがいいかもしれない

偉そうに言った所で結局は自分自身も彼女達と何ら変わらないのだ
信念という幻想に縋っている彼女たちと、ただ闇雲に生き続けている自分

どちらもその先にあるものが空っぽという点では同じだ

十 十 十 十 十

第三次試験が始まって早々私は重いため息をついた
試験地はあの“イグラーの樹海”、あの“イグラーの樹海”だ

私はアイジエン大陸出身なのでよく知っている。世界三大魔境の一つであり、魔獣たちの巣窟
学者の中には魔獣の故郷はこの地とまで言われているほどで、童話にもなっているこの地の恐ろしさはよく両親に教えられている

イスマスに言われ、私は恥も外聞もなくおとなしくイスマスの背中に隠れた

なんせこの樹海は不気味な声で溢れているし、鈍い私でも殺氣に中

てられてさつきから心臓が早鐘を打っているほどだ

案の定、樹海に入って直ぐクワガタのようなハサミをもった狼の魔獣が『殺シテヤルツ』と襲い掛かってきたが、イスマスは両手でそのハサミを掴み取ると捻じ曲げて真つ二つに引き裂いてしまった

相変わらずイスマスは強いな〜と関心していると、おそろくさつきのハサミが引つかかったのだらう、イスマスの腕に傷跡が残っているのが分かる

「大変！ イスマス、ちょっと待っててね」

肩からぶら下げたバツクから医療道具を取り出して、別に必要ないと断るイスマスの腕を消毒し、ガーゼを貼ってその上から包帯をグルグル巻きにする。

少し汚くなっちゃったけど、あたしが気づかないと、イスマスはこういう怪我を軽視する傾向があるので直ぐに手当てするようにしている

そしていつも満更でも無さそうな笑みを浮かべるので性質が悪い

二人で食べられそうな食材と飲み水、一夜を凌げそうな場所の確保が済む頃には既に日は暮れていた

むしろあの魔境でそれだけ必要なものを確保できるのに一日もかからなかったのは偏にイスマスのおかげだらう

しかし魚の塩焼きを二人で味わうという、ささやかな幸せは深夜の

来客によって壊された

最初に気づいたのはイスマスだった。

しばらくして私もようやく闇の奥から人影がやってくるのが分かった。

人の形をしているとはいってもキリコのような変幻魔獣がいるので油断ならない

そして焚き火の火に照らされてハッキリと姿が見えた時、私はなんと魔獣じゃないのだろうとこの世の厳しさを思い知ることになる

「夜分遅く失礼するぜ」

ムクロ様だ！！ よりにもよって危険度ナンバー1が来るとはついてないね、アニーちゃん

………何でさ？

そんな私の心情は何処へやらムクロ様は焚き火の前に当然のように胡坐をかいてこちらと対峙する。ムクロ様は包帯をとれば綺麗な女の人だからもつと女らしくしたらもてるのだろうに……

勿体無いという気持ちと、女の私でも憧れてしまうカッコよさを内包したムクロ様を見ていると、気分を害してしまったのか包帯から覗く眼球で睨みつけられ萎縮してしまう
やっぱ怖い

「………あの、何の用事ですか？」

イスマスはムクロ様を警戒するのに集中しているので私が恐る恐る切り出す

出来れば早く帰っていただきたい

「オレは今まで数限りない念能力者と対峙してきた。純粹に力を求める奴、変わった能力を持つ奴、日常生活にしか使えない能力をつくる奴、まるで使えない能力を持つ奴もいれば神の奇跡のような能力を持つ奴もいる。そんな念の奥深さに最近では変わった能力者を見るのが唯一の娯楽になりつつある。そして中でも一番興味深いのは死者の念だ」

「はあ」

いきなりの話しについていけず、気の抜けた相槌になってしまふのは仕方無いだろう

「なぜ死者の念が強いか考えたことがあるか？」

専門家は念が当人の心の動きに密接に関係していることから、生物として一番感情が高ぶる瞬間である死ぬ直前に最大のオーラが体内から発生するせいだと考えているが俺は違う。

その念が死者の憎悪や執着の強いものに向かうというのは正しいと思うけどな……

結論を言うと、人間の魂という奴の大部分はオーラで出来ているから死者の念は強いってわけだ。なんせそれ自体が凝縮されたオーラの塊だからな」

なかなか信じられない話だった。

転生者である私が言うところと違和感を感じるけど魂というものは存在しないと考えているからだ。だったら前世と連続しているこの私という記憶はどうしてあるのか？ と問われたらそれは神のみぞ知ることだろう

「それで、用件は何ですか？」

「どうやら白けてる訳じゃなさそうだな。これ以上は見たほうが早い」

ムクロ様は呆れたように言うと、目の前から消えた。間違いなく消えたのだ

何処にいったのかイスマスに訪ねようとすると、消えたはずのムクロ様の腕が

イスマスの腹部にムクロの腕が突き刺さって反対側から血まみれの指が覗いていた

「えっ！？ わぁーーーー！！！！」

急いでムクロをイスマスから引き離そうとただ闇雲にタツクルしたけど、片手で止められる

目の前で腹部から血を流しているイスマスを助けたい！ でもムクロに止められて何も出来ない私は自分の不甲斐なさに泣きながら、ただイスマスの無事を祈るしかなかった

「よくもっ！！ よくもっ！！よくもっ！ ……ヒック、イスマスを助けてよ」

行く手を阻むムクロの手を念で強化することも忘れて叩く

「こいつを助けたいなら、ただ死なないことを祈るんだな」

そう、ムクロの手を逃れようとしても私の力じゃ無理だろう。癩だけど今のあたしに出来ることは祈ることだけ
眼をつぶって、再び開けた後に無事なイスマスの姿が見れたらきつと幸せだろう

それが到底無理な願いだってことは分かるけど、このままイスマスが死んでいくのをただ何も出来ずに眺めるよりはずっといい

「おい、目を開ける」

嫌だ、見たくないと思っていると抵抗すると、ムクロは私の瞼を引っ張って無理やり目を開けようとさせる。嫌がる私にイスマスの最後の瞬間を見せようとするなんて最悪だ

しかし、抵抗も空しく私の目は開かれ、ムクロは首を固定してイスマスの最後の瞬間を見せ……………えっ!?

少しグタツとはなっているけどそこには無事な姿のイスマスがいた……………どういうこと?

よく見てみるとイスマスの服は先ほどの光景は嘘じゃないとばかりに、ムクロの手によって破けてはいたがお腹には傷が全くない。
気が抜けたのか、あたしはドサツと地面に倒れこむ
なんだかやけに体がだるいな

心配したようにこちらへ駆け寄り、ムクロから庇うイスマス。ああ、よかった。生きていてくれて

「大丈夫かアニー？」

「イスマスの方こそ」

「私は大丈夫だ」

それにしても何故怪我してないんだろう？　むしろこれは治癒つてレベルだけどイスマスはそんな能力者じゃなかったはずだし、隠し能力だったのかな？

「見ての通り、そいつはお前の念能力だ」

何をいつているのかまったく理解できなかった。ここで言うそいつはおそらくイスマスのことなんだろうけど、イスマスはちゃんと自分の意志を持つているし、血も流れている人間だ。それに私はオーラ量が異様と言えるほど少ないし、発が出来るほどの技術も持っていない

毎日練をしているのにも関わらず、それを認めるのは嫌だけど……とにかく、そのどれもがムクロの発言を否定するのに十分な理由を持ちえていた

「何を言っているんですかムクロさん。イスマスに失礼でしょ」

「悪いが何か勘違いをしているのではないか？」

「では聞くが、その男が過去に死にかけたこと、または危なかったことはないか？」

……たしかにある。五年前だったか、私達が乗っていたフェリーを突然襲った海賊の凶弾に倒れて海へと落ちたように思っていたが、無事戻ってきて私を襲おうとしていた犯人を倒した

でもそれが何だと言っただろう？

私の無言を肯定と受け取ってムクロは再び話したす

「それにオレの能力は死者の念を感じ取ることがその条件の一部だ。死者の念に気づかないはずがない」

「でもこうしてイスマスは生きていないですか！ それに死者の念と私の念能力に何の関係があるんです！」

「……オレの仮説はこうだ。いつかは分からないがその男はその時死んでいた

しかし、お前はそれを信じたくない余り、男を具現化。その男への強い思いがそれを成功させたがそれだけならその男はそこまで人間らしくならなかっただろう。念の未熟なお前の実力ならせいぜい上辺だけをつくるのが精一杯で、構成も五分と持たなかったはずだ

だがその男の死者の念がその奇跡をおこした

生前の自分と全く同じ姿の、お前が作り出した人形に引き寄せられ、そこにいる男は完成したってところだな。まったく念は奥が深い」

「それは全て憶測でしょう。些かその理論には無理があるように思えますね」

まるで答えから無理やり式を求めていくような強引なやり方だ。それにその憶測はどれか一つでも欠けたらなし得なかった。正に奇跡としかいいようのない出来事を信じるほど私は非現実的な人間じゃない

「だったらオレが殺したはずのその男が今そこで生きていることをどうやって説明する？　そしてお前が今どうしてそこで疲れ果てているのかも

全ては能力者であるお前がその男の無事を願って、無意識に自身のオーラを提供し損傷した部分を再生させたと考えれば全て説明がつく。

まだあるぞ。今まで直接その男は人から話しかけられたことはあるのか？

誰も話しかけるはずがない。それは男の姿をとっているだけで、いわゆる念獣の一種に過ぎない存在だ。たとえ人だと思っても、その男に話しかけるといふ行為は酷く不自然に感じるはずだ」

どうして、どうしてどうして！！　この人は私達の邪魔をするのだろうか？

ただ私達は互いに必要な存在で、それ無しで生きていくことなどが考えられないだけなのにつ！！

突然現れた人がそれを邪魔する権利などあるはずがない

「ほお、やはり薄々気づいていたようだな。全くの無意識で具現化し続けることなど不可能だから当然と言えば当然だが……その顔が見たかった。憎悪と自己憐憫、羞恥、敵愾心に満ちたその表情を、それを見るために今夜来たからな。クツクツク、おもしろ過ぎるぞお前つ！！」

樹海が殺気で満ちた

仙水さん話す（後書き）

今回はタイトルの通り、会話がほとんどの回でした。最近あまり会話を書いてなかったせいかな、不自然な所もありこれから努力していく次第です！

あと、うざくないトリッパーを書こうと努力したんだけどどうしてもうざくなってしまうのは何故！？

……その内いい性格のトリッパーを出すようにします

仙水さん手に入れる

トンパにベッドを盗られてしまったので大きめの木によりかかって睡眠をとっていたが、凄まじい殺気で目覚めた

最初は自分がその殺気の対象だと考えていたのだが、どうやら樹海の中で誰かが別の誰かに向けた殺気を感じ取ったらしい。このネットリとした殺気は人間特有だからすぐわかる

戦闘はまだしてないようで、両者は互いの殺気をぶつけ合って様子見でもしているのだろう

この樹海に一般人が入り込むとは思えないので十中八九受験者の一部なのだろうが、第三次試験で禁止されている戦闘にいつ入ってもおかしくない

それだけなら競争相手が減ってむしろ喜ぶべきことだ

だが、殺気があまりにも強すぎる。

それに中てられてしまったせい、このままではグッスリ眠れそうにないし、少し気になったので夜の散歩がてら見物しに行くとしよう

夜の樹海は魔獣たちの動きも活発になり、常に血の匂いが辺りに漂っているはずなのだが今現在も放たれている殺気に警戒してか、魔獣の姿はなく、殺気の放たれている場所に辿りつくのは楽だった

絶で気配を消す必要もないぐらい殺気が溢れている場には少女とイスマスのコンビとそれに向かい合っているムクロの姿

ムクロが凄まじい殺気を放っているのは理解できたが、少女もムクロほどではないが怒気交じりの殺気でムクロと対峙していることに驚く

「いったい何があの緩い少女をそうさせたんだろう？
目つきがまるで別人だ

このまましばらく様子を見るのも愉しそうだがムクロの攻撃の巻き沿いになるのは勘弁願いたい

おとなしく帰ろうと乗っていた木の上から飛び降りようとした所、寝ていたはずのトンパがムクロと少女の向かい合っている方へ足を勧めているのを発見した

葉の量が少なかったのか、さきほどの殺気で目覚めたらしい

誰か一（十中八九俺だろう）を探してここまで来たようで、辺りを見回しながら焚火の明かりがあるムクロたちの方向へ向かっている
なんと間の悪い男なのだろう

手なり声なりでこっちへ来るように促そうにも、既にトンパはその殺気溢れる場へ…

二人の殺気の籠った視線にトンパは居心地悪そうに頭を掻いた

「あれ？　もしかしてお取り込み中だったか？　じゃあっ！？」

言い終わる前にトンパは後方へ吹き飛んだ

ムクロが水を差したトンパの存在に機嫌を損ねたのか、一般人であ

るトンパに凶悪なオーラを放ったからだ。そしてムクロは部外者の止めを刺そうとゆっくり近づいていく

勿論、少女はムクロを止める気配がないようで、ただムクロの動きをイスマスと共に警戒している

ただでさえ当のトンパの意識は既になく、後頭部からの出血もあり、このまま手当てもせず放置しておくのと死にかねない。それに付け加え、あのムクロだ

さすがに放ってはおけないな

「すまない。連れが邪魔したね」

ムクロがいきなりの登場に驚いた表情を浮かべている間に、瀕死のトンパを肩に背負い逃げ出そうとしたが、肩を掴まれて阻止されるやはりそう簡単に帰してはくれないか

「仙水、そいつをさっさと寄せ。さもないとお前の命がないぞ」

「意外だな。そういう警告を前もって伝えるタイプだとは思わなかった」

「警告はしたぞ」

ドンッ！

警戒はしていた。いつ攻撃してきても対処できるように身構えてさ

えいたが、その瞬間を捉えることは出来なかった

腹部の痛みと、凄い勢いで前へ流れていく景色、ムクロが手の平をこちらに向けていたところからおそらく掌底を喰らったのだろうことは分かる

ただそれが余りに速過ぎて目で追いきれなかっただけのこと

回転する景色。木々にぶつかっては樹木を倒し、それがおそらく五六回は続いたのだろうか？ 頭はクラクラ、体は木々を倒した時に裂傷を負い、極めつけは内臓を傷めたのか血反吐が出る

一応、凝でオーラを前面に集めていたがこの様だ

少しでも気を抜けば意識を手放してしまいそうなか、仰向けになっている自分を見下ろすようにムクロが現れる。何故こんな時も愉しそうなんだろう？

「オレの掌底を喰らって意識があるやつは久しぶりだな。やっぱりお前オレの部下にならないか？」

「その……言葉を今度……言う時は、俺を膝枕でもしながら……言ってくれないか？」

「ハツハツハハ！ 面白い奴だ。……興が冷めたから今日の所は引き上げるとするか」

そう言って去って行ったムクロの気配が完全に消えてからようやく一つため息をつく

もう二度と闘いたくはないな

何も考えずにこのまま眠ってしまったのだが、それだと血の匂いに引きつられて魔獣がやってきてしまう。

どこか、安全な場所を……あの木の上でいいか

今は寝心地を優先している場合ではない。一刻も早く絶の状態で寝て体を休ませないと

トンパは……別にいいか。一応ムクロという死への一本道からは助け出したんだ。後、生きるか死ぬかは彼次第だろう。とにかく今は休息が……大事だ………

トントンと肩を叩かれ深い夢から目覚めた

ボンヤリとした意識の中、水の入ったコップを渡され反射的に飲み込むと、そのまま二杯目に移る

三杯目を飲み干したところでようやくはつきりと目が覚め、あたりの様子が分かってきた

鬱蒼と茂った木々に囲まれている、少し開けた地に自分はどうかやられているらしい。日は既に高く、空腹具合からみて気を失ってから12時間後といったあたり
つまりちょうど正午だ

少し体を起こすと腹部の痛みが走り、思わず傷跡を眺めると誰かの手当てをうけたのか、包帯がグルグル巻きにされていた。

「もう大丈夫なんですか？ あれだけの怪我をしたのに」

声の主はあの少女。寝ている俺の直ぐ隣にいたらしく、近すぎて今まで気づかなかったのは不覚としかいいようがない。状況から見ておそらくこの少女が手当てをしてくれたのだろう

「大丈夫……とは言えないな。しばらく体を満足に動かすことは出来ないだろう」

内臓の回復力は一般人のそれと変わらないので完治までには二週間やそこらかかるだろう

それでも十分おかしいです！！ と少女には言われたが、そういう体なので仕方無い

早く治るに超したことはないし、これから次の試験では大きなハンデイになると思えば長すぎるぐらいだ

「そういえば、そこらにトンパが転がってなかったか？」

「転がるって……昨夜倒れたトンパさんならそこで寝ていますよ」

少女が指差す先を見ると、毛布にくるまって苦しそうに唸っているトンパが木の下に転がっていた。どうやら自分と同じように手当てを受けたいらしい

「君が助けてくれたんだろう？ 感謝する」

「イスマスも手伝ってくれましたけどね

それにお礼を言うのはこっちの方です。仙水さんやトンパさんが来なければ私達は殺されていましたから。……だから私が治療するのは当然のことですよ」

「そうか」

ここで何故ムクロと険悪な雰囲気になっていたのかと聞くのは野暮だろう

いつまでも世話になる訳にはいかないので、体に鞭打って立ち上がると膝からガクツと崩れ落ちた。まるで膝から先が一気に無くなつたような感覚に驚いたが、それ以上に少女が驚いていた

「なっ！？ 何動こうとしているんです？ しばらくは動けないって言ったじゃないですか？」

「『満足』にはな、動けない訳ではない。まだ試験も残っている」

「その体で試験に出るなんてバカげてます！ 怪我の度合いだとトンパさんより酷いんですよ」

「トンパは一般人だ」

「関係ないで ヒッ!？」

少女が言い切る前に念弾を手の平につくって浮かべた。調理の支度らしきものをしていたイスマスも俄かに殺気づくあまりこういうことはしたくないんだが

「君には感謝している。だからこれが手を離れる前に考えを改めてくれると助かる」

「わ、わかりました」

ブンブンと首を縦に振る少女を後に残して、体を引きずって前へ前へと進む。包帯から血が滲み出て腹部が真っ赤に染まった頃ようやく洞窟へと辿りついた

本当に少女が早く考えを改めてくれて助かった。傷の痛みで念弾を維持するのも大変だったので、後数秒返事が遅かったらきつと念弾は掻き消えていただろう

今日一日絶で休んでも明日まともに動くことは出来ないが、しないよりはしていたほうがずっといい

唯一の不幸中の幸いはムクロが俺とトンパに怪我を負わせたことだろう。彼女が失格になれば次の試験は大分楽になるはずだ

試験の数は平均して五つか六つ、残る試験が少ないことを祈るとしよう

翌日の真昼。ハンター協会の伝令が受験者個人個人を呼びに来た。近くに人の気配はなかったがなんらかの念能力で監視していたのだろう。ムクロはやはり失格。トンパもムクロにやられた怪我が酷く、今年の試験は諦めざるを得なかったようだ

また、会おう。今度は本気で殺りあえたらいいな

と言ひ残して去つていくムクロにかけ言葉が見つからなかったのは仕方ないことだろう

そしていつの間にか携帯に電話番号が登録されていたのに気づいた時は背筋が寒くなった

トンパは担架に運ばながらもホームコードの書かれた紙を渡してきた

仙水となら新人潰しが楽にいきそうだ

とはトンパの最後の言葉。そんな自殺願望はないので丁重にお断りしようとしたが既に担架で運ばれてしまったので、言葉をかける暇がなかった。

まあ、次会つた時に返せばいいだろう
そんな風に考えを膨らましていると飛行船のスピーカーから大音量で声が聞こえてくる

『これより第四次試験の為に筆記試験を行つてもらいます。受験者の皆さんは3102号室へ集まつてください』

筆記試験？ 確かにハンターになるためにある程度の学力は必要だが、求められているのはハンターになつてから何を成すかということだ

終盤に近い四次試験ということもあるし、普通の筆記試験ではないだろう

何はともあれと部屋に着くと、既に他の受験者は席についていた少女とイスマス、それに三姉妹と、真つ黒なフード付きのローブを被りスツポリと頭を覆つた男、耳に何個もピアスを付けたスキンヘ

ツドの敵つい男。

それらがこちらを一度チラリと見ると、再び前を向きなおす

唯一少女は恥ずかしそうに手を振ってくれたので笑顔でそれに返した
とりあえず部屋が一番後ろの席に座り、しばらく待つと前の扉が開
きカランカランという下駄の音と共に誰かが入ってきた

「ここまでご苦労じゃのう。ワシはハンター協会の会長のネテロと
いう者じゃ」

ネテロ会長。やはり現実で見るとその強さに圧倒される

ムクロの念のように禍々しさはなく、ただただ圧倒されるような念
のプレッシャー

しかしネテロが出てくるのはイレギュラーを除いて最終試験の時の
みだったはず、まさかこの第四次試験が最終試験なのか？

「第四次試験に入る前に君達に詫びなければならぬことがある」

部屋の中にクエスチョンマークが飛び交う

「第二次試験のことじゃ、試験官は一応ワシの元弟子ということも
あって信頼してたんじゃが、少々敵しすぎる内容だったようじゃの。
ワシの眼もすっかり曇ってしまったようじゃわい」

納得だ。と皆しきりに頷いている

勿論その中には俺もいた

「それで急遽第三次試験は受験者同士の争いを禁じる試験に変えた
のじゃが、これまた受験者の一人がそれを破り、危うく死人を二人

出すとこじゃった。協会としてもこれ以上見目麗しき将来有望な君達を失うのは痛い。よって今回のような筆記試験という措置をとらせていただいた訳じゃ」

「その筆記試験はいつたい何点から合格なのですか？」

三姉妹の内の紫髪女が優等生のような質問をする

「百点満点中90点からかの。それで君達の実力を見せて貰うつもりじゃ」

この世界の義務教育はまったく受けてない。知っているのは一般常識と殺しに役立つテクニクのみ

まさかハンター試験で一般常識を問う問題が出てくるわけはあるまい正直まったく自信がないが、学力だけを問うなどハンター試験らしくない。おそらく何か手があるはずだ

307

そう信じていたが……配られたテストの問題は勘で当てられる四択などではなく記述形式で、学会で発表するレベルの数学や古代語の訳などと分かるはずもない問題ばかりだ

他の受験者達も分かるのはあの紫髪ぐらいだろう

まさか、ほとんど誰もが分からない問題をハンター試験で出すわけがないので、やり方次第では全員合格できるやり方があるに違いない
まず受験者に共通することを上げていくとしよう

転生者。……違う

そんなことが協会に分かるはずもないし、それが答えに結びつくような内容の問題でもない

念能力者。……有りえる

となると試験で役に立ちそうなのは発か、凝か

試験用紙に発を試してみたが何も変わった様子はない。となると凝か

案の定、試験用紙に念で書かれた文字が光って見えた

今更だが、ネテロ会長の発言には『眼が曇る』『見目麗しき』『実力を見せて貰う』など凝を暗示している部分があったように思える

何はともあれ全ての答えを埋めるのは楽だった

間違った答えが浮かび出るのでなければ全問あっているはずだ

「合格者は56番、77番、78番、103番、204番、205番の6名です。呼ばれた方は別室で待機しててください」

55番が黒いローブ姿の男、77、78が少女とイスマスで204、205が三姉妹の青髪と金髪だ。紫髪はなまじ頭がよいばかりに自力で問題を解こうとして、凝を使うことに気づかなかつたらしい

別室でマーメンにハンターライセンスを手渡され、講習が済むとようやく帰って体を休めると真っ先に出口へ向かおうとしたが、

「まあ待ちなさい。君等はどうやら念を身に着けているようじゃこれからちよっとしたテストを受けて合格すれば、晴れて君等はハ

ンターの仲間入り。

なぐに、基本の四五行をやってもらうだけじゃから直ぐ済むよ」

とネテロ会長に止められた。

……改めて確認するが基本の四五行は「纏」「絶」「練」「発」
俺は……練ができない

少し羨む自分に比べ周りは、「何だよ今更？ 出来ない人とかいるの？」 「ネテロ会長つかっこいいな」 「百式観音って明らかに具現化系なのに、会長強化系っておかしくね？」 「今日はアニーの好物のミートソースでお祝いだ！」 「わあ、嬉しい」
と余裕の表情を浮かべ歓談する有様

やばい、落ちるかもしれない

とりあえず練が出来ないということ人を人に知られると弱点にもなりかねないので、会長が審査する部屋へと続く列の最後尾に並んだ
余裕の表情で部屋から出て行って、悠々と帰る受験者。

ついに自分の番が来た時にはテスト返しの時のそれと同じ気分だったろう

「確か受験番号103の仙水じゃったかの？ 試験官の君への評価は中々高いから期待しとるぞい。特に第二次試験官のな」

ビスケ、余計なことを……

「ではまず“纏”」

これは楽だ。ほとんど一日中しているのでそんなに意識することなく纏が出来た

「よろしい。次は“絶”」

今は回復力の高いこの状態の方が望ましい

「ではこの機械に向けて“発”を試みなさい」

そう言って渡されたのは小さな鉄板で組み合わせられた時計のようなものだった。

言われるままに発をすると、鉄板がバラバラになって地面で乾いた音をたてる。発の訓練は水見式が一般的な方法だが、それだと他人に自らの系統を教えることになってしまふのでこのような機械をつくったのだろう。

おそらくジンがゴンに残した鉄箱と同じ仕組みなのだろう

「どれも素晴らしい。では最後に“練”を見せてもらおうか」

少し迷った後に、黒魔装束を具現化した。“練”を見せるというのは修行の成果を見せるという意味なのでこれでも別に間違っていない。念能力を知られたのは痛い、練が出来ないのを知られるよりはまだマシというものだ

舐めてもらうよりは、高く評価して貰ったほうが安全ということもある

「ほほう。“練”の裏の意味も知っておるとはやはりたいしたものじゃろう。よろしい合格じゃー!!」

会場を出て、本拠地方面に出発する飛行船へ向かう際にハンターラ
イセンスを太陽に翳してみた
興味ないとは言ってみたもの、手に入るとやはり少し嬉しいものな
んだな

仙水さん手に入れる（後書き）

ようやく仙水さんもハンターの仲間入り！！

既にヒロイン候補を三人も手に入れてこれ以上何をハントすると言
うんだ！？

仙水さん帰ってくる(前書き)

今回は短めです。旅団の皆との掛け合いを久しぶりに楽しみたかったので書いてみました。しばらくはこんなほのぼのとしたのを書きたいな

仙水さん帰ってくる

「仙水、よく帰ってきてくれた」

……おかしい、こんなことは今まで一度もなかった。ひよっとして今自分は白昼夢でも見ているのかもしれない
そつでもなければ本拠地に帰ってきて直ぐにクロロからそんな甘い言葉が出るなんて不自然すぎる

俺がいない間に何が起こったというんだ？

「そついえばまだ紹介してなかったな。あそこで、フィックスをからかっているのが新メンバーのヨナだ」

見ると、両腕を後ろからフェイタンに拘束されたフィックスと向き合っている少女がいた

まるで新緑の色に染まったかのような双眼と柔らかそうな髪。どう控え目に見ても美少女と言えるようなその子は、世界中の富豪たちが自身のコレクションが盗まれるのを恐れている相手であり、A級首の幻影旅団のヤクザコンビの片割れに真っ向から勝負をしかけていた

「フェイお兄ちゃんが側にいないと、何も出来ないんですか片思いさん？ 団長さんにラブなのは分かるけど、気を惹こうと別の人に色目を使ってもきつと団長さんには通用しませんよ。懇ろせいせいするはずですよ」

「ウガーーツ！！ 違うって言うてるだろ！ てめえぶつ殺す！」

「ハハハ。いいねヨナ、その調子よ」

「……そのへんにしとけよ、ヨナ」

呆れたように言うクロロの言葉はすんなりと口から出てきた。今まで何度少女、ヨナを嗜めてきたのだろう。全く反省の色が見られないので意味はなさそうだけど

「は〜い」

その返事に何度騙されたことか、とクロロはため息をつく。俺が帰ってきて直ぐに喜んだのはきつと自分以外にヨナを嗜める存在がいなかったからだろう。旅団はほとんど煽るタイプが無干渉のタイプに分かれるからな

とは言え、憶測ばかりを並べても意味がない。その本人のを知りたければ本人と話をするのが一番だ

とりあえず近くにいたマチを通じてヨナとの接触を図る。余計なことに楽しそうだからとノブナガも着いて来た

「やあ。君が新しい旅団員かい？ 私は仙水 忍という者だ、よろしく」

「よ、よろしくお願いします。私はヨナです」

続けて何かいいたそうな顔をした後、俺達はしばらく見つめあった。そして互いの瞳の中に悪戯の光を見出すと、納得したように握手す

る。

この子とはとても気が合いそうだ

後ろでノブナガが俺の時の対応と違いすぎるだろっ！ と大声で喚いているが、俺もおそらくヨナもこれからどうノブナガを弄るうかという碌でもない事を考えている

「やっぱりあたしの勘が当たったね。当たって欲しくなかったけどさ」

クロロもマチに追従するようにハアツと再び溜息をついた

あいかわらず本拠地は広い。大小五つの館が渡り廊下で繋がっていて、部屋数もかなりある

ここまで広いと普通家政婦や掃除夫が必要になってくるのだが、雇うと情報が漏れる恐れがあるのでシャルナークがそこらの人間にアンテナを刺して毎回雑用をやらせている

一通り掃除が済むとポケットに札束を詰め込んで、はいさよならという訳らしい

その様子をソファーでのんびり眺め終わると、パクノダやマチ、ヨナの女性陣と手先が器用なシャルナーク、コルトピ、クロロが料理の支度にとりかかった。普段ならそこに俺も入るのだが内臓を傷めていることと、ハンター試験合格の祝いの席らしいのでおとなしく

ソファアに座ってその様子を見ていることしかできない

……暇だ。他の旅団員は何をしているのだろうか？

ノブナガとウボオーギンは料理が出来る前に飲んで既に出来上がっているし、ボノレノフはヘッドフォンに耳を当てて音楽に没頭している

旅団の良心であるフランクリンはヨナが包丁を扱っている様子に気が気ではないらしい

あんなに上手く包丁を扱っているのに、大人しそうな少女が包丁を持っているということだけで心配なのだろう。

気持ちは分かる

残るは一風変わったところで、フェイタンとフィンクスと一緒にゲームをやるのもいいが、二人がかなりやり込んだ格ゲーなのでボロボロにされるのがオチだ

結局手持ち無沙汰になってムクロとトンパの番号を携帯に登録した

「ムクロねえ。こいつ女だろう？」

いつの間にマチがソファアの後ろから携帯の中を覗きこんでいた。調理の最中に手の平に付いた粟をパツパツと払いながらそんなことを訊ねてきたので、顔に若干雫が飛んだ

「マチの勘は時々念能力の一つなのかと疑ってしまう所があるな」

脅威的中率に感心してみせると、まあねと適当に答えるマチ
その様子からどうやら続きを促されているようだ

「ハンター試験で偶然知り合ったんだよ。本人曰く夜号のボスらしい」

「夜号!? ちょっと今、仙水夜号って言ったの?」

シャルナークが何か炒めている最中だったフライパンを置いて、忙しげにこちらへ向かおうとしたが、炒めていた物が焦げ付きそうになって再びフライパンの面倒を見る。そんなシャルナークを他所にクロロが、

「パクノダ。しばらく代わってくれないか?」

「了解」

「あー! 団長だけずるいよ」

ブーブー五月蠅いシャルナークを完全に無視して、クロロは長丁場を予想したのか、ソファアの反対に椅子を持ってきて話を聞く体勢になった

ここまで来たからには話さない訳にはいくまい

「そのムクロについて詳しく教えてくれ。容姿、年齢、念能力。分かることだけでいい」

マチも立って聞き続けるような内容の話ではないようだ、黒い革張りのソファアに腰を下ろした

俺は、とは言っても分かっている内容なんてほとんど無いに等しい

のだがと前置きして、

「容姿は顔に包帯を巻きつけているので分からなかった。年齢はおそらく20代〜30代といったところだろう。念能力は分からないが、とにかく彼女は強いな
ただの掌底だけでこの有様だ」

「……夜号のボスについて聞いていた情報と一緒にだな。だが女性だとは思わなかった」

「本人もあまり進んで女性だと知られたくない様子だったみたいだ」

「だったら何で仙水はそいつが女だって気づいたんだい？」

「……勘かな」

そうとしかいいようがないのだが、やはり周りには理解が及ばないようで納得のいかない表情を浮かべる二人。

「とりあえず、食事の後にしたら？」

料理の乗った皿を片手に三つずつ抱えてきたパクノダのその一言に甘えて俺達は食事をとることにした。

内臓を傷めた自分には特別にポタージュなどの汁物や煮込んで柔らかくなった野菜が運ばれてきた時には、さすがにパクノダの笑みに隠された物を感じたが、当の本人はどう、おいしい？ と言わんばかりの笑みを浮かべるので俺にはただ美味しそうに啜ることしか選択肢は残されていなかった。悪意が全くないというのは恐ろしい

体にはそれが一番良いのは分かっているが、これが合格祝いだとい

うのだから空しいところだ

食事が終わる頃。ウボオーギンはワインの酒樽に顔をつっこんだまま起き上がってこないし、フェイタンとクロロは新メンバーのヨナと楽しそうに話をしていた

ベンズナイフは90番代が一番ベンニードロンの狂気が刃に込められていていい、とかやはり人の脂を多く吸った後期がいいとか、そんな話だ

「そんなにベンズナイフとはいいいものなのか？」

俺のその場の空気を読まない発言にしばし呆然すると、ヨナはベンズナイフの良さを勢い良く捲くし立てた。製造における過程、ベンニードロンの過去など、ざっと原稿用紙十枚分ほどの長い説明を受けることになるとは思わなかった

「という訳です。分かりましたか仙水さん？」

「ああ。もう十分だ」

「その感じ分かってないでしょ！ もう……仕方ありませんね。布教用に私のベンズナイフを一本あげましょう」

そう言ってヨナが一度本拠地の自分の部屋から取ってきたのは重厚な金属性のケース

重そうに時々地面へ置いて休憩しながら持ってくるので途中で見てられなくなり、運ぶのを手伝う

ケースの中身は黒いクッション素材に包まれている十数本のベンズナイフだった。

形はそれぞれだったが、そのどれもが怪しいオーラを放っていて美しい

素人の俺でも一目で素晴らしい品だということが分かる

満足そうに自分の表情を眺めてヨナが手渡してきたのは、刃渡り十センチ程の両刃のナイフ。俗に言うタガーナイフと呼ばれる物だった柄の部分は黒と銀で装飾されているが、それ以外の余計な装飾はなく、装飾のおかげで逆に手に馴染むのが心地よい

「さすがにそれは少し勿体無いんじゃないか？」

今まで黙っていたクロロが口を開いて出たのはそんな言葉だった
クロロもベンズナイフのファンなので、特に拘りのない俺にそんな上等なナイフを渡すより寧ろ自分に欲しいのだろう

「ナイフは人が使ってこそ価値があるんですよ団長さん　それにハンター試験のお祝いも兼ねていますし……」

「……………そうか」

渋々というように頷いてみせるクロロ。

そんなリアクションをされると、このナイフのことが少し気になっ
てきた

「確かに素晴らしい品だというのは分かるが、これはいったいどう
いう物なんだ？」

「ベンニー＝ドロンはナイフを作る時に徹底的に利便性を追求しているせいか、作品は戦術的ナイフの中でもコンバットナイフやサブイバルナイフのようなタイプがほとんどだ。戦闘中、そのタガーナイフのように急所を的確に狙わないと致命傷にならないような武器を作ることはほとんどなかった為に、ある意味90番代よりも希少だといえる」

「ベンニー＝ドロンが利便性を追求したが故に、変り種のこのような品に希少価値が出るという訳か」

「それだけではない。それで少し指を斬ってみる」

言われたまま指先にナイフを当てると何の抵抗もなく指先が斬れ、赤い雫が浮かび上がってくる

切れ味もかなりいいな

と言おうとしたところで、傷口から更に多くの血が溢れて来た。よく観察すると傷口が先ほどより広がっているではないか

「見ての通りだ。普通切れ味がいいとあまり出血せず完治も直ぐなんだが、そのベンズナイフは刃に込められたオーラのせいか、傷が治りにくく広がるという特徴がある

これによって急所を狙わなくても十分致命傷に出来るタガーナイフという……」

クロ口はそのまま長々と語り始めてしまった

確かに止血点を押さえているのだが、言われたとおり血が止まりにくい

見かねたマチが念糸縫合するまで血は滲み出続けた

まだジンジンとする指の痛みを無視してナイフを握り、仮想の敵と向かい合う

敵は3人。中肉中背の一般的なタイプで軍上がりの様に逆手でナイフを持っている

両側の二人がサポートの役目を果たし、真ん中の一人が斬り込んできたナイフをまずはタガーナイフで受け止める

二、三度斬り結ぶと一度バックステップして両側の二人が牽制をしかけてきた。

右側から突き出してきたナイフの刃先を横から薙いで剣線をずらすと、その勢いで逆側に回転し反対側から振り落とされたそれを受け止める。それを待っていたかのように今まで戦闘に参加してなかった真ん中の男が飛び込んでくる

だがそれは予知していたわけで、ナイフを振り下ろした男の崩れた体勢を利用して向かってくる男を遮る壁兼、盾にしたついでに盾の足を引っ掛けて隙だらけの首を掻き切る

その用済みになった死体を今まで攻撃のチャンスを狙っていたもう片方の男へと投げ、もう一人の男の方へ滑り込みざまにふくらはぎへナイフを突き立てる。

大分温まってきた体は頭の中でなぞった通りの剣線を描く

そうして二人目を始末すると、逃走を図った三人目の背中にナイフを投擲して終了

いい。予想以上にいい

ほとんど拳技を使わない烈蹴拳は手が留守になるので、ナイフとの相性も良さそうだ

満足して投げたタガーナイフを鞘にしまってようやく俺は辺りの様子に気づいた

座っていた革張りのソファはボロボロで、カーテンは切り裂かれ、とりあえず眼に見える範囲のあらゆるモノは斬られている。不幸中の幸いは誰も怪我してないことだが、荒く息をしているノブナガを見れば必死で攻撃から逃げたことは想像に難くない
そして最後に投擲したナイフはクロロの首横数ミリ先に突き刺さっていた

「……なるほど。これがベンスナイフの魔力か」

「絶対違う!?!?!」

皆の声がピツタリ揃っていた

仙水さん帰ってくる(後書き)

どうでもいい情報

〈ヨナの団員の呼び方編〉

仙水：仙水さん

ククロ：団長さん

パクノダ：パクノダさん

マチ：マチさん

フランクリン：お父さん (皆のお父さんの存在だから)

フェイタン：フェイお兄ちゃん

フィンクス：片思いさん (団長に片思いしてるから)

ボノレノフ：ホクロさん (ホクロがついているからww)

ノブナガ：厨二病さん (厨二病だから)

シャルナーク：腹黒さん

ウポオーギン：アフロさん (昔アフロだったから)

コルトピ：キタローさん (それっばいから)

ちなみにこの呼び方はあくまで今現在の呼び方で後々変わる恐れがあります

それとヨナはトリッパーではありません

仙水さん眠る（前書き）

先に書いておきますが、今回の話はシリアスでグロテスクな表現があります。

苦手とする方はお止めになられたほうがいいのかも

仙水さん眠る

「楽しみですね」

ヨナがバスの座席で言葉の通りよほど楽しみなのか、その細い足でパタパタ座席を叩いてはしゃいでいる。その隣にパクノダ、後ろの席に俺という陣形だ。バスの行き先は梵林医大。キメラアントの女王救命の為に派遣されたが、結局助けられなかった記憶が濃くて優秀かどうかも疑わしいというイメージが強いかもしれないが、この世界においてその医療知識無しでは医療は語れないと言われているほど有名なところだ

そんな梵林医大に何の用事があったて行くのか？

何でもそこに医療に関して有能な念能力者がいるらしいという噂を聞いて、来るべきクルタ族やキメラアント戦での怪我を治す為に治療専門の能力者をヘッドハンティングしに来たという訳だ。

別にクロロから直接依頼を受けてそうする訳ではない。いつまでも幻影旅団という枠の中に閉じこもっている訳にもいかず、個人的にチームをつくりたいと考えていたので、ちょうど暇そうだったパクノダと親交を深める為にヨナも誘いここまでやって来た訳だ

パクノダは心を読むという能力を持っているせいか、旅団に直接的な被害を及ばさないことについては口が堅いし、ヨナは俺と同じ愉快犯だからある程度信頼できる

「こら、ヨナ他の人が見てるでしょ」

まるで親子のようなパクノダとヨナを見てみると微笑ましい気持ちになる。パクノダは猫や可愛い物好きなので二人の相性はいいようだ

バスを乗り継いで数時間、梵林医大に着いた

医大だけあって眼鏡をかけた秀才ばかりが通っているのかと思いきや、思ったよりも奇抜な色の髪の毛の持ち主や、派手なファッションに身を包んだ人物が多い。天才と変人は紙一重というがまさにそれなのだろう

敷地内に入る前に受付でアポの確認をされたが、梵林医大へ一般人が入るには強力なコネと権力が必要なので、当然アポもとれるわけがない

「だったら無理だよ。ここにはお偉いさんがたくさんいるんだ。もしあんたらが間違っつて怪我でもさせたら国家間の問題にも繋がりがねんのだよ」

守衛の話も最もだ。ヨナとパクノダはどうするの？ とばかりに首をかしげている

コネが無ければ権力があればいいだけの話だ

「これならどうだ？」

懐からこの間取ったばかりのハンターライセンスを見せる。守衛も態度を変え、それが本物であるということを機械を通して確認すると特別見学者専用のカードを渡した
しかしそれはたった一枚だけだ

「この二人にも同じ物を」

「失礼ですが、そのお二人との関係は？」

「妻と年の離れた妹だ」

さすがにヨナを子供で通すのは年齢的に無理があったので妹という設定にした。

ほどなくして三枚のカードを手に入れた俺達は梵林医大の中に入る遠くから見ても大きかった建物は近づくにつれてさらにその巨大さを増す。大きな真つ白い塔のような建物が幾つもあり、その建物同士を繋ぐように渡り廊下があちこちから架かっている。真下から見上げるとそれは巨大な蜘蛛の巣のようにも見える

「さて、ここは何処にその能力者がいるのかしら、あ・な・た」

「教えてお・兄・ちゃ・ん」

勘弁してくれと手をヒラヒラさせると、堪えきれないようにクスクス笑いをする二人
それを珍しそうに眺めて行く医大生

いったいどういう風に俺達のことを見ているのだろうか？

「とりあえず、一番大きい建物から風潰しに探すしかないだろう。
これだけ大きい建物の中に能力者は一人だけとは限らないし、一人でも能力者を見つけたらそいつを追跡すればおのずとその人物にた

どり着けるはずだ。念能力者同士のコミュニティが無ければ、緊急の場合どうしようもないので確実に繋がりがあらず。連絡は逐一取れ」

「了解」

さすがにこのときばかりは真面目に戻る

「よし、解散」

十 十 十 十

「中々面白そうな連中が来たじゃないの」

窓から眺め、思わず口から漏れる

梵林医大の一室。部屋の机には念能力による病状の改善の報告や新種の病原菌をまとめたレポートが山のように重なっていた。だがその人物はそれを両手で机の上から押しつけるとポーチから化粧品を取り出す。化粧が一通り済むと、最後に真っ赤な口紅を塗って書類の山に埋もれていた自らの携帯を引っ張り出し、おもむろにある相手へ電話をかけ始めた

「あっ、私よ私。ちよっ!? 切ろうとしないで! 今回は真面目な話なのよ」

『何だ？ また新作の実験台にするんだっいたら付き合わないからな』

「……侵入者よ」

電話の奥で相手が息を呑む

「なかなか手強いわよ。守衛の話によると、ハンターみたい。まだ何が目的でここへ来たのかは分からないけど気をつけておいた方がいいわ」

『……こちらは計画が忙しいので余計な人員は割けない。監視は学生に任せる。もし向こうから接触を凶ってきた場合、どうすればいい？』

「その時は私の元へ通しなさい」

そう言って電話を切ると男（ ）は微笑んだ

追けられているのに気づいたのは、塔を下から上り始めて真ん中あたりに辿り着いた辺りだった。やたら白を基調とした建物の内部には白衣を着た医学生の姿が多い中、その追跡者は何を思ってたか、目立つ私服姿で壁から身を乗り出して追跡しているのだ。
気づかないほうがどうかしてる

例えその男が絶をしているといつても、そんな追跡では少し勘の鋭い一般人でもばれてしまうだろう
ここは一つ指導するべきかな

少し早足で進んで角を曲がると、案の定見離さないよう急いでこちらを追いかけてくる男

勢い余って曲がり角の直ぐ先に身を潜めていた自分にも気づかない様子で目の前を通り過ぎ、見失った！ と毒づく

「誰か探しているのかい？」

その男の肩に手を置きながらそんな疑問を投げかける
ギギギとロボットのようになり振り向いた彼の顔面は蒼白。思いもよらない事態に相当驚いたらしい

「具合が悪そうじゃないか？ 幸い、ここはかの有名な梵林医大だ。有能な医者はその中にあるだろう、良ければ付き添いをしようか？」

遠慮する彼を親切で付き添って歩いて行くと、廊下の奥から眼鏡を掛けた女性がこちらへ駆け寄ってくる。近づくにつれ状況が理解出来てきたのか、隣の男までとは言わないが顔色はかなり悪い
凝で警戒しているのでこの女もやはり念能力者のようだが、オーラ量から目的の治癒能力者とは程遠い

「後輩が迷惑をお掛けしたようで申し訳ありません。ぜひこちらでもてなさせていただきます」

断る理由もないので別に構わないのだが一応パクノダとヨナに連絡を入れておいた方がいいな

携帯を使い始めても前に行く女性はこちらをチラリと見るだけだったので、別に連絡はしても構わないのだろう。下手にこちらの行動に制限をかけるより、ある程度自由に行動させて敵意を生ませない方が賢明という考えだろう。これからの交渉の余地は十二分にある

『念能力者達との接触に成功し、今は何処かに案内されている模様』
そうメールで打つと直ぐにメールが二件帰ってくる

『こちらと同じく接触があったわ。おそらくヨナのところもね』

『同じくです。私達3人を分けて見張るほどの人員は無さそうなので、たぶん同じ部屋に案内されると思いますよ』

そんなメールのやり取りをしながら、案内されるままに階段を上ったり、渡り廊下で別の塔へと向かった後更にエレベーターで移動したりした

なんでもこの建物の構造上、塔の途中で階段が途切れていて別の塔を経由しないといけない場所があるらしい
そんな不便は早々に解消して欲しいところだが、数十年による改築のせいで大部屋が必要になったり、部屋数が増えたせいでそこまで気を回すだけの余裕は無いのが現状だ、と案内する女性のため息交じりに言う

中にはその階に何か秘密があるせいではないかと噂されてもいるのよ

そこまで言った所でさすがに言い過ぎたかと感じたのか、「今のは忘れて」と苦笑する

……残念ながらそんなに都合の良い頭は持ってない

話してもっと情報を得ようとしたが、さすがにさっきのようなミスを恐れて口数が極端に少なくなってしまった。そして特に話すこともないまま数十分

着いたのは教授に用意されている研究室らしく、ドアの横にはマーセン＝リノアと教授名が貼ってある。しばらくドアの前で待っているとパクノダ、ヨナの順番に付き添いを従えてやってきた

「あなた、待たせたわね」

「お兄ちゃん。心配したよ」

まだその遊びは続いているのか？

俺を案内した女性も随分年の離れた妹さんですねと勘違いしてしまっているだろう

付き合うのも面倒くさいのでドアノブに手をかけて部屋に入った部屋の端に置かれていた机の上には書類が乱雑に置かれ、隅に置かれたペットボトルの飲み口には赤いリップの痕が残っている

「はい、いらっしやい 私の名前はマーセン＝リノアよ、マリアって呼んで」

迎えたその男性の姿にクラツときた。勿論悪い意味だ。そもそも男性の魅力にやられてクラツとすることなんて今までもこれからも絶

対無いだろう

ともかくその男は酷かった。黒人で185以上はあるだろう程背丈があり、白いシャツから筋肉質な胸元が大胆に出て、そしてなによりオカマ……ゲイだ

少し長めの坊主の片側に剃り込みを入れ、アイシャドウ等のメイクもバツチリで女言葉で大柄な体を可愛く感じるはずもないのにクネクネ動かしていたら、それはもうオカマ以外の何者でもない

パクノダは目の前の現実が受け止められないのか口を金魚のようにパクパク動かしていたし、ヨナに至っては見たら目が穢れるとばかりに両手で顔を覆っていた。だがパクノダと違ってヨナの方はどうやら形だけのようで、指の隙間から覗く瞳はおもしろそうな珍獣でも見たように輝きに溢れている

「そんなとこに突っ立ってないで。とりあえずコーヒーでも飲む？」

「……じゃあ紅茶を入れてくれないか？」

「え！？　じゃあ私も……」

「私は何だかオカマ汁が入ってそうなので遠慮しておきます」

「あら〜ん　面白いこと言うわねお嬢ちゃん。でも入っているのは私の愛情だけよ〜ん」

その言葉にウゲツと吐く真似をするヨナに対しても「可愛い」と軽くあしらう大人な対応をするオカマ。その代わりヨナはパクノダに下品なこと言わないのと窘められ、珍しく落ち込んでしまった

「で、早速本題に入りたいんだけどいいかしら？」

「ああ」

「あなた達、どういう目的でここへ来たの？」

「ちよつとした交渉だよ。ここにはなかなか能力者がいそうなのでね。ヘッドハンティングしに来た」

引き抜いたらいすれ分かってしまうのだからあえて隠さずに言った

「へえ、随分大胆だね　あなたがもつと筋肉ムチムチだったら危なかったかも……」

こつちとしてはそれで嬉しい

「でもお断りよ　皆医学に誇りを持った人ばかりで忙しいし、そんな暇はないわ。おとなしくあきらめてちょうだい」

「君なんかはかなりの念能力者だと思うんだが」

纏だけでも顕在オーラ量はかなりのものだ。この中で見た他の能力者とは比べようもない

治癒系かどうかは見た目からして怪しいものだが実力はある。それだけで十分だ

「お兄ちゃん、正気ですか？ あんな一緒にいるだけで背後から危険を感じる生物を誘うなんて」

「確かに趣味がいいとは言えないわね。マチにどう伝えたらいいかしら？」

何故そこでマチが出てくる？ それにあくまで欲しいのは彼女彼の念能力者としての実力だ。そして何故そのオカマは頬を赤らめて「魅力がありすぎるといふのも困りものだわ」とほざいているのか、意味が分からない

あれか、もしかして俺はここにいる全員から弄られているのだろうか？

ノブナガの専売特許を奪うなんて残酷なことは俺には出来ないのでお断り願う

それにここまで来てあっさり引き下がる訳にはいかないヨナとパクノダに目配せして早速行動に移ってもらう

「さあ、こっちもあまりあなた達に構ってられないの。いくらあなただが高ハンターだからってここでの行動には制限がかかるわ」

「……仕方無いな。帰るぞ」

「え〜〜！ せっかく面白そうな人を見つけたのに！」

オカマの服の端にしがみ付いて帰りたくないとかダダを捏ねるヨナをオカマから引き離そうと、パクノダがオカマの服を引っ張るヨナの指を一本ずつ外して行く。大分手馴れた様子なのは、猫好きなパク

ノダが猫がじゃれて服につき立てた爪を剥がす作業を何度もやっているからだろう

「ヨナいい加減にきなさい。この人も用事があって忙しいんでしょ、帰るわよ」

それで渋々とヨナはオカマの元から離れた

「すまない、迷惑をかけたな」

「いえ、いいのよ。また今度忙しくない時だったらヨナちゃんを連れていらっしやい」

帰る際にも、オカマはドアの隙間からケバケバしいネイルアートで飾られた指先をブンブンと振りながらヨナを見送る。よっぽど子供が好きなんだろう

そうして梵林医大を出て、近場のホテルの一室に着くとパクノダに全員の衣服諸々をチェックしてもらう。盗聴器を仕掛けられている場合でもパクノダの能力なら物に込められた記憶からその有無が調べられる

案の定、ヨナのワンピースと俺のベルトに極小の盗聴器が仕掛けられていた。

ハンターが来た程度でこの対応とは少しやり過ぎではないだろうか？

「それで、情報は引き出せたのか？」

ヨナとオカマを引き剥がす際にパクノダがそれとなく記憶を探るよ

うな発言をしたのはそのためだ。ヨナは演技とは言え、あのオカマにしがみ付くのは相当嫌だったらしく盗聴器の確認が終わると直ぐにシャワーに入るほどの念の入れようだ

「ええ。仕事、実験、今夜と断片的な事しか掴めなかったけど。少なくとも時間だけはハッキリしてるわね」

「……今夜行ってみるか」

「ええ」

深夜の学校の例に漏れず、深夜の医大も不気味な気配に満ちていた。特に人の生死に関わるのでその不気味さはより増しているのかもしれない

守衛の隙をついて忍び込んだ敷地内には人の気配もなく、潜入は楽だったが嫌な胸騒ぎがする

パクノダもヨナもピリピリとした空気のせいか普段より緊張している様子だ

あまりこういうジंकスは気にしないタイプの自分でさえ、今日は止めていた方がいいと脳内で忍が囁いているような気がする

不安に感じてしまったらその予感が本当になりそうになってしまい

そつで、全員無言で大学内に入った

『その階に何か秘密があるせいではないかと噂されてもいるのよ』

案内の女性がそう漏らしていたこともあり、目的地は既に決まっていた

深夜で止まっているエレベーターの代わりに階段で進むのだが、一段一段がやけに遠く、足が中々進んでくれない

目的地に近づくとつれ濃密な気配を感じる。オーラや殺気、怒気、その他のどれでもない、別の何かの気配

……気持ち悪い

その階に下りた時、ムツとした熱気が既にそこに立ち込めていた

東西南北に延びた通路の奥の一室から呪詛のような言葉が漏れでていた

あそこだ。

その重厚な鉄の扉から覗いた景色は理解の範疇を超えていたとしか言いようがない

白衣を着た老若男女。そのどれもが熱に浮かされたような目で魔法陣の中にいる子供たちを囲い、何やら一心不乱に唱えている

よく見ると魔法陣だと思っていた線の一つ一つは、神字でびっしり

と描かれていた

それが念と関係のあることは分かるが、この人数での複合念、更にその効果を高めるために使われているのである。神字から考えられるのはどれも碌でもないことばかりだ。

死者蘇生かそれに近い危険なことだろう。とても狂気の沙汰ではない真ん中にいる子供たちの皮膚は焼け焦げたかのようにところどころ炭化している。生きているのが不思議なくらいだ

「……さすがに今回は止めておいたほうがいいんじゃないかしら？」

パクノダの意見は最もだ。今回は色々と厄介で込み合った事情がありそう。面倒くさいおとなしく帰ろうとしたところで、

「お兄ちゃん、あれ」

ヨナが扉の隙間から指差す先にはあのオカマの姿が……
オーラを注ぎ込む役をやっているらしく、何やら唱えている連中には加わっていないが一番目に狂気の光を宿らせているのは彼だ

オカマは大量のオーラを一人で生み出すと、床に書かれた神字にそのオーラが流れ込み、一つ一つの字が明かりを灯していく

やはりオカマも一枚噛んでいたわけだ

「あまり時間はありそうにないわね」

光ってない神字は残るところあと数十文字。あれが全部光った時に何かが起こるのだろうことは簡単に想像できる

「彼らの目的が何かは分からないけど、ここにいない方がよさそうよ。もう行きましょう」

「……俺はもう少しだけ残ってみようかと思う。先にヨナとパクノダは避難していてくれ」

気になるのだ。彼らがここまでやって何を為そうとしているのか

「そう。じゃあ行くわよヨナ」

「……………」

「ヨナ？」

「私もここに残るよパクノダさん」

「何言ってるの？ ふざけている時間はないの！」

やはりヨナのことか心配なのか、パクノダの語気も自然と強くなる

「べ、別にあのオカマのことが少し気にかかるんじゃないんですからね。それにもしもの時はお兄ちゃん が私を守ってくれるでしょっっ。」

「はあ……………もう好きになさいー！」

パクノダはそう言い残して去って行く。だが去り際に口だけでヨナのこと……頼んだわね、と伝えるパクノダはやはり優しい。

本人も自分の能力が団長に必要とされなかったら、迷わずヨナと共に残っていたことだろう。

立场上そう出来ないパクノダからしてみれば、自分の立場はなんと楽で羨ましいことか……

それにパクノダには命を助けられた恩がある。そのことに比べたらその程度の依頼は容易いものだ

「あ、光った」

ヨナの声で気づけば神字が真っ赤に光り輝いていた。そして一度光が消えたと思った次の瞬間にそれはそこにいた

三メートルを超す巨体は全裸で、ボサボサの黒髪は炎で出来ているかのように揺らぎ、獣のような目は白く濁って何の感情も移さない。ただこいつはそこにいるだけであたり強烈な負の感情をばら撒く

人類の敵。全生物の敵。そう、それはまさに魔王

「ま、魔王よ。そこにいる哀れな御子たちにどうぞ祝福を」

オカマも魔王の存在に怯えていたがそう恐る恐るきりだした。

なるほど大分話が読めてきた。確かにこの世界には魔王がいる

“闇のソナタ”と呼ばれる魔王が作曲したとされる独奏曲を聴いてしまったせいで、センリツは体を病んだのだ。となれば魔王がいるのも納得だ

おそらく、魔法陣の中にいる子供はその“闇のソナタ”を聞いて体が炭化してしまったのだろう。子供好きなオカマのことだ、なんとか治す為に協力者を募ってこのような魔王を呼び出す大規模な念能力の行使を計り、ここまで至った。大体そんなところだろう

今でも逃げ出したいほどのプレッシャーを放つ魔王の存在からして、成功してよかったのかと不安になるほどだ

正直、冷や汗が止まらない

魔王はオカマの存在を無視して、ジトリジトリと子供たちの元へ向かっていく

子供たちには叫ぶ余裕すらない。中には自分の炭化した両手を強く地面に押し付けるあまりポロポロと手を崩し、自傷行為に及ぶものもいる

子供の頭を魔王は優しく撫でると、そのまま頭を食いちぎった
血が噴水のように溢れ出す音とコリコリと頭蓋骨を噛み砕く音が部屋の中に響く

誰もそんなことをする魔王を止めることは出来なかった。まるでそこにお菓子があるから自然と手が伸びるように、本人が無意識のまま

まに行う行為に人は反応することが出来ない

ようやく我に返った男の一人が

「離せえー！！！」

と突っ込んでいったが魔王の尻尾で足だけ残して消え去ってしまう
それをきっかけに悲鳴を上げ始める人々。しかし五月蠅いとばかり
に魔王は悲鳴を上げた順番に確実に尻尾で殺していく

悪夢だ……これが悪夢と言わずになんと言おう

唯一魔王に立ち向かって行ったのはあのオカマだ。泣きながら、醜
く叫びながら全オーラを右腕に集め硬をすると魔王の後頭部にその
一撃をぶち込む。

その攻撃でズシンツと建物が二、三度揺れ、魔王の頭は前後に軽く
動いた

でもそれだけだった

魔王が蠅でも払うかのように手を動かすと風圧で軽くオカマは天井
へと吹っ飛ぶ

それを見てヨナは懐からベンズナイフを取り出すと、オカマが天井
に当たる瞬間に服の裾にナイフを投げ留めて落下を防ぐ。

だがその動きで魔王の注意はヨナに移ってしまう

クソツ、不味い

今の俺では到底勝てる相手ではない。もはや呪念錠を解除するしかないな

開^{アンデ}と言い掛けたところで魔王の存在が希薄になり、影のように体の端がぶれる

どういうことだ？ 魔王を召喚する儀式なら、呼び出した時点で念能力とは切り離されているのでこんなことが起こるはずがない
考えられるのは、この存在は念能力によって作り出された念獣。百人規模で作られた念獣なら、魔王を模した念獣が出来るはずだ。魔王を模した念獣なら同じく魔王によって作曲された『闇のソナタ』
によって病んだ子供たちを救えるとも思ったのかもしれない
まったく手に負えないのは予想外だっただろう

魔王が消えかけている原因としてはオーラの大部分を担当していたオカマが気絶したのが大きいだろう

あそこまで知的に能動的に動く念獣ならば使うオーラ量も相当な筈だ

魔王は最後の命を燃やすように手近にいた子供たちを襲う。苦悶の表情が、恐怖が脳裏に焼き付いて離れない。気づけば隣にいたヨナも空っぽの瞳でただそれを見ていることに気づいた俺はヨナの目を手で塞ぐ

更に安心させるように肩に手を置くと、震えているではないか
こういう時に自分本位な俺が嫌になる

「もう見るな、ヨナ」

「……………」

ただ無言で震えているヨナの様子は痛ましかった。こんなことならば連れてこなければよかったと後悔するが、事が終わった後に悔やむのが後悔なので今更どうしようもない

そうして魔王という名の念獣は消え去った。起きたことが悲惨だったがだけにあっさり消えてしまい、ホツとしたような、いまいちこんな終わりでもいいのか？ と納得出来ないようなモヤモヤした気持ちだった

事が済むと天井に張り付いたオカマも回収してそこらの車を拝借させてもらい、夜の高速を走り続ける。なんと言っても今回の目標は仲間集めだからその辺を忘れてしまっっては辻褄が合わないだろう

自分たちのせいで助けようとした子供たちを失ったショックで、彼は目覚めた後に自殺を図ろうとするかもしれない。それを説き伏せてダメだった場合は諦めるしかないだろう

兎に角今日は色々有り過ぎた。サービスエリアで一泊する前に明日の飛行船のチケットの予約を済ませると、寝る準備に入る。

ヨナの入っている毛布の横に邪魔させてもらうと小さな手が腰に回された。

誰かところやって一緒に寝るのは久しぶりだ

ヨナの柔らかい手を握って目を瞑ると少しだけ心の痛みが和らいだ
気がする

このまま手を握って眠ろう。今日は悪い夢を見そうだから……

仙水さん眠る（後書き）

魔王に関してはやはり人の力で呼び出すのは無理だろうとこういう話になりました。トリッパの女の子と少し話が被ってしまい申し訳ありません

魔王があっさり崩れるというのも念能力から考えると現実的かな？

三部作ぐらいにしても良かったんですが、どうしても魔王を倒して終わりが納得できなかったもので……

仙水さん蕩ける(前書き)

まさにタイトル通りのお話です

久々にのんびりした感じが出ていると思つ今日この頃

仙水さん蕩ける

仙水がハンター試験に合格してから数週間ぶりにホームへ帰ってきた

それというのも仙水に金を貰いキルアの修行を任されたからだ。修行といってもだいたい模擬戦と、訓練にピッタリな秘境に連れて行くことしかあたしはやってない

だが、それでもグングンあの子は伸びる
天性の才能ってやつだろう

怪我也多いが、死なさないように注意だけしていれば、あたしはほとんど苦労しないで金が入ってくるので随分楽な仕事を任されたものだ

「おおマチか」

ホームに帰ってくるとほぼ百分の確率でそうノブナガに出迎えられる。別に嫌いじゃないんだけど、こつも同じ出迎えをされると少し飽きてしまう

適当に頷いてシャワーを浴びようとしたところで、

「マチさん、お帰りなさい」

ヨナの声に引き止められた。三十近いオッサンの低い声の後に、ヨナの透明感のある声で迎えられるというギャップもあって、あたしの足を止める理由としては文句なしで上位入りだ

キルアも黙っていれば可愛いのだが、あの生意気な態度でそんな気もあまり起きない。それがいいのだと言うショタがいるがあたしには理解できない
素直なヨナのような子が一番だと思う

ヨナはTVを見ているノブナガの後ろでサクサクとリスのようにジヤंकフードを食べていた。久しぶりにヨナを可愛がろうと、近くと何だか様子がおかしいことに気づく

顔色があまり良くない。体調でも悪いのだろうか？

「どうしたんだい、ヨナ？ 何かノブナガにいじわるされたのかい？」

「いや違うからな！ ……俺も聞いてみたんだが、何でもないの一点張りだよ」

「本当に何でもないのマチさん。しいて言うなら厨二病患者さんという存在のせいかな」

またヨナが冗談めかして言うけど、それがあたし達に心配かけないようにしているのが分かり、逆に心配になってきた。

ヨナは素晴らしいマスコット兼、私達の仲間だ。

仙水のハンター試験合格のお祝いの際はこうではなかったから、それからあたしが帰ってくるまでの間か……

「ノブナガは本当に何にも知らないの？」

「俺が仕事終わって帰ってきた時には既にこうだったからな。あつ、そういえばパクとヨナと仙水と一緒に何処かへ出かけたってシャルが言ってたような気が……」

「バカッ、そういうのはさっさと言いなよ」

ノブナガの頭を叩いてそう言っていると、痛そうに頭を擦りながらノブナガが忘れてたんだから仕方ないだろう？ と口を尖らせて唸る。全然可愛くない。むしろキモイ

ノブナガに聞いたところパクノダは団長の護衛で今いないらしいが仙水はホームにいるらしい

仙水……仙水といるとペースが崩されて嫌だ

以前のように嫌いな訳ではなくてきたけど未だ苦手というか、どう振舞っていいのかよく分からないというか

団長への憧れや団員の皆への親愛の情とは別な感情。別に悪く思っていないのは確かだ

あたしが部屋を訪れた時、仙水は本を読んでいた
こちらに気づくと本に栞を挟んで机の上に置く。少し本の内容が気になる

「やあ、お帰り」

軽く微笑みながら手をあげる仙水が無視して向かいの席について早速ヨナのことを聞き出す

「ヨナの様子がおかしいんだけど何か知らない？」

仙水の表情が僅かに歪んだ。間違いなく何か知っているそれにしても、仙水がこういう風に表情を曝け出すのは珍しいと場違いなのは分かっているけど、思わずマジマジと見つめてしまった。

「マチの様子もおかしいんじゃないか？」

仙水があたしを見てのそんな発言に冷静さを取り戻す
今気になるのはヨナだ

「茶化さないで」

仙水は少し渋ったがあたしが納得するまであきらめないと悟ったのか、足を組み替えると諦めのため息をついた。時々見せるその仕草が何処か団長と被っていることに仙水は気づいているのだろうか？

本人は至って自然にそうやってみせるので違和感はないけど……

団長はうすうすそれに気づいているからホームにいる時は髪を下ろすようになった

「……実はヨナと観光をしに行った際に強烈な物を見てしまったね。最近では夜もグッスリ眠れるようになったがそれまでは悪夢にうなされて大変だった。よく悪夢でうなされるヨナの声で目覚めたものだ」

ふぐん、ヨナがそこまで恐怖するとはよっぽどだったんだね。
つて！？ 最後に何かおかしなことを言っていたような……悪夢で
うなされるヨナの声で目覚めるってことはつまり、そんなに近くで
寝ていたってことだ

仙水に限ってそんなことは無いとは思うが一応、

「それでヨナを慰めながら同じベッドで寝たんだね」

「ああ」

そうあっさり返されると反応に困る。別に今なら構わないのだが、
これから先ヨナも多感な時期が来るはずだ。その時にいつまでもそ
んなことをしていたらヨナの成長に悪い影響を与えるのではないか。
それだけが心配だ

「まあ、何があったかは聞かないけどあまり構いすぎてもヨナの為
にならないからね」

「分かっているさ。だがさすがに今回は少し責任を感じてな」

「そう、ならいいけど」

やっぱり少し気になる。後でパクノダに何があったのか聞いてみよう

十 十 十 十

マチの訪問は少し予想外だった。ドアが開いた時にはどうせノブナ
ガが酒でも持ってきたのだろうと思いきや、まさかのマチだ。

とはいえ、ヨナをまるで実の姉のように可愛がるマチのことだから、
あれ以来少し落ち込んでいるヨナに関係あるのだろうと考えたが案
の定そうだった

ヨナに関しては最近随分落ち着きつつあるので大丈夫だ。

自らが人を殺すことは喜んでやるのだが、人外の魔王が自分と同年
代ぐらいの子供を食い殺すシーンはさすがにショックだったらしい。

確かに殺しに慣れてきた俺でさえ、あまり思い出したくないシーン
だ。ウボオーも人を噛み殺す時はあるが、魔王のあれは完全に捕食
する目的での行為でその差は大きい

オカマに関してはもっと大変だった。いや、こう呼ぶと怒るのでマ
リアと呼ばなければならなかった

マリアは起きると直ぐに半狂乱になり暴れまわろうとしたが、そう
させないように特注のロープで体を縛っておいたのでジタバタとす
る事しか出来ない。暴れまわると体に食い込んで痣ができるようにな
っているそれを破ることが不可能と知ると、こちらをただジツと
睨みつける。

よく舌を噛み切って死ぬという描写があるがあれは嘘だ。切った舌
によって窒息死することは本当に稀にしかないらしい、舌の血管

の数から出血死するほど血がでるわけでもない。かといってショック死で死ぬという僅かな可能性にも賭ける気はないらしい。マリアはさすがに人体を知り尽くした専門家なのだろうと改めて思う

「何のつもりかしら？」

「君が自殺したいならしても構わないが、まずこちらの話を聞いてからにして貰えないだろうか？」

そんな風に切り出した俺だが実際、自分がすることはほとんどなかった。どうせ俺のいう事など聞きやしないだろうと最初から交渉は全てヨナに任じたからだ。

マリアも亡くした子供たちのことを思えばこそ、ヨナを無視できないように大人しくなる

それから数時間後、隣の部屋で待機していた俺をヨナが呼びに来た。その間隣の部屋から泣き声や、怒鳴り声が絶えることは無かったの。で少し心配だったが、どうやら上手くやったようだ。

マリアは仲間になると言う。だがその代わりに

「“闇のソナタ” ピアノ、フルート、バイオリンのパートを集めるのを手伝うこと。ハープは既に持っているからいいとして、後の三つはぜひ集めておきたいわ。もしかするとこの楽譜の中に治療のヒントが隠されているかもしれないから。その代わりに、あたしも子供相手以外なら戦闘も治療もするわ、いいわね」

もはや頭を頷くことしか残されていなかった。

ヨナは嬉しそうにオカ…マリアの腕にしがみ付く。どうやら俺のいない間に仲良くなったらしい
仲間が増えるのはいいが、この先ヨナに頭が上がりなくなってしま
いそうだ

本当にヨナが旅団であることが惜しい

ふと耳をすますと通路をパタパタと駆ける足音が

「忍お兄ちゃん、マチさんが昼飯だって！」

今日もいつものように白いワンピースの裾を翻しながらヨナが部屋
に駆け込んでくる。そんなに急がなくてもいいと言うのに、手をフ
リフリ動かして早くおいでよと急かす

俺はヨナの柔らかい髪をそつと撫でると、片腕でヨナを持ち上げる。
少し驚いたような表情を浮かべた後、ヨナは照れを誤魔化すように
笑った

そんな俺達をノブナガが迎えに来て、マチがキッチンでヨナと共に
ノブナガをからかう俺の姿を眺め微笑む。

しばらくはこんな感じでいいじゃないか

仙水さん参加する(前書き)

大分更新遅くなりました!! 真に申し訳ありません

仙水さん参加する

マリアが本拠地に招待されたのはそれから一カ月後だった。クロクの許可なしで入れるのは不味いし、団員が揃うのを待たなければならなかったので、クロクからOKの連絡が入るまで天空闘技場で時間を潰すこと約半月、団員全員がそろうまで半月。ようやくマリアと共に本拠地へ入る。ちなみにキルアはマチの修行による怪我で入院していたらしく会えなかった。いったいどんな修行をしたのか気になるところだ

団員以外が本拠地に入るとは滅多にないこともあって珍しそうにこちらを観察するいつものヤクザコンビや旅団員。並みの者ならそのプレッシャーで目を逸らしてしまうところだがマリアはむしろこっちが捕食者よ、と言わんばかりに口の端から透明な雫を滴らす

マリアという存在に大分慣れた自分でさえその表情に思わず胃の奥から酸っぱいものが溢れてきそうなのだから、初対面の旅団にはさぞキツイだろう

案の定、シャルナークはトイレへ駆け込んでいった

ゲンナリとした表情で俺を見つめる大多数。その瞳はどうしてこんな奴を連れて来たんだ？ と説に訴えてくる

唯一ヨナだけが一人ニコニコしているのが不幸中の幸いだ。その笑顔に何度助けられたことだろう

「それで団長。あたしたちはそいつが旅団員以外は立入禁止のはず

の本拠地にいる理由を聞いてないんだけど……」

「そういえばまだ言っただけでなかったか？ 彼は貴重な治癒系の念能力者だ。残念ながら蜘蛛に入るとは断られたが戦闘時では協力して貰える。パクノダやシャル同様に俺達の命を繋ぐ重要人物だ」

息を呑む音が聞こえる。勿論俺も最初マリアが治癒系の能力者であることを聞いて驚いた。念能力は本人の資質や性格に因るところが大きいのだが彼はどうみても癒し系ではない、彼が癒し系だとしたらヨナの存在を例えるほど上手い形容詞はこの世にはないだろう

因みにマリアの念能力は“ 婦人の優美な血化粧<コスメ デ バートリ> ”

変化系よりの強化系な彼が相手の血液と自分の血を混ぜ合わせた特別製クリームを患部に塗りこむ事によって、その相手を治療することが可能

手術が困難な大きな怪我でも治すことが出来るが、傷が大きければ当然その分必要な血液やオーラ量も増える。尚、治癒能力は傷や骨折、内出血などにしか使えず、病気にはまったく効果がない

そして肝心なことは治療する相手の血液は前もって採血した血を怪我した場合に使っても構わないが、術者の本人の血液は怪我を治す三分前のものでしか効果を発揮しないことだ

その制約によって治癒効果を上げていているらしい

クロロにそのことを伝えると具現化していた盗賊の極意を閉じて能力を盗むことを諦めた。多量の出血はマリアのあの太柄な体だからこそ耐えられるのだ。それにクロロでは医学知識が不足している為充分にあの能力を使いこなせるとは思えないし、的確に指示を出す

団長が戦闘中にそんなことをしている暇はない。結果、他人マリアに任せ
たほうがいい。そういう結論に達したらしい

そんな訳で来るべき戦闘の為に団員全員の採血をしておく為と、顔
見せの為にマリアを連れて来たと説明するとマチやその他の団員も
納得したように頷く。唯一顔を予め知っていたパクノダは隠してい
たわねと声に出さず口パクで伝えてきたが、さあと知らぬ振りをし
ておく

「まあ、あなたいい筋肉してるわね　たまらないわ〜」

「ウゲツ!?　ちよっ、近づくんじゃねえよ!　気色悪いな!」

ウボオーギンとマリアの筋肉コンビがじゃれ付く姿はお世辞にも綺
麗とは言い難いものだったので、トイレから戻ってきたシャルナ
ーは再びトイレに行く破目になった。

「仙水、こいつどうにかしてくれよ」

団長命令でパクノダやシャルと同列になったマリアに手荒にするこ
とも出来ず、珍しくウボオーギンが助けを求めてくる

「すまない。二人の邪魔をしたようだな。採血も済んだことだし俺
達は別室へ移動することにするか」

「ハハッ、すっかり可愛がって貰えやウボオー」

「クッソー、覚えてやがれ!」

ヨナは何も言わずとも既に特別性のロープを片手に用意している。

だったら俺はもうノブナガの体を拘束するしかないじゃないか！

「なっ！？ 止める！」

ノブナガの体をロープで縛ってモンスターの巢へと投げ出す。

「あらっ！？ また一人男が ……でもあまり好みじゃないわね。私にはダーリンがいるからあなたはいらないわ」

「グオツ、てめえそれ以上触ったらぶち殺すぞー！」

「私、あなたの愛を全て受け止めきれ自信がないわ」

(……………何だこれ？ 確かにあのオカマに絡まれずに済んだのはありがたいが、何だこの敗北感は？ そして何故俺は筋肉男同士の絡み合いを簀巻きにされたまま見なくちゃいけないんだ？ クツソ
ー！！ 怨むぜ仙水！)

意図していたものとは違ったが、ある意味マリアに絡まれるよりも嫌には違いないので良しとしよう。

「忍お兄ちゃん、マリアさん楽しそうで良かったね」

「……………そうだな」

「仲良くしてるところ悪いんだけどさ。結局仙水はクルタ族の襲撃に行くの？ まさか治療師だけを派遣して自分は行かないつもり？」

「そうだぜ、仙水！ ヨナは行くって話してたぞ」

シャルに続き、簀巻き状態のノブナガがそんな話をしたところで違和感を覚える

俺はヨナが行くとは聞いてなかったぞ……

寄り添っていたヨナを見ると、必死で目を合わせないようにしていた。明らかに拳動不審だ。腹事が得意なタイプかと思っていたが案外白を切るのが下手なのか、それすらも演技なのか分からないところが怖い。

「ヨナは行くのか？」

ヨナは不安そうに目を左右に動かして首を縦に振った

「マリアさんが心配だし、それに……久しぶりに人を殺したいから

」

これは後でヨナの教育係のマチに一言、言っておかないといけないな。少なくともそのセリフは満面の笑顔で言うセリフではない

続けてヨナは俺に行かないのかと尋ねた。気を遣わなくていいと口

では言っているがその表情は来て欲しいと訴えている

原作に関わらないと最初は決めていたが、今更俺がどう行動した所でトリッパーという存在によって原作の未来はほとんど崩壊するのがオチだし、あまり原作を意識しすぎるのも良くない。

ヨナや命の恩人であるパクノダの命を救うということが達成できれば何も問題はないのではないか？

「分かった。参加しよう」

「出かした！ ヨナ！」

「 厨二病患者さんは黙ってください」

「ハハ、ノブナガ泣いているね」

一気に騒がしくなる。このまま行くと今日も宴会になりそうだ。

クロロも口元を『盗賊の極意』で隠しながら微かに笑っていた

仙水さん参加する（後書き）

次回からクルタ族襲来編です！

仙水さん看破する(前書き)

更新が遅くなったのはテストのせいです。決してネトゲをやったわけではありません!!

仙水さん看破する

クルタ族を襲う準備が出来ると直ぐにルクソ地方へ向けて出発した。準備というのはクルタ族の緋の眼を奪った後に浸けるホルマリン液と専用の瓶、いくつかのキャンプ用品だ。

緋の眼は原作時には36対しかなかったが、実際少数民族とは言え少なくとも100人はいるだろうから何人か緋の眼になる前に殺されたり、蒐集家の手によって今も隠されていると考えると60対ぐらいが実際手に入る数だろう。さすがにその量のホルマリンを直接運ぶのは安全面と利便面からも賛成出来ないので、クルタ族とトリッパーに気づかれないうよう走って三日の距離まで旅団の飛行船で移動する。

クルタ族の襲撃を終えるまでそこでシャルナークに待機させて、終わり次第ホルマリン等を積んでいる飛行船に迎えに来て貰う予定だ。ちなみにメンバーはクロロ、ウボオーギン、ノブナガ、フェイタン、フィンクス、フランクリン、パクノダ、マチ、シャルナークの旅団結成時のメンバーと俺、ヨナ、マリアだ

マリアは念能力に必要な全員分の血液パックやら、医療道具やらで非常に重そうだったが本人は平気な顔で持ち歩いていた。怪我人が出るまでは近くに絶で隠れてもらうつもりだったが、この様子では働いてもらった方がいいのかもしれない

クルタ族の集落の直ぐ近くまで移動するとチベットの民族衣装のよ

うな服を身に着けたクルタ族と明らかにそれとは顔立ちも服装も違い、何かを警戒しているような連中が数十人ほどいた。

おそらくあれがトリッパーだろう。よくよく見ると何処かで見た三姉妹もその中にいる

一応警告らしきものはしていた筈だがあの様子では懲りてないのだろっ

「おいおい、クルタ族以外の念能力者がいるとは聞いてねえぞ」

「どうした。怖気ついたか？」

「バカッ！ 楽しみなんだよ〜！〜！」

「五月蠅いね。ばれる前に静かにしな」

決行は夜。クルタ族の連中が寝静まった頃に狩る。皮肉にもこれがハンター初任務ということになるのだろうか？

そんなどうでもいいことを考えていると側のヨナにトントンと膝を叩かれて注意を促される。クロロは全員の準備が整ったのを確認すると指でサインを出した。いよいよ作戦開始だ

まず邪魔なトリッパー集団を潰して、後はなるべくクルタ族を刺激し緋の眼に変わってから殺す。作戦はそれだけだ

たださすがにあのトリッパー達は念能力を覚えているようでまともに対しても殺れるとは思いが、前世の記憶がある分より嫌らしい能力を持っているのに違いないだろう。ここは罠を立てた方が堅実

だな

ヨナを指差して、焚火の周りに集まっているトリッパー集団の方向へ向かわせるジェスチャーをクロ口に送ると了解の意図が帰ってきた

ヨナも了解と頷いて、茂みから出ると絶を解いてトリッパー集団の元へ近づきだした。言わずもがなヨナを向かわせたのは奴らに顔を覚えられていない唯一の人間だからだ

「こんばんは」

いきなりのヨナの登場に驚くトリッパーたち。普通山奥でこんな夜に少女が出歩くわけがないからな。ヨナが注意を惹いているその間にも俺達は奴らを狩るのに一番のポイントに移動する

「止まれっ！！そこを動くな」

「魔獣かもしれないぞ」

「落ち着きなさい、この辺には人に化ける魔獣なんていないでしょ。見たところ鬨えそうにも見えないし、クルタ族の子かもしれないわね」

幻影旅団でさえ騙したヨナの実力に気づく様子は全く無く、ゆっくり警戒を解いて近づいていくトリッパー。その一瞬を見逃すはずも無く、麦わら帽子を被った男に接近するとヨナから貰ったベンズナ

イフで頸動脈を掻き切る。偶然それを見つけた女が悲鳴を上げる前にフィックスが首を捻じ切って、残りの連中も次々と現れて音も無く一人ずつ殺していく

ヨナは囷にされたせいで人を殺せなかったのが気にいらぬ様子で拗ねていたがマチとパクノダに頭を撫でられると直ぐに機嫌を取り戻した

それにしてもこのベンズナイフの切れ味はかなりいいな。ほとんど撫でる積もりで振るっただが豆腐のようにあっさり斬れた血糊もまったく付いていないどころか、人を斬ってより鋭さが増しているようにも思える

「気に入った？」

ニコニコと楽しそうにこちらを見上げるヨナ

「ああ。だがこのナイフは使い手を選ぶな」

「大なり小なりベンズナイフはそんなものだよ。その魔力で心が壊れちゃった人もいるし、用は持ち手の心次第だね。忍お兄ちゃんなら大丈夫だろうけど…」

気をつけるとしよう。武器はあくまで使いこなさないと意味がないからな

「 良し、片付いたみたいだな。まだ他にも能力者がいるだろうから、ツーマンセルで周囲を警戒しながらクルタ族の眼を奪え。各自凝を怠るなよ」

ベンスナイフを軽く手で弄びながら一軒の家屋にお邪魔しようとした所で、派手な破壊音と共に遠くの家の半分が吹き飛ぶのを見た。

あれはウボオーギンのビックバンインパクトだな。今まで忍んだ意味が全く無いような攻撃をするあたりらしいと言えbraしいのだが、もうちょっと空気を読んで欲しいと思うのは贅沢な望みなんだろうか？

その音を聞きつけて今正に入ろうとした家屋からガタイの良い男が飛び出してくる。男は俺達を一目見て堅気ではないと判断したのか、近くに立てかけてあった木の棒をこちらへ構える。

「貴様らっ、何者だ うっ！？」

言い終わる前にヨナがベンスナイフをブスブスと腹に突き刺して、ゴツという鈍い音と共に崩れ落ちた

「ヨナ。緋の眼になる前に殺しちゃダメだろう？」

「久しぶりに人を殺せると思ったら舞い上がったちゃって」

気を取り直して男が出てきた家屋の中に入ると、ぐっすり眠っている男の子と深夜の客に驚いている様子の女がいた。おそらくさつき殺した男の妻なのだろう、女はヨナの手に握られている血塗れたベンスナイフに気づき顔を蒼白にする

「わ、私はどんなことをされても構いませんからどうかこの子だけは……」

ヨナは聞く耳を持たず、粘着質な泡で覆われたバスケットボール大のテントウムシを具現化して女の体内へ侵入させると、いきなり女が狂ったように暴れだした。白目を剥いて口の端から涎がタラタラと流れているが女はまったく気にした様子もなく、いや気づいてもないのだろう、しばらく暴れ続けると瞳が段々鮮やかな緋の色に染まってきた。

ヨナの能力“孤独で蟲毒な蹂躞劇<トラウマメイカー>”は相変わらずエグイ。今回の任務に新参のヨナが入った理由はこの能力に因る所が大きいだろう

唯一の問題はやり過ぎると精神が麻痺してせつかくの緋の眼が元の眼に戻ってしまうということだ。ヨナにもそれは十分言い聞かせてあるので眼が緋色の内にベンスナイフで眼球を傷つけないようくり抜いている

母親の悲鳴でようやく目を覚ました子供にも同様に行い次々と別の

家を訪れる

俺はヨナが黙々と眼を奪っていく中周囲の警戒をしていたが、聞こえるのは他の団員によって殺されていく者たちの悲鳴や戦闘音ばかりで、ひっそりと眼を奪っているこちらに注意を払う者はいないようだ

ヨナの作業が終わるまで血や糞尿の臭いの籠った家の中から退散しようとして外に出てみたが、外は血の臭いこそ薄くなっているものの家や人の焼ける臭いで中とたいして変わらなかった。

「まあ風がある分、中よりはマシだろう」

燃え上がるクルタ族の集落を見てこれからどうしようかとボンヤリ考えた。まさかこの世界でクロ口たちと知り合いになるとは思っていなかったからここまで原作と関わることになるとは……別に関係ないと言ってしまうてはそこでお終いだ、ここまで原作と似たような展開が続くとは運命を感じるな。

「!?!」

ふいにヨナのいる家の中から轟という音の後にガラスが割れる音が直ぐに家の中に駆け込むと、荒い息を吐いて体中をナイフで傷つけられたヨナの姿があった。幸いなことに傷自体は浅いようだが傷の

数が多いので床にも少なくない量の血が溜まっている。

当のヨナはおそらく襲撃者が去ったであろう破られた窓の先を警戒していたが、もう安全だと分かると殺気を霧散させた。

ヨナにここまでの怪我を負わせるとは襲撃者も中々の腕だ

「ヨナ。直ぐにオーラで止血しろ」

言われる前にヨナは止血していたが既に随分な量の血を流している。ここは事前に採血しておいた血でマリアに傷を治して貰って、ついでに輸血してもらったほうがいいのかもしれない

案の定ヨナは少し顔が青白くなっている。体重がないので失血の影響も大きいだろう

さすがにこれ以上の任務続行はキツイ

「ヨナ。マリアのもとへ行くぞ。その出血ではもう任務の続行は無理だ」

「え！？ でも……」

困惑の表情でこちらを見るヨナ。まだまだ斬り足りないのは分かるがここで帰さなければ後で責任をとらされるのは俺だ。主にマチやパクノダに……

普段よりいつそうわざとらしく落ち込む振りをするヨナを守りながら、2kmほど離れた位置に設置されたマリアの救護所まで連れて行く往直ぐに

「まあ！？ ヨナちゃん怪我してるじゃないの！？ ……あんたがついといて何ヨナちゃんに怪我させとるんじゃない！ コラッ！！」

「……………すまない」

すっかりヨナに甘々のマリアにバリバリのヤクザ言葉で切られた。その変貌振りにヨナ自身も心なしかビクビクしているように見える。とはいえマリアも俺に説教するよりかはヨナの治療を優先したらしく、ヨナの傷に毒などが入ってないことを充分確認した後自分の手首にナイフを当てて血を流すと血液パックに入っているヨナの血と混ぜてオーラでクリーム状にした物を傷に塗っていく。

ヨナの傷は見る間に治っていく……………と思われたが何一つ変わった様子はない

確か一度見たときはあつという間に傷が塞がった筈だがどういう訳だ？

「これは…………たぶんよっぱど性質の悪い念能力が掛かっているわね。そつでもないと私が治せないはずなもの。仕方ないから当分は応

「急処置で我慢してねヨナちゃん」

能力者を下手に倒すと死後念が強くなる可能性もある。とりあえずヨナのことは医学に関してだけ心配できるマリアに任せるとしよう

再びクルタ族の集落に戻った時には既に家屋のほとんどに火が点けられて、轟々と燃え盛る家屋の火の粉があたりを明るく照らし出し、人々の憩いの場であったたろう集落の中央広場には山のように死体が積み重なっている

その死体に今また一つ新たな死体を投げ込んだフランクリンに手を上げて軽く挨拶しあう

全身血の色で染まったフランクリンの顔はいつも以上に厳しい

「よう仙水。ヨナはどうした？」

「すこし負傷をしてな。さっきマリアの所へ運んでいったところだ」

「そうか……こつちも何人が怪我人が出た。体術自体はたいしたことないが、あいつら奇妙な念能力使いやがる。クルタ族の戦士連中は勿論のこと強かったがな」

そのまま雑談に花を咲かせていると遠くの空からブーンブーンという低い音と共にシャルナークが操縦する飛行船がやって来た。それをきっかけにして次々と他の連中も広場に集まってくる

確かにフランクリンの言うとおりフィックスやウボオーギンが血流しながらこっちへ向かってきたが本人は至って平気そうなので心配ないだろう

問題はクロロに支えられながら歩くマチだ。腹部を酷く打ったのかお腹を押さえて痛みを耐えている様子からよっぽどいいものを貰ったのだろう

「仙水、ノブナガ、パクノダは生き残りの掃討。残りの連中は眼を保管する作業をしておけ」

クロロの言葉に一瞬の迷いもなく反応する旅団連中。皆クロロに従うことがこの場での最善手であることを知っているからだ

「生き残りの中にやっかいな能力者がいる。他人に化ける能力者だ」

「旅団くクモ>の姿に変わっても俺らには直ぐ分かるはずじゃねえのか、団長？」

ノブナガの言うとおり、付き合いが長いってこともあるがちよっとした歩き方の癖や、その人特有の匂い、強さなんかで直ぐそれがその人物じゃないかそうでないかはハッキリと分かるはずだ。特に強さなんかはマネしようがないからな

「でもそんな能力だったら心を読めるあたしが残党狩りに参加するはずないでしょ。おそらく本人かどうかも分からないぐらい完璧な真似。考えただけで恐ろしいわね」

「正確に言うとは完璧な真似ではなく、真似ている最中他人はその人物に違和感を抱かないという心理的効果がある念のようだ。化けられていた本人を見るとそいつが偽者だとわかるようだ。マチも俺の姿に化けた奴に騙されていたらしい。残念ながらローブを被っていて俺も奴の姿は良く見えなかった」

「しかし、それだとパクノダの念でも本人か偽者かの区別がつかないのでは？」

いくらパクノダの念が心（正確には記憶）を読むといっても、もしパクノダ自体が相手の念の影響で違和感を抱かなければ本人かどうかなんて分かりはしない

「そこがまだよく分かってない所だ。記憶を読むのだからパクノダの能力がそいつの能力より優先されるか、そいつの能力のほうが優先されてパクノダが気づけないかは試して見るほかないな」

「……いや、まだ一つ手がある」

十 十 十 十

潜入に成功した。

最初マチを騙せた時は内心ガッツポーズをしてしまった程嬉しかった。まあ、バレナイように能力を作ったからマチでも騙せるのは当然なんだけど、重要人物に化ける時は今でもドキドキする。特に今回はクロロだったから前世でいるとクロロとの妄想を膨らましていた甲斐もあって我ながら完璧だと思っていたんだけど途中で本人が乱入して来るのだから驚いた。

ちゃんと足止め連中働けよ
大枚はたいているんだからさ

こっちの能力は本人の姿見えたらおじやんだからそれが痛い！
それでもしないと能力作れなかったから仕方無いんだけどねw

まあ何だかんだあってヨナって名前の旅団の子。たぶんトリッパじゃなくて原作に出てない元8番か4番の子なんだろう。相手を気絶させるガスを発生させる相方に手伝って貰って気絶させ直ぐにヨナって子に化けるのは成功した。外にいる仙水さんに疑われないように今さっき戦闘があったように体をナイフで傷つけておく。バレ

ナイとは分かっているが細部まで拘っておくのが元劇団員としての譲れない点だ

今回の任務はこの先邪魔になりそうな仙水さんとこのヨナって子の抹殺。ちゃんと原作という台本どおりに進まないといい作品は出来上がらないのだよ、ウン！ あとクラピールの命の恩人ってポジシヨンは美味すぎるからね　あの美形が私のことをジツト見つめて愛の告白を……ウキヤー！　テンション上がってきた！！

仙水さんに連れてこられたのは救護所みたいなところ。変なオカマみたいな人が傷ついた私を見て男言葉になって仙水さんを怒鳴りつけた。ヒヤ〜怖いよ、ヤクザ言葉で怒鳴るのは勘弁です！！

オカマさんはいきなり自分の手首を軽く切って、血液パツクの血と混ぜるとドロツとしたクリーム状のものに変えていきなり傷口へと塗りつけた。

ちよっ！？　それはどうなの？

バツチイよ！！

ところが不思議そうな顔をする仙水さんとオカマ。あれ？　ひよつとしなくても念能力だった？　しかも本人じゃないと意味がないタイプの能力？

不味いなあ〜とヒヤヒヤしたが、偽者だと気づかないオカマさんは敵の能力と都合よく勘違いしてくれて仙水さんもどっかへ行っちゃった。

チャ〜ンス！ 油断してるこのオカマさんも原作関係なさそうだから殺して埋めとこう

その為には絶好のチャンスを待たなければ。この先旅団に侵入して
仙水さんも殺さなければならぬし、ここでヘマをする訳にはい
かない

ヨナって子は私が化けるために死んでもらっちゃ困るから全てが終
わった後に殺すでしょう。今頃仲間が何処かへ運んでいる最中だろ
うから見つかる心配はないしね

オカマさんは私の怪我を素早く縫い繕うと、血が出来るためにレバ
ー料理を作り出した。なんでも相手の念能力がどういふ効果をもた
らすか分からないから輸血は止めにしたらしい。本当に考えを改め
てくれて助かる！ ヨナって子と私の血液型が違ったら血液固まっ
ちやうよ！

「ちょっと待っててねヨナちゃん 今出来上がるからね」

ウゲツ、思わず吐き気がしそうな甘ったるい声と料理の臭い。
ちやうど今料理に集中して背中を向けているこの隙に殺してしまお
う。私はヨナって子が持っていたベンスナイフを音もなくとりだし
筋肉質なオカマの首へと振り下ろそうとした所で、

ブウーン

という機械音と共に上空の飛行船に取り付けてある巨大なモニター

の電源がついた。

なんとそのモニターには全旅団の顔が映し出されているではないか
！？

たとえ写真だとしても私の化けの皮をはがすには全く問題ない。

「あれ何かしらヨナちゃん？　つて！？　あんた誰よ！」

ヤバイヤバイ！　とりあえず逃げなくては…

「何処へ行く気かな？」

目の前の茂みからは眠ったままのヨナって子を抱えた仙水さんの姿が
輸送班はもうこの地から脱出したはずじゃあ……

「さあ、ゆっくり話し合おうじゃないか」

そ、そんな。こんな筈ではなかったのに

私の目の前は比喻なんかじゃなく真っ暗になった

仙水さん謀略を練る

飛行船に設置してあったモニターに旅団全員の顔を映し出すアイデアを出してから、とりあえず救護所へ戻ることにした。犯人は自分達の仲間の誰かに未だ化けている可能性が高いのでモニターに全員の顔が移るまで仲間同士が集まっていた方が都合良いのもあって道中を急いでいたわけだが……

まさかこの光景を目撃することになるうとは

目の前には後ろの茂みに隠れている女の子を守ろうと金髪の少年の姿。慣れない構えで木の棒を握ってこちらを牽制しているその少年は確かに二年後の面影を残したクラピカだった

木の上を猿のように飛び移っていた最中に、近くの茂みから気配を感じ今の状況に繋がったわけだ

クラピカはこちらの纏う空気で一族を虐殺した手の者と判断したらしく緋の眼になって怒りを顕にしているが、少女の方はただ怯えてポニーテールにした髪だけを覗かせ茂みから動かない。

まあ、原作人物相手でも今までとやることは変わらないが

とりあえず今一番捕まえやすそうな茂みに隠れている少女の後ろへ移動して拘束しておく。

少女はそれに気づくと暴れだそうとしたが抑えている両腕を少し強めに握ると痛みを訴えて大人しくなった

「貴様っ！ ジェシカを離せっ！」

「クラピカ！ 私はいいから逃げて！」

その時強烈なデジャヴに襲われた。激しい頭痛を伴う強烈なデジャヴに思わず手の力も緩み少女はその隙にクラピカの元へ行ったようだ。

浮かんできたヴィジョンは昔の記憶。エリと一緒に逃げ出そうとして無残に殺されたその少女の姿が幻視された

状況こそ今のものと違うが、圧倒的強者によって自分の大切なものが無残に汚され冒険を受けようとしているクラピカの姿が過去の自分のモノと重なる。

まだ、まだ残っているのか！ この忌まわしい記憶が！

クラピカたちが急に地面に蹲る俺の姿に逃げ出そうか、どうしようかと悩んでいる間にだんだんと痛みは引いていき、ついにクラピカたちが決断する前に正常な思考へと戻った

どうする？ ここで逃がせば後に命の恩人であるパクノダが目の前の少年によって殺される恐れがあることは確かだ。ここで殺してお

くのが正しい判断であることは分かっている

分かっているがっ　どうしてもその気にはなれない
完全にクラピカとあの状況を重ね合わせてしまっている。それがお
門違いであることも充分承知の上だがその気になれないものは仕方
無いと情けなく言い訳を探している自分に吐き気さえこみ上げてくる

「……………行け」

「「!?!」」

「さっさと行けと言っているんだ!?!」

クラピカ達が我を取り戻して去っていく足音が消えてからようやく
体が動き出す。こうしている場合ではない、直ぐにヨナたちの下へ
向かわないと…………

そうして急ごうとする先に再び人の姿が
今度は中々の大人数で、一番先頭にいるトリッパー三姉妹の内の一
人が黒い袋を負ぶさって夜道を急いでいる。すまないが八つ当たり
させてもらっぞ

集団の真ん中にバスケットボール大の念弾を打ち込んで開戦の狼煙
をあげた

集団の三分の一が壊滅したのを確認すると場を落ち着かせようとす
る指揮目がけて木から襲撃する。

闇を切り裂くかのようにベンズナイフの銀色の線を走らせて、それでも近寄ってこようとする奴らは烈蹴拳の餌食に
最後に残った姉妹、金髪と紫髪はすっかり戦意を喪失して纏すらもおぼつかない様子だ

「一応、忠告はしておいたはずなんだが、ここにいるということは聞いていなかったということなんだろう」

「え、ええ」

「私は反対したんだ。でも姉さんが」

「そんなこと言ってなかったでしょ、あなた！」

「まあ落ち着け。どうせ死ぬんだから辞世の句をそんな言葉で締めくくりたくないだろう？」

俺がそう言つと脇目も振らず逃げ出した姉妹に烈蹴紅球波をぶつけて一息ついた

そういえばあの姉妹何かを重要そうに担いでいたが……
きつく縛ってあるそれを解いてみると中には妖精もかくやというほどの美しさの少女が入っていた。というかヨナだ。睡眠薬か何かを嗅がされたのだろう、スヤスヤと眠っていて起きる気配もみせない

確かマリアに預けたはずだが何故こんな所にいるのだろうか？ マリアがみすみす誘拐を許すはずないし、傷も無い。もしかしてあの時

マリアに預けたヨナが偽者だったのか？
そう考えるとマリアの能力が発動しなかったのも納得できる。

「少し急ぐか」

道中飛行船に設置してあるモニターが点灯して全員分の顔が映しだされる。恐らくこれを見たマリアも既に気づいているはず
案の定、救護所に到着すると化けの皮を剥がしたケバイ女性がマリアから逃げ出そうとする途中だった。

「何処へ行く気かな？」

目の前を塞ぐ俺の姿とさっきまで化けていたヨナを見つけるといよいよ混乱の極みを迎えたようで瞳孔が怪しげに揺れる

「さあ、ゆっくり話しあおうか」

ゆっくり話し会ってみたがもはや気がどうにかなくなってしまったようでまともな話も出来ない。するとその騒がしさでようやく起きたヨナが背中を下ろしてとパタパタと動き出したので地面にゆっくり降ろす。まだ少し眠いのかふらついていたがしばらくすると足取りもしっかりしてきたので一安心だ

「へえ〜。この人が私に化けていたわけですね」

「そういうことだな」

ヨナはウケケケと壊れたように笑う女を汚い物でも触れるようにつま先でツンツン額を小突いている。やがて興味がなくなったのか女の手握られている自分のベンズナイフを布で綺麗に拭くと頸動脈を一気に切り裂く。噴水のように血を噴出して倒れる女は最後にニヤツと笑ったように見えた

「ウワツ！？ この女キモイよ忍お兄ちゃん」

何もヨナは死ぬ前に笑ったことを気持ち悪がったわけではない。死ぬ前に泣き叫ぶ奴もいれば、無表情の奴、笑う奴もたまにいる。ヨナもその経験がないわけではない
奇妙なのは死んだ女の顔がヨナの顔だということだ

先ほどまではまったく別の女の顔だったはずなのに、今は全身どう見てもヨナにしか見えない。視界の中にヨナと死んだ女を入れて見比べるとハッキリ違うと分かるのだが、それでもしないと分からないくなる。

「おそらく死後念が強まったのだらう」

死後その念の制約が緩くなったり、なくなったりするのはよく聞く話だ

マリアはヨナが死んだ姿を見たくないらしく常にヨナを視界に入れて精神の安定を保とうとする様子からもその精巧さを窺わされる

「まったく！ ヨナちゃんに化けるなんて有り得ないわ！ こんな可愛い娘は世界中に一人で充分だったのに」

「マリアさん。ありがとっ」

ベタベタする二人を他所に頭の中は打算で一杯だ。クラピカを助けてしまったからには何か奥の手が必要になるだろう。まだまだトリッパー連中は現れてくるだろうし、この先何が起こるか分からない。

そうして考えたそのアイデアは旅団への裏切り行為になるかもしれないが、敵を騙すにはまず味方からという言葉があるように奥の手は隠しておかないと意味がないものだ

ヨナには悪いことをしてしまうがそうでもしないと奥の手になり得ない

勿論自分のエゴにヨナを巻き込んでしまってお詫びとしてヨナは幸せにしよう。それぐらいしか自分には出来ないのだから

「ヨナ。少し話がある」

「何？ 忍お兄ちゃん？」

十 十 十 十

確かにクルタ族は強かった。でもそれはあくまで念能力者じゃないにしてはの話で、蜘蛛が勝てないレベルではない。何人かは念能力者もいたがどれも経験不足であたし達の敵じゃない

それがどうして、

「どうしてヨナが死んでいるんだ！」

第一発見者の仙水は旅団全員に囲まれて責任を問い詰められている。無事クルタ族の緋の眼を奪って祝杯ムードだった私たちはこの悲報に水どころか、液体窒素を差された気分だった。

仙水ともあるうものがみすみすヨナの死を許してしまった。その事実が堪えようも無く嫌だった

「おい、落ち着けマチ。まだ仙水の弁解を聞いてないだろう」

「そうだぜマチ。それにヨナの死は仙水だけの責任じゃねえ。ヨナ自身が弱かったからだ」

嗜めるフランクリンとノブナガの意見も正論だけに余計あたしのイライラを高まらせる。そんなことは結成当時からいるあたしが一番分かっている。だがヨナという初めての妹分、そして尊敬に近いものを抱いていた仙水が何も出来なかったというのが悔しいやらイラつくやらで複雑な気分になる

団長はあたしの肩に手をおいて

「とりあえず仙水、こうなった理由を説明してくれ」

仙水はいつもと変わらぬ表情で淡々と答えた。ヨナが怪我をしてマリアの元へ連れて行ったが相手の念能力のせいか、治癒が出来ないばかりかそのかけた相手をそうと知らずに仙水が殺してしまい死後の能力強化のせいでヨナが狂い、自分のナイフで首をかき切ってしまった。

言葉にしてしまえばそれだけだ

「それに関して何か弁明は？」

「無い。俺の責任だ」

「そうか。今日はヨナの葬儀だ。皆、式の後には思い思いの夜を過ごせ」

そうあっさり終わってしまった。皆ヨナの死を悲しんでいるがそれ

を表に出すと次に死ぬのは自分だと理解しているので悲しんでいるフリを見せないのは分かっている。分かっているがヨナが一番懐いていた仙水ぐらいは表だって悲しんで欲しいと思うのはあたしのエゴなんだろう？　それでもしないと死んだヨナが浮かばれないと思うのはあたしの大きなお世話なんだろう？

ヨナの火葬が終わって

酒が入るとさすがにノブナガが泣き出して、それを追うようにフェイタンも惜しい子を亡くしたねと珍しくぼやいている。フランクリンは自分の娘を無くしたような気持ちなのかいつも以上に黙って酒を飲み、もう数十本は瓶を空けているというのに、仙水はただ黙ってクロロと一緒にゆっくり飲んでいただけだ。

「マチ。あなた考え過ぎよ」

「パク」

パクノダはあたしの横のソファに座って肩に寄りかかる。甘える素振りを見せるということはどうやら相当酔っているみたいだね

「ヨナのことは残念だったけどそれを一番深く受け止めているのは私や勿論マチでさえない仙水だってこと、それを分からなくちゃあなた何時まで経ってもくっ付けないわよ」

「ハッ？　意味がわかんないんだけど」

「まだまだね」。言っとくけど仙水の良い所を知ってるのはあなた

だけじゃないこと覚えておくことね」

何だかパクは酔っ払って訳のわからないことを言っているが、仙水がヨナを失って悲しんでいることが分かればそれで充分だ。あたしはウボオーやシャルナークの宴会に混ざって騒いだ。今日の星はいつもより綺麗なそんな気がした

仙水さん謀略を練る(後書き)

という訳で今回いろいろありましたが勿論ヨナは死んでいません
ここ重要!!

あとパクノダ萌えるな、こんにゃろー!

仙水さん進化する(前書き)

今回急に時間が飛びます。後今更だけど最初の部分は前回に入れておけばよかったですと反省ww

仙水さん進化する

ヨナにその件を伝えるのは予想以上に自分の中に残っていた良心を削られるものだった

「ヨナ、お前はここで死んだ。そういうことにしてくれないか？」

自分でも相当無茶を言っているのは分かっている。当然のようにマリアはハア！？ と聞き返した後、意味を掴めたのか烈火のごとく怒りだす。

ヨナもしばらくは悩んでいたが言っている意味を理解すると、

「いいですよ」

と笑いながら言った。

さすがに驚きを隠しきれずに提案者である自身が思わず呆然としてしまうのは仕方無いだろう。否定や困惑が返ってくるのは予想していたが、そんな肯定的な答えが返ってくるとは全くの想定外だった。

「ちょっと待ってヨナちゃん。このバカ野朗が言っている意味がちゃんと分かっているの？」

いつの間にバカ野朗へと格下げになったかは知らないが、マリアの

言う事も尤もだ。俺が求めているのは存在の抹消。時が来るまで旅団に会えない事は勿論、ヨナの大好きな人殺しもほとんど出来ないだろう。ヨナの存在はトリッパー連中の誤算であり、最大の武器でもあるのだからそれを有効活用しない手はないのだが、本人がどうしても無理だというようなら諦める考えだった。だがこうしてあっさり肯定されると本当にその意味を理解しているのか不安にならざるを得ない

「分かっているよマリアさん　旅団の人、マチさんやパクノダさん、お父さんに会えないのは少し寂しいけど忍お兄ちゃんがそれを必要としているのなら別に良いんだ」

ヨナは本当に平気そうにニコニコ笑う。俺へのこの執着はきつとヨナの過去に何か関係があるのだろうか、とにかく今は感謝するばかりだ

「な、何て健気なの～～！！……おい仙水っ！！　この子を泣かしたら承知しねえからな！！」

「勿論だ」

そついう流れでクロロに偽者のヨナの死体を見せて事情を説明すると、ヨナの葬儀が行われる事になった。本人は今頃マリアと一緒に何処かのホテルで過ごしていると思うが、勿論旅団はそれを知る由がない。

皆ヨナの死を悲しんでいるようだが実際ヨナが死んでないことを知っている俺はどうもこの空気に入れない。クロロはそんな俺が平気なフリを装っていると感じたようで酒に付き合わされた

マチからの視線を感じる中飲むワインは緊張で全く味がしなかった

十 十 十 十

ブーブーブー

あれから2年後。クロロとちょうど昼食をとっていた俺の携帯のバイブレーションが店内に鳴り響く。クロロに断りを入れて店の外に出て着信に答えると

『久しぶりだな』

電話口からは低めの声。急いでいたので相手を確認していなかったのだがまさかこの人物から掛かってくるとは

「こちらこそと言うべきかなムクロ」

『そうなるな。あまり長話は好きじゃないんで手短に聞くぞ』

「たぐどの口が言っただが。おしゃべりが好きなのは飛行船で十分理解させられたよ」

『お前うちに入らないか？』

「これでいったい何度目の催促だ？」

『茶化すなよ』

「はあ……。こちらもいろいろとあってな、実際そんな暇はない」

『……そうか。最近うちの奴等がシマを荒らされたっってお前等幻影旅団に不満を持ち初めてな。しばらく後にそっちに戦争を仕掛ける予定だそうだ』

「随分いきなりだな。それにこっちはそちらのシマを荒らすような真似はしてないはずだが……」

『奴等はそっち（盗賊稼業）まで手を伸ばしたいんだろう。犯罪組織としてあらゆる分野を網羅することが自分達の使命だと思ってるバカな奴もいるってことだ』

「その長がなんとか出来ないのか？」

『無理だな。組織の末端でさえ数千人もいるんだ、それを今まで放っておいたからもはや幹部でさえ好き勝手やっている。まあ、奴等の行動の根源はオレへの崇拜に基づいているから直接オレが言えばなんとかならんこともない』

「だったら」

『その為のさっきの提案だったのさ。もしお前があそこで頷いていたら戦争は起きなかっただろう。それに前からお前と本気で殺り合いたかったというのもあるし、オレにとってはちょうどいい暇つぶしと言っわけだ』

これは不味いことになった。俺だけならまだしも旅団を巻き込む事になるうとは

早速携帯を切り、クロクの待つ店内へと急ぐと騒がしくした俺を咎めるような視線をクロクから受けたが事情を説明すると直ぐに携帯で旅団全員に電話し始める

夜号の総員は一万人以上。その全員が能力者ではないだろうが3〜5割は堅い

いつも通り真っ向勝負が出来るほど簡単な相手ではないだろう
これはこちららも総力を結集しなければ……

五日後、ヨナの抜けた穴に入った8番と不在だった4番をクロクが補充した全旅団とマリア、そして以前アン・ストツパブルで出くわしたスナイパー、ハギリを集めた総勢16名が集まった。こういう時ヨナの戦力があればと思うのだが、死んだことになっているのでそれも出来ない。まあ、無い物ねだりはやめよう

ハギリは目元がキリリとした高校生で若かりし頃の自分を思い出す青年だった。ハンターサイトで個人情報調べてからラブコールを送り続け昨日、未だ会ったことのない兄を探すという条件付きで仲間になってくれた。一応気になったのでハンターサイトでそれも調

べたのだがハギリの両親の名前はなんと俺を捨てた両親の名前と一緒だった。安心したまえ、君の願いは既に叶っている

4番と8番は髭面の男とやたら露出度の高い女だ。どちらも実力はあるのだろうが、旅団結成時のメンバーに比べるとどうしても見劣りしてしまう。シルバヤヒソカに殺られるのも頷けるな

「既に連絡が行っているとは思いますが今回の仕事、いや戦争はこれまで以上に激しいものだろう。相手はあの夜号だ」

クロロの言葉に一同は無言で頷く。裏を生きる者なら夜号の名を知らない者はいないだろう。それは幻影旅団も同じなのだが、勢力では比べるまでもない

だが今回の戦争で一つだけ分からないことがある。

何時？ どこで？

もう既にこちらに夜号が向かっているとしたらゾツとするな

するとポケットの携帯が再び鳴り始めた。着信先はムクロ。この夕イミンクの良さ、もしかしてネテロ並の地獄耳なのか？

『そっちの準備は済んだみたいだな。戦争は一週間後、場所はシバ大陸の小都市クアンセンだ』

シバ大陸。6大陸のうちの一つでアイジエン大陸の南に位置する大

陸だ

「確かシバ大陸はそちらの本拠地ではなかったかな？　しかも場所がそちらの指定とはそいささか不公平だと思うのだが」

『安心しろ。昨日買ったばかりの都市だし、こちらにも地の利はない。場所を指定したのは警察や一般人に邪魔されなくなかったからだ。無論トラップを仕掛けるようなマネはオレがさせねえ』

都市って買えるものなのか？　と少し気になったがそこはムクロだと思っただけよう

「だがそちらが一方的に決めたのだからこちらにも何か決める権利はあるはずでは？」

『どうせ人数制限だろう？　さすがの幻影旅団でも一万人が相手では多勢に無勢、それじゃ面白くないからこっちも最初から戦うのはオレと直属の77人だけだと決めている。それでいいか？』

「願ってもないな」

電話を切ると、盗聴していたフェイタンが全員に携帯で同時中継で流していたらしく説明する手間が省けたのはいいのだが、やたらノブナガがニヤニヤしているのが気に食わない

小指をピンと立てて、コレかと聞いてきた時は頭突きをしてやった先ほどの会話の何処にそのような要素があったというのだろうか？ バカの脳内がどうなっているのかさっぱり分からないし、分かりたくないものだな

戦争の方はどうやら当初の予想より楽になりそうだが、よく考えると夜号の精鋭77人は連携の取れていない一万人よりよっぽど強敵のように思える。妥協しているように思わせたムクロの口車にまんまと乗せられてしまったというわけか

「最後のあれはいらなかったな。もう少し粘れば相手も譲歩したはずだ」

案の定ククロもそう思ったらしく苦言を頂く。

「ああ自覚してる。その分精一杯働かせてもらおうよ」

決戦は一週間後

ブーンブーン

飛行船のプロペラが奏でる重低音は船内の心地よい揺れも合わさって今にも睡魔に襲われそうになる。あと数時間で戦争だというこの状態は不味いと眠気覚ましに飛行船のキッチンへコーヒーを注ぎへ向かう途中、展望台でボンヤリ雲を眺めるハギリの姿を見つけた。

その顔は緊張のせいか少し青白くなり、さすがにこの状態のまま放っておいて死なれても困るので声をかける。血の繋がりがあると言っても、両親が俺を捨てた後に出来た弟なのでまったく実感がないし、その程度の意識だ

「どうしたハギリ？」

「ああ……あんたか」

「緊張してるのか？」

「いや、実は乗り物に弱くてな。あんた達とアン・ストツパブルで戦った時も結構きつかった」

「ほう。では今回の実力はあの時以上だと期待してもいいのかな？」

「ああ。足を引っ張らないでくれよ」

「ククッ、期待しておこう」

緊張なんて欠片もしてないじゃないか。さすが俺と同じ血が流れて

いるだけはある

少し上機嫌になりながら当初の目的を果たそうとキッチンへ向かえばそこにはパクノダ、マチ、フィンクス、ノブナガがコーヒー片手に雑談しているところだった

「随分余裕だな」

「つたりめえだ。夜号相手だろうと何だろうと気負った奴から死んでいくからな」

「その通りだな」

フィンクスのそのいつもどおりの荒い口調に苦笑すると、パクノダが変な物でも見たような顔をする。

「随分機嫌が良さそうね。例の彼女と仲直りしたの？」

「ムクロとはそんな関係じゃない……と言っても聞いてくれないんだらうな」

「あら？　もしかして拗ねちゃった？　お詫びにコーヒーをご馳走するわ」

「頼む」

パクノダから渡されたカップを手に取りほとんど一気飲みするとようやく頭の隅まで冴えてきた。口の中に残る苦味を舌で拭う俺に珍しくマチが気を利かして二杯目のコーヒーを持ってくる。実際そんなにいらなかったが断るのも悪い気がして受け取ると、ノブナガがまたニヤニヤとうざい顔を見せたが俺がそれを嗜める前にパクノダがノブナガの頭に拳骨を振り下ろす。しばらくノブナガは床の上で痛みを訴え転げまわっていたが当然誰一人として助けようとはしない

唯一フィックスだけは「危なかったぜ。もう少しノブナガが遅かったら今頃俺は……」と謎めいた独り言を呟いていたがそれはどうでもいいことだろう

数時間後飛行船が着いたのは都市クアンセンのあるビルの屋上。

さすが都市というだけあってヨークシン程ではないが広く、高層ビルが立ち並んでいる。だが普段は地上を埋め尽くしているであろう人の姿は無く、どの建物にも人影は無い。まるでゴーストタウンのような光景だった

かといって廃都市というわけではなく、ビルも新しく、近くの公園にはつい先ほどまで子供が遊んでいたかのようにスコップが転がっていた。

確かムクロはおよそ一週間前にこの都市を買ったと聞いていたな。ということとはたった一週間でこの都市に住む人間を全て何処か別の場所に移したのか、それとも………まあ俺にはどうでもいいことだ

「オツ？ あそこのビルの上に人が立っているぜ！」

ウボオーギンがそう言った方向には確かにこちらのビルとは比べ物にならないほどの大きさのビルは見えたが、その上に立っている人の姿なんか凝をしてみたって見えるわけが無い。さすが強化系を極めた男だと内心、感心しながら双眼鏡を覗くと確かにビルの上に全身包帯姿のムクロとそれを守るように囲んでいる多数の精鋭たちの姿。

双眼鏡越しにムクロの濁った目と目が合うと突然指をこちらへ突きつけた。それが合図だったのが、ムクロの周りに数人残して精鋭がビルの上を飛び移って一斉にこちらへ向かってくる

「来たぞ！ 各自左右に展開して撃退しろ」

当初の作戦通りクロロ、ハギリ、コルトピと俺を残して左右に展開する。

ハギリはスコープを付けた重機関銃を用意し、ビルの上に立つムクロを狙うとドドドツと止む事のない銃弾の嵐を叩き込んだ。

だがムクロたちのいるビルの前にそこらのビルを軽く越す大きさの壁が現れ銃弾を楽に防ぐ。4番の男が悔しげに舌打ちすると同時に他の旅団員と夜号の連中との争いが始まったよう爆音が鳴り響いたり、ビルが崩れたりで忙しい。

ムクロを狙撃して速効殺すという当初の目的が崩れた今やるべきことは一つしかない

クロロに視線をやると無言で頷いたので早速実行に移すとしよう。
あのムクロに勝つ唯一の勝機はこれぐらいしかないのだから

「開くアンテナ！」

瞬間、辺りが光に包まれた。そして陳腐な言い方だが体中に力が満ち満ちて来る。

細胞一つ一つが確固たる意識を持っているかのように、宿主を次の段階の生物へと押し上げていく

成長ではなく進化

自分と言う存在は今ここで生まれたのも同然だと魂から実感できた眩しさから遠ざけていた目を開けると紫色の濃密なオーラが自分を中心に3メートル展開されていた。まだ纏しかしていないはずなのに、既に円になってしまっているではないか

「ククッ、ハッハッハー！！！」

思わず笑いが零れる。先ほどまでの自分と比べると圧倒的だ。もはや比べるのもおこがましいほどの力

近くにいたハギリは数メートル吹き飛ばされていたが、クロロは練

で耐えていたのでその場から動いていない。さすがだ

そういえば久しく練をしていない。確か呪念錠をつけたのが3年前だから三年振りということか、感覚が鈍っていないか確かめるために一度やっておいた方がいいだろう

しかし纏でこれなのだから練はいつたいたいどうなることやら？

高ぶってくる気持ちをどうにか押さえ、精神を集中し既に湧き上がってしょうがないオーラを体内に止め、体の内側に限界まで溜めて一気に放出する！

再び目を開けた時直ぐにそれがそれだと分かった。纏のオーラは濁った紫色のオーラだったが、目の前で燃え盛っているオーラの色は金色。神聖で清らか、それでいて周囲の空気を押しつけるような圧倒的な力を持つこの金色のオーラに俺は一つだけ心当たりがある

聖光気だ

仙水さん進化する(後書き)

気になるところで終わってしまいましたことを深くお詫びします。
これから戦闘シーンに移る予定なので戦闘描写に欠ける作者はしば
し武術を極める旅に出かけます

二) ^ ^) ブーン

まずは梁山泊だな……

仙水さん戦争する(前書き)

無事梁山泊から帰ってきた作者です！
今回ムクク戦を全部入れた
かったもんで結構長めになりました

相変わらず戦闘描写難しいね

仙水さん戦争する

呪念錠という束縛が解かれた以上、当然長年の負荷も無くなったわけでは羽根のように軽いが、地面と己を結びつける重力が無くなったような喪失感もある。かつての祖先が何とかその重力から解放されようと飛行船を開発したことを考えれば贅沢な願いかもしれない

少し体を慣らしたかったが、そうはさせじと前方から三つの殺気がやってくる。その三人は俺達が立っているビルの屋上まで一気に上り詰めるとその姿を現した

毒々しい色の戦闘装束に身を包んだ男達は全員これまた悪趣味な籠手を装備して、一糸乱れぬフォーメーションで三方向から襲い掛かる。一対多数の場合は、敵全員に気を配る必要があるのが基本的にどうしても一人側は受け手に回ってしまう。しかし多数は攻め手に回れ、更に周りがカバーしてくれるので各々の全力の一撃を叩き込むことが出来る。

それはこの三人にも言えることでほとんど硬に近い凝で攻撃して来た。その判断は概ね正しい

だが……今回に限ってその考えは甘かった

三人の渾身の一撃は全て俺の体に直撃したがアザーつつかないどころか、当たったにも関わらずその衝撃はまるで最初から無かったものとして体を微々と動かさなかった。

一瞬息を呑む三人の急所に攻撃を入れることは随分容易いもの

腹部に攻撃を受けたものは上半身と下半身が真っ二つに裂け、頭部は脳髓を撒き散らして粉碎された。

「凄まじいオーラだな。例の念具を外せばそこまでの力を手に入れられるのか？」

死体を興味深そうに眺めながらクロロは尋ねる。

「ああ。着けた時間と外した後のオーラ量が比例する。一度しか使うことが出来ないがな」

「成る程。……とりあえず作戦変更だな。お前にそこまでのオーラがあるのなら夜号の長の元へ連れて行って、タイムンさせるほうがよっぽど効率的だ。知らない間じゃないんだろ？」

元々旅団でもないのにクロロたちを巻き込んでしまった責任が俺にはある。そこを言わずにおいてくれるクロロへの恩を仇で返すほど人間が出来ていないわけではないので勿論だと頷いておく。

とりあえずムクロとその護衛をバラかさないと話が進まない。聖光気を身につけた今の俺でさえムクロの相手をしながら、護衛の連中と殺り合うことは出来ないからだ。それほどムクロからはこの距離で見える程邪悪で濃密なオーラが滲み出ている。

その為にはとにかく人員が必要となる。クロロは殺し合いをやっている最中のノブナガとマチを呼び出すと作戦の概要を話した。

「へえ、いかにも団長らしい大胆な作戦だな。それより仙水！ お前だそのオーラ！？ この間まで纏しか出来ないへなちよこ野朗じゃなかったか？」

「今は真面目な話だったのに…。仙水の話は後で聞くとして、面白そうだね」

「マチ、お前は成功すると思うか？」

「成功すると思うよ。あたしの勘だけだね」

「その言葉が聞きたかった」

最初のビルの屋上にクロロ、ノブナガ、マチ、コルトピ、ハギリ、俺と揃ったところで作戦は始まる。

向かいあうムクロたちと俺達がいるビルの直線状には大きな道路が走っている

この空間を利用しない手はない

その為に最初クロロは道路を挟む左右に戦力を分散させたのだ

「コルトピ頼む」

「分かったよ」

コルトピの能力でコピーされたビルが道路上に次々と具現化されていく。あっと言う間にムクロのいるビルまでの直通路が完成すると、ビルの上を通って走りだす。

ムクロのビルまで行くにはどうしても敵側の能力者が出した壁が邪魔だったので、コルトピの能力で壁を越す高さのビルを具現化したのだ。ただの壁を出すだけの能力とは籠っているオーラ量から見ても思えないので今回このような安全策をとった

「相変わらずコルトピの能力はすげえわな」

「でもボク戦闘能力はほとんど無いから」

「それだけ出来たら十分だよ」

コルトピを脇に抱えながらビルの上を駆けるノブナガは本当に楽しそうだ。

途中、ムクロの元へ向かう俺達を止めようと来た連中もいたが相手をする前に、その連中を追いかけていたシャルナークやウボオーギンがそれを阻止したので道中は平和だった。

問題はここからだが……

いよいよムクロのいるビルを見上げる距離にまで近づくと、ムクロ直属の上半身裸の敵ついスキンヘッド男が何やら床に両手を押し当て始める。

何をやる気が分からないがこの先の壁さえ越えれば

ゴゴゴゴゴ

不気味な重低音と共に飛び越えようとしていた壁が急に高さを変えて、乗っていたビルの約二倍の高さになる。俺達は壁の異変に一瞬早く気づいたマチの念系によって難を逃れたが、一人突っ走っていたノブナガは既に遅く抱えていたコルトピをこちらへ投げ渡すと、壁へ真正面から激突する。衝撃自体はそんなに凄いものではなく、せいぜい鼻を折るぐらいだったが、ノブナガは壁にぶつかると同時にまるでゴキブリホイホイのようにくっついて離れない。

「何だこりゃ！？ 磁力か？」

「危ないとこだったな。もう少しマチが気づくのが遅ければ全滅だった」

本当にそうとは分からない程度に少し微笑みながらクロロの放つセリフにノブナガが団長っ！！ と大声を上げている。

「まあ、別に残された道はここだけじゃないから

ゴゴゴゴゴ

ゴゴゴゴオ

ゴゴゴゴオ

マチのセリフに合わせてビルの四方を囲うように四枚の壁が現れ、ビルの侵入路は空を残してなくなる。一度烈蹴紅球波を打つてみたが特殊な念でも込められているのか、罅さえ入らない。仕方無いと地下から侵入しようとしたが地下にも同様の物が伸びていてそれも無理だった。

「どうする？ さすがにあの高さは飛び越えられないんだけど」

「仙水、今のお前なら何とか行けるんじゃないか？」

「ジャンプの瞬間足に全オーラを集中させれば何とかなるかもしれないが、まだオーラ（聖光気）の扱いに慣れていないから飛びすぎて下から狙い撃ちになるか、距離が届かずノブナガのようになるのがオチだな」

「案外役に立たないんだな」

ハギリにそう言われても仕方無いほど、まだ聖光気をコントロールしきれてない。今まで纏しか出来ないほどのオーラ量だったのが、他を圧倒するほどのオーラをいきなり手に入れて直ぐに扱える方が不自然だと思っただが…

図星は図星だ

この聖光気でいずれ空を舞うことさえ可能になる日は来るのだろうか？ オーラをある程度具現化すれば出来ないこともなさそうだが今は到底無理そうだな

ふと背中をツンツンと突く感触を感じた。コルトピだ

「このビルの上にもう一棟ビルを具現化するからどいていて。僕の場合は具現化する場所に障害物があると発動できないから」

確かに壁の高さはちょうどこのビルの二倍。具現化したビルの上から移動すれば壁に邪魔されずムクロたちのもとへたどり着けるはずだ。

だが相手もそれを悠長に待っていてくれるほど優しくない。この作戦において重要なことはコルトピが具現化したビルを素早く上り、スキンヘッド男が能力を発動させる前にムクロのいるビルにどれだけ移動するかに掛かっている。

「あとボクが具現化したビルは建物の基礎までしっかりコピーするから、具現化した瞬間下のビルは上のビルの重さで潰れ始めるよ。だからなるべく早く飛び移ってね」

コルトピの助言どおりに具現化する一つ前のビルに移り体勢を整える。

三・二・一の合図でコルトピがビルを具現化した。俺達は不吉な音を立ててゆっくり崩れていく下のビルの窓の棧に飛びつき、それを足がかりにして上へ上へとバッタのように跳躍する

上のビルの屋上にたどり着いた時にはすぐ目の前にムクロ達の姿が…
しかしビルは既に前へと傾き始め、更に悪い事にスキンヘッドの男
が再び能力を発動させようと床に手を着けようとしていた。

ドン！ ドドドン！

崩れ行くビルの叫びに合わせてハギリのコルトバイソンが火を噴く。
俗に言うワンホールショット、一度打った場所と寸分違わず同じ
場所に打ち込む神業がスキンヘッドの男を違わず狙い、壁の高さを
変えることを諦め自身の防御に回すほどの腕前だった。

その隙に慣性の法則によって崩れ行くビルの勢いを利用してムクロ
達の下へたどり着くことは俺達にとって苦ではなかった。

ムクロの周りを囲う精鋭たちは殺気を強め、互いに激突の瞬間を待
つ。その緊迫した空気を破ったのはやはりムクロだった。精鋭たち
を片手で止めると囲いを破り一歩ずつこちらへ歩いてくる。包帯越
しにムクロが酷く楽しげに興奮しながら殺気を撒いてくるという器
用な事をしていたので、あまり近寄りたく無かったがクロ口とハギ
リに目で急かされて大人しく一人歩き、あと二メートルというこ
ろで立ち止まり向かい合う。

「よく来たな。歓迎しよう」

気のせいだろうか。そのムクロの言葉に背後から奇妙な気配と殺気
が膨れ上がる

この感じはおそらくマチだろうが、殺気を向ける相手がムクロではなく俺な訳はいつたいどうしてだろうか？ さすがに前と後ろから殺気で挟まれるのは勘弁して貰いたい

「歓迎という割りに、ここへ近づかせないために壁を作るのはどういう訳だ？」

俺の言葉にスキンヘッドの男が怒りを顕にして飛び掛ろうと身構えたが、再度ムクロが手で制止させると大人しく引き下がった。

「あれは忠誠心故の行為だ。さすがにそれを止めるほどオレは厳しいわけじゃないし、お前ならあの程度超えてくると分かっていたからな。それにしても見間違えたぞ、何か隠していると思っていたがそこまでのオーラを隠し持っていたとは」

「あの時は持っていなかったさ。だから俺はムクロに負けた。だが今度はそうはいかない」

「ほう、見せてもらおうか。その真の力とやらを」

ムクロの黒いオーラと俺の黄金のオーラがぶつかり合う。互いのオーラが触れている場所はチリチリと静電気のような音を発しながら反発する。

俺とムクロのオーラはまったくの逆なのだ。光と闇、火と水、聖と邪

正反対の位置に属する物は互いに惹かれあい、拒絶し、袂を別つ。

唯一共通しているのはどちらも貪欲に力を求め、そしてその力を手に入れたということだけ。

「ハギリ、ノブナガが使えなくなった今お前がその代わりだ。予定通り護衛をばらすぞ」

「ああ、貰った金の分は働くさ」

クロロたちは作戦に取り掛かったようだ。俺とムクロロが向き合っていた最中隠でコソコソやっていたのが関係あるのだろう、次々とムクロロの護衛たちが消える。

スキルハンターの瞬間移動能力を使ったようだ。後はマチ、クロロ、ハギリが足止めしてくれると信じて、ムクロロと戦うことだけに集中すればいい。

……ノブナガは本当に使えないな

「邪魔者は消えたようだな。これで思う存分楽しめる」

ムクロロはやはり小細工に気づいていたようだ。それでもそれを止めようとしなかったのは強者の自信か、それともこちらの意向に気づいていたのか？

前者ならついているチャンスはありそうだが、ムクロロなら十中八九後者のような気がする

やはり本当に戦いたくない相手だ

だがここまで来てそうも言ってもらえないのが事実
ただ今は俺の全力をぶつける。考えるのはそれだけでいい

先手必勝とばかりに懐へ潜り込んで掌底をムクロの鳩尾に叩き込む。
今の俺は聖光気で念の攻防力が跳ね上がっているので、さすがのム
クロもダメージを免れないレベルだ。

しかしやはり相手はムクロ、掌底をひよいと横に避けると裾の中で
両腕を組んだままアクロバティックな動きで飛び後ろ蹴りに繋げて
来た。

それに若干遅れて回し蹴りで向かい打つと、互いの力が拮抗してい
たせいか完全に衝撃を殺しきり脚が止まる。

ムクロはそのまま宙返りして地面に着地。どうやら相手が宙に浮い
ていたことを差し引いても蹴りの威力はどうやら俺の方が強いらし
い。それでもなければ一番威力を乗せられる飛び後ろ蹴りに後手の
回し蹴りで相殺できるものか

お互い一度距離をとって、裂帛の気合をあげながら再びぶつかる。
貫手、手刀、肘打ち、踵落とし、互いの技の全てが急所を狙い、一
発当たっただけで肉が消し飛ぶほどの威力。元々烈蹴拳は攻撃を受
け流すことに長けているが、その烈蹴拳を極めた俺でさえ掠った攻
撃が肉を切り裂く。

それはムクロも同じようで、ポタポタと血を流しながら

「やはり真剣勝負はいいものだ。決する瞬間互いの道程が花火のよ

うに咲いて散る。特にお前のような相手になるとな」

とご満悦な様子だ。

何のことやらと首を傾げてやると何がツボに入ったのか笑いが止まらなくなるムクロ。ようやくと落ち着いて面を上げたその顔にはギラギラと輝く片目があった

「お前のことはだいたい分かった。だがオレばかり分かっちゃ不公平だろう？ お前にはオレの素顔を特別に見せてやるよ」

ムクロはスルスルと神字の呪符付き包帯を外していく。左半身を見た時は隠すのも勿体無いほどの美人だったが、右半身を見て包帯で姿を隠す訳を知った

右半身の皮膚はほとんど溶けているのだろう。女の命である顔の眼球が剥きだしになっているせいで初見の人は叫び声すら上げるかもしれないほどグロテスクだ。おそらく硫酸かなにかを被つたのだろう。右腕は義手なのか、金属製のフレームで作られたそれは強度も精度も申し分ないようで、ムクロはそれを証明するように義手の指先を器用に動かす。

普通ならそのムクロの姿を見てショックを受けるなり、何か思うのだろうが自分でも驚くほどムクロの姿を受け入れられた。哀れみの気持ちすら湧かなかった

唯一ムクロが自らその姿を曝け出したことへの奇妙な喜びがあっただけだ

「今までこの姿を見た者は全員殺してきた。それはこの体がコンプレックスということもあるが、最も大きな理由は手加減が出来ないからだ」

見ればムクロの内側からどす黒いオーラが吹き出てくる。先ほどのムクロのオーラは所詮このオーラが端から漏れ出していただけに過ぎないということか

しかもそれは止まることもなく湧き出続ける。まるで蛇口の壊れた水道のように

「お前は初めてオレの姿を見て生かしておいていいかもと思わせた人間だ。ここで死んでくれるなよ」

ムクロの指先に淀んだオーラが絡みつくとその武器になった。それは小さな小さな髑髏が重なりあって形作られた鉤爪
初見だがあれが不味いということは分かる

ぶつつけ本番だがどうやらあれをやる以外の選択肢をムクロは残してくれないようだ。

想像する。聖光気が形を変えて、純白な戦闘衣を生み出すイメージ
頭から足の先まで黄金のオーラを巡回させ、徐々にそれが形作られていく。こうしている間にもムクロは着々と近づいて、その狂気（凶器）を血で塗らそうとしているが、ここで引くわけにはいかない。

一度この作業を中断させるとこの場では二度とそんな時間が与えられないだろう

つまりそれは死に直結する

ムクロの鉤爪の風切り音が耳に届いたころようやくそれが完成した。

気鋼闘衣が

「ギリギリだったな」

気鋼闘衣による防御が少し遅かったせいか頬の肉が切り裂かれて結構な血が流れ出した。最も装甲の薄い横顔の部分だった。が気鋼闘衣を貫いて攻撃が通るとはさすがの一言だ

急ごしらえだったのも少し関係あるかもしれないが、それを抜きにしてもあの鉤爪がヤバイ

「それがお前の切り札か。オレの“棺断”^{カンダチ}の路を逸らすとは生半可な念ではないな」

どうも素直に喜べない。聖光気に気鋼闘衣まで使わせて未だ劣勢なこちらの身にもなってもらいたいものだ

しかしこのまま戦闘を続けると不味いな。あの棺断とやらをまともに受けてはいくら烈蹴拳でも受け流しきれず裂傷を負うことは十分に予想できる。純粹な肉弾戦では少々厳しいとなると…

おもむろにヨナの形見ということになっているベンスナイフを取り出す。聖光気で周をすれば、あの棺断の攻撃でもしばらくは持つだろう

純白の闘衣が自身の聖光気によってバタバタとはためく音だけがしばらくした。

瞬間、ムクロの棺断とベンスナイフがぶつかる金属音が響く。

一度離れては再びぶつかりあう。まるで二人で舞いを踊っているような、そんな気になってしまうのは両者の動きに無駄がないからか、それともただ純粹にこの戦闘を楽しんでいるせいか？

もはや何度目の衝突かというところでムクロの動きが唐突に変わった。今までのような、隙を見せず次の攻撃に備えるような動きではなく、棺断を大振りに振り下ろしてきたのだ
その大振りな攻撃を必要最小限のバックステップでかわし、逆手で持ったベンスナイフで頸動脈を狙ったが、ムクロの超速反応で肩を切りつけるだけに終わった

まったくもってやっかいな相手だ

そこで仕留め切れなかった油断が不味かった。ムクロはベンスナイフを持つ左手に脚を絡ませて、何の迷いもなく 折った

激痛に叫びそうになるがそれを堪えて、なんとか左腕を地面に叩きつけることでムクロを引き剥がすことに成功

とは言え、ベンスナイフを落としたのと左腕が使えなくなったのは大きい。これ以上時間をかけてもこちらが不利になる一方だ

「楽しいな。こんなに楽しいのは久しぶりだぞ忍！」

ムクロも俺と同様に傷ついているがそれもまったく気にしないほど戦いに酔っている。こういう重度のバトルジャンキーは痛覚すらも戦闘のご褒美のように考える
ヒソカが良い例だが、ヒソカと同一視されるとさすがにムクロが可哀そうなので例えるのは止めておこう

「俺はそろそろ終わらしたいな」

全力で行かせてもらおう

練を維持して堅にする。こうでもないムクロのあの多角的な攻撃を受けきれない

まず足下に転がっていたベンスナイフを拾うと見せかけて、足でムクロ目がけて飛ばした。ただベンスナイフを蹴飛ばしただけではムクロは避けようとしてもないので勿論周をしてだ

予定通りそれを避けたムクロに肉迫して独楽のように蹴りから後ろ回し蹴りの連携を続ける

そのコンボの途中で時折掌に念弾を作っただす烈蹴紅球波は思わずムクロも舌打ちするほどの良い攻撃だった。生きて戦いを終わらせ

ることが出来たらまた使うでしょう

焦れたムクロは俺の回転を体を通り込ませ緩衝材にして止めると

「隙だらけだぞ」

と、棺断を脇腹深くへ差し込んだ。

棺断の爪が肉を切り裂き、内臓まで届くところで俺は筋肉を収縮させて進行を止める

「隙だらけなのはそっちの方だ」

俺はこの瞬間を待っていた。ムクロ相手に完璧に勝つ方法なんて無い、そうならば肉を切らせて骨を断つ方法しかないだろう？

硬に限りなく近い凝で無事な右腕にオーラを集め、ムクロの鳩尾にそれを叩き込んだ

轟ツと鈍い音がしたがムクロは軽く笑ってダメージがないことをアピールする。しかし徐々に不思議な表情を浮かばせ始めた

そう先ほどの攻撃はあまりにも軽い。あれだけのオーラを集めた攻撃にしては威力が少なすぎるのだ。ムクロがハッ!? と事態に気づいた時には既に俺の壊れた左手がムクロの背中に当てられていた

ムクロが凝で防御するより早く左手から発をする。さすがのムクロ

も鳩尾にオーラを集中させていたので防御の薄い背中からの発で気絶してしまった。

種明かしすると実に簡単だ。右腕に集めたオーラであのままムクロに攻撃しても超人的な反射神経が凝で阻止することは想像がついた。だから当たる瞬間流でほとんどのオーラを左腕に写したまでのことまさか壊れた左腕が本命とは思わないだろう。まあ、右腕のオーラを少なくしたせいで今や右腕は左腕以上に悲惨な結果になっているがそれは仕方ないことだろう

何にせよ勝ったのだ

勝ったことをクロロたちに伝えようとビルの上に立ち上がると強烈な立ちくらみを感じた。血が足りてないらしい

視界がぼやける。それでもふらふらと歩きクロロたちの姿を見つけたところで、前へ倒れてしまった。普通ならビルの冷たい屋上の床にキスするのだろうか、重力はいつまで経っても消えない

その状態が三秒続いたところでようやく自分がビルの上から落ちてしまったことに気づいた。

風の音が耳元で五月蠅い。もうしばらく休ませてくれ

バサッ

何か柔らかいもので受け止められたような気がして、俺の意識は完全に落ちた

仙水さん驚く（前書き）

毎回更新遅くなるのは最初にちゃんとプロット書かないせいだと思う

原因は分かっているのに直さない作者なんて最低ですよね！（他人事）

こんな作者を見捨てないでくださる読者の皆様に感謝感激です！

あと今更ムクロの能力設定w

ムクロの能力“墓泥棒の懺悔<グレイヴ＝ラヴァー>”

特質系：死者の念に込められたオーラを自分の物にできる
なかなか都合のいい能力だが制約が二つある

- 1、ムクロ本人に強い恨みを持ったまま残した能力の場合に限る
- 2、一度死者のオーラを使いきるとその後一週間、再び死者のオーラを使うことが出来ない

この二つの制約を設けることで能力の発現に成功した。しかし副作用として死者のオーラを取り込むと常に心身を害する

尚、2の間は副作用が解除される

・悪影響は普段包帯に巻きついてお札の神字でその効果を弱めている

そうでもしないと死者の怨念で睡眠さえとれない。しかし同時にオーラ量も激減する

・棺断は死者のオーラを使うので包帯を外した時にしか使えない

そこから入んを理解した上で35話スタート!

仙水さん驚く

体が痛い

そう感じると共にまるで霧が晴れるかのように俺の意識が戻ってくる。

ふと見回すとここは今自分が寝ているベッドの他にはほとんど何もない部屋で、だからこそそれに気づくのも直ぐだった。

「…………マチか」

ベッドの隣にあるパイプ椅子でスヤスヤと眠るマチの姿。誰かが気を利かしたのか、その体を覆うようにタオルケットが掛けられているこの様子だと看病してくれていたのだろうか？

とりあえず現状把握のために立ち上がろうとしたところで腕に痛みが走って、再びベッドに倒れこむ。ガツチリ包帯で固定されている両腕を見てムクロとの戦いは確かに現実だったとホッと一息をつくあんな壮大で馬鹿らしい夢を見るほうがよっぽど非現実的だからそう心配せずにいいものだろうが、やはりもうムクロと戦わずにすむと考えると思いのほか安心するものだ

今度は痛みを感じないように手をつかず足だけで立ち上がり、寝ているマチを起こさないように部屋から出る。そうして出た廊下に敷かれた絨毯の柔らかい感触を足の裏で受けながらしばらく歩いていると、目の前から見慣れた二人の姿が現れた

「あら、起きたの？ ちょうどマチに夕食を持っていくところだったんだけど、一緒にどう？」

何時もどおりの白いシャツと紺のスーツ姿のパクノダは料理が幾つか載せられたワゴンを押しながらそう告げる。ここまでは良いだがその少し前を先導するムクロの姿に思わず首を傾げる

いつもの包帯は何処へやら、シャツにジーンズと軽装？ で右半身の火傷の痕も露出しているが本人は気にしていないようで飄々とした様子だ。気のせいか纏うオーラの邪悪さも薄れ、さっぱりとした印象さえ受けた

これがイメチェンというやつか

「どうした？ 一週間でボケでもしたのか？」

マジマジと見つめる俺の視線に気づいたのかムクロは小バカにしたような表情で言ってきた。

ん？ 一週間？

「俺は一週間で寝ていたのか……」

そこまで体が疲弊しきっているとは……
そういえばヨナに連絡をとってなかったな。今頃心配しているだろ

うか？

……ああ見えて細かいところまで気がつくマリアだから、おそらく連絡は行っているとは思いますが

「ええ。もしビルから落ちた時、マチが咄嗟に念糸で綱をつくらなければこれから先もずっと寝てたかもしれないけど」

あの時の感触はマチの糸で助けられた時のものだったのか
確かにあの高さから落ちたら死あるのみ。これはマチに世話になっ
たな

「後で礼をいっておくよ」

「それだけでいいの？」

パクノダが何か面白いものでも見たかのような表情でそう返してきて、ようやく俺はそのことに気づいた。

「勿論謝礼金も払うさ」

マチの性格からして俺の礼よりそっちの方がよっぽど喜びそうだが、そんな基本的なことを失念してしまっているとは俺らしくも無いだが、どうやらその考えも間違っていたようでパクノダとムクロは呆れたようなため息をつくばかり。頭の中で心当たりを探すがどうも思い当たる節がないので諦めることにする

その後ムクロから戦争の結末を聞くと、やはり夜号のトップであるムクロの敗北から旅団が勝利をおさめたらしい。だが夜号という巨大組織の解体はそれこそ小国を落としかねない暴動へと発展する恐れがあるため長をムクロに据えたまま、幻影旅団のパトロンとなることで話は収束したらしい。なんだか上手い具合に乗せられたような気がするが、13人しかいない旅団では夜号という巨大組織の持つ縄張りを治めきれないのも確かなのでおそらくこれが最善手だったのだろう

それにもともとパトロンなんていらぬほど旅団は稼いでいるが、そこはやはり形だけでも取繕っておかないと一組織として舐められる。組織の大きさでは夜号が勝り、しかし今回の件で夜号の上位組織とまではいかないが同等の組織にまでなった旅団の対応にはあちらも困惑気味の様子だったが、一言ムクロの声が掛ければ先ほどの戸惑いも嘘のようにキビキビと行動し始める

そんな諸々の事情もあって今幻影旅団は夜号の治める土地に招かれている

そついでついでらしい

場所は変わって、夜号の治めるホテルの最上階に位置するVIPルームに俺達はいた

今後の幻影旅団と夜号の関わり方についてトップが議論するという名目で、幻影旅団側からはクロロと何故か俺、夜号からはムクロが集まるこの会合は本来肅々とした雰囲気で行われるはずだったが、名目はやはり名目でしかなかった

「遠慮せずに飲めよ。セノビア地方のワインは格別だぞ。献上品の中でもオレのお気に入りだ」

「自分は怪我に障るから遠慮しておくよ」

「……惜しいな、ここまでのワインは市場にも滅多に出回らないぞ
そう言うとグツと煽るようにしてクロロがルビー色のワインを飲み干す。普段ゆっくり楽しむクロロがそんな余裕もなくすほどに美味しいのだろう」

それを横目で見ながら果たしてこれは会合と言えるものだろうか
今更ながら思う

やっていることは普通の旅団の宴と変わらない。しかしさすがにこの状況の中それを諫めて場の空気を濁すわけにもいかず、一人素面ひだりのままウーロン茶を飲むことに専念する

時計の針が深夜三時を指し示したところでようやく酔いが回ってきたのか、ムクロとクロ口の頬がほのかに紅潮し始めた。口の中がウーロン茶の味で染まってしまった俺はこれ幸いと宴の終了を提案して、まだ飲み足りなさそうなクロ口の肩を引きずり寝室のベッドへと投げ込む。大分酔っているせいか反抗する気力もないようで随分楽だった

だが、さすがに疲れた。

まだ不調というのもあるがアルコールですっかり舌を湿らせたムクロの話が止まらないこと、止まらないこと

最初のほうは熱心に聴いていたクロ口も途中で耳から耳へ聞き流してしまった程だ

他の旅団員は下の階から喧騒が聞こえることから、まだ飲んでいるようだが俺は早めに休むことにしよう

宛がわれた部屋の電灯を点けることも面倒で、手探りでベッドを探すとそのまま倒れこんだ。体全体を包む気だるさに癒されながらふとガサガサと動く音が聞こえたような気がした

頬を何かでツンツンと突かれている。最初の頃はあまりの眠たさで放っておいたが、強く抓ったりと段々エスカレートしてきたのでその犯人の手を掴むと、起きていることに驚いたのか耳元で息を呑む

音が聞こえた

「パクノダ……か？」

マチがこんなことするとは思えないし、そこらへんのあたりをつけていたが薄目を開けて犯人を見てみると想像だにしない人物が犯人だった

「オレだ」

窓から差し込む光を受けたムクロが真上から覗き込むようにして答える。この位置関係と頭に感じる感触はもしかしなくてもムクロに膝枕をされている？

あまりにも予想外すぎてしばらく呆然とムクロと見つめ合う
ムクロはムクロで暇つぶしでもするように俺の髪をいじくって遊んでいる。しばらくしてようやく現状を受け入れた俺はとりあえず一番気になることを質問してみた

「……いったいどうしてこんな状況になったか教えて欲しいところだ」

「うん？ 覚えてないのか？」

しばらく考えてみたが心当たりがないので降参するように両手を持ち上げる

「ハンター試験の時だ」

……そういえばムクロに吹き飛ばされて気絶する前に膝枕がどうのこつと言った覚えがある。あの時はほとんど意識が朦朧として残念ながらハッキリとは覚えていないが

ムクロはそんな俺の表情で全て理解したらしく

「オレが『お前、部下にならないか』と誘う時は膝枕をしながら言ってくれ。そんなことを言ってただろう?」

そういえばそんなことを言った覚えがある。しかしあれは手も足も出なかったムクロに対する完全な皮肉だったのだが…まさか実現することになるうとは

「しかし夜号と旅団との関係が対等になった今では、一応旅団側の人間が夜号側につくわけにはいかない。夜号の幹部連中が勘違いする恐れもあるからな」

ハッキリ言っただけは表向きの理由だ。俺は個人の責任で巻き沿いになったにも関わらず戦争に付き合ってくれた旅団に少なからず感

謝しているし、クロロとはこれからもいい友人でいたい。時々仕事はあるが思いのほか楽に動ける旅団に愛着が全く無いといえば嘘にもなる

結局のところそういう面が大組織夜号に入るメリットを上まわっているのだ

「そんなことは分かっている。だからこれから言うのは別のことだ」

「何だ？」

「たまには夜号に顔を出せ」

「……そんなことでいいのか？」

もっと無茶を言われると思ったが思いのほか簡単な願いだ

「本当は夜号に迎え入れたいところだがな。昨日の感じからしてオレ側とクロロ側が選べと聞いたなら十中八九お前はクロロ側を選ぶだろう。……ちょっとあいつがうらやましい」

穏やかな顔つきのムクロに少し見とれてしまったのは朝日があまりにも綺麗なせいだろう

仙水さん驚く(後書き)

ムクロたん可愛い

何故皆分かってくれないんだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2493o/>

仙水さんが歩むハンター道

2011年9月9日03時05分発行